
天剣を持つ少年

康頼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天剣を持つ少年

【Nコード】

N0904J

【作者名】

康頼

【あらすじ】

ある日、いつものように汚染獣を倒すため出たレイフォンだったが、戦闘終了とともに不思議な光を放つ宝石を見つけてしまい、そのまま何処かに転移させられてしまう。

そして転移先には、車椅子の少女八神はやてがいた。

※この小説はArcadiaで投稿されているものと同じものです。

序章

草木が枯れ果て、荒れた大地が広がる世界、

生命の営みを感じさせないその死の世界とも言える世界でただ一人の少年がその時を待っていた。

砂が混ざった風がフルフェイスのヘルメットを叩き、内部に響く音を聞きながら少年は静かに待ち続ける。

少年の手に握られているのは、白く輝く白金の剣。

それは、天剣授受者の証とも言える12しかない至高の鍊金鋼ダイトである。

天剣を握り締めながらただひたすら少年はその時を待ち続けた。

そして遂にその時が来た。

そんな彼の耳元に蝶の形をした何かがユラユラと舞う。

それは少年にとって見慣れた念威端子であり、それが少年の行動を合図するものである。

『レイフォン、ここから北西に2キロメルの汚染獣反応。その老生体を任せていいかしら』

蝶の形をした念威端子から響くその声は、少年——レイフォンと同様の地位である天剣授受者のデルボネだ。

彼女の念威端子から聞かされた情報にレイフォンは動じることなく、ただ一度だけ頷くと呼吸を整え、思考を整理クリアにさせていく。

老生体と呼ばれる化け物は、この世界を我がもののように闊歩する汚染獣の最終形態とも呼べるその存在である。

化け物は、普通の移動都市の武芸者全員を集めて、都市が半壊する

ぐらいすれば勝てる相手をレイフオンは、たった一人で相手をすることになる。

だがレイフオンもまた天剣授受者と呼ばれる存在で、人より圧倒的な強靱な身体と力を持つ武芸者と比べても比較できない程の武芸者なのである。

11才と若年のため他の天剣授受者とは経験値が大きく離れているが、彼自身の持つ圧倒的な剋の量と他人の剋の流れを見て剋技を模倣することに長けた妙技を持つ武芸の天才である。

『レイフオン、緊張してますか？ あとで飴玉あげますから頑張ってください』

そんなレイフオンをも子供扱いするデルボネもまた凄まじい。

いやーデルボネにしたらまだ、自分の10分の1しか生きていないレイフオンは、孫のような存在なのかもしれない。

緊張感のないデルボネの言葉にレイフオンは苦笑していたが、次の瞬間、レイフオンの顔に微かな緊張が走る。

『来ましたね……レイフオン、よき戦場を』

最後にレイフオンの武運を祈るとデルボネの念威は、レイフオンから離れ、それと同時にレイフオンは既に復元状態になっている剣状の天剣を握り締め、深く息を吸う。

そして、身体の中から溢れる青い剋を全身に纏うと、

「早く終わらせて、リーリンのシチューを食べよう」

地響きを起こしながら地面から現れた汚染獣に向かって、レイフオ

ンは――飛んだ。

？
？
？

肉眼でハッキリと見えた汚染獣の形状は、巨大な鱗に覆われた巨蛇で、レイフォンの10倍程の長さで、体重なら100倍はあるだろう巨体の持ち主である。

外力系衝剄の変化、閃断。

剣身に研ぎ澄ませた衝剄を圧縮し、それを刃と化して汚染獣に向けて放つ。

幼生体なら10以上は斬れる薄い衝撃の波とともに放った一撃は、老生体の鱗に当たり、小さな傷を作る結果に終わる。

「思ったより固いな」

だが当のレイフオンには動揺は無く、さすがに驚きを見せる程度だったが、次の相手の攻撃に備えて間合いを取り、様子を窺い始める。すると次はこっちの番だと老生体は、巨大な身体を生かし、レイフオンを圧死させようと突っ込んできた。

内力系活剄、旋剄。

両足に溜められた剄から踏み出した一步は、爆発的な加速力を得ながら、初速からトップスピードという高速移動で汚染獣の攻撃を回避すると、レイフオンは空中で方向転換し、老生体の頭に飛び移る。

そのまま再び閃断を汚染獣の頭に向けて放つが、レイフオンの手には肉を斬った感触は無く、大きな岩に当たったように、軽い痺れが両手を襲う。

「やっぱり固い。生半可な一撃じゃ致命傷は与えられないな」

その攻撃を受けた、汚染獣は、レイフオンを振り下ろすように鬱陶しそうに身体を激しく揺すり始める。

が、しかしレイフオンも大蛇の巨体から振り落とされないように、天剣を大蛇を纏う鱗と鱗の境目に向かって突き刺す。

鱗は頑強な鎧のようだが、境目はどうやら柔らかかったらしく、剣を突き刺すと同時に吹き出る血がフルフェイスの部分に付着するが、レイフオンは構うことなく、さらに剄を天剣へと流す。

そのことにより大蛇の汚染獣は痛みから逃れようとしたのか、それともレイフオンを地面で潰そうとしたのか、傷口を地面へに向かって倒れていく。

その汚染獣の行動にレイフオンは、天剣を引き抜くと汚染獣の背中を蹴り、汚染獣から距離を取る。

レイフオンが地面に着地した同時に汚染獣は唸り声を上げ、大槌のようなしっぽを外敵であるレイフオンに向けて振り下ろす。

再び迫る老生体の一撃をさらに後方に飛んで回避すると、同時に天剣に纏った剄を放つ。

外力系衝剄の変化、針剄。

無数の細い針のような貫通性に優れた衝剄の雨に、汚染獣は身体を丸めると、その攻撃を完全に防ぎきる。

「キリがないな……」

突き刺した時に入った汚染獣の身体小さな傷を見ながら、レイフオンは呟く。

この汚染獣は、攻撃が単純で回避しやすい。

だが、全身に覆われた強固の鱗に巨体を生かした破壊力は、脅威に値する。

事実、一撃でも喰らえば即死は確実で、一撃により飛び散る石粒もしっかり回避しなければ、防護スーツに傷が入るだろう。

そうなれば、外気に溢れた汚染物質がレイフオンを蝕むことになる。となればレイフオンは都市に戻るか、死ぬかの二択を選ばなくなる。

その選択はレイフオンにはありえないことであり、そうなるとレイフオンの行動は一つである。

「もたついてたほうが危険だ。なら、一撃で決めてやる」

覚悟を決めて、一呼吸。

それだけでレイフォンの身体に剄が満ちる。

そしてその剄を全て天剣に収束させる。

外力系衝剄の変化、轟剣。

剣身は伸び、刃幅も広がり、天剣はレイフォンの身体の何倍にもなる巨大な剣へと姿を変化する。

轟剣は、極めて単純な剄技だが、レイフォンが持つ膨大な剄と天剣という最高の錬金鋼の両方を持たないと出来ない代物だ。

それゆえに巨大な剣から放たれた一撃は、まさに必殺の一撃。

その剄にあてられ反応したのか、老生体の動きが変化する。

するとどうだろうか、老生体の背中が開くとそこには無色の羽が現れ始める。

「空になんて逃がすか」

巨体の汚染獣に飛ばれて、制空権を取られると状況は間違いなく悪くなる。

その汚染獣の行動に、レイフォンは駆け抜けていき、300メルはあっただろう間合いを一瞬で潰すと、そのまま縦に一振り。

垂直に斬り下ろされた一撃は、老生体の顔を切り裂き、そこから噴水のように血が吹き出す。

「これで終わりだ」

次は流れるように無造作に横に一閃。

風すら切り裂く一撃に老生体の鱗で覆われた身体を、紙の如く切り裂いた。

ボタボタと血を流し、後ろに倒れる老生体を見ながらレイフォンは、注意深く老生体の様子を伺う。

見たところ、傷は致命傷であり、老生体の命は尽きる寸前である。

それを確認するとレイフォンは、とどめの一撃を止め、天剣を下ろす。

汚染獣の断末魔が響くのを聞きながら、レイフォンは自身の仕事が終えたことを確認すると、天剣を基礎状態に戻し、腰のホルダーへと突き刺すとその場から立ち去ろうとする。

レイフォンは怪訝な顔つきでもう一度振り返るとそこには死に絶えた汚染獣の身体の一部が青白い光を放っていた。

その光を見たレイフォンは、見慣れない光の美しさと好奇心から、無用心にその光へと近付いていく。

「なんだろう？ 綺麗な光だけど…」

無造作にレイフォンは、汚染獣の死骸へと手を突っ込むとその光の正体を探す。

光の正体は簡単に見つかり、今度はレイフォンの右手が光り始める。

恐る恐るレイフォンは、ゆっくりと手を開き握っていたものを確認する。

そこにあっただのは青い光沢を放ち、菱形の形をした宝石であった。

その宝石を呆けたように見詰めるレイフォンだったが、彼の頭にある名案ともいえる閃きが浮かぶ。

そうだ。リーリンにプレゼントしよう、と。

昔から世話なりぱなっしの幼なじみの喜ぶ顔を思い浮かべ、少し顔を弛めていると――それは起こった。

「!!!!」

突如、レイフォンの右手に収まっていた宝石が先程よりも強い光を放ち始めたのだ。

思わぬ強い光にレイフォンは、目を眩ますと同時にレイフォンは危険と直感し、その宝石を投げようとする。

「なっ!!」

がしかし、宝石はレイフォンの手に完全に引っ付いたように全く離れようとしなない。

マズイー、レイフォンはそう思い、右手に持つ宝石を外そうと左手を伸ばすとそこで異変に気付いた。

右手が何かに吞まれていたのだ。

レイフォンの首筋に寒気が走る。

理解できない状況にレイフォンの身体は完全に固まってしまう。

その間に宝石から放たれる光は、レイフォンの右肩と右足を呑み込んでいた。

そして――

「リーリンっ！」

レイフォンの身体は、青い光を放つ宝石に吸い込まれいき、そして――

宝石は消失した。

こうして、レイフォン・ヴォルフシュテイン・アルセイフは、天剣とともにこの世界から姿を消したのだった。

第一話　はやてとレイフォン　修正中

突然であるが彼女、八神はやては、不幸な少女である。

幼い頃に両親を無くし、後見人の存在がいえるとはいえ、彼女の家からは彼女の声しか存在しなくなり、そのうえ彼女には、腰から下を原因不明の下半身麻痺という悲劇が襲ったのだから。

世間一般の目から見ても彼女は不運な少女といえるだろう。

だがしかし八神はやては強かった。

車椅子に乗る生活が続け、料理や洗濯などを覚えて、身の回りのことを全て自分自身で行っていたのだ。

それも9才の女の子が、である。

けれど、一人で生きていく代償は大きく、彼女の同年の子供たちとの生活と大きくかけ離れており、学校に行くことはおろか、友達すらいないのである。

そのためにはやては、基本的には食料の買いだしにスーパーに行ったりと治療のために病院に、後、趣味でもある読書のために図書館に行く時くらいしか出歩かない。

ただ、今日は珍しく彼女の家の近くにある小さな公園に来ていた。

「はあ……楽しそうではないなあ」

ぼそりと羨ましそうに呟くはやての視線の先には、はやてと同学年くらいの男の子と女の子の集団が、遊んでいた。

公園の中心にある噴水の前で男の子同士が水の掛け合いをして遊ん

でおり、女の子は木陰で何やら楽しそうにお喋りをしている。

そんな光景を見てはため息をつくという行為を繰り返している。

本当に楽しそうだ。

できれば仲間に入れてほしい、とはやては思ってしまう。

だが、それを彼女の心の何処かが否定するのだ。

走ることもできないうえ、いつ倒れるかもしれない自分を仲間にしたか、彼らにも迷惑が掛かるのだ、と。

これがはやての美德であり、ある意味欠点である。

もう少しわがままを望めば、目の前の彼等とも友達になれるかもしれないし、遊べるかもしれない。

家事のことだって、後見人から渡された巨額ともいえる資産でお手伝いさんでも雇えば、樂することができ、その余った時間を好きな事に費やせるのだ。

「ふう……いつまでも見ててもしゃあないな……ご飯の用意せなあかんし、はよ帰ろ」

けれど、彼女がその選択を選ぶことはない。

自分にそう言い聞かすとはやては、もう一度だけ目の前で楽しそうに遊ぶ彼らのほうを眺めると、車椅子をゆっくりと動かし始めた。

?・?・?・?

玄関の扉を開き、いつものように家の中に入ると、はやては思わず首を傾げてしまう。

首筋に何か冷たいようなもの触れたような悪寒を感じたからだ。だが、玄関付近は今朝出てきたときと同じ状態で、物音もはやてが扉を閉める音しか聞こえなかった。

気のせいかと思った瞬間、扉の向こうのリビングの方から何か落ちたような音が聞こえた。

その音にははやては思わず、身体をピクリと震わす。

「な、何の音なん?」

はやての言葉への返答は無く、その後物音一つしなかったので、何か落ちたのだろうと結論づけるとはやては、車椅子を動かし始めた。

その瞬間、再びはやての耳に物音が聞こえる。

先程の大きな音とは違い、例えるなら人の足音のような音が聞こえる。

というより、間違いなく足音である。

はやては現在この家で一人で住んでいる。

両親もいないし、親戚も友達もいないはやての家を尋ねてくるのは

宅配業者が行きつけの病院の担当医である石井先生くらいだろう。しかし、宅配物を頼んだ覚えは無いし、石田先生が来る日でもない。唯一、会ったこともない父の古い友人であるグレアムと言う人が該当したが、普通に考えて鍵の閉まった家に無断で侵入するなんておかしい。

つまり考えられるのは、一つ。

「け、け、警察に……」

泥棒、もしくは強盗のどちらかある。

それに気付いたはやては慌てて自分のスカートのポケットから携帯電話を取り出し始める。

家の固定電話は、リビングの方にあるから取りに行くことなんてできないため、慣れない携帯電話を使おうとするが、恐怖のあまりに携帯電話を落としてしまう。

慌てて携帯を拾うために車椅子から降りたはやては、警察に電話しようとした携帯を手にとった。

その瞬間、はやての耳に段々と大きくなる足音が聞こえると、それに慌てたはやては、更に混乱し始めた。

「け、警察の番号は、……あつあれ？　わ、わからへん！！　119？　104？」

押すボタンがわからないほど混乱するはやてに対し、足音は確実にはやての方へと近づいてきている。。

「ああ！　そうや、104で110の番号を聞けば……ってそうや110番や！！」

奇跡的に思い出したはやてがボタンを押そうとした瞬間、廊下の向こうの扉が開いた。

思わず唾を呑み込んだはやては壊れたブリキの人形のように後ろに振り替えると、そこに現れたのは、フルフェイスのメットを被り、ライダースーツのような服を着込んだ人の姿だった。

そして、極めつけは手に握られた白金の剣である。

まさに強盗ルックである。

「ぎゃあああああっ！！ 殺人鬼がおるっ！ 殺人鬼がおるっ！
ああ……私を殺して食べても美味しくないで！！」

いい具合に錯乱し始めたはやての頭では、目の前に人間が強盗から殺人鬼へとグレードアップしていた。

その言葉を聞いた殺人鬼（仮）は身体をゆらゆらと揺らしながら近づき、そして――

「あれ？」

大きな音を立てながら後方へと倒れた。
その場には沈黙が残った。

？・？・？・？・？

目が覚めたレイフォンの視界に映ったのは知らない天井だった。
一瞬、現状が理解できないレイフォンだったが、段々とあの時のことを思い出し始めた。

汚染獣を倒した後、宝石を見つけて、そのまま白い光に呑みこまれる光景を。

だが、それ以上のことを覚えておらず、身体をゆっくりと起こしてみる。

孤児院と違い、真っ白な壁紙に包まれた部屋にはやはり見覚えのない調度品が置かれており、その際レイフォン自身がベッドの上に寝かされていたことに気付いた。

「おっ、気がついたみたいやね」

その言葉にレイフォンは振り返ると、そこには扉を開いてこちらの様子を窺う少女がいた。

一瞬警戒したレイフォンだったが、少女の人懐っこい笑みに毒気を抜かれ、視線を少女に合わせると口を開く。

「えっと、君は？」

「うん？ 私はこの家の主やけど、そういう君は誰なん？ なんか

知らん間に上がりこんでるみたいやけど」

少女の言葉を聞いて、ようやく現状を理解し始めたのかレイフォンは慌てながら少女に向かって頭を下げる。

「ええ！？　その、ご、ごめんなさい」

「うん、まあいいけど、なんや泥だらけやな」

少女の指摘に、レイフォンは思わず自分の防護服を眺める。
都市外で汚染獣と戦っていたため、砂や泥などで汚れきっており、そのせいで寝ていたベッドも泥などの汚れが付着していた。

「ご、ごめん、布団が」

「別に気にせんでええよ、今日シーツを変えようとしてたから」

少女の言葉にレイフォンは顔をあげると、その時始めて少女が車椅子に乗っていることに気がついた。

少女は、レイフォンが自分の車椅子を見ているのに気付き、

「ああ、足が麻痺っているだけや」

何でもないように答える少女に、レイフォンも車椅子から視線を外した。

「あの、ありがとう、助けてくれて」

ようやくお礼を言えたレイフォンは深ぶかと頭を下げる

「別にええよ。しかし、その様子やと強盗さんでもないみたいやし……そうやな、名前教えて貰えるか？いつまでも君や自分って呼ぶは嫌やし。あつ、私は八神はやてな」

人懐っこい笑みを浮かべた少女――はやての勢いにレイフオンは押され気味に鳴りながら名乗り始める。

「レ、レイフオン・ヴォルフシュテイン・アルセイフ」

「レ、レイフオン？ボオルテン？アシウイス？」

？マークを頭に浮かべながら困惑するはやてにレイフオンは苦笑しながら、

「レイフオンでいいよ……えーつとはやて？」

レイフオンが慎重にはやての名前を呼ぶとはやては嬉しそうに頷く。

「うんうん、そうや。所でレイフオン君は外人なん？名前からして明らかに外人なんやけど、何処の国の人なん？」

はやてからくる質問の嵐に、レイフオンは慌てて答えていく。

「が、外人？……うーん、外人なのかな？
出身は槍殻都市グレンダンだけど……」

「槍殻都市グレンダン？……そんな都市あったかな？何処の国の都市なん？」

「え、ええ？国？ええーっと……」

（グレンダン知らない？

いくらはやてが武芸者じゃなくても知ってるくらいの知名度はあるはずなのに……

それにはやてのいう国ってなんだろう？）

頭に入る色々な情報――

「あっ！レイフォン君」

レイフォンは頭から煙を出して倒れるしかなかった。

「ふーん、レイフォン君はこの世界の人間じゃないんや」

あの後、復活したレイフォンは、はやてに質問をする。

汚染獣について、武芸者について、移動都市――レギオスについて
……

しかし、はやての答えは、

「汚染獣？何なんそれ？なんかの動物？」

「武芸者って、格闘技してる人たちのこと？私が知ってるのは、ミ
ルコとかサップとかアーツとかしか知らんわ」

「移動都市？はあ……そんな奇っ怪な都市なんてあるんやね……」

はやての答えを聞いて、レイフォンはついにここが別世界だと悟る。

グレンダンを知らなくても、レギオス、武芸者、汚染獣を知らない
と言うのは、あり得ないからだ。

知らないというなら、それはここが別世界という照明になる。

驚きを隠せないレイフォンだったのか、何となくそうかと思わず納得してしまう。

この部屋の調度品が、自分がいた世界の物とは微妙に違う。

このレギオスの特色かと思っていたが、はやての名前も、レイフォン達とは全然違う感じだった。

別世界という答えを得て、未完成のパズルが次々に埋まっていく感じがする。

と同時に自分はどうすればいいのだろう、と。

レイフォンは、今まで孤児院にお金を入れるため、汚染獣と戦ってきた。

お金のために闇試合に天剣として参加し、荒稼ぎもしてきた。

そのために敬愛する養父・デルクに教えられたサイハーデンの刀技も、封じた。

その代償も意義も、別世界に飛ばされたせいで、全て意味が無くなった。

レイフォンは、どうやって生きればいいのか、と悩み始める。

ここには、リーリンも、デルクも、陛下も、リントンスもない。

レイフォン一人しかないのだ。

悩むレイフォンの横でもはやても何か考えている。

十

（レイフォン君の言うことはようわからなかったけど、要はレイフォン君は今は一人ぼっちなんやな……）

はやては、レイフォンの横顔を盗み見る。

そこには、動揺、哀しみ、絶望、……それらがレイフォンの表情に張り付いている。

はやてには、その気持ちがよく解ってた。

両親を失い、下半身の自由が奪われたとき、似たような感情を抱いたのを覚えていたから。

（うーん……どうしたらいいんやろな……）

はやては、頭を抱えて考えて始める。

しかし、どうすることも出来ないことも解っている。

結局の所、レイフォン自身が決めて、割り切って、覚悟しなければならぬということ……

（なら私に出来るんはこれくらいやな……）

「……なあ、レイフォン君」

「……え？何、はやて」

はやてがレイフォンに話し掛けると、レイフォンは下に向けていた顔を慌ててはやての方に振り向く。

「レイフォン君の話は、ようわからなかったけど、レイフォン君が今、行く宛がないことはわかる」

「……あ、うん……そうだね……」

暗くなっていくレイフォンに、はやては優しく笑みを浮かべて――

「なら、家でおらへんか？」

レイフォンに家での滞在を提案した。

驚くレイフォンを見て、はやてはやっぱりな……と苦笑する。

いきなり、家にいてもいいと言われ、不審に思わないわけがない。

しかもレイフォンは、不法侵入者でもあるのだ。

そんな自分を家に呼ぶのは変だと思うだろう。

はやて自身、何故目の前の少年を助けたいと思ったのか解らない。

まだ会ってから3時間も経っていない。

いくらお人好しでもそうそうない結論になっただろう。

（ああ、そうか……）

しかし、目の前のレイフォンを見て、はやては自分が何故、こんなことを言ったのか、解った気がする。

（私は、助けたいんや……私と良く似た境遇のレイフォン君を……それが）

過去の自分を助けることになるということ……

そして、自分の孤独を分け合える人間を逃がしたくないから……

そんな自分にはやては、笑うしかなかった。

（もしかしたら、レイフォン君は、これを見抜いて白くないって言ったのかな……？）

目の前のレイフォンを見て、はやては答えが出るのを待った。

+

レイフォンは、はやての提案に困惑と動揺を隠しきれなかった。

（こんな展開になるなんて……）

全く考えてなかった提案をレイフォンは、必死で考える。

（僕は、この世界で一人だ。……だけど、まだ死んではない。もしかしたら、帰れる方法もあるかもしれないから……）

レイフォンの答えは一つしかなかった。

「うん、はやて。申し訳ないけど、泊めてもらえるかな？」

レイフォンの答えにはやては満足そうに頷く。

「よし。なら今日はレイフォン君の入居祝いや。悪いけど、買い物付き合ってくれへんか？」

「うん、いいよ。荷物持ちは得意だから」

互いに様々な思いを持ち、共同生活を始めたはやてとレイフォン。

この出会いがどういう結末を迎えるのかは、誰も知らない……

第二話 始まる運命

レイフォンが、はやての家に暮らし始めて、一週間……はやては、レイフォンを引き連れ、近くにあるスーパーマーケットに顔を出していた。

レイフォンは、買い物カゴを車椅子に乗るはやての膝に置いて、はやての指示する食材をカゴの中に入れていく。

「よし、レイ君、次はお肉や。牛は余ってたと思うから今度は豚にしようか。で、ほん次は野菜コーナーでニンジンとキャベツをこうてきてもらおうか」

「うん、わかった。行ってくるよ、はやて」

はやての車椅子を押していたレイフォンは、その場にはやて乗る車椅子を置くと、小走りで他の客で密集している肉コーナーに向かうと小さな体を活かして簡単に豚肉を手に入れてきてはやてのカゴに入れると次は野菜コーナーへと向かう。

そんなレイフォンの動きを見てはやては満足そうに頷く。

車椅子のはやてではこうも簡単にあの人ごみの中食材を手に入れることはできない。

まれに親切な人がいるときは譲ってくれるときもあるが、そんな人はそうそういないし、何より譲ってもらったはやて自身も悪い気がしてならなくなる。

そうなるといつも残りものばかりになっていたのだが、レイフォンがいるとこうして鮮度などがいいものを手に入れることができるのだ。

はやてがこうしてレイフォンに感謝をしていると店内のアナウンスが鳴り始める。

『今日は、スーパー亀井にご来店ありがとうございます。これより、お肉のタイムサービスが始まります。牛、100グラム、130円。豚は100円とさせて頂きます。各自数量20と限られています…』

アナウンスを聞いているとレイフォンがニンジンとキャベツを持って帰ってきていた。

「はやて」

レイフォンの言葉にはやては頷き、不敵に笑う。

「そう、戦争や」

今日は激安タイムサービスの日、主婦の戦争日である。

+

「いやゝゝ、レイ君がおったら助かるなゝゝ私、一人だったらタイムサービスなんて、参加できへんし」

本日の戦果を膝の上に乗せ、レイフォンに押されているはやては、満面の笑みを浮かべる。

それもそのはず今日の広告に書かれてあったタイムサービスの品々は、レイフォンの活躍により、全て手に入れた。

そのときの周りの主婦の茫然した姿は、はやての笑いのツボに入っただようでも今も思い出しては嘔き出している。

因みに、レイフォンはここ最近のタイムサービスでの動きで主婦から『疾風の狩人』と微妙な異名で呼ばれている。

「なら今日買ったアレは……」

「駄目や。納豆は体にいいんやで。そんなん私が許すと思うか？」

機嫌のいいはやてに、納豆廃止を訴えたレイフォンだったが、それは別だとはやてにバツサリ斬られる。

基本的には、嫌いなものというより食べれないものがないレイフオンだったが、納豆とくさやだけは、駄目だった。

人間の食べ物じゃない、と呟いたレイフオンの目の前で美味しそうに納豆を食べていたはやてに、殴られたのはいい思い出である。

「納豆を食べんと大きくならんぞ？」

ニヤニヤと笑うはやてに、レイフオンはボソリと呟く。

「はやてが言っても説得力は無いけどね……」

「うるさい、対して変わらんやないか」

後ろに振り向いてポカポカと叩き始めるはやてを見てレイフオンも笑ってしまう。

この一週間でレイフオンははやてのおかげもあり、漸く笑顔を取り戻してきた所だ。

別世界に來たせいでレイフオンは、自分の部屋としてあてられた部屋の片隅で、ぼーっとしていたのだが、それを心配し見かねたはや

てがレイフオンを強引に外へと連れ出した。

そしてその行動は功を奏したようで、環境が変われば気持ちにも変わるというように、レイフオンの気持ちも段々と前向きになっていった。

前向きになり、余裕ができたレイフオンは外の世界に興味を持ち始めた。

空にはエアフィルターなんて物は無く、何処までも続く青空は広がっており、汚染獣という危険なものなんてものも存在しない。こんな世界はレイフオンはいままで見たことがなかった。

そして、家に帰るとはやての手料理が待っていた。

はやての腕前は、リーリンと同等ぐらいだったが、如何せん貧困なグレンダンで手に入れた食料より、この豊かな海鳴での食料のほうが断然、質が高い。

これには、レイフオンも向こうの孤児院の皆に罪悪感を抱いてしまったが、残すのは持ったのほかだと、思いながら口に運び、味わった。

今までにない穏やかな日々を過ごすレイフオンの体や心は癒されていく。

そして現在、レイフオンは、感謝の意味を込め、本日誕生日のはや

てに手料理を振る舞うことにしたのだ。

はやても初めの内は遠慮したのだが、珍しくレイフォンが押してきたため、先に折れた。

はやて曰く、

「ヘタレイフォンがあんなに言うやから聞いてあげなあかんやろ」

と言いながらもその顔は嬉しそうに笑っていた。

ちなみにヘタレイフォン発言に若干レイフォンが凹んだのは内緒である。

こうして料理を始まったレイフォンの後ろ姿をはやてが嬉しそうに眺めている。

その目は、初めてレイフォンを台所に入れたときの心配そうな目ではなかった。

レイフォンとの共同生活の二日目にレイフォンが手伝いたいといって台所に来た時は、はやては思わず心配してしまった。

自分と同じくらいの男の子が料理の手伝いなんてできると思っていなかったからだ。

しかしその心配はものの数分で無用の長物と化した。

レイフォンのいた孤児院では、料理に掃除、洗濯は孤児院の皆でやるものと決めており、そのためレイフォンもリーリンほどではないが、料理を作るのだ。

そのためレイフォンは包丁を手慣れた手つきで握ると次々に用意された食材を切っていく。

その姿を見てはやては驚いたのは覚えている。

何日か前の事をはやては懐かしく思いながらレイフォンの後ろ姿を見ていた。

十

「ご馳走様でした。いやゝゝしかしレイ君、料理上手やね」

はやては、レイフォンの手によって作られたカレーを完食すると満足そうに呟いた。

「まあ、料理と言っても、カレーだし……切った野菜を入れて煮込んだだけだしね」

「そんなことあらへんよ。カレーやって料理が下手な人が作れば、殺人的マズさにもなるしな。それにレイ君は隠し味にリンゴとチョコレートを使うという手間も加えたやん。そのおかげでコクに甘味も良かったし、レイ君は立派な物を作ったと自信持っていていいで？」

はやては片目を瞑り、愛嬌良く笑うとレイフォンも釣られて笑みを浮かべる。

そのレイフォンを見て、はやては思うことがあったが、口を閉じることにした。

こうして夕食が終わると、はやての提案でテレビゲームをすることになったが、ゲーム初心者のレイフォンがはやてに勝てるわけなく、全敗するという結果に終わったが、二人共、終始笑顔でゲームを終えた。

十

深夜。

何時もなら趣味である読書をベッドの上で勤しむはやてだったが、今日は、横になりながら天井を見上げていた。

天井を見上げるはやてが考えているのは、隣の部屋で眠っているだろうと思われるレイフォンのことだ。

今日、食事時に見せたレイフォンの笑み……

ゲームをしていたときのレイフォンの笑み……

そして、今まで見せたレイフォンの笑み……

それらは笑っているようだったが――全て、泣いているようにも見えた。

「やっぱり……そう割り切れるものやないんやな……」

はやて自身は、今日の誕生日は、両親が死んで以来、楽しく笑えた誕生日だった。

はやては、レイフォンが来てくれたおかげで、長年溜まっていた孤独感が消え、毎日が楽しく過ごしている。

しかし、レイフォンはどうだろう……

今までいた世界から飛ばされて、知り合いが誰もいない世界。

レイフォンから聞いた話では故郷のグレンダンでは、貧しい生活をしていたと言っていた。

生活面では、こちらの方が断然に優れている。

しかし、それでもレイフォンはやっぱり帰りたいのだろう。

「レイ君がおったら私は楽しい……でもレイ君は孤独感を味わう……レイ君がもし帰ってしまったら、今度は、私は一人ぼっち……」

それは嫌だ、とはやては断言できる。

前とは違い、人と生活する温かさを知った今ではレイフォンという新しい家族を失いたくない。

ならどうする？

決まっている。レイフォンにこちらの世界に愛着を持って貰い、好きになってもらうことだ。

そうなれば、二人共悲しい思いもせずに楽しく過ごしていける。

「でもそうなるためには、どうすればいいんやろ？……先ず、お互いに理解し合うのが一番と聞いたけど……」

こういう生活のせいかな他人との接触が極端に薄いはやては、どうすればいいかわからない。

ごろりと寝がえりをうつはやての視界の先に、本棚にある黒い本が映る。

はやてが物心つく前から、本棚にあった黒い本である。

回りに鎖が巻き付いているせいで今まで一度も開いたことはないが、はやて自身その不思議な本を気に入っていた。

そんなはやてのお気に入り本であるそれを見て、はやてはあることを思いつく。

「そう言えば、レイ君には見せたことなかったな……変わった本やし、レイ君も気に入るかもしれんしな……明日にでも見せようか」

そう結論を出すとはやては、車椅子に向かってベットの上が這い始める。

「先ずは、久しぶりに本を綺麗にしとこうか……埃が溜まっているやろうし」

善は急げというように、はやては車椅子を本棚まで寄せると目当て

の黒い本に手を伸ばす。

そしてはやての手が黒い本に触れた瞬間――

黒い本が光を放ち始めた。

第三話 ヴォルケンリッター

はやての誕生会を終え、パジャマに着替えたレイフオンは、ベットの上に寝っ転がると自室の天井を見上げながら、グレンダンに在る孤児院の皆のことを思い出していた。

「リーリン……養父さん……孤児院は皆……元気にしてるかな」

レイフオンの口から洩れた言葉は孤児院の皆の心配のみである。決して、陛下や同僚を心配する言葉は一片もない。

リテンズやサヴァリスが死ぬわけないし、陛下に至ってはグレンダンが滅びても生きてそうなくらいの生命力がありそうである。

何より、グレンダンが汚染獣に落とされるなんてあり得ないことである。

レイフオンを除く11人の天剣、それを凌駕する陛下が在るのだから。

そういう意味では、リーリン達の安全は確保されたこと同然だ。

しかし、レイフオンの心配はそれとは別で、食料難のほうである。

レイフオン自身が抜けたせいで収入源が大幅に少なくなるのは、レイフオン自身よく理解していた。

だからこそ、レイフオンは早くグレンダンに帰らなくてはならないのだ。

そう考えながら、レイフォンはベッドの脇に置いてある天剣を取る。一部を除くと何も変わりようのない相棒であるが、その一部にレイフォンは、視線が移る。

青い菱形の宝石。

レイフォンをこの世界に送った原因であるものである。

何故かわからないが、いつのまにか天剣に嵌り込んでしまっているのだ。

復元させても、何の支障もないことは確認したが、この石がレイフォンを元に戻すキーになることはわかっていて、それがただで、この宝石が何かとか使い方などはまったくわからないのだ。

「くそっ……駄目だ。全然わからない……」

この石のせいで、と親の仇を見るような目で睨み付けるレイフォンだったが、不意に壁の向こうから物音が聞こえた。

思わず身体を起こすと再び、物音がレイフォンの耳に入る。

物音がするのは隣の部屋——はやての部屋である。

「はやては、まだ起きてるのかな？」

何時もならもう寝ているのに、とレイフォンが不思議がっていると

「ひゃああああっつっ！！！ごっ強盗さんやっ！！」

隣のはやての部屋から、はやての悲鳴が聞こえた。

「っ！！はやて！！」

その声を聞くや否や、レイフォンはベッドから飛び起き、隣のサイドディスクに置いてあった基礎状態の天剣を握りしめて、部屋の扉を蹴り抜くように開ける。

「レストレーション01」

復元言語を唱えると天剣は、白金の剣へと変化する。

剣を握り、活勁を体中をはしらせるとはやての部屋の前に立つ。

「はやて！！」

扉を蹴り破るように開けると、そこにいたのは車椅子に乗るはやてとその回りに立つ三人の女性と一人の男。

その一人の白銀の髪の褐色の肌の大柄の男がはやてに触れようとした瞬間――レイフォンは一瞬で男まで間合いを詰め、男の横腹に蹴りを放った。

「どけえっっ！」

「っ！！がはっ……！！」

内力系活剽を纏った右回し蹴りは、易々と男を吹き飛ばしそのまま後方の本棚まで吹き飛ばした。

その衝撃で崩れる本棚を呆然と見詰める三人の女性を無視するとレイフォンは、はやてを左肩に抱き抱えそのまま部屋の入り口まで下がった。

「はやて、無事?!」

「ああ、レイ君!! 強盗がっ! レイ君に続く強盗さんが!!」

「いや、僕は強盗じゃないし」

はやては混乱気味だったがどうやら怪我等はないみたいで、無事を確認したレイフォンは苦笑いから無表情に戻し部屋にいる四人に視線を移す。

「てめえっっ!! ザフィーラをっ!!」

レイフォンが視線を移した瞬間、三人の女性のうち一番小柄な赤い

髪の毛の少女が、レイフォンを目掛けて槌を振り下ろしてきた。

反射的にはやてを後ろに下ろすと、右手に持った天剣で少女の一撃を受け止めた。

その時、はやての悲鳴が後ろで聞こえたが状況が状況なので許してほしい。とレイフォンは思った。

「何っ!!」

「ぐっっ! 重い……」

両者に驚愕の顔が浮かぶ。

少女は、目の前にいるレイフォンが自分の一撃を受けたのに対して。

レイフォンは、目の前の少女の見かけから有り得ないほどの重い一撃だったから。

この時二人の脳裏には、目の前にいる子供がただものではないことが理解した。

鏑競り合いのような形で睨みあっていた二人だったが、一人の女性の声で流れが変わる。

「ヴィータ、よせ！！主に当たる！！」

「ちっ！」

後方にいる赤毛の女性の言葉に目の前の少女は顔を顰めて舌打ちをする。

しかし、その一瞬の隙をレイフォンは見逃さなかった。

「ふう！」

「っ！ぐあっ！！」

両手の力を抜き、少女の体勢を前方に崩すと右足で少女を押すように蹴り飛ばした。

後ろに吹き飛ばされる少女を見ながらレイフォンは素早く両手で天剣を構える。

先程の一合で、目の前にいる4人が只者ではないことがわかった。

そんな相手にはやてを守りながらの4対1は無謀である。

レイフォンは、この状況を打破するために頭をフル回転させる。

一番に考えたことは目の前の相手の戦力分析である。

目の前の少女の力は侮れない。

レイフオンでも無防備な所に、一撃を喰らえば致命傷になりかねない程の一撃である。

先程、蹴り飛ばした男も手応えがあった一撃を喰らっても、平然と立ち上がってきている。

そして未知数の女性二人。

特に赤毛を後ろで束ねた髪をした女性のほうは、この四人のリーダー格であり、レイフオンの見立てでは一番腕が立ちそうな感じがした。

（リーダーを潰せば、集団には動揺がはしる……ならリーダーのあの女性を倒して、はやてを連れて逃げる？……駄目だ……倒しているうちにはやてに……）

頭の中で考えを纏めているレイフオンだったが、不意にリーダー格の女性がこちらに近付いてくる。

表情は硬いが、先程の少女とは違い、敵意みたいなものが感じなかった。

そのため、レイフオンは天剣を構え警戒はするが、何もできずにいた。

「色々聞きたいことがあるが、貴公は何者だ？」

ピンク色の髪の女性のいきなりの質問に対し、レイフオンは戸惑いながら後方にいるはやての方を見る。

その視線にはやては一度ピクリと震えると、そのままレイフォンのパジャマの上着を掴んだ。

その様子を見たレイフォンは、女性の方を向き直ると警戒しながら答えた。

「はやての家族だ」

その返答に対し、女性はレイフォンの顔と後ろの隠れるはやての顔を覗き見る。

その行動にレイフォンとはやては首を傾げそうになるが、目の前の女性は、未だレイフォンを威嚇する少女の肩に手を置く。

「待て、ヴィータ。我々は勘違いしているかもしれん」

肩を叩かれた少女は不機嫌そうな顔つきで口を開く。

「勘違いって何だよシグナム？彼奴はいきなりザファイラに攻撃を仕掛けてきたんだぞ？」

「そっちこそ、いきなりはやてを襲ってたじゃないか？」

ヴィータと呼ばれた少女の物言いにレイフォンもムスツとした様子で言い返す。

そんなレイフォンの返答が気に入らなかったのか、怒気を溢れさせながら目の前のレイフォンに噛みついた。

「何だとてもえ！！」

「ヴィータ、よせ……主の前でこれ以上恥をかかせるな」

レイフォンに襲いかかろうとするヴィータを赤毛の女性―シグナムが再度止めるとレイフォンのほうに向き直る。

そして、突然片膝をつき、いきなり膝を折る。

「主の騎士である貴方様にヴィータが攻撃を仕掛けた事に対し、このシグナムに免じて許していただきたい……」

そう言って頭を下げ始めたシグナムという女性の行動に後ろにいた銀髪の男性も金髪の女性も一度おどろくと何か気付いたような顔をして揃ってシグナムと同じ動作をする。

その様子をレイフォンとはやて、そしてヴィータの三人は固まったように呆然と見ていた。

?
?
?

あの変な雰囲気から数分後、はやての言葉により、居間に集まるとシグナム達の説明が始まる。

数時間に及ぶ説明だったのと難しい内容だったためレイフォン理解できたことは、

シグナム達は、はやてが持つ『闇の書』と呼ばれる本の防衛プログラムで『ヴォルケンリッター』と呼ばれる存在だということ。

彼処にいたのは、はやてが『闇の書』に触れたことに反応して発動し、召喚されてしまったということ。

そして最後に真っ白の『闇の書』の666ページを埋めると莫大な力を得ることができ、はやての足も直るということ。

そして、はやては魔導師という才能を秘めているらしい。

説明を聞いて一番に口を開いたのははやての隣で頭を抱えていたレイフォンである。

「いきなり攻撃してしまいすみませんでした!!」

ソファーから飛び降りてからの流れるような土下座をジグナム達に向けてするとそのまま力の限り謝った。

その様子にジグナム達が困惑した様子で顔を見合わせていた。

「いや、それはこちらも不手際もありましたし……」

「でも……」

ジグナムの言葉をきいてもレイフォンは顔を暗くさせたままだ。

そんなレイフォンを見て、助け船を出す男がいた。

「俺なら構わん。同じ主を持つ同士として、あの主を守ろうとする気迫、見習わなければならぬ」

そう言って神妙に頷く銀髪の男―ザファイラの言葉にレイフォンは

苦笑するしかなかった。

「でも私は許さねえぞ……仲間をいきなり攻撃されたんだからな。いくら同じ主の騎士だからって……」

「まあまあ、ヴィータやったっけ？ 皆無事なんだし、レイ君を許してやってな。ほらケーキあげるから」

レイフォンを睨みつけるヴィータにはやては、冷蔵庫にしまっていた誕生日ケーキをヴィータの目の前に置いた。

「……わかった。私も騎士だ。これ以上は何もいわねえ……」

そう言ってはやてから差し出されたケーキを美味しそうに食べるヴィータを見て、和んでいたはやてが、何か思い出したかのように頷く。

「そうや、明日は皆の服を買いに行こうか。レイ君のもまだ買っとなあかんし」

さあ、皆明日に備えて寝るでー、と楽しそうにいうはやてにジグナムが慌てた口調に言う。

「ちょ、ちょっと待ってください！」

「うん、なんやジグナム。心配せんでも、私がジグナムにバッチリ合う服を探したるからな」

物凄く良い笑みで親指を立てるはやてにシグナムは、一瞬呆然とするが、しかし直ぐに我に返る。

「主はやて、それより蒐集はどうするのです！？蒐集をして闇の書を完成させれば、貴方の足は治るのですよ！？」

シグナムの言葉に、はやてを苦笑いする。

「うーん、でもそれなら人様からリンカーコアっていうの？それを取らなあかんのやろ？ならええわ。人様に迷惑かけてまで治したくないし」

「しかしっ！」

「それに私は今幸せや……一人だったときとは違い、レイ君もおるし、今日の誕生日ではシグナムやヴィータ達という新しい家族を貰ったところや。これ以上はもうええわ。それより私は今と言う幸せを満喫したい」

「しかし、足が治ればもっと幸せになるのでは……？」

「でもそれなら誰かが苦しい思いをするんやろ？ならそんな幸せいらんわ」

柔らかくそして強固な拒否にシグナムは、レイフォンの方を見る。

「レイフォン殿は？」

貴方からも主を説得してください。という目で見てくるシグナムにレイフォンは顔を苦笑いさせる。

「うーん、僕もはやての足は出来れば治してあげたいけど、でもはやてが嫌っていうなら、騎士としては聞かなければいけないんじゃないかな？ 後、はやてって中々頑固だし」

「そうやで、シグナム。私はそんな望んでないよ。そんなよりシグナム達と楽しく過ごす方が私には重要や」

レイフォンの言葉にはやては便乗するように言うとシグナムは難しい顔をする。

「わかりました。主はやての命により、ヴォルケンリッターは蒐集行為を行いません」

それを聞いたはやては、満面の笑みを浮かべ、隣でシグナムに同情の目で見えるレイフォンとハイタッチをしている。

その様子を他の守護騎士達は、微笑ましく見ていた。

第三話 ヴォルケンリッター（後書き）

おまけ

シグナムとはやてが話をしている時、ザフィーラは隣にいた金髪の女性の様子がおかしいことに気付く。

「どうしたシャマル。先程から俯いて……」

ザフィーラが話しかけると金髪の女性―シャマルは顔をあげる。

その顔は若干涙目であり、それを見たザフィーラは、少し驚いた。

「……ないんです」

「？何がだ？」

か細い声で呟くシャマルの声を、ザフィーラは聞き取ろうと耳をシヤマルに向ける。

「私だけ……ないんです」

「だから何がだ？」

「私だけ、本編で一言も喋ってないんです!!」

名前も出てきてないじゃないですか!と言ってわんわん鳴き始める
シャルにザフィーラは同情の目で慰めるしか出来なかった。

第四話 平和な一時 その一

翌日。

昨日はシグナム達の登場とその後の話し合いが続いたせいか、普段より遅い時間に目を覚ましたレイフオンは、いつものように台所に向かうと――

「あかん！ シャマル！！ 米を洗うんに洗剤はいらん！！ 水だけで洗うんや」

「で、でもはやてちゃん、白いのが出てくるのですけど……」

「それはいいんや！！ ってシグナム、火力強すぎや！！ 魚が焦げ始めてるで！！」

「す、すみません！！」

そこはある意味戦場であった。

焦げ臭い匂いや洗剤の匂いが充満しており、レイフオンは鼻をつまんでしまう。

台所に辿りつくところにはシグナムとシャマルが鍋や包丁を片手に料理に奮闘しており、その後ろではやてが指示をとばしていた。

「シャマルとシグナムが、主に料理を作らせるわけにはいかない料理の手伝いを頼み込んだのだ。まあ、結果は見ての通りだが」

その光景にレイフオンは呆けたよう佇んでいると背後から声をかけ

られた。

その声に振り向いたレイフォンの視界に現れたのは、青い毛並みをした大きな犬だった。

「い、犬が喋った!!」

犬が言葉を放つという異様な光景に出くわしたレイフォンは、思わず驚き後ろに下がってしまう。

そんなレイフォンに目の前の犬？は、呆れたように首を左右に振った。

「犬ではない、狼だ。あと俺だ。ザフィーラだ。昨日説明しただろう？俺は守護獣だよ」

「ああ……そう言えば……」

現れた犬改めて狼は、どうやらザフィーラのように、レイフォンは昨日の話でザフィーラがそんなことを言っていたことを思い出す。

だが、今まで生きてきた中で人間が犬になるとか、犬が人間になるという光景に出くわしたことがなかったレイフォンは冗談感覚で聞いている。

しかし、何故今ザフィーラは犬の状態なのかと、疑問に思ったレイフォンは思わずザフィーラに尋ねてみた。

「けど、何故その姿に？昨日みたいに人形態にならないの？」

「……主はまだ幼き女性だ。あの姿では色々問題であろう」

レイフォンの質問にザフィーラはレイフォンから目を逸らしながら呟いた。

その反応を見てレイフォンははやてが犬を欲しがっていたことを思い出した。

「ああ、だから犬に」

「狼だ」

哀愁を漂わせるザフィーラにレイフォンは心の中で合掌すると、この空気を切り替えるため、唯一姿の見えない少女のことを尋ねた。

「そういえばヴィータは？」

「ヴィータなら、まだ主はやての部屋で多分寝ているのだろう」

「そうなんだ……ザフィーラ、そろそろ起こして来てもらっていい？ 僕は向こうを手伝わなきゃいけないさそうだから……」

何故かシャルの叫び声が聞こえる台所の方を見ながらレイフォンは疲れたようにそう呟いた。

「……心得た」

我が同士が迷惑をかけるな、とレイフォンに励ましの声をかけると、ザフィーラはそのままの姿ではやての部屋へと向かうため、部屋を退出した。

本当に犬だな……とザフィーラの後ろ姿に素直な感想を抱いたレイフォンはそれを見送り、激戦地区であろう戦場に化している台所へ

と足を進めた。

?
?
?

「うん！はやての作った料理はギガうめえな！！」

「それは、ありがとうなヴィータ。あつ、ご飯粒ついとるよ」

「ありがとうはやて」

凄まじい勢いで、はやてが作った朝食を平らげていくヴィータに、はやては微笑みながらヴィータの頬についたご飯粒を取っていた。そんな二人の会話を聞いているとヴィータが昨日よりはやてに対して打ち解けている気がした。

二人は昨日はやての部屋で一緒に寝たらしいから、それが良いきっかけになっただろう。

だが、そんなヴィータの態度は、シグナムは気に食わなかったように、それを横目に見ながら片眉をピクリとさせる。

「ヴィータよ。主はやてにそのような手間をかけさせるな。大体も

う少し、行儀良く味わってだな……」

「うるせえよシグナム。うめえ料理はお腹いっぱい食うのがわたしの礼儀だ。それに手間とかいうなら、魚焦がしてはやてに二度手間かけさせてんじゃねよ」

「ぐうっ！」

ヴィータの思わぬ反撃にシグナムの胸に何か刺さったようで胸元を抑えていた。

その隣ではシグナム以上に苦しんでいるシャルの姿があったが。

まあ、あの台所の惨状から見たら確かヴィータの言う通りかもしれない。

朝から陰悪な雰囲気になりつつある二人を見かねて、この家の主であるはやては口を開く。

「ヴィータ、そんな口きいたらあかんよ、シグナムに謝るとき。シグナムも別にそんなん私気にしてないからいいよ」

主であるはやてにそう言われ、ヴィータもシグナムもお互いにばつ悪そうな顔をして見合す。

「……悪かったよ」

「ああ……」

はやてに叱られ、意気消沈した二人のせいで、先程まで賑やかだった

た食卓が若干暗くなる。

特にヴィータはムードメーカーみたいな役割を果たしていたため、必然的に会話が減ることになった。

そのため、レイフォンも居心地悪そうに周囲を見渡していると、偶然、自身と同じ心境であろうはやてと目があう。

するとはやては、アイコンタクトでレイフォンに対して場の空気を変えように頼んだ。

その意味を何となく理解したレイフォンだったが、その指示はレイフォンには少し荷が重かった。

レイフォンは、自分が小意気なトークで空気を変えたり、話題変更できると思えなかった。

寧ろはやての方が得意では？とはやての方を見るが、当のはやてに思いつきり視線を外された。

困りに困ったレイフォンは、なんとか無難に話を変えようと周囲を見渡し、そしてあることに気付いた。

「あれ？そういうえば、シグナムさんとシャルさんの服はどうしたの？」

シグナムとシャルが昨日のような黒いアンダースーツみたいな服とは違い、この辺で見る人達と変わらない普通の服を着ていた。

実は、ヴィータもだが、ヴィータの場合ははやての服を着ていたのでありレイフォンは気にならなかった。

「あ、ああ、それはな私のお母さんの服や。ダンスの中から引っ張

り出してきたんや」

流石にあの服で外に出るんはどうかと思うし、街のデパートなんてもつと行けんからな……というはやての意見に確かにそうだとレイフォンも頷く。

レイフォンも此処に来た時は、都市外戦闘用スーツ姿だったため、服を買いに行ったときにはやてから上着を貸してもらった。

「あ、でもザファイラはどうするの？ デパートはペット入れないじゃなかったっけ？」

レイフォンは、テーブルの下で肉を一心不乱に食べているザファイラを見ながら呟く。

盲導犬等なら入れるようだったが、八神家には盲導犬は必要なかった。

その質問にはやては待つてましたと言わんばかりに足元に置いてあった紙袋をレイフォンに見せながら答えた。

「それも大丈夫や。ザファイラにはペットモードから人間モードに変わってもらって、お父さんの服着てもらうから……まあ、若干キツいと思うけど、我慢してもらおうわ」

カッコイイ服を選んだからなあ、と言いながらザファイラの頭をはやては優しく撫でた。

その行動を見たレイフォンは、ザファイラが完璧に犬扱いされていることが不憫に思えたが、彼自身尻尾を振って喜んでいたので放っておくことにした。

「なあ、レイフォン殿」

はやて特製の味噌汁をすすっていたレイフォンに向かい側にいるシグナムが話しかけてくる。

「何ですか、シグナムさん」

レイフォンの返答にシグナムは居心地悪そうな顔をする。

「その、さん付けをやめてくれないか。ヴィータやザフィーラは呼び捨てで呼んでいるのに、私とシャルだけさん付けっていうのは……」

シグナムの願いにレイフォンも疲れたように答える。

「ならシグナムさんこそ、殿付けをやめてくださいよ。殿付けなんてシグナムさんだけですよ」

レイフォンもグレンダンでいたときは、天剣授受者という地位についていたため、稀に様付けや殿付けはされていたが、内心それはかなり嫌だった。

あんな風に闇試合に染まった自分に相応しくない呼び方だったから。

それにだ、レイフォンの方も、シャルとシグナムは呼び捨てにはできない

彼女達は、言わば大人の女性である。

はやてと年が変わらないように見えるヴィータと違い流石に呼び捨てには出来ない。

因みにザフィーラは犬の姿を見てしまったから何となくで、そして同僚の天剣のカウンティア達は除く。

そんなレイフォンの考えを知るよしもないシグナムには納得できかつたらしく、口元に手をやり、眉を顰めながらうなり始める。

「むむむ……しかしだな。レイフォン殿は、私達より主はやての騎士をしていた。つまりレイフォン殿は私達より古参の騎士……先輩という形になるということだ。だから殿付けはおかしくはない」

「僕も、はやてと出会ってまだ一週間なのですが……それに僕ははやての騎士なんていう綺麗な者じゃないですよ」

実際はやてとはそんな間柄じゃない、はやては自分の恩人なだけだ。とレイフォンは思った。

騎士というものは高潔で主を思う人間のことを指すとレイフォンは教わった。

しかしシグナムが思っていたことはかけ離れており、堂々とした様子で口を開いた。

「何を言う。あの時、我等から主はやてを守ろうとした立ち振舞い、あれを見て騎士ではないと言えるわけはないではないか。……主はやてはどう思われます？」

いきなりシグナムに話を振られたが、今まで蚊帳の外だったためはやては、少し驚きながら答える。

「うーん、とりあえずお互い名前で呼んでみたらどうなん？さん付けも殿付けも無しや。それなら両方とも問題ないやろ」

これで解決や、とはやてに言われ、シグナムも何も言えなくなる。
レイフォンの方にシグナムは向き直ると、口を開いた。

「……わかった。これでいいかレイフォン」

「……いいですよ。シグナム」

レイフォンとシグナムが呼びあうのを聞いてはやては首をかしげる。

「うーん、シグナムの方は問題なしやけど、レイ君の方は違和感バリバリやな……やっぱりへたレイフォンの影響か？」

違和感は自分も感じたが、それは見た目からであり、へたれは関係ないとはやてに言いたくなるがレイフォンは話が拗れるの恐れ、突っ込むことは諦めた。

「ならシグナムさんでいいのかな？」

「そうやな。そっちのほうがしっくりくるわ」

はやての言葉を聞いたシグナムは驚きながら、レイフォンの方に向き直り、

「卑怯だぞ！レイフォン！！私だけそんな……そうだ！！今すぐへタレを直せ！！」

「……へタレ」

シグナムの支離滅裂な物言いにレイフォンはかなり凹み始める。

その隣では、はやてとヴィータがテーブルを今にも叩くような勢いで笑い始める。

賑やかな食事風景、目の前のそれはまさしく家族の風景だと、はやて達は思った。

「あの……」

そんな空気に一つの声が割り込んできた。

そう、先程から一度も喋らなかったシャルだ。

「ところで皆さん、これは食べないのですか？」

シャルがそう言ってテーブルの中心に置いたのは、黒い物体。

ヘドロのような匂いと真っ黒な見た目のソレの制作者はシャルのようで、今の今まで、シャル除く五人は無意識に視界に入れないようにしていた。

しかし、シャルに出されて目の前に置かれては、無視は出来ない状況になる。

しかし食べるという行動には絶対に移せないとシャルを除く五人の思いが一致した。

口にすれば本当の意味で昇天しそうな存在感がある。

生唾を飲み込む音とともに、そこにいた全員の目が重なり合う。

もちろん皆の目が語っていたのは、誰が食べるのか、の一言だ。

重くなった空気の中、一番早く動いたのはレイフォンであった。

「あ、洗濯を干しとかなきゃ」

『疾風の狩人』の名に恥じないタイムセールスの時並みのスタート
ダッシュでレイフォンはその場からまさしく風のごとく離脱する。

その後を追うように立ち上がったのは向かい側のシグナム。

「なら私も手伝おう。何、気にするな。干すくらいなら私も出来る」

何故か独り言をいいながら素早い撤退を始める『烈火の将』。

「よし、ザファイラ。散歩にいくぜ！ 付いてこい！！」

「応っ！」

意気揚々と駆け出すのは『鉄槌の騎士』と『盾の守護獣』。

特に、守護獣は良く効く鼻のせいでアレの危険性は一番理解していた。

その証拠に尻尾を千切れんばかり振り回している。

そうして四人がいなくなった居間に残されたのは、この家の主と元
凶の『湖の騎士』のみである。

（って、皆、主を捨てて逃げよった……特にシグナム）

予期せぬ裏切りにはやては呆然としていると、目の前から啜り泣く
声が聞こえる。

「ひくっ……私が作ったのなんてみんな食べたくないんだ……やっぱり影の薄い女が作った料理なんて口にしたくないんだ……」

涙目で自傷気味のシャルルの肩をはやては優しく叩く。

「そんなことあらへんよシャルル」

そう言ってシャルルを抱き締めるはやてに、シャルルの方もその体を抱き締め返した。

「はやてちゃん……」

「何や、シャルル……」

抱擁し終わると、シャルルははやてに優しく笑みを浮かべて――

「味見してくれませんか？」

そんなシャルルにはやては優しく微笑み返して――

「それは無理や」

きっぱり、容赦なく断わった。

この後、大泣きしたシャルルのせいで出発が大幅に遅れたことは言うまでもない。

第五話 平和な一時 その二

朝の騒動のせいで、当初の時間より遅く、海鳴市内のデパートに到着した八神ご一行はぞろぞろと列を組んで歩いていく。

「さて、まずは皆の服からや。希望があったら聞くからな」

車椅子をシャマルに押されながら先頭をいくはやてが後ろに振り返りながら後ろにいる皆に話し掛けてくる。

「希望ですか……しかし私達はそのあまり衣服には……」

シグナムの言葉に他の騎士達も頷く。

シグナム達は今までの主からそういう風に人として扱われなかったから服なども着れたらいいというレベルのものしか支給されなかったし、何より戦うだけの存在として生きてきたシグナム達も服などにあまり興味がなかった。

それを聞いたはやては、シグナム達にも服などの色々なことに興味を持ち、戦うこと以外のことをして、はやての家族の人間として生きてほしいと考えていた。

「ならわかった。私が皆に似合うと思う服をガンガン渡していくから、皆もガンガン着てな？で気に入った服を買っていいこうか」

だから今日は精一杯楽しんでもらおうとはやては意気込んだ。

そんなはやての勢いに押された様子でシグナムは口を開く。

「ガンガン……ですか」

「そうや、ガンガンや。そしてここからはスーパーはやてタイムの開幕や」

不敵に笑うはやてにシグナムは相変わらずどう反応したらいいか解らず困惑気味である。

そのシグナムの横では、レイフォンが店内を興味深そうに見ていた。こういう大きなショッピングモールはグレンダンにもあったが、清潔感と煌びやかな感じではなかった。

近くのスーパーとも違い、その光景を物珍しく見ているレイフォンに同じようにキョロと周囲を見渡していたヴィータが声をかける。

「おい、レイフォン、何キョロキョロしてんだよ？」

「そういうヴィータこそ」

「私はいいんだよ。こんな所来たの初めてだから、何か落ち着かねえんだよ」

「僕だってそうだよ。今日で二回目だし」

前に来たのはレイフォンが流れ付いた次の日である。

あのときは、心境が心境だっただけにあまりデパートないを見る余裕なんてなかったが、今こうしてみると大きな建物だと感心してしまう。

多分、隣のヴィータも同じ感想を抱きながら見ているのだろうと考えていると、

「二人とも、主はやてが呼んでいる。早く行くぞ」

デパート内を見渡している二人に今まで後ろで傍観していたザフィーラが急ぐように諭してきた。

そんなザフィーラの方を二人は振り返るが、再びすぐに視線を前方へと戻す。

二人の反応にザフィーラは怪訝そうに顔を顰める。

「なんだ？私の顔に何かついているか？」

「いや……別に」

「うん……何でもないよ」

明らかに何かある態度の二人にザフィーラは首を傾げると、突如、前を向いていたヴィータが吹き出した。

「ぷはっ、くくく……」

「ヴィ、ヴィータ、ぷっ……」

それに釣られて、レイフォンも可笑しそうに吹き出し笑い始める。その笑いは次第に大きくなり、辺りに響くくらいにレイフォン達は大声で笑う。

「おい、俺の顔に何かついているのか」

笑い続ける二人にザフィーラは少々苛立ったように尋ねる。

そんな質問にヴィータが笑いながら答える。

「ぷはははは、だっ、だってよ、ザフィーラのその服」

ヴィータにそう指摘され、ザフィーラはそんなことは一番知っていると言わんばかりに顔を真っ赤にして怒り始めた。

「おい、ヴィータにレイフォン笑うんじゃない！！俺だって嫌だったんだ！」

「まあまあ、はやてが選んでくれたものだから、ね」

顔を真っ赤にし、少し泣きそうなザフィーラの服装は黒いスーツ姿である。

一見普通のサラリーマンのような格好だが、ヴィータ達がそこまで爆笑するような格好ではない。

——それが全て七分でなければ。

「スーツの七分って、きついよね」

笑いを堪えながらのレイフォンの発言にザフィーラは、軽く傷ついている。

盾の守護獣とはいえ、傷つくときは傷つくのだ。

これは誰のせいでもない。

ただ、はやての父親が背が小さく、ザフィーラの身体が普通の成人男性より大きいという結果が生み出した悲劇である。

おまけに筋肉質なザフィーラが着込んでいるため、服も腕や太腿も全身ピチピチになっているという有り様になっている。

他に服はなかったのかと疑問には、どうやらスーツ姿が見たかったはやてが爽やかな笑みを浮かべただけ無言の返答を返すだけだった。しかし、他の服を着ても全て七分丈になるという運命からは逃れられないのだが。

「しょうがねえよザフィーラ。ここはペット禁止だし」

「俺はペットじゃない！！誇り高き守護獣だ！！」

ヴィータの慰めなのか、投げやりな激励にザフィーラは吠えた。ザフィーラの叫びに周囲にいた客がレイフォン達を見てひそひそと話している。

ただでさえ、目立つ集団なのだ。大声を出せばなおのことである。

その視線を感じたレイフォンが慌ててザフィーラの口を塞ごうと飛びつく。

「ザ、ザフィーラ、声が大きい……」

「放せ、レイフォン！俺の誇りがっ！！」

「……何をやってるんだ、お前たちは？」

じゃれ合う三人に遂に怒りを覚えたシグナムの説教が始まったのは言うまでもない。

十分にも及ぶシグナムの説教を周りの人間が注目していたのは必然であろう。

?
?
?

「ふう、疲れた……」

溜め息をつき、腰が砕けたようにレイフォンは店内の長椅子に崩れるように座る。

汚染獣と戦うより疲れたような気がした、とレイフォンはぼやきながら、はやてに渡された荷物を長椅子の横に置く。

「なんだレイフォン、もう疲れたのか？」

長椅子に身体を預けたレイフォンに服を一新したザフィーラが話しかける。

「うん、まあ……でも凄いなはやて……さっきからあんなに動いて」

弱弱しい笑みとともに呟くレイフォンの目の先には、シグナムやシャルの服を見つけるため、ブティック内を車椅子で駆けるはやての姿だった。

その後ろを追い掛けるシグナムとシャルの両手には、はやてが選んだ服が大量に積まれていた。

「ああ、そうだな」

その光景にザフィーラもレイフオンに同意するように頷くとレイフオンの座っている横に座る。

並んで座った二人は、どちらも口を開かず、ただはやて達を見ていた。

その沈黙には気まずさなんてものはなく、レイフオンは身体を預けながら目を瞑ると、そこに隣のザフィーラが話しかけてきた。

「レイフオン……俺達、ヴォルケンリッターは、主八神はやてに本当に必要なのか？」

重々しく、そして真剣な口調のザフィーラの質問にレイフオンは、首を傾げる。

「どうしたの？急にそんなことを言って」

「いや……まだ出会って一日しか経っていないが、主はやての人柄くらいは、大体わかった。主はやては優しく、力を求めない無欲な方だと……そんな方に戦うことしかできない俺達は、かえって邪魔ではないのか？」

自身の両手を見つめるザフィーラが言っているのは、多分昨日説明したページ蒐集の話だろう、とレイフオンは考える。

確かにザフィーラのいうとおり、はやてが蒐集を望まなければ、闇の書の、いや守護騎士達の半分以上の意味はなくなるであろう。

それにこの世界では、はやてが守護騎士に守ってもらわなければならない程の危険な目に合うことは、多分ないことは、昨日の説明から理解しているのだろう。

それにレイフオンは気付いていた。

ザフィーラ達守護騎士が既に両手を血で染めていることを。

ザフィーラの発言はそのことも含まれているのだろう。

しかし、だ。

「それはないよ、ザフィーラ」

レイフオンは首を振り、確信ともいえるほどの自信に満ちた声で、ザフィーラの言葉を否定し、視線をブティック内で動き回るはやてを移す。

「確かに八神はやての守護騎士は必要ないかもしれない……でもはやての家族であるザフィーラ達は、間違いなくはやてに必要だよ。だって……」

そう言ってレイフオンが指差す先には、シグナム達と楽しそうに話をしているはやての姿があった。

「はやては、楽しそう笑っているよ。だからザフィーラ達ははやてには必要な存在だよ」

レイフオンの言葉を聞いて、ザフィーラもはやての方を見る。そして、その姿に口許を緩めると、

「ああ、そうだな。……忘れてくれ、さっきの言葉は」

微かな笑みを浮かべて呟いた。

その言葉を聞いたレイフォンは、軽く頷くと再びはやて達を見る。

視線の先には、丁度レジを終えて服を持ったはやて達がブティック内から出てきた所だった。

「あ、レイ君にザフィーラ。こんなところにおったんか、探したんやで？」

本当に楽しそうに笑うはやてが車椅子を走らせるとレイフォンとザフィーラは長椅子から腰を離れた。

「うん、でもやっぱり女性服のお店だから、僕達は出ていてもいいかな、と……」

「あかん、レイ君。それはちゃうわ。いいか、女性が買い物しよつたらな、男性は、よく似合うよとか、可愛いねとか、言って女性を誉めなあかんのや」

ザフィーラもやで、と言われザフィーラは慌て頷いた。

「そうなのですか？はやてちゃん」

「そうや、シャマル。それが真の紳士への第一歩や」

なるほど……と興味深く頷くシャマルに車椅子を押されるはやてが、レイフォンとザフィーラを見て首を傾げる。

「あれ？ ヴィータは一緒違うん？」

「ああ、ヴィータなら彼処にいるよ」

レイフォンが指を指すとそこにはヴィータがいた。

ぬいぐるみが並べられたその店先で、ヴィータは真剣な顔つきで一つのぬいぐるみを手に取っていた。

「ふむ、ヴィータは服よりぬいぐるみか……よし、皆行くよ」

はやての呼び掛けにシグナム達も頷き、その後をついていく。

そんなはやて達を見て、レイフォン自身が先程ザフィーラが言ったことについて考えていた。

あれは、レイフォン自身も当てはまることではないのか、と。

自身も戦闘に明け暮れ、はやての傍に在るべき存在ではないかもしれない。

しかし、自分の存在が、はやての笑顔の何%にでも貢献できているのであればだったら、嬉しいことだと思う。

だが、それが事実だとしたらレイフォン自身が、はやての前から立ち去ってしまうば、はやてを悲しませる結果になる。

「どうすればいいだろう……リーリン」

レイフォンの口から洩れた言葉はここにはいない幼馴染みの名前だった。

? ? ?

「いやー今日は楽しかったな」

夕暮れ時、帰り道にはやてがご機嫌な様子でそう呟いた。

視線先には購入したウサギのぬいぐるみを大事そうに抱えるヴィー
タの姿があった。

その言葉にシャルとシグナムも同意するかのように口を開く。

「そうですね、はやてちゃんのお買い物は楽しかったわ」

「私も少し疲れましたが充実感に満たされています」

その言葉を聞いたはやてはうんうんと上機嫌に頷くと今度はレイフ
オンやザフィーラに話しかけた。

「そうか、それはよかった……レイフオンとザフィーラはどうだっ
た?」

「うん、二回目だったけど楽しかったよ。ちょっと疲れたけどね」

「私も貴重な時間を過ごせたと思っています」

苦笑いをするレイフオンと口元を緩めたザフィーラの言葉にはやて
は頷き返した。

「そうか、これからは色々な所に行くから楽しみにしといてな」

幸せそうに笑うはやてに釣られて、レイフォン達も笑みを浮かべた。

幸せな日々を感じるはやて達。

それゆえに気付かなかった。

この幸せが長く続かない幻想のようなものということに。

数ヵ月後、はやてが倒れるまで、誰一人終わりに気付くことはなかった。

第六話 語られる事実 その一

病院から帰ってきたはやては検査疲れからなのか、いつもより早い時間にベットのの中に潜り込んだ。

「はあ……ヴィータとか何処行ったんやろうか」

ベットに横になったはやてが横に控えていたレイフオンにぼやいた。

「うーん、何か用があるっていったね、まあ、まだ八時だし、シグナムやシャル達が付いているから大丈夫だと思うよ」

今朝、病院ではやてが検査しているときにシャルからそうレイフオンは聞かされていた。

遅くなりそうだと言っではいたが、確かにいつもより遅い気がした。

それにレイフオンはもう一つ気になることがあった。

それはシグナム達の集まりの悪さである。

少し前までなら、皆で行動していたはずが最近では誰か一人二人が欠けていた。

はやてはそのことを皆が新しい趣味や楽しみができたのだろうと言っただけだったが、レイフオンはそうは思わなかった。

それははやての病状が悪化しているのに、だ。

原因不明の下半身麻痺の病。

はやての主治医である石田医師による診断結果から現状では下半身で収まっている麻痺も徐々に上へと上がってきているらしい。

それを聞いたシャル達の表情に何か違和感を感じた。
何か酷く焦ったようなあの顔つきが。

焦ることは理解できる。

レイフォン自身も焦っているし、どうすればいいか分からないからだ。

しかしシグナム達はそれに輪をかけたように焦っているし、何処か悲壮感に染まっている。

何より、昨日はやてとレイフォンが就寝後、彼等が居間で話をして
いるのをレイフォンは確かに聞こえた。

壁を幾つも挟んでいるし、大声で話し合いなんてしていないから内容
は聞き取れなかったが、ヴィータの荒々しい声が聞こえたし、冷静な
シグナムの焦った声も聞こえた。

だから間違いなく何か深刻な話とレイフォンは考えている。

「むー、やっぱり起きとこうかな」

ヴィータ達が心配なのか、身体を起こそうとするはやてに対し、レイ
フォンはその行動を止める。

「駄目だよ、今日は石田先生も疲れてるだろうから早く寝なさいっ
て言ってたじゃないか」

レイフォンに再び寝かされてもはやての不安は消えないようで、ベ

ツトの横に置いてある目覚まし時計の針を眺めながらぼそりと呟く。

「でも心配で」

「大丈夫だよ、何かあったら念話するって言ってたし、それに僕が起きているから」

はやての心配をレイフォンは力強く答えることで和らげるように努めた。

それにレイフォンは使えないが、リンカーコアを持ってるものなら、いつでも念話と言うもので会話できるから心配するなど当のシグナム達が言っていた。

そのことを聞いたはやては、うーんと唸り始めて、そして遂に諦めたのかレイフォンの方に向くと笑みを浮かべる

「うーん、仕方ないな……じゃ、レイ君お願いな」

「うん、任せてよ、はやて」

レイフォンの返事を聞くとはやては目を瞑り、そして一分を立つ頃には既に寝息を立てていた。

やはり疲れが溜まっていたのだろう。

そんなはやてにレイフォンは顔を少し緩めると、はやてを起こさないように一度頭を撫でると、その場から立ちあがり、そのまま静かに部屋から退出した。

はやての部屋から出たレイフォンは一度自身の部屋に戻ると、部屋の机の棚に閉まっておいた天剣を取りだした。

久しぶりに握る天剣の感覚を確かめつつ、ポケットにしようとレイフォンは自室から立ち去った。

その足で居間に付くと、小音にしてあるテレビをつけてぼんやりと眺め始める。

見る気もないテレビを見始めて、三時間後。

深夜といえるその時間帯に、八神邸の玄関の扉が開く音が聞こえた。

その音を聞いたレイフォンは、ソファから起きあがり、居間から玄関へと歩き出す。

右手には天剣を握りしめて……

?
?
?

本日の蒐集を終え、八神邸への帰宅を急ぐシグナム達四人があった。

ここ最近、遅くなることは多々あったが、今日はいつもよりも数時間も遅く、珍しく四人全員が、である。

昨日この辺りで高い魔力反応を確認したため四人で探していたが、見つけたのは魔力値の低い魔導師であった。

しかも厄介なことに、その魔導師は時空管理局所属の魔導師であっ

たため、シグナム達は念入りに遠回りして帰ることになった

「厄介だな……管理局の手が伸び始めてきたか……」

「そうね……ヴィータちゃんの見つけた例の物を見つけたらこの世界での蒐集は当分やめて、少し離れた管理外世界で蒐集したほうがいいわ」

出ないとはやてちゃんの存在や居場所が管理局にバレる可能性がある、とシャルの続く言葉に他の三人も神妙な面持ちで頷く。
より早く全てのページを集めることも大事だが、はやての安全が一番大切だ。

「……絶対にはやてを助けような」

「ああ、当たり前だ」

ヴィータの言葉にシグナムは応える。

そんな二人を見ていたシャルは少し微笑みながら答えた。

「さあ、二人とも、もうすぐ家に着くわ」

シャルの言葉と同時に八神邸の門が微かに見え始めた。

ヴィータは、その門を見て、そのまま視線を上空に向ける。

そこには光輝く星と漆黒に染まる空が見えた。

回りにあるマンションや家も明かりがついている所は少なく、八神邸の電気も全て消えていた。

「ああ……やっぱりはやて達はもう寝てるよな……」

間違はなくはやては心配していただろうな、と考えるとヴィータは居た堪れない気持ちになる。
隣にいたシグナムも同様に肩を落としながら答える。

「そうだな……明日、主はやてには一番に謝ろう。それと次回からは最低二人は残っておこう」

シグナムの言葉にヴィータ達も頷くとそのまま入口の門を開く。

玄関口に辿りつくとはやてに渡された予備鍵を取り出した。
これがあったと助かったとシグナムは思いながら、鍵穴に差しこみ鍵を回した。

あまり音を発てずにドアを開け、中に入ると、予想通り玄関から廊下までは、真っ暗であった。

「やはり、主はやては先にお休みのようだ。このまま各自部屋に戻って早く寝よう」

寝ているであろうはやて達を起こさないようにシグナムは小声でヴィータ達に伝えると、シャルとザフィーラは黙って頷く。

しかし、ヴィータは何かに気付いたように首を傾げながら答えた。

「なあ……なら私は今日何処で寝ればいいんだ？はやての部屋には戻れないし」

いつもヴィータははやてと一緒に寝ているため、ヴィータの部屋自体は無いし、いくらヴィータでもはやてを起こさないようにはやての布団に入るのは難しいだろう。

「うん？ そうだな……」

ヴィータの問いにシグナムは少し考えて、シャマルとザフィーラの方を向く。

「仕方ないから今日は、我々の内の誰かがヴィータと一緒に寝るでしょう。就寝なさっている主はやてを起こすわけにはいかないからな」

「別に構わんが……俺は居間で寝ているからヴィータも床かソファーの上になるぞ？」

基本犬型で過ごしているザフィーラの言葉を聞いて、ヴィータは嫌そうに首を横に振る。

床は論外として、少し固めのソファで寝るのは、布団の柔らかさを覚えたヴィータには無理だった。

「それならヴィータちゃん。私と寝ましょう？ 久しぶりにヴィータちゃんと一緒に寝てみたいもの」

両手を叩き、何処か嬉しそうに言うシャマルの言葉にヴィータも少し考えて頷く。

「シャマルか……うん、それが一番いいな。シグナムと寝たらベッドから蹴り落とされそうだしな」

「馬鹿を言うな！ 私がそんなに寝相が悪いわけあるかっ！」

「シグナム、声が大きい——」

ヴィータの発言に憤慨だと大声を出して反論しようとしたシグナムをシャマルが慌てて止めようとしたとき——

「お帰り、皆」

真っ暗な廊下の向こうからレイフォンが現れた。

気が立ったシグナムは、一瞬レイフォンの登場に驚くが、すぐに冷静になるとレイフォンのほうに向き直る。

「……ああ、ただいまレイフォン」

切り口の悪いシグナムの言葉にレイフォンはいつもどおりに返事を返す。

「うん、おかえりシグナムさん」

「ただいま、レイ君」

「おう」

「主は就寝中か？」

二人のやり取りを見ていた他の三人も、続いてレイフォンに帰宅時の挨拶を述べた。

「おかえり、はやてはもう寝ているよ」

いつも通りのレイフォンの反応にその様子を見ていたシグナムは、違和感を感じ、レイフォンの顔から全身にと視線を移す。

（なんだ……このレイフォンの感じ……以前何処かで……）

レイフォンの様子におかしく感じながらシグナムの視線がレイフォンの右手に向けられた。

そしてそこに握られたものに気付く。

「っ！！レヴァン——」

鈍く光るそれにシグナムは首元の待機状態のレヴァンティンを掴もうとするのより早く、レイフォンが動いた。

「レストレーション01」

レイフォンは天剣を基礎状態から復元状態の剣とすると、一瞬でシグナムの首筋に刃を寄せた。

そのいきなりの行動に、他の三人は茫然と眺めていたが、次に口を開いたのは剣を突きつけられたシグナムであった。

「……何の真似だ、レイフォン……」

怒りに満ちたその声にレイフォンは視線を外しながら答える。

「強引なことをしてごめんなさい……でもシグナム達に聞きたいことがあるんだ」

レイフオンのその言葉を聞きながらシグナムは動こうとするが、自身が動けばそのまま首元を両断されることに気付き、そのままレヴァンティンから手を離れた。

「……そうか、こちらもお前には話しておいたほうがいい話がある」

レイフオンの方を見ながらシグナムはそう答えた。

その目には先程まで宿していた怒りは消えており、真摯な思いが込められていた。

その視線にレイフオンは向き直ると小さく頷いた。

「シグナムっ！」

シグナムの言葉を聞いてようやく動き出したヴィータは噛みつかんばかりにシグナムに詰め寄るが、シグナムはそれを手で制す。

「ヴィータよ……お前だってこれからレイフオンに何も言わずにやっていけると思っていけないだろう？」

「うっ……」

シグナムの諭すような言葉にヴィータは口を閉ざすしかなかった。ここでレイフオンと違えるのは、全く利点はない上、こちらも相応の被害を被ることになる。

何より、このレイフオンの行動ははやてを思っていることとヴィータを含む四人も分かっていた。

「それに、主はやての護衛としてレイフオンは適任だ。それはお前だってわかっているだろう？」

何よりレイフォンを取りこんで仲間にすれば、大きな戦力を得ると考えた。

そのシグナムの言葉を聞いて、深いわけがありそうだと思ったレイフォンはシグナムに向けていた天剣を下ろし、基礎状態に戻す。

「皆、とりあえず居間で話そう。あまり騒ぐとはやてが起きる」

暗い廊下を先頭を歩き、居間へ向かうレイフォンの後ろ姿を見ながら、シグナム達は覚悟を決めることにした。

ただ、レイフォンが賛成してくれることを願いながら、その後を重い足を引きづるように追い始めた。

第七話 語られる事実 その二

レイフォンは今日の夕飯であったカレーを温めなおすと、冷蔵庫に入っているお茶とともに、居間にいるシグナム達の元に向かう。

ソファーにシグナム、シャマル、ヴィータが座り、ザフィーラが傍の床に寝ているのを確認すると、レイフォンはシグナム達の目の前の机の上に料理を並べ始める。

「話ご飯を食べてからにしよう。シグナムさん達はまだ夕飯食べていないでしょ？」

「ああ……」

レイフォンの言う通り、四人とも夕飯前に出かけていたから食事を取っておらず、特にヴィータとシグナムの二人は昼食もっていないから、腹に空腹感を感じていた。

「いただきます」

シグナム達がスプーンに手を取り、食事し始めたのを確認すると、レイフォンは部屋の隅に置いてある犬用食器に水とドックフードを補充し、ザフィーラの前に置いた。

「はい、ザフィーラも。今日の夕飯はカレーだったから、これで我慢してね」

「ああ、助かる」

明らかに犬扱いしたレイフォンに対し、ザフィーラは何も言うこと

なくドックフードを口に運んでいく。

レイフォンはソファにそのまま座ると、自分のお茶を呑みながら、食事しているシグナム達を眺めていた。

その後、特に会話がすることなく食事を終えたシグナム達に、レイフォンは食器を片づけるとそのまま話を続ける前の大前提として聞くべきことを尋ねた。

「話を始める前に確認するけど、皆はやての味方でいいんだよね？」

レイフォン自身、シグナム達のはやての敵や害を及ぼすものとは思ってはいなかったが、これは聞いておかなければいけないことであった。

その問いに、レイフォンの信用を肯定する反応がヴィータから返ってきた。

「っ！？まさかお前、私たちを疑っているのかよ！！」

「まあまあヴィータちゃん落ち着いて」

怒りを露わにしたヴィータは、そのままレイフォンに飛び掛かりそんな勢いだったが、冷静に話を聞いていたシャルに宥められるように止められた。

その間にシグナムがレイフォンの質問に答えた。

「ああ……現在の主は間違いなく主はやてだ。それに主はやては私達のようなものを家族とまで言ってくれた……そんな方を裏切れるはずがない」

若干不愉快そうにそう言ったシグナムに対し、レイフォンは慌てて頭を下げる。

「ごめん……そんなつもりで言ったわけじゃないんだ」

「ああ、わかっている。お前が主はやてを心配していることも、夜な夜な家を出る私達を怪しむこともな……」

私も逆の立場なら疑っている……と苦笑混じりで言うシグナムにレイフォンはもう一度頭を下げた。

シグナム達の反応を見て、レイフォンは信頼に値すると再度確認し、本題を話し始めた。

「本題に入るね。まず聞きたいことなんだけど……原因不明のはやての病気のこと、シグナムさん達は何か知ってるの？」

「……ああ、やはり気付いたか？」

苦々しく答えるシグナムに、レイフォンは小さく頷き答えた。

「うん……だってシグナムさん達が夜な夜な家を出始めたのは、はやてが倒れてからだだったから……それにシグナムさん達も原因がわからないなら、もしはやてが倒れたら、今までよりずっとはやての側にいるはずだから」

「ああ、確かにそうだな」

「確かにそうになったらはやてちゃんの傍から離れないわね」

レイフォンの言葉にシグナム達は頷くのを見たレイフォンは再びシグナムに尋ねた。

「じゃあ、僕にも教えてくれない？はやての今現在の状態も含めて……」

「……そうだな……巻き込みたくなかったのだから……」

顔を歪めたシグナムにレイフォンは首を横に振りながら答える。

「別に構わないよ。僕にとってもはやては恩人だ。僕に出来ることがあるなら、それをやりたい」

レイフォンにとって、はやては大切な恩人である。

はやてにもし出会わなかったらどうなっていたか分からないほどだ。

「そうか……わかった。ならシャル、説明を頼む」

レイフォンの言葉に覚悟を感じたシグナムは、自身もレイフォンに話す覚悟を決めた。

それはシャル達も同様で、シグナムの判断に頷くとそのままレイフォンに説明を始めた。

「わかったわ、シグナム……じゃあ、レイ君、最初から話すわね」

シャルからの説明は簡潔であり、分かりやすくまとめられていた。そして事実はいフォンにとって衝撃的な内容だった。

はやての下半身の麻痺は、病気などではなく、闇の書から魔力ではやての未熟なリンカーコアに負荷が掛かったことが原因。

シグナム達が闇の書から現れたせいではやての負荷が増え、病状が早まっているらしい。

「そうだったんだ……だからシヤマルさん達は」

「ええ、はやてちゃんの命を助けるにはこれしかないの」

シヤマルは顔顰めながら、辛そうに答えた。

その方法は、はやてが禁じた方法であつたからだ。

蒐集で闇の書の全666ページを埋め、そしてはやてを完全な闇の書の主とすること。

それを聞いたレイフオンはどうすればいいのか頭の中で考え始める。

最初に頭に思いついたのは、シグナム達には悪いが闇の書を破壊するという案だったが、よくよく考えてみると魔法知識皆無のレイフオンに破壊ができるのかというのは些か疑問であつたし、はやての病状が治る可能性も分からないためこの案を却下した。

続いて外部の力……即ち管理局に助けを求める案を思いついたためシグナム達に提案してみたが、信用できないの一言で却下された。シグナム曰く、闇の書の主であるはやてをそんなところに連れてでもいったら、利用されるか、幽閉されると言われ、レイフオン自身そのことは許容できないため、速やかにこの案も諦めることにした。

それからレイフオンは、ひたすらに考え続けてみるが、一向にまともな案が思い浮かぶことはなく、そして――

「……」

「あ、あのレイ君？頭から煙の様なものが……」

考え過ぎたせいで知恵熱を出し、頭がふらつき始めたレイフォンにシャルが、心配そうに声をかける。

そのシャルの心配に続くように、

「そうだ、レイフォン無理はするな」

「そうだ、脳筋なんだから無理するなよ」

「そうだ、おまえはよくがんばった」

シグナム、ヴィータ、ザフィーラが心配そうにレイフォンに優しくねぎらうように話しかけてきた。

その言葉にレイフォンは、右手の親指を突きだし、大丈夫と、合図をシグナム達に向けた。

その様子を見ていたシグナムは再び話を戻すことにした。

「まあ、現状で主はやてを助けるにはこの方法しかない……主はやてとの約束は破ってしまうが……」

主との誓いを破ることに對し、強い嫌悪感を抱いたシグナムは顔を歪めながら答えると、他の三人からも同様の返事が返ってくる。

「だけど、はやての命には変えられねえ……」

「そうね……はやてちゃんを死なせるわけにはいかないわ」

「だから俺達は蒐集をこれからも続けようと思うが、レイフォン……お前は どうする？」

確認するように尋ねてきたザファイラの頭には一つの不安があった。それはレイフォンに否定されることである。

もし否定された場合、レイフォンをここで倒さなければならぬのだ。

シグナム達も同様に、レイフォンの答えをゆっくりと見守っていると、レイフォンはゆっくりと口を開いた。

「手伝うよ。さっきも言ったけど、はやては恩人だ。死なせたくない」

「そうか……」

レイフォンの決断にシグナムはほっとした気持ちと同時にレイフォンを巻き込むことに対しての罪悪感に蝕まれるが、その気持ちをこまかすかのように溜め息をつく。

隣にいたシャマルは、何処かレイフォンを悲しそうに見ていた。

「で、これから簡単にだが役割を決めるぞ」

決意を固めた後、場を仕切り直したシグナムの言葉にヴィータは首を傾げる。

「役割？今まで通り各自別れて、シャマルにはやての側にいればいいんじゃないか？」

当初考えていた役割分担でいいと考えていたヴィータに対し、シグナムは慎重を重ねるべきだと考えていた。失敗は許されないのだ。

「いや、確かに現状は問題ないかもしれないが、これからは管理局の目も厳しくなるはずだ。そのために念のための護衛でもシャマル一人では荷が重いだろう」

護衛が必要な状態、それははやての存在が管理局にバレるということである。

最悪の状態だが、それでも念を抑えて置いておくべきとシグナムは考えていた。

「そうね……私は皆みたいに直接的な戦闘は避けたいわね」

はやての存在を隠すフォローはシャマルで適任であるが、後衛のシヤマルで敵からはやての身を守るのは少し役不足である。

「なら主護衛の専門のザファイラか、戦闘特化型の私か、シグナムの誰かがはやてにつくのか？」

ヴィータの疑問にシグナムは顔を、話し合いが始まってから空気になりつつあったレイフォンのほうへ向く。

「それなんだが……レイフォン。お前に主はやてとシャマルの護衛を頼みたい」

「え？ 僕が？」

いきなりシグナムの指示にレイフォンはいきなりのことと理解できなくなるが、その様子を見ていたシグナムが説明を始める。

「そうだ。お前は私達より主はやてとの付き合いも長いし、お前にはリンカーコアがないから管理局のサーチャーにも引っ掛からないし、護衛としても申し分無い力も持っている。それに支援や補助を得意とするシャマルとの相性もいいはずだ」

シグナムの考えは確かに理が適っていた。

魔導師ではないレイフォンには魔力センサーが引つかかることはないし、戦闘能力の高さも問題ない。

それに魔法の知識がないレイフォンに参謀であるシャマルが付くことにより互いの短所を補うことができる。

そしてシグナムが言った通り、はやてがいつ番信用しているのはレイフォンだと、当人以外のここにいる全員がそのことを知っていた。

シグナムの考えに肯定的なのかテーブルの下から出てきたザフィーラが答える。

「確かにそうだな。本当なら俺が主はやての護衛に入るのが適切だろうが、そうなるとヴィータの監視役がいなくなるからな」

レイフォンを高く評価していたザフィーラはそう答えると、レイフォンもそれに対して答えるように頷こうとするがいきなり立ちあがったヴィータの言葉に口を閉じる

「って！本当にレイフォンに任せるのかよ?! あと、ザフィーラッ！ 誰の監視役がいなくなるだっ!? この犬っころ!」

レイフオンを信用していないというより、大好きなはやての元を取られる嫉妬とさっきの犯人扱いされたことを根に持っていたためヴィータはレイフオンの護衛着任に否定的だった。

その心情を理解したザフィーラが呆れ気味に答える。

「お前だ、ヴィータ。今日だって例の高魔力保持者を探すために街中で魔力波を放とうとしただろう？　もし、放っていたら高魔力保持者の他にも余計なものまでついてくるところだぞ。あと犬じゃない、狼だ」

「そうだ、レイフオンの実力はお前も知っているだろう？　なら適任だ」

ザフィーラとシグナムの言葉に意地になったのか、ヴィータは顔を真っ赤にしてレイフオンの方を睨みつける。

「とにかく、わたしは反対だからな！　へたレイフオンなんかにはやてを任せられるか」

もう寝ると言いながら静かに部屋からヴィータは出て行った。

足音ではやてを起こさないようにと考えるくらいは冷静だったらしい。

そんなヴィータを見送ったシグナムは呆れた様子でレイフオンに口を開いた。

「ふう、まあ、気にするな。ヴィータのことだ、明日には忘れているだろう」

「うん、僕もあまり気にしてないから、それにヴィータがはやてのことをそんなに思っていてくれたことを知って嬉しいし」

シグナムの言葉に、レイフォンは頬を緩めながらそう答えると、シグナムもそうか、とだけ答えて頬を緩めた。

「さて、もう寝ましようか。こんな時間だし、詳しい話は明日にでも話ましよう」

シャルの言葉に全員が頷くと解散という形で全員、ソファから腰を上げた。

居間で寝るザフィーラ以外のシグナムとシャルに続くようにレイフォンも自室に戻った。

はやてを絶対に助けると、決意を固めて……

第八話 平和な一時 その三

あの夜の出来事から数日が経ち、朝、いつものようにベッドから起きたレイフオンは棚の上に置いてあった服に着替え、寝巻を持ったまま洗面所に向かう。

洗面所に辿りつくと、持っている寝巻を洗濯機の中に放り込むと、洗面台の前に立つ。

眠気を飛ばすために顔を洗い、跳ね上がった髪の毛を櫛で直して、最後に歯を磨き、身だしなみを整える。

準備を終えたレイフオンは、そのまま居間へと向かって歩き始める。

レイフオンが居間の扉を開けるとまず視界に入ったのは、ソファアに座り新聞紙を広げて真剣な表情のシグナムとその足元で身体を丸まっている犬の姿（狼らしい）のザフィーラであった。

「おはよう、シグナムさん、ザフィーラ」

いつものように挨拶するとシグナムは視線を新聞からレイフオンに向ける。

「ああ、おはよう」

「おはよう、レイフオン」

簡単な返事を返すとシグナムは再び新聞紙へと目を落とした。

ザフィーラも同様に返事を返すと大あくびをしてそのまま眠るように身体を丸めなおした。

レイフオンはそのままキッチンのほうに目を向けるが、シャマルと

はやての楽しそうな話し声が聞こえたので、向かうのを止めてシグナムの向かい側のソファ―に腰をおろし、視線を落とす。

「ザファイラ、もしかして眠たいの？」

レイフォンの視線の先には、再び大あくびをするザファイラがいた。

「ん？ ああ……昨日あの後、ヴィータと二人でテレビを見てしまったな……」

「なら、ヴィータが起きるのにはまだまだ時間がかかりそうだね」

「ああ、そうだな」

今度は欠伸を噛み殺そうとするザファイラの頭を、レイフォンは撫でると正面のシグナムに視線を移す。

相変わらず新聞紙を真剣に読むシグナムを見て、レイフォンは自分にこんなに真剣に新聞紙を読むのは無理だと思っていた。

活字がびっしりと紙に書かれているのを見ると頭が痛くなる病気を抱えているからだ。

「今日は、シグナムさんやけに集中しているけど、何か面白いこと書いているの？」

いつもより集中しているシグナムに、レイフォンは何が書いているのか興味が湧き、思わず尋ねてしまう。

レイフォンの疑問にシグナムは新聞を閉じながら答えた。

「うん？ いや……いつもどおり、政治欄から芸能欄まで隅々見ているのだが、その中で一つ気になる言葉を見つけてな」

「気になる言葉？何？」

新聞紙を目の前のテーブルの上に置きながら、シグナムは首を傾げながら答えた。

「うむ……『ニート』という言葉だ」

シグナムの言った『ニート』という言葉は、レイフォンは聞いたことがなかった。

だからレイフォンも首を傾げながら、シグナムに聞き直す。

「『ニート』ってどういう意味なの？」

「うむ……本当に小さな記事だから、詳しい説明は載っていない。ただ増加してきたとしか書かれていないから、もしかすると、常識的な言葉なのかもしれないな」

「ならはやてに聞くしかないね」

「そうだな」

シグナムとレイフォンはそう結論づけると、丁度そこに話を終えたのか、はやてとシャルが台所の方から現れた。

はやては居間にレイフォンがいることに気付くと、笑みを浮かべながら口を開く。

「お、レイ君、起きたんやな」

「おはようございます、レイ君」

「うん、おはようはやてにシャルさん。ところではやて、今日の調子はどう？」

レイフォンの心配するような言葉に、はやてはより一層嬉しそうに笑みを浮かべる。

「ふふふ、レイ君まで聞くんやな。シグナムにもシャルにもザフィーラにも聞かれたわ。大丈夫、調子は絶好調や」

自信満々に答えるはやての背後で車椅子を押すシャルも釣られて笑みを浮かべながら口を開く。

「だそうですよ。シグナム、朝御飯の用意が出来たからテーブルの上を片付けてくださいね」

「ああ、わかった。ならザフィーラ、すまないがヴィータを起こしてきてくれないか？ 主はやての朝御飯が冷めてしまう」

「わかった」

シャルの言葉にシグナムは、テーブルの上の新聞紙を雑誌が置かれている棚の上に纏めると、キッチンに向かいはやてが作った朝ごはんを運ぶためにキッチンへと向かう。

眠たそうなザフィーラも頷くとヴィータのいるはやての部屋へ向かうため、居間を出て行った。

「じゃあ、私も朝ごはんを運ぶのを手伝いますから、レイ君ははやてちゃんの手椅子を運んでくださいね」

「わかりました」

「じゃあ、お願いなシャル」

車椅子ゆえに料理を運ぶのが困難なはやてをレイフォンに託すと、シャルはキッチンへと戻っていく。

いつも通りの朝、こうして八神家の朝は始まるのだった。

?
?
?

「今日は、私とヴィータの二人で蒐集に出掛けてくる。レイフォンとザフィーラは、とシャルともに主はやての傍で居てくれ」

シャルとはやてが皿洗いをしているうちにシグナムはレイフォンとザフィーラに向かってそれだけ伝えたとヴィータとともに朝早くから家を出ていった。

昼から探査を行い、例の高魔力保持者の居場所を探そうだ。

「しかし、シグナムとヴィータも精が出るな……こんな朝早くから頑張るって」

「そうだね。シグナムさんは、やっぱり剣の騎士だから竹刀でも握って道場で素振りするのは落ち着くとか言ってたし、ヴィータもゲートボールが楽しいみたいだし」

だが、そのことをはやてに教えるわけにはいけないので、シグナムは近くの道場で竹刀を振るい、ヴィータは近くの空き場で老人会の人達とゲートボールをしているということにはなっている。

実際、全くの嘘というものでもなく、二人共、はやてが倒れる前まで良く通っていたので、外出理由を誤魔化すにはいい材料になっている。

「そうかそうか、それはええことや……」

「……もしかして、はやて寂しいの？」

ヴィータ達の外出に対し、少しだけ寂しげにはやては呟くと、それを見ていたレイフォンは元気付けようと、はやてをからかうよう口調で話しかける。

「うーん、どうなんだろうか？ ……まあ、少しは寂しい気もするけど、二人がそういうこと見つけられて嬉しいってとこやな」

そう言って笑うはやての顔は何処か、子を見守る母親のような優しい笑みだった。

実際、まだ十にもなっていない少女というのにだ。

「だから、ザフィーラも、シャマルも、レイ君も、私に構わずそういうもの探してきいよ」

慈愛の笑みを浮かべたはやての言葉に三人が頷きながら答える。

「大丈夫です。主はやて、朝夕の二回、散歩に行っていますので」

「私もはやてちゃんと一緒にお料理とかお洗濯するのが一番楽しいですから」

「僕も家でゴロゴロするのが一番好きだから。寧ろ外に出たくないくらいだ」

三人の言葉を聞いてはやてはにこやかな笑みを浮かべ―

「って！ レイ君、それは駄目や！！ そんなじゃニートまっしぐらや！！」

おもいつきりレイフォンにキレのいい突っ込みを入れた。

その華麗な突っ込みを受けたレイフォンは、何処か遠い目をしながら口を開く。

「ニート……何処かで聞きたい響きだね」

「いい響きやないよ！ 寧ろ悪い意味のことやっ！ ニートについては、今朝シグナムと一緒に聞きに來たのにもう忘れたん？！ それによう考えたらレイ君も学校行かなあかん歳やし！！」

「大丈夫、僕、勉強嫌いだから」

関西人の血が騒ぐのか、キレのいい突っ込みを入れるはやてに対し、

レイフォンは天然ゆえに次々にボケた発言を返していく。

そんな賑やかな漫才をシャルとザフィーラは楽しそうに見ていたのだが、二人は気付くことなく、さらに漫才は加速していく。

「大丈夫やないしっ!!むしろ余計にあかんやんっ!!間違いなくアウトやっ!!」

「はやて、アウトはシャルさんの料理だよ。あれを思い出すだけで未だに背筋に戦慄が走るから」

いきなりのレイフォンの言葉に先程まで笑みを浮かべていたシャルの顔が泣き崩れる。

「レイ君、ヒドイっ!!あのゴミ箱に捨てたのやっぱりレイ君の分だったのねっ!!」

「ち、違いますよっ!僕はちゃんと処分しました!それは、シグナムさんとヴィータの分です」

シャルに泣かれたせいで気が動転したのか、レイフォンは同士である二人の名前を漏らし始める。

ちなみにレイフォンの分は、庭に穴を掘って埋めたのだが、後日、そこから草木が生えてこないのを見て、レイフォンはシャルの料理は汚染物質並の毒性物であることに気がつき、背筋が凍ったような戦慄を受けたのはいうまでもないだろう。

「レイ君、それはあかんわ。シャルに謝りや」

突っ込み疲れのせいか、若干息が荒いはやてが責めるようにレイフォンに言うが、当の本人は目を細めて笑う。

「そういうはやてだって、その自分の分をザフィーラの餌箱に入れてたじゃない」

三人目の同士に向かってしたり顔を向ける。

その顔に殺意を芽生えそうになるはやてだったがシャルの視線に気づき、うっと呻くと絡みつくような視線を逸らすため、顔を横に向け――

「……あれや、私は下半身が麻痺してるから」

ボソリと呟いた。

「関係ないよ。あの後、ザフィーラは泡吹いてて、ヴィータと二人で蘇生措置するの苦労したんだよ」

「何っ、レイフォン！それは本当かつ！俺は身に覚えがないぞ！」

レイフォンの言ったことに、今初めて知ったとばかりに人型に戻ったザフィーラは、レイフォンの肩を掴むと大きく揺すり始める。普段冷静なザフィーラがここまで焦っていることを新鮮に感じながら、レイフォンは肯定するように頷いた。

「本当だよ。ザフィーラが『主の命は守護獣である俺が護るっ！』て叫んで口に含んで数秒で旅立ったんだから」

守護獣の誇りを掛けたザフィーラの勇姿を思い出したのか、レイフォン、はやて両名の顔が徐々に曇っていく。

「しかし、即効性でしかも、き、記憶まで失う程の破壊力があるな

んて……シャル、これからシャルが料理を作る時は私が横にいるときに作ってな」

シャルが持った新たな生きがい、奪う事ができないはやては最大の譲歩として条件を口にする、

「シャル、悪いことは言わん……もう料理を作るのはよせ……死人が出るぞ」

対照的に殺されかけた経歴を持つザフィーラは、被害者拡大を防ぐためにシャルに料理を作ることを止めるように忠告する。

「まあ、お米研ぐときに洗剤を使ったりするからね。シャルさんは……」

レイフォンは失敗談を語りながら優しく目でシャルを見ていた。それを聞いたシャルは身体を生まれたての小鹿のごとく震えながら、バンバンと両手を机を何度も叩き始める。

「皆でそんなにマズイマズイとか言わないでください！私だって頑張っているんですよ！」

小さな子どもが癇癪を起こすような感じでシャルは、ここにいる全員に訴えかけ始める。

「シャル、マズイ、旨いの問題じゃない。食物か毒物かの違いだし、間違いなく根に持っているザフィーラの言葉は厳しかった。

同じ守護騎士からの辛辣な発言に、遂にシャルの背に灼熱の怒り

の炎が燃え上がった気がした。

「ならザフィーラの散歩って何ですか?! もう完全に犬になっているじゃないですか!」

標的をザフィーラに絞ったシャマルの発言を聞いたザフィーラも目を見開く。

「なっ! 馬鹿を言うな俺は守護獣――」

「守護獣ならおやつのビーフジャーキーを食べるとき、尻尾なんて振りませんし、シャンプーも嫌がりません!」

いつもシャンプーするとき逃げてばかりで……とシャマルが言う
とザフィーラは一瞬声を詰まらせ、バツの悪そうな顔をするが、すぐシャマルに向かってに言い返す。

「ふん、俺が本気になったらシャンプー程度どうってことないっ!」

どこかズレ、若干情けない発言に隣でレイフォンとはやては吹き出して
いたが、必死なザフィーラには気付かれなかった。

「本気にならないとお風呂にも入れないんですか!! それにまだあるんですよ!! この前、おやつのかまぼこを庭の隅に埋めてましたし、散歩に行っても至る所にマーキングして、雌犬を見かけたらずーっと見てるじゃないですか?! この何処が狼で守護獣なんですか?! 普通の犬ですよ、レイ君?」

「えっ、う、うん、まあ……」

いきなり振られたせいもあり、シャマルにレイフォンも思わず頷いてしまう。

「レイフォンっ！ ……くっ、あ、主……」

唯一の男仲間裏切られたザフィーラは、最後の綱の敬愛なる主に助けを求めた。

そんな思いをはやては感じたのか、真剣な顔をして頷く。

「私……犬飼うの夢やったんや」

その後、ザフィーラが涙を流しながら朝の散歩に出掛け、夕飯まで戻らなかったの言うまでもない。

第九話 武芸者と魔導師 その一

季節は冬、街を歩く人々はコートなどの防寒具を身に纏い、白い息を吐きながら家路を急ぐ。

日が落ちた寒空の下、レイフオンは夜の空を駆ける。

活剷を纏った両足で高層ビルや電柱、マンションの上を駆けては飛び、遠く離れた建物の上に着地すると、再び違うビルへと飛び移る。その姿は、この日本で古来から伝えられる忍者の姿のようだったが、レイフオンは普通の人間ではなく、武芸者であるため、このぐらいのことは何の苦もなくこなすことができる。

だが、月の光をスポットライトのように浴びたレイフオンの顔はいつもとの人畜無害な顔と違い、能面のような無表情な顔つきで、感情が抜け落ちた冷徹な表情でしかなかった。

その表情は、はやて達と出会う前にグレンダンでの戦場などで見せた武芸者の、天剣授受者の時の顔である。

そんなレイフオンの右手にはあの頃と同じように既に復元状態にされた天剣が握られている。

右手に持つ天剣の感触は馴染み深いものだが、何処かこれを握ることに違和感を感じていた。

それもそうである、レイフオンがこの世界に来て、天剣を握ったのは数えるほどしかないが、戦いに行くために握ったのはこれが初めてである。

これを握ることにははやてやグレンダンの皆に罪悪感を感じてしまいうが、レイフオンはこれを握らなければならない理由があった。

連絡があったのは数時間前のことである。

夕飯の後片付けが終わり、少し散歩とおやつを買いに出ていったシグナム達を見送って、居間ではやてとシャマルと共にお茶を飲みながらテレビを見ていると、自宅の電話が鳴った。

「お、電話だ」

「僕が出ようか？」

「ううん、私が出るよ。ついでやしな」

炬燵に入ったレイフォンの言葉に、ミカンを取りに行くために炬燵を出ていたはやてが断るとそのまま電話機のほうへと車椅子を走らせる。

「はい、八神ですけど」

「あ、主はやてですか？シグナムです」

はやてが電話を取ると、電話の相手は毎日話をしているシグナムだった。

外に出ていたシグナムからの電話にレイフォンも炬燵から抜け出し電話機の方に向かうとすると隣にいたシャマルに腕を止められる。

「ちょっとマズイことになったようです」

シャマルの言葉に、レイフォンの顔に一気に緊張が走る。

シグナム達は本当は蒐集活動に出ていることを知っていたからだ。

「何があっただんですか？」

電話中のはやてに聞こえないようにレイフォンは小声で尋ねると、シャルは念話で送られてきた状況をレイフォンに教えた。

「ヴィータちゃんが焦ったみたいで強引に例の高魔力保持者を探し当てようとしたみたいなの。」

その後、管理局の人間が介入したみたいで、現在交戦中みたいで、シグナムもこれから援護に向かうみたい。だから逃走手段の確保と蒐集役で私も現場に行くことになったわ」

シャルの説明を聞いたレイフォンは何故か嫌な予感がした。

「なら僕も行きます」

そのため、レイフォンも同行をしようとするが頬を緩めたシャルに止められる。

「駄目よ、レイ君ははやてちゃんの傍にいなきゃ、シグナムもレイ君にははやてちゃんの護衛を任せるって言ってたわ」

それは、話し合いの末決まったことであり、もっとも確実な配置である。

何より、その配置はシグナム達がレイフォンを信頼してくれている証でもあった。

それが分からないほどレイフォンは馬鹿ではないが、仲間であるヴィータ達の危機を黙っているほど、冷

静な人間でもなかった。

だが、レイフォンが口を開く前に、電話を終えたはやてがこちらに

向いて口を開く。

「なあ、シャル、悪いんやけど、シグナム達を迎いにいってくれへんか？　なんか困ってるみたいやから」

「はい、構いませんよ。　ついでにコンビニで残り少ない洗濯洗剤を買ってきますから」

「そういえば、あと一回分くらいしかなかったな……ならお願いな」
笑みを浮かべながら立ち上がったシャルは、レイフォンに向けて、大丈夫、だという意味で一度ウイंकをするとはやてからお金を貰って、居間から退出して行く。

「レイ君、二人になってしもうたけど、ミカンでも食べようか」

シャルが家の扉を閉まる音が聞こえると車椅子のはやては太もものにミカンの入った箱を乗せて戻ってきた。

はやてが、炬燵に入りミカンを食べ始めると、レイフォンは思わず尋ねてみた。

「ねえ、はやて、今幸せ？」

レイフォンの突拍子もない質問に目をぱっちりと開けて驚くと、はやてはにやにやと笑い始めた。

「なんや、レイ君。いきなり哲学的な事言い始めて」

「いや、別に聞きたかったただだよ」

流石に可笑しかったかとレイフォンは思ったが、はやては笑みを浮かべながら何でもないように答えてくれた。

「ふうん、まあええわ、　そうやな……ほんの少し前の私なら頷けなかったかもしれんけど……」

「けど？」

「今間違いないと言えるのは、幸せやと思うよ。うつかりシヤマルにお堅いシグナム、可愛いヴィータに忠犬ザッフィー、そしてヘタレなレイ君。　こんな素敵な家族と過ごせるこれで幸せでなかったら何が幸せかわからんわ」

そう言って満面の笑みを浮かべるはやての言葉は、レイフォンの心を暖かくさせ、そして迷いを断ち切った。

「はやて、もしかしたら少しの間、寂しい思いさせるかもしれない……けど、すぐにはやてが思う幸せの百倍くらい幸せな日々が来ると思うから」

「そうか」

レイフォンの言葉にはやてはその一言だけ返すと首に巻いてあったマフラーを外し始める。

「外は寒いからな、マフラーくらいはしていきよ」

はやては自身の首に巻いていたマフラーをレイフォンの首に掛け直した。

そのマフラーは微かにはやての匂いが香り、レイフォンは自身の身

体がとても暖かくなった気がした。

「ありがとう、はやて、ちょっと行ってくるね」

レイフォンはマフラーを巻いた状態で、近くの椅子に掛けてあった自分のコートを掴むと、そのまま慌ただしく居間から飛び出していた。

そして再び玄関の扉が閉まる音が居間まで聞こえると、はやては一人ぽつりと呟いた。

「ありがとうな」

家族へ向けたはやてのお礼の言葉は、はやて以外の耳に聞こえることなく、掻き消えていった。

?
?
?

「シャマルさん!」

「レイ君! どうしてっ」

超高速で空を駆け抜けていたレイフォンは、遂に飛行魔法で空を飛んでいるシャルに追いつくとそのまま並走しながら答える

「すみません……気になってしまつて……」

駆けながら頭を下げるレイフォンにシャルは顔を少し動揺させながら答える。

「そうなるとはやてちゃんの護衛が……」

「でも、シグナムさん達がやられたり、捕まったら意味がないです。それに管理局の目は、シグナムさん達に集中しているはずですから、はやては大丈夫ですよ。鍵も掛けてると思いますし」

レイフォンの言い分は一応理解はできたが、納得はできないシャルは疲れたように溜め息をつくとき、笑みを浮かべる。

「……もう、後でシグナムに怒られても知りませんよ」

「あはははは……」

確実に怒られることが目に見えていたので、レイフォンは苦笑いですが答えることができなかった。

「あ、彼処です」

「え？」

シャルがいきなり飛行魔法を止めて、近くのマンションに降り立つとレイフォンも慌ててそこに着地をする。

「ここに結界が張られています。多分、ヴィータちゃん達の誰かが張ったんでしょう」

指を指しながらシャルがそう言うと、レイフォンも差す方向を目を細めて眺めると、微妙にだが歪んでいる空間が見えた。

初めて見る結界魔法をレイフォンは興味深く見ていると、いきなりシャルに左手を握られた。

「わあっ！　ってシャルさんいきなり何で手を握るんですか？！」

いきなり握られたためか、それとも女性らしい細く柔らかい感触に驚いたせいか、顔を真っ赤に染めたレイフォンを見てシャルはからかうように笑みを浮かべる。

「ごめんなさい。　レイ君が何か楽しそうに結界を見てましたから」

「そうですか？　まあ、結界っていうものの初めて見ましたし」

「そうですか。なら――」

エア―フィルターみたいなものかな？と考えるレイフォンの隣のシャルはある疑問に気付いた。

「シャルさん？」

いきなり黙り込んだシャルを見て、レイフォンは心配そうにシャルの肩を揺ると、シャルは何か驚きながらレイフォンを見る。

「え……レイ君、貴方、結界が見えるの？」

「え？ まあ、見えるというほど見えてないですけど、あるのはわかりますね。空間が歪んだように見えますし」

シャマルの質問は結界が見えるレイフオンにとって何でもない事だが、魔導師であるシャマルには、驚きと共に疑念が浮かんた。

何故、リンカーコアがない、魔導師ではないレイフオンに人払いの遮断結界が見えるのだろうか。

この結界は魔力資質を持たない人間が入ってこれないようにする結界なのだから、魔力素質の持たないレイフオンが見えるはずがないのだ。

しかし、今はそれを考える時間はシャマル達にはなかった。

現在の状況を打破し、シグナム達とともに逃走しなければならないのだ。

頭を切り替えたシャマルは、結界内に侵入の準備に掛かる。

結界を破壊しないように、相手に気付かせないように侵入しなければならぬ。

「レイ君、今からこの結界に入るからレイ君は私の後について」

「わかりました」

シャマルの言葉に魔法知識のないレイフオンは全て任せることにしてシャマルの後ろにつく。

その姿をシャマルは確認すると、結界の表面に手をつけ、そして身体をゆっくりと結界内に入れていく。

それに続いてレイフォンの身体も結界内に入っていく。

「何か不思議ですね」

難なく入った結界内は外とは正しく別世界で、様々な光や騒音が飛び交っていた。

遠く向こうでは紫色と金色の閃光が光の帯を纏いながらぶつかりあっており、レイフォンの視界の左側の上空では赤と青の点が対峙していた。

活剏で強化した目でよく見てみると紫色と金色の閃光の正体は、仲間であるシグナムと金色の髪の少女だった。

どっしりと構えた迎撃態勢のシグナムに対し、金の少女が空を高速移動しながらシグナムに迫るが、全てシグナムに防がれていた。

動きは早いようだが、シグナムやレイフォンが見失うほどではないし、実際シグナムには見えており、戦況を優位に進めていた。

それを確認するとレイフォンは視線を赤と青の点に向ける。

こちらもよく見てみると人型のザフィーラとオレンジ髪の女性が戦っており、ザフィーラの固い守りに女性の攻撃は阻まれているようだった。

シグナムと同様にザフィーラが優勢であり、近いうちに決着がつくだろうと結論付けると、視線を逸らしてヴィータを探すことにした。

「あれ？ヴィータは」

だが、ヴィータの姿の姿はレイフォンの視界に入ることはなく、現在戦っているのはシグナム達とザフィーラ達の二組のみだった。

「ヴィータちゃんなら彼処よ。どうやら手を貸すのはヴィータちゃんの所のようなね」

シャルが指差した方にレイフォンも視線を移すと、そこには先程の位置から建物で隠れていたところに赤い何かが見えた。

その赤い何かは、勿論ヴィータであつたが、全く動かないことにレイフォンは異変を感じる。

ヴィータの傍には全身黒い服の少年と金の髪 of 少年、そしてビル of 屋上に腰を下ろしている茶髪の長い髪の少女の姿が見えた。

アレが敵なのだろうかとレイフォンは様子を見てみると、隣のシャルは焦ったように口を開く。

「マズイわ……ヴィータちゃん、バインドで拘束されているわ」

「バインド？」

シャルの言葉にレイフォンは意味が分からず尋ねてみると、シャルは持っていた黒い本一冊の書のページをめくりながら答えた。

「拘束魔法の一種よ、結論からいえば、ヴィータちゃんはバインドを喰らって捕まったというわけ」

簡単に説明するシャルだが、その表情からは余裕なんてものはなく、必死に考えをまとめているようだった。

レイフォンはもう一度、ヴィータの方を見ると確かにヴィータの両

手足には光の輪のようなモノが嵌っていた。

「あれは自力で破壊できるんですか？」

「……ヴィータちゃんなら、大抵の魔導師のバインドなら数秒で破壊できるんだけど、今は二人掛かりで拘束されているから。それにあの二人はかなりの曲者みたい」

魔導師であるシャマルからすると二人の魔法は遠くから見ても見事のように、現状ヴィータ一人での脱出は不可能に近かった。

レイフォンには魔法の凄さとかはわからなかったが、二人から流れるみたいな流れが魔力の流れなのだろうと判断すると何でもないように答えた。

「なら僕が助けにくるよ。ある程度見せてもらったから」

魔法の脅威はわからないが、いつものように剽の流れならぬ魔力の流れも見えたため、何の問題もないと判断したレイフォンは、天剣の握りを確認しながら全身に活剽で纏う。

「はえ？　って！　ちよつと、レイ君！！」

いきなりのレイフォンの発言にシャマルは一瞬放心状態になるが、すぐにレイフォンを止めようとした。

が、レイフォンがそこから駆ける方が早かった。

「シャマルさんは、蒐集というやつを用意してください。僕はヴィータを助けてきますから」

内力系活剷の変化、旋剷。

レイフォンは、そのまま風を切り裂きながらヴィータに向かって飛んだ。

第十話 武芸者と魔導師 その二

ヴィータは焦っていた。

何度もシグナムやシャル達と話して決めてたように、出来るだけ慎重に動き、そして管理局に悟らせないようにすると決めていたのに、このような事態を招いてしまった。

管理局にマークされるということが蒐集活動に遅れを及ぼすこともわかっていた。

しかしだ、はやての命が掛かっていると、やはり自然と焦ってしまうのだ。

今日こそは、と例の高魔力保持者を見つけようとしていたが、なかなか捕捉することができなかった。

それが焦りと苛立ちとなり、遂に広範囲に魔力波を放ってしまった。

しかし、そのおかげで例の高魔力保持者を探し当て、おびき寄せることができた。

高魔力の魔導師は手強かったが、戦闘経験が浅いことが幸いで何とか戦闘力を奪うことに成功した。

だが、いざ蒐集に取り掛かろうとしたとき、向こうの援軍である管理局の魔導師達が現れ、一度その獲物を取り逃がさなければいけなくなった。

こちらもしグナムとザフィーラの二人の援軍を得て、向こうの二人の動きを封じることが出来た。

だが、ヴィータの目の前には獲物である高魔力の魔導師を除く、少年の二人の魔導師がいる。

まずこの二人を無力化しなければいけないのだが、目の前に立つ二人の魔導師はなかなかの曲者であった。

片割れの金髪で何処かの民族衣装のようなバリアジャケットを纏っている魔導師は、どうやら防御と支援に特化した魔導師のようで、プロテクションでこちらの攻撃を防ぎ、もしくは逸らすとこちらの隙を見てバインドを放ってくる。

もう一人の黒ずくめの魔導師は、バランスの取れた魔導師であり、向こうで一番戦闘に慣れてしており、うまく連携しながら、堅実な攻め方でヴィータを思うように攻撃をさせてくれなかった。

拮抗状態が続き、ヴィータの中に溜まるに溜まっていた苛立ちが怒りとなり爆発した。

「ちっ……いい加減墜ちやがれ！」

二人の魔導師を親の敵の様に睨み付けながらヴィータは両手に握る相棒デバイス—グラーファイゼンを構えて突貫を開始する。

「まずはお前からだっ！！」

ヴィータが狙いをつけたのは、黒の魔導師だった。

一番手強い相手だが、逆に言えば先に落としてしまえば後の戦況が楽になる。

そう判断し振り下ろされたヴィータの鉄槌は、その間に割って入った金髪の魔導師の展開したラウンドシールドにより塞がれる。

「この程度っ!!」

「ぐっ……」

が、ヴィータの一撃はそれ程軽いものではない。

シールドを破壊したその衝撃は術者を襲い、そのまま術者は真下へと叩き落とされる。

その隙をヴィータが逃すはずもなく、そのまま追撃を開始する。

「もらった!!」

「させるかっ!」

その追撃を黒の魔導師の砲撃が目の前を横切り、その場に停止したヴィータは左側面にシールドを展開する。

次の瞬間、ヴィータのシールドに無数の光弾が着弾した。

その攻撃は、ヴィータの攻撃を貫くほどの威力はなかったものの、ヴィータの動きを止めることには成功した。

「ちっ! 邪魔すんじゃねえよ!」

「そういうわけにもいかない」

「なら、お前から先に墜ちやがれっ!」

思うように動けない事に苛立つヴィータは、再び狙いを黒の魔導師に変えて突貫するが、そのヴィータから距離を取るように黒の魔導師は後方に飛ぶ。

その間、魔力弾をヴィータに撃ち続けるが、その攻撃はヴィータに

届くことなく全て前方に展開するシールドにより防がれてしまう。

上手く距離を詰めて放った一撃は、黒の魔導師に流すように受けられて、後ろに飛びながら回避された。

「ちょこまかとっ!!」

「悪いが君と接近戦をするつもりはない、ユーノっ!!」

黒の魔導師の呼びかけに先程下に叩きつけられた金髪の魔導師がヴィータに向かって飛んでくる。

無傷に近いとはいえ、その無謀とも言える突貫にヴィータは思わず鼻で笑ってしまう。

「ふん、支援型が私に近接戦闘で勝てるかよっ!」

そう口では言いながらもヴィータの考えでは、迫る魔導師はただの囷だと考えていた。

最初に言ったようにこの魔導師は支援型で、恐らく攻撃魔法は使えないのだろうと判断していた。

だからこそ本命は――

「お前だっ!」

迫る魔導師から目を逸らし、そのまま少し離れた所で詠唱をしている黒の魔導師に向かって飛んだ。

しかし、黒服の魔導師の詠唱は終えてたようで、ヴィータに向けて針状の射撃を放ってくる。

中々の速度であつたが、その程度の攻撃はヴィータには楽々と回避できるものだった。

その攻撃を回避し重い一撃を喰らわせようと、思ったヴィータはその魔弾を回避しようとした一その瞬間、魔弾はヴィータに向かって速度を上げて襲いかかる。

「なっ！」

突如、変化を起こして迫る魔弾にヴィータは長年蓄積された戦闘勘に身体が反射的に動こうとしたが一

「逃がさないっ！」

後方から放たれた金髪の魔導師の鎖の呪縛により、右腕が捕えられた。

その拘束によりヴィータは回避が遅れ、頭に被っていた帽子を撃ち抜かれた。

「あ……」

ヴィータは撃ち抜かれた帽子に目が奪われ、一瞬だけ思考が止まる。

はやてがこのデザインを決めてくれた時のことを……

だが、その一瞬の隙はこの場に不要のものだった。

両手に光り輝くバインドが決まり、ヴィータを拘束した。

「くっ……この程度っ！」

その拘束に瞬時に思考を入れ換えたヴィータはバインドを破壊しよ

うとするが、今度は目の前の黒の魔導師から追い討ちのバインドが放たれ、更に両足両手にバインドで拘束した。

「ふう……どうやら力自慢の君でもそのバインドを破壊するのは時間が掛かりそうだな」

「ちっ！てめえ……」

黒の魔導師の言葉に、怒りを露わにしながらヴィータは暴れるが、二重三重と固められた拘束から逃れることができない。

「二人がかりで卑怯だと思うが、君を一人で押さえることは易くない事だからな」

さて……と呟いて目の前の黒服の魔導師は、ヴィータに杖状のデバイス向ける。

「できれば、このまま大人しくしてもらいたい。向こうの二人にもだ……色々話を聞かなければいけないようだからな」

黒の魔導師のその発言はヴィータには上からものを言う言葉に聞こえた。

その言葉が逆に怒りを通り越し、今の状況を脱するか、と冷静に頭を回転し始めた。

現在、自分はバインドで頑丈に固められており、瞬時に破壊するのは不可能。

破壊する素振りをすれば、此方に向けて攻撃を仕掛けてくる、もしくは再び拘束してくるだろう。

こちらの助けとして、シグナムとザフィーラが援護にくる時間は少し掛かりそうで、何よりヴィータを挟む魔導師の優秀さはヴィータが身をもって知っていたので、迂闊な行動を起こすことができなかった。

打開策を考えるヴィータの背後から、急かすような金髪の魔導師の声が聞こえる。

「クロノ、話は後だ！　まずは、早くなのはを安全な所に」

「むっ、そうだな……ユーノ、君はこの子を見張りを頼む。　僕が結界の破壊を試みる」

その言葉はヴィータにとって最悪のことである。

自分達が張った結界が破壊されれば、向こうの援軍が来る可能性がある。

そうになると危険を冒してまで見つけ出した例の高魔力保持者も逃すことになる。

何より、このままだとヴィータ自身が管理局の次元航行艦へと連れていかれるかもしれない。

設備や能力の持ったものがあるだろう船の中なら、ヴィータが言わなくても、はやての居場所を自白させることは容易であろう。

それだけとは、最悪、ヴィータ自身の自決すら覚悟した瞬間――

ヴィータの横を一筋の風が横切った。

?
?
?

クロノは、目の前で起きた光景が理解出来なかった。

目の前の襲撃者を挟んで向かい合う位置にいたユーノは、何かに弾き飛ばされたように上空に吹き飛ばされ、クロノが手に持ったデバイスは、完全に真っ二つに切り裂かれている。

その事実を何処が他人事のように見ていたクロノの背後から――

「ごめんね」

小さな謝罪の声が耳元に響くと、クロノの意識を手放した。

?
?
?

「クロノ君っ!!」

背後にいた黒服の少年が地面に崩れたのを見届けた後、視線を目の前の少女に向ける。

半壊している杖を握りしめている少女の足元には、何やら光輝く円線が走っていた。

その中心にいた少女の身体が癒えていくの見たレイフォンは、はやてとしたゲームに出てきた魔法をこうして見ることに軽い感動を覚えていた。

「レイフォンっ！なんでお前がここにいるっ！」

後ろから怒鳴り声が聞こえ、魔法陣を眺めていたレイフォンは後ろにゆっくりと振り返ると、そこには赤いヒラヒラした服に身を包んだヴィータの姿だった。

近くで見るとあまり戦うための服ではないな…とはやてが考えた騎士甲冑というバリアジャケットを眺めていると、ヴィータの両手足に光る輪が嵌っていた。

「それに答える前に、はい」

ヴィータを拘束する輪をレイフォンは天剣を振るい外すと、拘束を解かれたヴィータがビルの屋上のアスファルトへと降り立った。

その行動に目を見開きながら驚くヴィータを余所に、レイフォンは簡単な経緯を話し始める。

「シグナムさんから連絡が来て、シャマルさんと一緒に援護に来たんだよ」

至極簡単すぎる説明を聞いたヴィータは、不快そうに眉を顰めると無愛想な声を返した。

「ちっ、私がそんなの必要だと思ってるのか？」

「必要かどうかは知らないけど、実際ヴィータだって手こずってたし」

「て、手こずってねえよっ！！」

二人を相手していたとはいえ、ヴィータが完全に押されていたことは誰の目から見ても明らかであり、当のヴィータも凶星を突かれたからか、一瞬声を詰まらされると誤魔化すように怒り始めた。

怒りだすヴィータを見てレイフオンは微笑ましそうに目を細めていると、ヴィータは諦めたのか、疲れたように肩を落とした。

「ちいつ、この話は後でぜってえ話しつけるからな……シャマルっ！」

怒りは収まっていはいないが、この場で遊んでいるわけにはいかなかった。

ヴィータは先に要件を済ませるために、通信を用いてシャマルに呼び掛けた。

その返事に了解という感じで、気絶していた黒服の男の胸から貫いたような形で手が現れた。

生え出た手の中には、光輝く宝石のようなものがあり、それを握りしめると手は男の胸の中へ戻り、その胸には傷らしいものはなかった。

た。

それを見たレイフォンは疑問を抱えながら首を傾げる。

「殺ったの？」

レイフォンの物騒な発言にヴィータは呆れたように溜め息を吐く。

「殺ってねえよ……ったく、シャルから説明を聞いていないのかよ？ 第一殺しはしねえってついこの間言っただろうが……」

「そうだよね、じゃあ、後でシャルさんにでも蒐集のことは聞いておくよ」

あっさりと答えるレイフォンにヴィータは、自分達を信用している嬉しいがもう少し自分で考えたり疑問を持つべきでは？ と密かに心配してしまうが、それは今は置いておくことにした。

「……まあいいか、次はこいつの蒐集だな」

気分を入れ替えてヴィータは目の前で治療中の少女にグラーフアイゼンを突きつける。

鉄槌を向けられた少女は恐怖からか、微かに体を震わせながらこちらを見てくる視線に、レイフォンの肩に罪悪感と後ろめたさが圧し掛かる。

だがこちらもはやての命が掛かっているのだと覚悟を決めると、ヴィータの横でひたすら傍観に徹していた。

「……悪いな」

ヴィータもレイフォンと同じ心境なのか小さな謝罪を少女に呟くと、目の前に展開する光り輝く癒しの結界を破壊しようとアイゼンを振り上げた。

「なのはから離れろっ!」

刺すような鋭い言葉とともに、ヴィータのアイゼンに緑色の光の鎖が巻きついた。

その鎖の先にいたのは、先程レイフォンに上空に吹き飛ばされた金髪の魔導師であり、鎖が握り右手と違い、左手は横腹を押さえていた。

それを見たレイフォンは少々驚いてしまった。

あの魔導師の横を通り抜ける際に、レイフォンは徹し刃を横腹に放った後、衝刺で上空に吹き飛ばしたのである。

確実に手応えはあり、肋骨、内臓に立ち上がるのも困難なほどのダメージを与えたはずだった。

だが、実際、この目の前の魔導師は立ちあがり、戦う意志を持っていた。

レイフォンはその魔導師の視線の先を見て、立ちあがった理由が理解した。

魔導師……いや少年は、目の前の少女を守るために立ち上がったのだ、と。

対峙するものが自身よりも強きものだというのは彼も理解はしているだろう。

だが、彼は少女を守ろうとしていた。

その姿にレイフオンは素直に尊敬と感動してしまう。

自分もリーリンや孤児院の皆を食べさせるため戦ってきたが、彼処まで純真に思えただろうか？

その自身の問いにレイフオンは頷くことができなかった。

闇試合に手を染めた自分とこの少年を比べるのは失礼な気がした。

だが、守りたいものがあるのはレイフオンも一緒だった。

あの優しく強く、そして儚いはやてを守りたいというのは間違いなく本心である。

だったらやることは一つである。

外力系衝剋の変化、九乃。

剣を持っていない左手の指の間に針のような細い剋の弾丸を形成すると、空を漂う少年へと放った。

「くっ」

レイフオンの九乃を少年は前方に防御魔法であるプロテクションを展開する。

が、レイフオンは既に次の行動を起こしていた。

内力系活剋の変化、旋剋。

九乃により完全に動きを止めた少年の背後にレイフオンは回りこむ。

「ユーノ君っ！！ 後ろっ！」

「！ くっう！」

「遅いよ」

少女の叫びに少年は反応するが、レイフオンが掌を少年に向ける方が早かった。

衝剄。

レイフオンの掌から放たれた剄の衝撃波は、少年を襲い、そのまま向こう側のビルの窓へと吹き飛ばした。

窓を突き破り消えていった少年の姿に少女は悲鳴をあげそうになるが、先程黒い魔導師にしたことと同じように胸元から手が生え、そのまま少女の意識を刈り取った。

倒れる少女をレイフオンは受け止めるとそのままその場に寝かすとゆっくりと立ちあがり、少年が突っ込んだビルを見る。

少年は力尽きたのだろう。もうその窓から顔を出すことはなかった。手加減は一応したが、かなりのダメージを負わしてしまったことにレイフオンは顔を歪ませていると、後ろから頭を叩かれた。

「何ぼさっとしてんだ？ さっさと引き上げるぞ」

「ヴァイター……」

気落ちしたレイフォンに対し、ヴィータは溜め息をつくとそのままレイフォンに近づくと脛へと蹴りを放った。

「っ痛」

「ふぬけた顔してんじゃないやねえよ、嫌なら辞めてもいいんだぞ？」

ヴィータの無愛想だが何処か心配する声を聞いて、レイフォンは膝を抱えて涙目になりながらも、ヴィータの分かりづらい意図を悟る。

「ありがとう、心配してくれて」

「ちっ、勘違いするんじゃないぞ。足手まといがいたらこっちまで迷惑するからな」

レイフォンのお礼にヴィータは顔を逸らしながらいつもの口調で答えた。

そのヴィータを見てレイフォンは頬を緩めていると、ヴィータの後方に軽い足音が聞こえた。

「そろそろ離れるぞ。管理局の人間が来るらしい」

降り立った先には、はやてがデザインした騎士甲冑を纏ったシグナムいた。

見たところダメージのないシグナムの傍にレイフォンは歩み寄りながら口を開いた。

「シグナムさんは大丈夫ですか？」

レイフォンの言葉にヴィータは顔を顰めるのに対し、シグナムは頬を緩めたまま口を開く。

「ああ、中々手強かったが、こちらに傷はない。まあ、あちらには逃げられてしまったがな」

そう答えるシグナムからは残念さが全く感じられず、寧ろ何処か嬉しそうだった。

そのシグナムの様子を見て、隣にいたヴィータが「戦闘狂」バトルマニアと呟くのを聞いて、レイフォンはシグナムの気質を思い出していた。

「しかし、あれは、後何年もすれば化けるな」

シグナムは対戦相手のことを思い出しながら頬を緩めているのを見て、レイフォンは隣にいたヴィータと思わず目を合わせてしまう。

「早く帰ろうぜ、はやてが待ってる」

「だね」

「って、わかったから、私を置いていこうとするな」

その場から早々と立ち去ろうとしたヴィータとレイフォンの後ろからシグナムが慌てたように追いかけてきた。

こうしてレイフォンの初めての蒐集は幕を閉じるのであった。

第十一話 戦いを終え……

謎の魔導師からの襲撃から一夜明けて、時空管理局所属次元空間航行艦船『アースラ』の船内では、金色の長い髪を二つに束ねた少女がアースラのある一室の前廊下をうろうろと徘徊するように歩き続けていた。

少女の顔を不安と疲れで憔悴しており、その姿に見かねた彼女の使い魔ーアルフは、思わず口を開いてしまう。

「フェイト、気持ちはわかるけどさ……とりあえず椅子にでも座って、もう少し落ち着いたらどうだい？」

使い魔であるアルフの言葉に、主である少女ーフェイトは不安げに扉の向こうを見詰めながら、アルフが座る長椅子に座るものの、再び立ちあがり廊下を歩き始める。

思わず溜め息をついてしまうアルフだったが、フェイトの気持ちもわかるのだ。

そう、この扉の向こうでは、彼女が最近出来た親友が眠っているのだ。

「立って待ったって、なのは達が良くなるわけじゃないんだよ」

「うん……でも」

「まあ……気持ちはわかるけどさ」

暗い表情で悲壮感を漂わせたフェイトの姿を見てアルフは、主から

のラインから流れ込む悲壮感とそんな主を悲しませた、例の魔導師達に怒りが込み上げてくる。

確かにアルフとフェイトは今回の戦闘において一番軽傷だった。

しかしフェイトの親友であるのはは、身体の傷の治療を終えたとはいえ、魔導師のコアであるリンカーコアを抜かれているため、現在ではフェイト達が前にいる部屋で安静にしている。

同じくフェイトの上官でありこの艦の執務官であるクロノも、なのはと同じくリンカーコアを抜かれて、自室で安静にしている。

何より怪我の具合が酷かったなのはの親友であり魔法の師匠であるユーノは、内臓をやられた上、肋骨、鎖骨を含む全身の骨五ヶ所を折られるという結果になった。

なのはとクロノは明日になれば起きるらしいが、ユーノは当分の戦闘行為は不可能との診断を受けた。

そんな状況が心優しいフェイトを傷つける。

フェイトは自分だけ軽傷という結果ということにも負い目を感じているのだ。

そのことがフェイトに何の責任も過失もないのに、だ。

「フェイト、取り敢えず座りなよ。フェイトだって無傷と言うわけじゃないんだしさ」

アルフは、そんな優しい主を気遣い再び座り身体を休めるように勧めてみるが、当の本人はそんな心配に気付かないのかひたすら廊下を行ったり来たりと落ち着かない様子で歩き続けていた。

「ああ〜！もう、フェイトは責任感することないよ！それに悪いのはあいつらじゃあないか！」

フェイトの態度に、アルフは何とも煮えたらない気持ちになり、強引に件の襲撃者に責任を押し付けるように叫ぶ。

アルフに言葉は確かに正論であり、フェイトも件の襲撃者について何か思うことがあったのか、その場に足を止めて考え始める。

フェイトの前に立ちふさがり、圧倒したピンク色の髪をした女性の剣使い。

彼女の剣技は、門外漢であるフェイトですら美しく、力強く感じてしまった。

「……何者なんだろうね？」

「さあね、まあそこはクロノやリンディ艦長がやってくれるさ」

また厄介なことになりそうだとアルフは、疲れたように溜め息ついて頭を悩ませた。

?
?
?

「厄介なことになったな」

蒐集を終え、管理局のサーチを振り切って八神家に帰ってきたレイフォン達は、何時もより遅めの夕食を取り、はやてを寝かせるとりビングに集まり反省会を始めた。

まず口を開いたのは、リーダーを務めるシグナムだった。

「管理局は本格的にこの辺りの調査に乗り出すだろう……ヴィータ、この意味がわかるな？」

「……ああ」

シグナムの言葉にヴィータは顔を伏せながらその言葉に頷いた。重い沈黙が流れて、遂にその空気に耐えられなくなったレイフォンがヴィータを庇うように、恐る恐るシグナムに話しかける。

「まあ、シグナムさん、ヴィータも良かれと思ったことだし、それに結構頁が増えた……」

なら結果オーライということで、と続けようとしたレイフォンの言葉をシグナムは遮った。

「それは運が良かったからだ。 実際ヴィータはあの二人の魔導師の連携の前に圧されていた。 あのまま戦局が続いていればヴィータの身柄は間違いなく管理局の手に落ちていたことになる。 ヴィータが捕まればヴィータが口を開かぬとも主はやてとの繋がりを調べる術もあっただろう。 そうなれば主はやてが望むこの日常も終わっていたのだ」

シグナムの言葉にレイフォンもヴィータも何も言えなくなる。

その考えはヴィータ達にも予想はできたし、何よりレイフォン達の援護がなければヴィータが捕まっていた可能性が高かった。

そのことはヴィータ自身が一番理解していたようで、ヴィータは一度椅子から立ち上がると回りにいるレイフォン達を見渡し、そのまま深深と頭を下げた。

「私の不用意な行動が皆に迷惑かけることになった。 本当にごめん……」

ヴィータの謝罪を聞いたシャルは肩の力を抜いたように顔を緩めると、そのままシグナムに向かって笑みを浮かべると、シグナムはつり上がった目尻を下ろしながらと今度はヴィータに諭すように話しかけた。

「……だが、今回のことで例の高魔力保持者と管理局の執務官から蒐集できたのは、我々にとってかなり大きい……ヴィータ、お前の焦る気持ちも分かる。それは我々も同じだ。だがもう無理はするな……お前に何かあれば、主はやても悲しむのだからな」

先程とは表情から一変し、心配するよう目じりを下げたシグナムがヴィータの頭を優しく撫でながらに微笑みかける。

その様子は、危なっかしい妹を見守る姉のようで、レイフォンはこれでこの話は終わりだと内心ホッとしていた。

だが、現実はその甘いものではなく、ヴィータを撫でるのを止めたシグナムが、さて……と一息つきながら視線を後ろにいたレイフォンに向ける。

その瞳はつり上がり、頬も引き攣っており、間違いなくシグナムは怒っていた。

「次はお前だ……レイフォン」

地獄の番人のような底冷えするような声色と打って変わってシグナムの背景には烈火のごとき轟炎が幻視出来るほど怒っており、レイフォンは自らの命運を悟ると同時に静かにこれから始まる地獄のような説教タイムを受ける覚悟を決めた。

?
?
?

「ああ……怖かったな」

「うん？何の話や？」

いつもの定期検診に同行し、それを終えて家路につくレイフォンがいきなり空を見上げながら呟くのを見て、はやては怪訝な様子で首を傾げる。

そんな首を傾げるはやてに車椅子を押していたシャマルが思い出したように笑いながら耳打ちする。

「昨日、レイ君が私達の言ったこと守らなかったので、シグナムに怒られたのですよ」

はやてちゃんもレイ君を叱ってください。と笑みを浮かべるシャマルの言葉を聞いたはやてはニヤニヤと笑いながら横にいるレイフォンのに向かって口を開く。

表情は半笑いだが、

「レイ君、あんまり、シャマルやシグナムを困らせたらかかんよ」

「……うん、わかったよはやて」

そんな二人のやり取りを満面の笑みで見ていたシャマルは、突然何か思い出したかのように口を開く。

「そういえば、はやてちゃん。今日は確か図書館に寄るんでしたね」

「うん、そうや。すずかちゃんと約束したからな」

上機嫌で語るはやての横でレイフォンは首を傾げているが、シャマルからはやての友達だと聞いて納得した。

会ったことはないが、はやてが友達と言うのだからいい子なのだろうとレイフォンが考えていると突然左手を上機嫌なままのはやてに掴まれる。

「そうや！レイ君もどうや？すずかちゃんにも会わしたいしな」

「えっ……うーん」

はやての提案にレイフォンは渋い顔をしながら答えを濁す。
だが、その表情は明らかに乗り気がないことが分かるほどだった。

勿論レイフォン自身は、すずかと言う子に会いたくないからと言うわけではない。

問題は、待ち合わせの場所である。

図書館。

昔、幼馴染のリーリンに連れられて、勉強をさせられた場所である。その地獄のような時間のせいで、図書館内にいるだけで意識を失いそうになるし、厚みの本を見るだけで頭が痛くなってくる。

その時は、自分が武芸者だったことと同時に勉強に関して厳しくなかったデルクの教育方針に感謝の気持ちが大きくなった。

「それは今度の機会にして、今日は遠慮するよ。それに僕はシャマルさんの買い物に付き合ったほうがいいだろうし」

誤魔化すようにレイフォンはそうは言ったのだが、はやてには何か思うことがある、ああ…と呟きながら何やら遠い目をして悟ったように頷く。

「あー、そうやな。レイ君はシャマルの監督及び監視を任せるわ」

「うん、妙なものを買ってきて、悪性物質を作られるわけにはいかないからね」

「って二人共、私を信用してないんですか!？」

レイフォンとはやての言葉を聞いたシャルは半泣きになりそうな顔で訴えかけるが、当の二人はシャルから視線を逸らす。

確かにお菓子などを大量に買い込むヴィータに、メモを渡しているのに稀に間違ったモノを買ってくるシグナムよりは信用ができるが、シャルの場合目新しいものを見つけると思わず買ってしまふ癖があり、それで終わればいいのに、家に帰ればはやてとレイフォンが知らないところでそれを調理し、ダークマターを製作する能力を持っている。

違う意味で考えれば一番信用できない存在なのかもしれない。

「違うんですっ!! 私のはやてちゃん達をびっくりさせようと」

「僕は、シャルさんがおにぎり（具無し）を作っただけでも感動モノなんだけど」

「処理班のザフィーラの泣きそうな顔を見ると心が痛みそうになるんよ」

ここぞとばかりに毒を吐き続ける二人にシャルの心の防波堤が碎けた。

「うっ……二人とも、酷いわっ!!」

二人から突き付けられた事実シャルは涙を流しながら号泣しそのまま凄まじい速度で走り出してしまった。

「って! シャマル!! 早い、早いわっ!! とりあえず車椅子から手を放してっ!! ぎゃああああっ……」

道連れとばかりに、車椅子を押されるはやてを伴って。

絶叫するはやてと号泣するシャマルを見送りながらその場に残ったレイフオンは冷静に一言呟く。

「シャマルさんって……結構、足早いんだね」

そんな問題ではない、もしここに突っ込み属性の人間がいたらそう突っ込んで違いなかったが、当のレイフオンは何も気にすることなくはやて達の元へ歩いていった。

第十二話 廻る齒車

あの戦闘から半日の時間が過ぎた頃、第97管理外世界付近を巡艦する次元航空艦『アースラ』の艦内の船内では翠の長い髪を後ろで束ねた女性、リンディ・ハラオウンはいつもと違い額に皺を寄せて苦々しい顔で報告書を読んでいた。

クロノの母親であり、『アースラ』の艦長でもある彼女にとって今回のことは頭の痛くなることばかりであった。

先程の戦いで息子でありこの艦の執務官を務めるクロノの負傷というアクシデントに顔色を青くさせていたが、現在ではクロノやなのは、ユーノ達の命の無事を確認出来て、何時もの艦長としてのリンディに戻れてはいたが、内心動揺と悩みが隠せなかった。

悩みの原因は先の戦闘でなのはに襲いかかった例の襲撃者達のことである。

飛ばしたサーチャーから撮った映像を調べていくうちに、襲撃者の正体が彼女にとって因縁深い存在であることがわかった。

『闇の書』の防衛プログラムである守護騎士ヴォルケンリッター。

それが襲撃者達の正体であり、リンディにとって特別な感情を抱かせる存在である。

いや、彼女達と言うよりも、彼女達を存在させるロストログア『闇の書』と言った方がいいかもしれない。

十年ほど前に起きた管理局所属の次元航空艦とその数隻を落とし、

乗組員を失った『闇の書』事件。

この事件でリンディは、夫でありクロノの父親であるクライドが死んだからである。

だからこそ、『闇の書』は……ヴォルケンリッターは……リンディにとって特別なのである。

しかし、それ以上に理解できなく、悩みの種となることがあった。

クロノというこの艦最高の戦力を一瞬のうちに落とした小さな少年。美しい白い剣を握った一人の少年によって戦況を一気に覆された。

ヴォルケンリッターの実力は、過去のデータからある程度推測出来た。

そのデータは確かに正確で彼女達の実力は本物であった。

だが、クロノはそれを理解していたし、だからこそ補助のスペシャリストであるユーノの補助を頼んでの戦闘だったのに、それすらいとも簡単に覆すイレギュラーである少年により、完全に潰され、最悪の結果は招くことはなかったが、乾杯ともいえる散々な結果に終わってしまった。

現在、そのイレギュラーの少年に対する情報をエイミー達オペレーターのクルー達に集めよう指示を出してはいるが、全く情報らしい情報が上がってこなかった。

ただ、現場にいたサーチャーからの情報では、あの少年にリンカーコアがなかったため、『闇の書』の主ではないことは確かである。

だがそのことがより、リンディの頭を悩ませることになる。

魔法を使わない戦闘でああも見事な戦いを出来る人間とその戦闘方法をリンディは知らなかった。

闇の書の主となれば、あの目にも止まらぬ移動にも納得はできないが理解はできるが、少年は主ではない。

つまりは、あの少年は闇の書の主の協力者となる。

その事実からだけでも今回の事件の危険度が理解できた。

百戦練磨のヴォルケンリッターとそれと同等の強さを秘めた魔導師ではない少年、それに巨大な魔力を得ることになる書の主。

これらを相手するには、なのはやクロノ、フェイトといった優秀な魔導師が全快になったとしても厳しいだろう。

ならば、とリンディは書類に埋もれた作業ディスクの隅に備えた電話に手をかける。

そのまま片隅に暗記していた電話番号を打ちながら、溜め息をついてしまう。

電話の相手には、親愛などよりも嫌悪感しか抱かない相手なのだが……実力だけは信用出来るものだった。

リンディは、後にクロノから怒られるな、と考えながら最後の番号を押して、通話が繋がるのを待った。

?
?
?

「はっ!!」

「ふっ!!」

風を切る音とともに、場内に鋭い炸裂音が響き渡る。

「やるなっ!! レイフォンッ!!」

「シグナムさんこそっ!!」

両手で竹刀を握り打ち合う二人が交差するたび、部屋中に竹刀の音が響き、その衝撃が部屋へと伝わる。

一般的な普通の部屋でこんな風に打ち合っていたら部屋の物が破損したり、床を踏みぬいたりしてしまうところだが、ここは八神家から歩いて数分のシグナム御用達の剣道場内である。

本日は休業日で使用することがないので、道場長の好意により、一日だけ貸してくれることになった。

そのためシグナムは前々から実力が見たかったレイフォンを、朝御飯を食べると同時に引きづり道場へ向った。

当初竹刀を持つことを渋っていたレイフォンだったが、一緒についできたはやての提案であるシグナムに勝てば料理を一品つけるとい

う言葉を聞き少しだけ乗り気になった。

しかし、徐々にシグナムと打ち合うにつれ、久しく感じていなかった高揚感や楽しさが身体の奥から溢れてくる。

レイフォン自身、その感覚に最初は戸惑ってはいたが、この感覚が父であり師でもあるデルクにとともに刀を振っていたときの感覚に似ていたことに気付いた。

天剣隋一の戦闘狂であるサヴァリスと違い、レイフォンは戦いはあまり好きではないと自覚している。

汚染獣と戦ったのも、天剣になったことも、そして闘試合に手を染めたことも、全てはその報酬であるお金のためだった。好き好んで戦ったわけではない。

しかし武芸は……デルクが教えてくれたサイハーデンの刀術はレイフォンは好きだったと内心気付いていた。

だがそのことを考えると同時に悲しみに押しつぶされそうになる。この武芸の一つ一つを教えてくれたデルクとももう会うことができないかもしれない、と。

内心悲しくなるのを抑えながら竹刀を振るうレイフォンに場外で見ているのはやてが何か楽しそうに手を叩いていた。

その姿を見てレイフォンの心が暖かくなっていく。

こっちに飛ばされて、もしはやてと出会わなかったら自分はどんなっていただろうとレイフォンは思う。

多分どうすることもできず、悲しみに押し潰されていたに違いないと。

しかし、家族になってくれたはやてと出会ったおかげで、グレンダ
ンにいた時よりも心に余裕がもてるほどになった。

故に、はやての命が刻一刻と失われる現状をレイフォンは許せな
かった。

恩人であるはやてを必ず助ける、そのためにはこの剣を振るうこと
躊躇しないと、決意した。

「隙あり！」

「つて！」

考え事をしていたレイフォンの脳天にシグナムの振るった一撃が直
撃し、場内に竹刀から聞こえる軽快な音が響いた。

「あー、シグナムの勝ちだな」

審判を務めていたヴィータが手を上げると、シグナムとレイフォン
を見ながらはやてが口を開く。

「うん、そうみたいやね……じゃあ、シグナムはレイ君から好きな
オカズを貰える権利を獲得や」

「つて、えっ！！　なんで僕のが！！」

はやての言葉に聞いてないとはかりにレイフォンは慌てて振り向き、
はやてに詰め寄るがはやては何でもないように答える。

「え？　だってレイ君、シグナムに負けたやん。　負けた方が、買った方にオカズをあげるっていうルール、レイ君も領いたやろ？」

「え！？　あれ、僕も適用されるの！？」

ルールを完全に把握していなかったレイフォンは再びはやてに抗議しようとは詰め寄ろうとするが、その肩を背後から掴まれる。

「見苦しいぞ、レイフォン。お前が気を抜かなければよかった話だ」

肩を掴んだシグナムはシャルから渡されたタオルで汗を拭き取ると、いつもより良い笑みを浮かべてレイフォンの肩を叩く。

「とりあえず、エビフライを貰おうか」

有無を言わさぬシグナムの言葉にレイフォンは抗議を諦め、はやての横にいるヴィータに視線を向ける。

「くっ……なら、ヴィータ、僕と勝負しよう！」

ヴィータに勝って、エビフライを奪い取ろう考えたレイフォンに対し、ヴィータは呆れたように冷静に口を開く。

「はあ？　そんなの試合するわけないだろ？　私はシグナムと違って戦闘^{バトル}マニア^{マニア}じゃないんだよ。　第一、剣は私は使わねえよ」

絶対拒否の態度を崩さないヴィータにレイフォンは説得をあきらめると、はやてと話していたシャルに標的を絞る。

「シャルさ……囲碁か将棋なら良いですよ」……辞めておきます」

参謀であるシャマルと脳筋のレイフォンなら始めから勝負がついているようなものだった。

そんな状況に絶望したレイフォンを救おうと肩を叩く者がいた。

「ならレイフォン、俺とやろう。剣は使えないが、素手なら問題ない」

それは本当に久しぶりに人間の姿になっていたザファイラだった。男らしく友情に溢れたザファイラの言葉に、レイフォンは笑みを返す。

「ご遠慮します」

そして一言で断った。

その無情な断り言葉に好意を無駄にされ若干心に傷を負ったザファイラがレイフォンの肩を揺らし始める

「ぬっ!! 何故だ、レイフォン!! 人? が折角気を使って」

「だって、ザファイラのご飯、ドックフードじゃないか。僕にメリットがないよ」

激しく揺らされながら答えるレイフォンの言う通り、確かにご飯がドッグフードのザファイラと戦う意味がなかった。

レイフォンがほしいのは餌ではなく、エビフライである。

「ドックフードの何が悪い!!」

「悪いというより、人として口にしたくないよ。それにザファイラ

の素手って、シグナム達のデバイス持ちと対して変わらないから、竹刀の僕の方が圧倒的に不利だし」

言い合うレイフォンとザフィーラを遠目で見ていたはやて達は可笑しそうに笑っていた。

そこには幸せな家族の光景が広がっていた。

?
?
?

第73管理世界『ヴィーグル』

管理世界であるが『ヴィーグル』は全土を見渡してもそう多くの人間は暮しておらず、どちらかと言えば魔法生物が多く存在する緑と海で形成された世界であった。

数時間程前までは、ここは緑豊かな木々に溢れた密林地帯だったが、現在は木々は黒く焼け果て、大地は何かに挟られたように穴が空いてあり、それ以外にも多くの魔法生物の死骸が散乱していた。

死の世界が形成されたその空間の中心に存在する大きな岩には金色の髪の少年が座っていた。

「ふん、やっと終わるか？ 全く、このリド・ロンには簡単過ぎる仕事だったよな、テウル」

「はっ、若の手には簡単すぎる依頼でした」

リド・ロンと名乗る少年は、自身の右手に魔導師の相棒との言えるデバイスを握りながら後ろに控えていた老齢の男一テウルが答える。

「まあいいさ、暇潰しにはなったよ……クレスタは何処へ行っただ？」

「クレスタなら若がお捕まえになった犯罪者を護送に行きました」

テウルの言葉にリドはもう一人の側近に連行させた次元犯罪者達を船へと運ぶように指示を出したことを思います。。

リド自身に刃向かった魔導師達の憐れな姿を思い出し可笑しそうに笑い声を上げる。

「くっくくく……しかしあいつ等の最後の憐れな許しを乞う姿……最高に笑えるね」

「そうですね、ところで若、また腕をあげましたな……これならAAも直ぐです」

「ふん、当たり前だろう。僕はミッドチルダ有数の名家であるロン家の嫡子、リド・ロンだぞ？　いつかはあの老いばれ三人を引きづり下ろし、管理局の頂点に立ってやる」

テウルの言葉にリドは頬を釣り上げていると、そこに青い長い髪の女性が姿を現した。

「リド様……」

「む、戻ったのかいクレスタ。遅かったじゃないか」

クレスタと呼ばれた青髪の女性は片膝をつき。リドに頭を下げるとそのまま口を開く。

「申し訳ございません」

クレスタの謝罪に対し、リドは一度鼻を鳴らすと岩場から立ち上がり、そのまま踵を返す。

「さっさと帰還するよ。こんな汚い場所にはいられないからね」

歩き出すリドに従うようにテウルとクレスタはその後ろを歩く。

「リド様、先程リド様宛に通が入ってましたが」

「へえ、誰からだい？」

「それは……」

言葉を濁すように口を紡ぐクレスタの様子を見てリドは推測を立て始める。

「言いづらい相手かい？ ……ふむ、なるほど、確かあればアースラで巡回中だったね……まあいい、話は艦に帰ってからだよ」

「了解しました」

「しかし、面白いことになりそうだね」

リドはそう言うと、どこか面白そうに好戦的な笑みを浮かべながら、自身の持つデバイスを握りしめた。

第十三話 執務官の葛藤

「なのは？」

「フェイト……ちゃん？」

なのはが目を覚ましたのは事件が終えて丁度一夜明けた頃であった。当初は、廊下で待機していたフェイトだったが、アルフがエイミィに頼み込んだ結果、静かに過ごすのではあれば入室の許可が出たのである。

こうして部屋に入ることができたフェイトは、ベッドの近くに椅子を置いて眠るなのはを心配そうに見ていたのだ。

「なのは、痛いところとかない？」

「痛いところ？ うーん、大丈夫かな？ 身体を動かしても痛くはないよ」

その言葉を聞いたフェイトはほっとしながら力が抜けたように椅子へと座りこんだ。

リンカーコアを抜かれただけで、身体の方は特に大きな怪我はないと診察結果を聞いてはいたが、フェイトは内心、不安と心配でいっぱいだった。

だからこそ気が抜けてしまった。

「フェイトちゃんっ?!」

「よかった……よかった……」

安心したせいかわろぽろと瞳から涙を流すフェイトに対して、その様子を見ていたなのはが慌ててしまい、意味も分からず部屋に視線を送るが、ここにはなのはとフェイトの二人しかいなかった。

この奇妙な光景がその後二十分も続くとは当の二人には知る由もなかった。

?
?
?

二十分後、場の收拾が収まったことにより、何とも言えない空気が漂う部屋から抜け出すように二人で出ると、なのはは、まだ目元の赤いフェイトに現在の状況を聞き始めた。

「そう……ユーノ君が……」

「ごめん、なのは……私もいたのに」

仲間であるユーノの容態をフェイトから聞き、なのはの表情に陰りが見えた。

そのことに責任を感じていたフェイトの瞳に涙が溜まりそうになるのを見て、それをなのはが首を振りながら否定し、そのまま自身の両手でフェイトの両手をしっかりと握りしめる。

「ううん……フェイトちゃんのせいじゃないよ。私もあっさりやられちゃったもん」

「なのは……」

潤んだ瞳で俯いていたせいで上目遣いになるフェイトを見て、なのはは一瞬抱きしめたい衝動にかられるが、何とか堪えて話を続ける。

「うん、それにフェイトちゃんに怪我がなくてよかったよ。フェイトちゃんまで怪我してたら私、悲しいから」

「あ、ありがとうなのは」

笑みを浮かべるなのはの言葉を聞き、フェイトが頬をうつすら赤く染めている。

「あー、お二人さん、私を忘れてないかい？」

どこか百合百合しい空気の二人の後ろから声が掛かる。

驚いたようにフェイト達はピクリと身体を震わすと、そのまま恐る恐る後ろに振り返った。

そこにいたのはもちろん、部屋の外で待機していた、

「「アルフ（さん）！」」

「ああ、なのは、元気になって本当に良かったよ。私も心配したんだからね？……あとフェイト、なのはが起きるのを一緒に待っていたのにそれを忘れるなんてひどくないかい？」

アルフは、なのはの無事を喜ぶかのように彼女の肩を叩き笑みを返すと、隣のご主人であるフェイトに呆れたような視線を送る。

「にやははは……」

「ご、ごめんね、アルフ！ その、アルフのこと忘れてたわけじゃあないんだよ？！ ただなのはが無事なのが嬉しくて……」

「いや、フェイト、もういいよ……なんか本気で凹んできたから」

なのはが苦笑いしている隣ではフェイトが本気で慌てて言い訳を言い始めようとするのを見て、完全にアルフの存在を忘れられていたことに本当に凹みそうになってくる。

「ごめんね、アルフ……」

「だから本当にもういいよ……」

本当に申し訳なさそうに謝るフェイトの姿を見てアルフは思う。こうやって主人であるフェイトが本当に大切に思っているものができたことは喜ぶべきなのか、それとも自身の存在を完全に忘れられていたことを悲しむべきなのか……

アルフはこうして使い魔として新たな悩みができたのである。

?
?
?

「あ、着いたよ。 医務室だ」

話を終えたなのは達はリンディに話をする前にユーノとクロノの見舞いに行くために医務室に向かった。

「クロノとユーノは今寝ているとエイミイが言ってたけど」

「まあ、騒いだりしなければいいんじゃないかい？ そうエイミイも言ってたことだしね」

アルフの言葉通り、エイミイも先程までクロノの様子を見に行っていたみたいで、艦長のリンディに呼ばれたと言って、なのは達とすれ違いながら艦長室に向かっていたのをなのは達は知っていた。

扉に触れようとしたなのはの手が一瞬だけ止まる。

微かに震えるその手を、隣にいたフェイトが優しく握る。

「……とりあえず入ろうか、なのは？」

「……うん、そうだね」

フェイトの言葉に強張った表情を微かに緩めたなのは大きく息を吸う。

「よし」

その後、息を吐くとなのは扉に向かってノックを行うと、室内から医務官らしき人が了承の言葉がかえってきた。

「失礼します」

なのはは扉の端末に触れ、自動ドアを開閉するとそのまま部屋に足を踏み入れる。

部屋に入るとすぐに目的の二人は見つかった。

医務室だからか、白に統一された部屋、その奥二つのベッドに金色と黒色の髪が並んで寝ていた。

それを見たなのは達は表情を強張らせながらベッドの側まで歩み寄ると、気を使ったのか医務官が、病人を起こしたら駄目よ？　と言だけ残してなのは達とすれ違いながらそのまま部屋を退出していた。

部屋にいるのはなのは達だけになるとアルフが近くの壁に立て掛けてあったパイプ椅子を持ってくるとそれをベッドの横に置き、なの

はとフェイトが座る。

「ユーノ君……クロノ君……」

頭に包帯を巻き顔に絆創膏とボロボロになった二人の姿を見て、なのはの目に涙が浮かぶ。

隣のフェイトも同様に涙目だったが、椅子を持って座ろうしていたアルフだけは呆れたようにクロノを見ている。

「ねえ……クロノ、寝たふりはやめないかい？」

「え？」

アルフの言葉にフェイトとなのはもクロノのほうを見ると、クロノの目がゆっくりと開かれる。

「はぁ……まさか見破られるとはね……」

溜め息をつきながら、苦笑いをするクロノはベッドから身体を起すのを見て、アルフが不敵な笑みを浮かべる。

「まあ、私は狼の使い魔だからね、鼻は聞くんだよ。それにクロノの頭の包帯だけぐちゃぐちゃだからね」

「……これはエイミーのせいだ」

苦虫を潰したような顔をするクロノを見て、アルフは愛されているんだよ、と楽しげ笑い返すと、

「って、クロノ!!」

「大丈夫なのっ!!」

普通に会話を交わす置いてきぼりを食らった二人が驚きながらクロノに詰め寄る。

その二人の勢いに、当のクロノは顔を少しだけ赤くさせると身体をのけぞるようになるのは達から距離を取りながら口を開く。

「あ、ああ、とりあえず大丈夫だ。 一時間前くらいから起きてたからね」

ただ、と言いながら苦虫を潰したかのような陰しい顔つきで自分の胸元を押さえる。

「蒐集されたせいで、魔法は当分使えそうもないけどね」

「蒐集？」

意味のわからない言葉を聞いてなのは達が首を傾げるのを見て、クロノは蒐集についての説明を始める。

「ああ、なのはもだけど、僕達はいつからリンカーコアから魔力を蒐集したのさ。蒐集されたリンカーコアは萎縮といえいいのかな？ まあ一時的に弱ってしまって、弱ったリンカーコアでは魔法が使えなくなるんだ」

「ねえ、クロノ、そんな魔法ってあるの？ 私は聞いたことないけど……」

クロノの説明を聞いていたフェイトが疑問に思い尋ねてみる。

なのはと違い、それなりの魔法の知識を持っているフェイトにもそんな魔法があるなんて知らなかった。

「魔法というか能力というか、詳しいことは僕にも分からないけど、そのおかげで今回の件は例の襲撃者達のことをが分かったよ。戦闘時のモニターの記録をエイミィに過去の物と照合してもらっているところだよ。僕の勘ではまず間違いないと思うけど」

「って事は、襲撃者の身元がわかったのかい?!」

アルフの言葉にクロノも神妙な顔で首を振る。

「いや、所在等はまだ分からない。だが彼等の正体なら分かった。
彼等はヴォルケンリッター守護騎士リッターといって、ロストロギア『闇の書』の防衛プログラムだ」

クロノから口から飛び出した真実になのは達も驚きを露にする。

「プログラム……ってあの子たちが」

「じゃあ、彼女らは人間じゃないの？ 私と同じ……」

「フェイトっ!」

フェイトの言葉に遮るようにアルフが怒鳴る。

「前にも言ったけど、君は確かにアリシアのクローンとして生まれてきたかもしれない……だが君はフェイトという一人の人間だ。あまりそういうことをいうと悲しむ人がいることを覚えおくんだ」

アルフに続き、クロノもフェイトの言葉を否定する。

「そうだよ!! フェイトちゃんはフェイトちゃんだよ!!」

なのはもフェイトの手を握りしめながら答える。

「なのは……うん、ありがとう、なのは、クロノ……ごめんね、アルフ」

涙目ながら笑みを浮かべるフェイトになのはは、アルフとともに抱きつくと、クロノはやれやれ、と喋りつかれた喉を潤すため、ベツトの横に置いてあった水筒を手に取り。口を含む。

「で、話を続けていいかい？」

「あ、うん。続けてクロノ君」

喉を潤すとクロノは先程の話の続きを進める。

「彼女らが守護騎士なら……既に闇の書の主がいるということだ」

「闇の書の主……」

「それって、クロノとユーノを倒した、例の少年かい？」

アルフが思い浮かんだのは、白金の剣を両手に握る少年の姿だった。アルフ自身、襲撃者の一人と交戦していたため、その少年のことはあまり見てはいなかったが、ただ、あの白金の剣は神々しい存在感がアルフの記憶に残っていた。

「さあ？ それは調べてみないと分からないな」

このことも母さんやエイミィ達に頼んである、とクロノが言ったその時、部屋に置いてある通信端末が鳴り響き始める。

「あ、通信だ」

「リンディさんからかな？」

「多分そうだろうな……はい、クロノです」

端末を触り、現れたマルチタスクには予想通りリンディの姿が映し出された。

「クロノ、具合のほうは大丈夫？」

「ええ、大丈夫です」

心配する母の顔になるリンディの言葉にクロノは若干照れながら答える。

息子としてのクロノの反応と子供の怪我の具合を見たリンディは安心したかのように一度溜め息をつく、今度は艦長としての顔を見せる。

その表情にクロノも執務官としての自分に戻り、リンディの言葉を待つ。

「クロノ執務官、事後報告となりますが、この度の事件に増援を依頼しました」

「増援……ですか」

リンディの言葉に、クロノは首を傾げる。

増援についてはクロノ自身も考えていたところだ。

自分を含めた最高戦力であるのは達に、戦線離脱までに追い込まれたユーノまでいるのだ。

この艦の戦力では、ヴォルケンリッター達を抑えるのは難しいと理解していた。

しかし、だ。

増援なんて、そうそう呼んでこれないのもクロノとリンディは考えていた。

蔓延的な人手不足の管理局に余る戦力なんて、そうそうないし、派閥争いがある中で自分達を助けてくれる者も殆どいない。

実際に半年前の事件であるP・T事件でもアースラ一艦の戦力で対処しなければならなかった。

それに戦力として来てくれるだろう人間は、死んだ父親のクライドの上司であるグレアムか母の友達のレティ・ロウランくらいである。

だが、クロノはリンディの顔を見てそれはないと考えていた。

それはいつも以上に険しいリンディの顔を見れば分かることだった。

「艦長……増援はこの部隊が来るのですか？」

クロノの質問にリンディは何処か疲れたように答える。

「……ふう、リド・ロン。そして彼が率いるロン家が誇る近衛部隊よ」

「……リド……ロン……っ！！母さん！！正気ですか!？」

予想以上の最悪の人事にクロノは、画面の先のリンディに怒鳴るように訴える。

しかし、それでもリンディは平静を保ち、再び口を開く。

「ええ……正気よ。彼等はこの事件向きの人材よ」

リンディの言うように、リド・ロンが率いる近衛部隊の实力はよく知っている。

ロン家が金にものを言わせて集めた傭兵集団で普通の武装局員より戦いなれているし、長年ロン家の護衛をしているテウルは、魔導師ランクは総合でA Aの猛者である。

リド・ロン自身も傲慢で有名だが、魔導師としてはとても優秀である、が

「しかし彼等のやってることは、ただの暴力だ！ 管理局の下でただ魔法の力を使い暴れる人間です！！そこには正義なんてひとつもない！！」

「でも、力が無い正義は貫き通すことは出来ないわ……現状のアーサラだけの戦力では、この事件の解決は難しいわ」

クロノの言葉に冷静に返すリンディ。

リンディが言ってることは、クロノは理解出来るが、納得出来ない。ただクロノはその場で歯を食いしばり、屈辱に震えて黙るしかなかった。

第十四話 崩れ行く日々 その一

八神はやては朝からいつも忙しい。

家主であるはやては朝起きると、そのまま洗面所に向かい、冷水で眠気を取るとそのまま居間に向かい、ソファで新聞を読んでいるシグナムとその足元で丸まっているザフィーラに挨拶を交わし、台所に立っているシャルと共に朝食の準備に進める。

台所に立つと兵器と化すシャルの監視を行いながら、頃合いを見てザフィーラにレイフォンとヴィータを起こすように頼み、シグナムに出来上がった料理を運んでもらう。

レイフォンが起きてくると、彼にシャルの監視を任せ、はやて自身は、洗濯機に洗濯ものを入れていく。

それを終えて居間へと戻ると、眠気眼のヴィータに洗面所に向かうように指示を出し、決められた席に着く。

そして完全に起きたヴィータが現れると、五人と一匹が揃った所ではやては言うのだ。

いただきます、と。

こうして八神家の賑やかな朝食が始まるのだった。

?
?
?
?

「今日ははやてちゃんは、すずかちゃん家に遊びに行くのね?」

「そうや、すずかちゃんが猫を見せたいって言ってたから行くんよ」

食事が終わり、後片付けをするシャルの言葉に、はやてはヴィータと共にデザートのアイスを食べながら嬉しそうに答える。

「へえー、でもはやて一人で大丈夫か?」

その隣で一心不乱にアイスを食べていたヴィータの心配の言葉に、はやては嬉しそうに笑みを浮かべながら、ヴィータの頭を優しく撫でる。

「それは心配ないよ。ザフィーラの散歩に行くレイ君が途中まで送ってくれるからな。で、ヴィータの方はゲートボール?」

「おう!! 今度、私のハンマー捌き見せてやるぜ!」

得意気にヴィータはスイングのフォームで腕を振る。

だが、その振り方は地面に転がる玉を打つよりも人を撲殺しそうな

勢いの物騒な振り方である。

「楽しみにしとるな」

自慢げに胸を張るヴィータにはやては笑みを浮かべて頷くと、今度は食器を片付けていたシャマルと共にシグナムに視線を移す。

「シグナムは今日も道場に？」

「はい、骨のある人を見つけたものを見つけたので」

一見冷静に答えるシグナムだが、その目には軽い闘志が芽生えており、それを見ていたヴィータが戦闘狂と呟いていたが当の本人は全く気にもしてはいなかった。

「そ、そうか……それは良かったなシグナム」

武芸に疎いはやてすらもシグナムの様子に若干ひき気味になるが、当の戦闘狂は気にすることなく微笑みを浮かべていた。

そんなシグナムの様子に、はやての隣でお茶を啜っていたレイフォンの安堵の表情で小さく溜め息をつく。

あの剣道場の一戦を含めて、同じ剣という担い手のせいでレイフォンは、よくシグナムに試合を挑まれるからだ。

シグナムと剣を交えるのは、嫌というほどではなかったが、一日五回でもそれも毎日のように言われると、流石のレイフォンも疲れてしまうのだ。

一度は、全力でやりたいからと言って、結界の張られた無人世界に連れていかれそうになったこともある。

あの時、ヴィータ達が止めなければどうなっていたかと、レイフォ

ンは身震いしてしまふ。

そういうわけで、シグナムに気に入られた者の冥福を祈っていると隣にいるはやてが、キッチンのほうにいるシャマルに話しかけた。

「ヴィータとシグナムは用事があるみたいやけど、シャマルは、どうするんー？」

「そうですねー。私はスーパーに買い物しに行こうと思っていますけど、何か買うものありますかー？」

趣味が家事と豪語するシャマルの言葉に、ヴィータが食べ終えたアイスの棒を翳しながら機嫌よく答える。

「アイスー」

「入浴剤を。出来ればオレンジの香りのやつを」

第二の趣味が入浴（實際を温泉）のシグナムが答えると、シャマルははやての方を向く。

「はやてちゃんは何か欲しいものありますか？」

「うーん、なら私は、醤油を買ってきてなー。ストックがもうなかつたはずや」

「それなら、サラダ油も、もうストックありませんよー」

「ならサラダ油も頼むわー」

主婦二人の会話を聞きながらレイフォンは、ザフィーラの水を入れ

換えながら彼に尋ねる。

「そういえば、ザファイラはあれは要らないの？　この前、テレビでしていたあの骨の玩具」

レイフォンが、ザファイラがちらちらと見ていたCMの内容を尋ねると、ザファイラは鼻を鳴らしながら身体を丸める。

「ふん、俺は狼だ。あのような犬の玩具なんぞいらん」

断言するザファイラに対し、レイフォンは目の前の狼が美味しそうにドックフードを食べているのをぼっちりとみていたため、微妙な気持ちになってしまう。

?
?
?
?

「ほな、行ってくるな」

「はい、主はやて」

「楽しんできてくださいね」

車椅子に乗るはやてにシグナムとシャルが話し掛ける横で、ヴィータとザフィーラとレイフォンがはやてに聞こえない位の小声で、話し掛ける。

「おい、ザフィーラ、レイフォン、はやてを頼むぞ」

「ああ、わかっている」

「うん、ヴィータ達は今日も蒐集？」

「ああ、今日は探査範囲を広げてここ以外の世界で、私とシグナムで二手に別れて蒐集をすることになっている。シャルは家ではやての周辺を見ながら、待機ということだ」

「なら、俺は主はやてを見送った後、自宅に戻ってシャルの護衛をしよう」

段取りを決める二人に対し、レイフォンは自分はどうするべきか考え始める。

まず一番に蒐集に行くことなのだが、これは直ぐに却下する。

前にシグナムに言われたのだが、違う次元世界での蒐集活動は、魔導師でないため念話すら使えないレイフォンを連れていくのは危険ーだそうだ。

続いて思いついたのは、ザフィーラと同じく、シャルの護衛だ。しかし、ザフィーラがいる時点で自分がいる必要性がないような気がする。

それならはやてと一緒に護衛を兼ねて、すずかと言う子の家に遊びに行くという選択肢を思いつく。

しかし、これにも問題があり、シャル曰く、このすずかと言う子は物静かな子のように、同性のはやてならまだしも、異性の自分が行くと迷惑がかかるのではないかと思ってしまう。

二番目か三番目か……と考えるレイフォンの肩を誰かが叩く。

レイフォンが振り返ってみるとそこにいたのは、怪訝な顔をしているヴィータがいた。

「何、さっきからうーうー唸ってんだ？」

「いや……僕はどうすればいいのかな……って」

取り敢えず先の案をヴィータに言うと、ヴィータはうーんと唸り始める。

「確かに、蒐集に来られると邪魔になりそうだし、シャマルの護衛にもいらねえな……ならばやての護衛でいいんじゃないか？」

「いや、でも向こうに迷惑掛かりそうだし……それにはやてに出来た新しい友達だから、邪魔したら悪いし……」

「確かにな……こんな能筋根暗野郎がいたら、はやても楽しめねえな」

妙に納得するヴィータにレイフォンは微かな怒りを覚えるが、何故か自分自身でも納得してしまい、黙るしかなかった。

「お、いいこと思いついたぜ」

何か思いついたのか、弾んだ声をあげるヴィータにレイフォンは嫌な予感を感じた。

それはヴィータのニヤリと笑う顔を見て確信に変わる。

「実はレイフォンにやって貰いたいことがあるんだ」

+

「ふう、これでいいのかな？」

ここは、はやて御用達で近所の主婦達に重宝されている海鳴スーパ
ー。

レイフォン自身もよくはやてと二人のときに、はやてとともによく
来たことのあるスーパーであり、『疾風の狩人』と言われる、よく
わからない称号がついた戦場でもある。

そんなスーパーでレイフォンは、ヴィータ達から頼まれた品々を買
い物籠に放り込んでいく。

何故、レイフォンが買い物に行っているのかというと、元々買い物
に行く予定だったシャルが、使用したカートリッジに魔力を積み
なければならぬ作業があるということ、一番暇だったレイフォ

ンは行くハメになったのだ。

といっても、レイフォン自身は特に思うことはなく、ザファイラがシャマルの護衛についているから、まあいいか、と言った感じで買物に来ているのだった。

「あ、そう言えば、ヴィータがアイスって言ってたね……」

メモ紙に書かれていなかった（意図的にシグナムが書いていない気がする）ヴィータのアイスを買うため、店内の隅にアイスのコーナーに向かって歩き出す。

それにしても、とレイフォンは、はやてについて思考を飛ばす。

はやてのいう話では、ほぼ一人きりだったはやてがここ数ヶ月で、レイフォン自身にシグナム、ヴィータ、シャマル、ザファイラという家族が増えて、すずかという友達も出来た。

共に遊びに行き、寝食を共にすることで、笑顔が絶えなくなったはやてに、再びは余命短い命という、余りにも酷い仕打ちが待っていた。

レイフォン自身も何とかしてあげたいけど、ヴィータ達守護騎士達

のように魔法に精通していない。

余りにも無力な自分に、レイフォンは苛立ってしまった。

負のスパイラルに陥る自身の思考を自ら頭を殴ることで抑えて、気分を切り換える。

「……僕に出来るのは夕飯をはやてと一緒に作って、はやてを喜ばせて、ヴィータ達を労い、信じるしかない」

決意を新たに、レイフォンはヴィータのアイスを手に入れるため、アイスコーナーへと足を早めた。

ようやく、アイスコーナーにたどり着いたレイフォンは、数多くあるアイスの一つずつ手に取り物色していく。

手頃なのは、色々なアイスが入ったデラックスタイプのやつだろう。アイスは主にヴィータが食べるが、はやてやシグナム、シャル達まで食べるのだから、量が多いほうがいい。

値段も単体で買うより安くつくみたいだからと、レイフォンは、袋に入ったデラックスタイプを籠に入れた。

これで買うものは全て買ったため、会計するためにレジに向かおうと振り向こうとするレイフォンの視界にあるものが映った。

「うーん……どれがいいのかな？ クロノは甘いもの余り好きじゃないみたいだし……でもリンディさんは甘党だし……そういえば、エイミーってどんなアイスが好きなんだろう？」

ぶつぶつと呟きながら、アイスコーナーをうろつく金髪のツインテールの女の子の姿である。

そんな彼女を他の買い物客が一瞥するが、直ぐに視線を戻し、買い物続ける。

そんな女の子の明らかに困っている様子を見て、レイフォンは声をかけるべきか考える。

考えること5秒。お人好しなレイフォンは話しかけることに決めた。

「あの……」

レイフォンはそのまま後ろから近付き、肩をポンと叩く。

ここでレイフォンは、ミスをする。

明らかに困っている相手に、殺戮を使用していないとはいえ、歩くのに物音を余り立てないレイフォンが背後から叩くとどうなるか？

「ひゃあっ！」

案の定、レイフォンに肩を叩かれた少女は、びくりの肩を震わせ、足を滑らす。

そのまま半回転してお尻から落ちる。

その瞬間、彼女が穿いていたスカートが一瞬捲り上がった。

だが正面にいたレイフォン中身が見えてしまい、思わず、顔を赤く染めてしまう。

そんなレイフォンに気付くことなく、少女は立ち上がるとレイフォンに頭を下げる。

「ご、ごめんなさい。いきなり声を上げたりして……」

吃りながらもレイフォンに謝る少女に対し、レイフォンも慌てて頭を下げる。

「い、いや、僕のほうこそ、いきなり声をかけてごめん」

というより、明らかにレイフォンに非があるのだが、目の前の少女が心優しいためか、そのことには気づかない。

「そ、それで、私に何か用ですか？」

互いに謝ったおかげか、若干落ち着きを取り戻してきち少女がレイフォンに尋ねる。

「うん、用というより、君が何か唸ってたから、どうしたのかわかって思って、声をかけたんだ」

「そうだったんだ……」

とりあえず、少女はレイフォンの言葉に納得すると、次の瞬間、レイフォンの買い物籠を仰視する。

レイフォンも視線につられて自分の買い物籠を見るとそこにあるのは籠に入りきらないデラックスタイプのアイスの詰め合わせ袋である。

「ア、アイス好きなんですね」

「え、ええ、同居人が好きで……それに色々なアイスが入ってるから」

少女の言葉に、レイフォンは流石にデラックスタイプはなかったかもしれないと思い始めた。

考えるレイフォンを少女はじっと見つめて、軽く頷く。

「あの……そのアイスってどこに売ってるんですか？」

「え？う、うん、これは一番右端の冷凍庫に入っているよ」

少女に話しかけられたレイフォンは、デラックスパックが置いてあったアイス専用の冷凍庫の一番右端を指差す。

「でも、買うならデラックスパックより、ファミリーパックが安いと思うよ。デラックスパックは、少し量が多いし……」

あと、持って帰るのも大変だし、と苦笑いするレイフォンを見て、少女はわかりました。と言ってレイフォンにお辞儀すると、トコト

コとファミリーパックのアイスの盛り集めがある冷凍庫の方へ、歩き出した。

その姿を見て、レイフオンはもう大丈夫だろうと思い、出口付近のレジへと歩き出す。

レイフオンは、気付いていなかった。

彼女があのかみ集の際にいた魔導師の一人だと……

レイフオンは、油断していた。

先程、別れた少女がレイフオンの後ろ姿を見つめていたことを……

第十五話 崩れ行く日々 その二

マンションへの引っ越しも一段落し、なのは、クロノの二人が魔力が戻ってないこともあり、現状、サーチャーを街にばら蒔いて地道に情報を集めるしかないと判断したリンディは、なのは達に臨時休暇を与えることにした。

この判断にクロノは、不満そうであったが、現状、自分が現場に出ても足を引っ張るだけであって何も言うことは出来なかった。

それとは、対照的になのはとフェイトは、この臨時休暇を楽しんでいた。

特に、フェイトは初めての学校に、アリサやすずかと言った新しい友達との出会い、なのはの家でのお泊まり会と、半年前と比べて、平穏で安らぐ一時を過ごしていた。

その一方でなのはやクロノを襲った守護騎士や例の少年という悩みの種はあったが、リンディの助言もあり、自分なりに精一杯、今を楽しんでいた。

そして、今日も、リンディに頼まれて、近くのスーパーに来ていた。

頼まれた物は、シャンプーやティッシュといった日常雑貨の予備と、肉や野菜などの空に近い冷凍庫の中身の補充、明日なのは達が泊まりに来るときに食べようと思うお菓子やアイスである。

不慣れながらも、メモを見ながら、目当ての商品を買い物籠に入れていく。

「えー…と、砂糖が四袋と……うん、これでは……うん、アイスだけだね」

最後から二番目に書かれていた【砂糖（四袋）】を、持ち歩いているボールペンで、横に線を入れて消す。

そうすると、紙に書かれていて消されていない品物は、一番最後の【アイス】のみとなった。

「えっと……アイスが置いてあるのは、……こっちの一番端だね」

店内に貼ってあった案内板を思い出しながら、フェイトは重くなった買い物かごを両手で持ち、アイスコーナーへと向かった。

アイスコーナーに辿り着くと、フェイトは並べてあるアイスの入った冷凍庫を右から一つずつ見ていく。

「うーん、どれがいいのかな？」

思った以上の品揃えに、とりあえずフェイトは家にいる人達の顔を浮かべていく。

まずは、リンディ……彼女は、自他共に認める甘党である。

緑茶に大量の砂糖とミルクを入れて飲んでいるのを見たときの驚きは、ある意味人生の中で一番驚いたかもしれない。

「ということは、リンディさんはこの【ドップリ濃厚、白いミルクバー】でいいのかな？」

パッケージに【注意、大変甘いので糖尿病の方はご注意ください】と書かれた細長いアイスを冷凍庫から取り出す。

「でも、クロノはこれダメだね？」

次に思い浮かんだのは、リンディの息子であるクロノである。

クロノは、どちらかというと余り甘いものを好んでいなかった気がする。

リンディ特性の緑茶をクロノはいつも苦い顔をして睨み付けていたし、余り、甘いお菓子も食べなかった気がする。

「うーん……どれがいいのかな？クロノは甘いもの余り好きじゃないみたいだし……でもリンディさんは甘党だし……そういえば、エイミーってどんなアイスが好きなんだろう？」

リンディ以外の好みがわからないフェイトが、冷凍庫の前で迷っていると、

「あの……」

ポンッと後ろから肩を叩かれた。

「ひゃあっ！」

深く考えていたせいか、全く気付かなかったフェイトは、驚きのあまり、足を滑らせて派手にその場で尻餅をついてしまう。

お尻に走る痛みと涙目に鳴りながらも、フェイトは素早く立ち上がると、いつの間にか目の前に茶髪の男の子がいた。

どうやらフェイト自身が一回転したことに気付いたようで、恥ずかしいせいで顔が熱くなっていき、思わず紅潮してしまう。

「い、ごめんなさい。いきなり声を上げたりして……」

慌てて、フェイトが目の中の少年に頭を下げると少年は顔を赤く染めてフェイトに対して頭を下げる。

「い、いや、僕のほうこそ、いきなり声をかけてごめん」

そういつて少年がいうと、フェイトも顔を上げる。

そうして、目の前の少年の顔を見て――ふと、首を傾げてしまう。

あれ?……この子何処かで見たとがあるような……

見覚えのある顔をフェイトは、まじまじと見てしまうが。

ふと、我に返り、少年に対して尋ねる。

「そ、それで、私に何か用ですか?」

フェイトの質問に少年は苦笑いをしつつ答える。

「うん、用というより、君が何か唸ってたから、どうしたのかなって思っ
て、声をかけたんだ」

「そうだったんだ……」

少年の言葉に、少しさっきまでの自分を想像し、確かに唸っていた
かもしれないと思い、それをこの少年や他のお客に見られていたこ
とに気付き、その事実に関が赤くなるくらい恥ずかしくなってきた。

そんな羞恥心からか、フェイトは視線を少年の顔からずらしてい
ると、少年の右手に持つ買い物カゴに移る。

少年の買い物カゴには、カゴからはみ出しているアイスが入った巨
大な透明の袋が堂々と鎮座していた。

だがら思わず、

「ア、アイス好きなんですね」

聞いてしまった。

「え、ええ、同居人が好きで……それに色々なアイスが入って
る」

そんなフェイトの質問に、少年は一度自分の買い物カゴを見て、フェイトに向けて苦笑いをしつつ答える。

そんな少年にフェイトもこれ以上聞かないでおこうと思い、

ふと、気付いてしまう。

「あの……そのアイスってどこに売ってるんですか？」

このアイスの盛り合わせみたいなのが在れば、先程の問題が一気に解決するのではないかと。

「え？ うん、これは一番右端の冷凍庫に入っているよ」

そう言って少年は、一番右端の冷蔵庫を指差す。

「でも、買うならデラックスパックより、ファミリーパックがいいと思うよ。デラックスパックは、少し量が多いし……」

補足するように言った少年の言葉にフェイトは軽く頷き答えた。

「分かりました」

少年に向かって一礼する少年は苦笑いをしながら、レジへと向かっていた。

そして、フェイト自身もアイスを買おうとしてその場を振り返った瞬間

『サー、お伝えしたいことがあります』

ポケットに入れていた私の相棒がそう警告してきた。

フェイトは、普段無口な彼が何を言うのだろうと思い、首を傾げながらも念話を用いてバルディッシュに話しかけた。

『どうしたの、バルディッシュ』

『はい、先ほどサーが話していた少年を見て、もしかすると思い自分のデータとアースラから情報を調べるとやはり照合しました』

『何が？』

『あの襲撃者達の中にいた例の少年です』

バルディッシュの言葉にフェイトは、思わず大声を出しそうになった口を両手で塞ぐ。

周りも見渡すがそこに不審な感じはなかったのでバルディッシュとの会話を続ける。

『本当なの？』

『はい、データ照合から96.7%本人という数字が出ましたので、本人に間違いないと思います』

バルディッシュの報告を聞いて、フェイト自身もあの子を見たときに何処かで見たことある様な気がした。でもあの映像の顔とは全然違い、学校の同級生と何も変わらない感じだった。

『どういたしましょうか？リンディ艦長かクロノ執務官に連絡して指示を仰ぎましょうか？』

バルディッシュの提案にフェイトは頷きそうになるが、先程のあの子の顔を思い出し、それを取りやめる。その代わりあることを思いつく。

『ううん。それよりバルディッシュ、あの子には私のことを気付かされたかな？』

『確実とは言えませんが、おそらく気付かれていないかと思います。あの時サーとあの少年ではかなりの距離がありました。それに彼はやはり情報通りリンカーコアを持っていなかったため魔導師ではないかと』

『そう、……ならあの子とお話しよう』

『……はい？』

珍しい相棒の声を聞きながら、フェイトは気合を入れながらアイスを買に行く。

急ぎ足でアイスを取り、カゴに突っ込むとそのままレジへと歩いて

いく。

『ちょっと待ってください。サーは何をするおつもりでしょうか？』
慌てた様子のバルディッシュの様子にフェイトは何でもないように答える。

『え？お話だよ。私にはあの子やあの赤い髪に騎士さんも悪い人には見えなかったし』

『しかし、危険です。彼はユーノとクロノ執務官を倒した強者です。せめてリンディ艦長に連絡するべきです』

主の安全と正論を言うバルディッシュにフェイトはレジに荷物を置きながら答える。

『大丈夫だよ。いきなりは攻撃してこない気がするから。それにリンディさんに言ったら話なんてできないよ』

『ですが、あまり勝手な行動をすればサーへの信用にも関係します。それにリンディ艦長にも迷惑をかけることにもなります』

バルディッシュの言葉が初めてフェイトの動きを止める。

主の優しさを知るバルディッシュは他人に被害が被ることになるとその行動を取りやめるだろうとの判断でそう言った。
だが、

『あの子の目、とても優しい目だった』

逆に言えば、あの少年のために自分の不利益が被っても行動する強

い少女でもあるということ。

『なのはは、私と話をするために命令無視したことがあるってクロノが言っていた。そうしてなのはと話してわかったことがある。話さなければわからないこともあると言うことを』

そうして数カ月前にフェイト自身はなのはと友達になったのだから。とフェイトは力強く答えた。

そんな主にため息がつけるならつきたくなるが、何処か誇らしげな気持ちになりながらこう答える。

『なら、せめてアルフを呼びましょう。護衛があつたほうがいいですから』

バルディッシュの言葉にフェイトは笑みを浮かべて答えた。

『ありがとう、バルディッシュ』

そうしてフェイトは、レジ前で止まっていたこと後ろに並んだお客に怒られながら急いで会計を済ましたのだった。

第十六話 崩れ行く日々 その三

買い物が無事に終えたレイフオンは、八神家に帰っていると何者かにつけられていることを確信する。

スーパーを出たときから、気配は感じていたが、ここまで来るとどうやらつけられていることに間違いはないようだ。

どうしようか、とレイフオンは悩んでしまう。

害は感じられないため穏便に事を済ませたいところだが、もしものことがあるため八神家には帰ることはできない。

となると、これしかないだろう。

レイフオンはそのまま振り返ると来た道に戻り始めた。

単純に後ろの人間に話しかければいいだけである。

レイフオンの行動に追跡者も驚いたのだろうか、やけに慌てた様な気配を感じる。

（あの角を曲がったところだ）

その角を曲がった瞬間、レイフオンの顔に何かが飛びかかって来た。

それは、難なく掴み取りそれを見るとオレンジ色の子犬だった。

何故か敵意むき出しの子犬を地面に下ろすと何気なく角の影を見る。

そこにいたのは先程スーパーで出会った金髪の少女がいた。

「こ、こんにちわ」

「……こんにちわ」

いきなり挨拶をしてきた少女にレイフオンは挨拶を返す。

そして、訪れる沈黙。

目の前の少女はもごもごと口を動かしていたが言葉になっていないため言いたいことがわからない。

そして、レイフオンもこういうときなんて言えばいいかなんてわからない。

そうして沈黙が続いていると、少女がようやく口を開く。

「き、今日はいい天気ですね」

少女の言葉にレイフオンは空を見上げる。

空には黒い雲が覆い始めており、数時間もすれば雨でも降ってきてそうな勢いだ。

レイフオンが空から少女のほうに視線を移すと、目の前の少女は若干泣きそうだった。

それを見てレイフオンもどうすればいいのかと泣きたくなった。

？

近くの公園のベンチに二人で座りながら、レイフォンは隣の少女を覗き見る。

艶のある金色の髪を二つのリボンで括った一俗にツインテールの髪型に人形のように整った顔に黒いワンピースの服装が少女にとっても似合っている気がした。

そんな少女を見ながら内心レイフォンはドキドキしていた。

鈍感と呼ばれ続けたレイフォンも年頃の男の子である。

可愛い女の子と隣に座れば緊張するものである。

そして家族同然のリーリンやフレンドリーなはやての二人とは違うタイプの女の子なためどういう風に話をすればいいかレイフォンにはわからなかった。

そしてその隣のフェイトも似たような感じだった。

決意したまではないのだが、最近まで話をするのが使い魔のアルフだけだったし、半年前に初めてできた友達のなのはを筆頭にクロノとアースラの人達、クラスメイトのすずかやアリサと話をする機会はできてきたが、やはりまだ緊張してしまう。

それにまだ男の子なんてほとんど話したことなんてない。

例外としてクロノやユーノがいるが、クロノの場合見た目に反して（失礼）年齢はフェイトより五つも年上でフェイト自身を氣遣ってうまく話をしてくれる。

ユーノの場合は、出会ったときがフレットだったため、その時の感覚から使い魔感覚（かなり失礼）で話ができる。

だが、隣の少年は違う。

そのため、クロノやユーノみたいにうまく会話ができないし、エイミーから教わった会話のきっかけを作る定番の天気の話は、先程不発に終わった。

なのはやアリサなら簡単に話掛けられるのだろうか？ ずずかならどうするのだろうか？

考え込むフェイトの足元にいたアルフは、思わず溜め息をつきたくなる。

アルフにとって、隣にいる少年は迷惑極まりない存在だ。

主の親友や恩人が、この少年がいる集団に怪我を負わされたし、主のフェイト自身も危ないところだった。

だから、早く離れてリンディなりクロノなりに連絡を取るべきだと考えている。

だが、フェイトの強い意志により使い魔としてはどうすることもできない。

最大の譲歩として付いていくことをフェイトから許されたのだ。

だが沈黙はまずいと思う。

早く、要件を済まさない少年の仲間が来る可能性もあるのだ。

仕方ない、とアルフは覚悟を決め、少年の足元に歩み寄り、少年の足に前足を掛ける。

「あ、餌か何か欲しいの？」

そう言って少年は、アルフの頭を撫で始める。

その行動にアルフは噛みつきたい衝動を抑えながら心の中でガッツポーズをしたくなる。

『さあ、フェイト！これを機に頑張って話しかけるんだよ』

主に念話で激励すると、フェイトは使い魔の心意気に感動しながら強く頷く。

そして勇気を振り絞り、少年に向けて尋ねる。

「犬、好きなんですか？」

平凡な返答だが、悪くない質問だとアルフは思った。

あとはこいつがうまく返せばいいだけだと、目の前の少年をにらみつける。

「うん、好きかな？可愛いし」

そう言って少年はアルフの頭を優しく撫でる。

そのあと、少年とフェイトの話が続くのを見たアルフは安堵の気持ちでいっぱいになり、そのまま少年の足元で丸くなった。

？

「へえ、この犬、アルフって言うんだ。珍しい毛並みだけなんて言う種類の犬なの？」

「えーっと……なんだろうね」

「ふーん、でも珍しい犬だね。こんな毛並みの犬初めて見たよ」

レイフォンは、少女の飼い犬であるアルフを見ながらこっちの世界はこんな犬までいるんだと感心してしまう。

実際、オレンジの毛並みで額の部分に宝石みたいなものを付けている犬なんてこちらの世界にもいないのだが、レイフォンはそこまで詳しく知るわけもなく、ザフィーラという青い毛並みの狼を知っていたからアルフの異常さにまったく気付かない。

「そうかな？私もアルフは自慢な子なんだけど」

「うん、自慢してもいいと思うよ。すごく綺麗な毛並みだし」

愛犬を褒められたからか、顔をほんのり赤く染め、嬉しそうに笑う少女に、レイフォンは正直に褒めて頷く。

「そういえば、……えーっと、ごめん君の名前なんていうんだっけ？」

アルフにかまっていて忘れていたが、この少女が何故自分をつけていたのか聞いてなかったことを思い出したのだが、その前に少女の名前すら知らなかったことを思い出す。

それは少女も一緒だったようで、レイフォンのほうを苦笑しつつ答える。

「そういえばアルフの名前は教えていたけど私の名前は教えてなかったね」

私の名前は、そう続けようとした少女を

レイフオンは押し倒した。

そして、その場が白い閃光と爆発音に覆われた

?

「え、
ええええええええ
ええええええええ！」

いきなり少年に押し倒されたフェイトは一瞬何が起こったのかわからなかったが、自分が少年の胸元の包まれているのに気付き驚きのあまり大声をあげてしまう。

だが、その大声は悲鳴へと変化する。

周りの爆発音とともに。

「きゃあああああ！！」

「ごめん、舌嚙まないようにね！」

少年の言葉とともにフェイトの体に圧力がかかる。

この感じはおそらく高速移動中なのは、フェイトは経験上目を開かずともわかった。

魔法を使わずにここまでの速度で駆ける少年に驚いているとアルフの念話が飛んできた。

『フェイト、大丈夫かい?!』

『アルフ! うん、こっちは大丈夫。アルフのほうは?!』

『わたしのほうも大丈夫。そのくそチビに安全なところまで蹴飛ばされたからね。その蹴られた場所が以外はほとんど怪我をないよ』

蹴られたからなのか、少し口調が荒れているアルフの言葉を聞いて、フェイトは安心して身体の力が抜けそうになる。

「怖かった？ちょっと我慢してね」

少年が心配するに声をかけてきたことで、フェイトの顔が魔導師の顔へと変化する。

『アルフ、何処から攻撃を仕掛けてきたか、わかる？』

『うん、警告もなく、いきなりだったからね。詳しいことは、方角はここから北東の森の中からの砲撃だね』

アルフの言葉を聞いて、まずクロノを含むアースラメンバーではないということは確定できた。

警告も無しに攻撃を放ってくるのは、あり得ないしそんなことをする人達ではないと断言できる。

そういう意味でなのはという可能性も消える。

、それにクロノとなのはは、リンカーコアを抜かれたせいで、現在魔法を使えない状態である。

ということは、……フェイトは自分を抱えながら疾走する少年の顔を見る。

彼の仲間、ヴォルケンリッターの攻撃だろうか？

ヴォルケンリッターの誰かが私の存在に気付き、攻撃をしてきたというなら、まだ考えられる。

だが、彼らが仲間である少年に攻撃をするだろうか？

あの砲撃の規模から考えて、私だけを攻撃してきたというのは考えられない。

現状は考えを纏めることも出来ないようで、私達に向かって無数の射撃系の魔力弾が迫る。

とりあえずは考えるのは後だ、とフェイトはポケットからバルディッシュを取りだし、少年の腕から逃れる。

そのままバリアジャケットに身を包むと、バルディッシュで迫る魔力弾を叩き落とす。

「なっ」

フェイトのバリアジャケット姿を見て、少年は理解したのか、顔を驚愕に染めるが瞬時に無表情に変え、フェイトやアルフ、そして魔法が飛んできた方向から距離を取る。

「罨か……」

感情を失くした声でそう呟くと腰に手をあて、腰から細い金属の棒を取り出した。

「レストレーション01」

そう呟くと少年が持っていた金属の棒から刃が現れる。
例の白金の剣である。

「だけど、それがどうした」

構える。

ただそれだけで、空気が変わった。

フェイト自身、わけのわからない重圧を感じていると、アルフは本能からかフェイトの傍に飛んできて獣の姿のまま少年のほうに向けて威嚇の体勢を取る。

その瞬間、再び無数の魔力弾が少年だけに雨のように降り注ぐ。

恐らく、魔力弾を放った魔導師が少年を恐れて放ったのだろう。
その魔力弾を少年は、いとも簡単に潜るように回避し、森へと駆け抜けた。

「逃げるよ、フェイト!!」

「え、でも」

「早く! あいつが戻ってくる前に逃げるよ!! ここにいたら殺される!!」

アルフの言葉にフェイトは、向こうで少年と戦っている顔も知らない魔導師のことを思ってしまう。

「逃げて応援を呼ぶんだよ！でないと向こうの奴も殺されるよ！！」

アルフの言葉にフェイト自身覚悟を決め、空へと視線を移す。

そのまま全力で逃げようと速度を上げようとした瞬間、背筋に悪寒が走る。

フェイトは自身の感で体を屈めると、それはフェイトの頭の上を走る。

フェイトの長い髪の手が3センチほど切れた。

不意に後ろに振り替えるとそこにはいた。

血の斑点を顔に浴びたままの小さな鬼が無表情のままそこに立っていた。

第十七話 崩れ行く日々 その四

ゆっくりとこちらに歩み寄る少年が一步踏み出すたびに、フェイトは一步後ろに後ずさりする。

そんな、フェイトを気にすることなく少年は鮮血が付着した剣を構える。

「……やったのかい？」

アルフが、少年に声をかける。

その声は何処か震えており、アルフもフェイトと同様に目の前の少年に恐怖を抱いているのだろう。

「殺してはいない。そう約束したから」

剣を振りながら少年は静かに答えた。

誰と？ヴォルケンリッターの人間と？それとも闇の書の主と？

だが今それを考える必要はないとフェイトは理解している。

まずはこの危機をどうにかするべきだと。

バルディッシュを構えるとフェイトは少年の一足動作すら逃さぬように少年を見る。

『アルフ、やれる？』

頼れる相棒にそう尋ねる。

『そうだね、私の野生というのかね…その本能は逃げろとしか言わないけど、逃げられそうにないしね』

『ごめん、アルフ。無茶言って…』

『何、別にいいさ。それにこいつの高慢な鼻っ面をへし折るのも悪くないよ』

そういったアルフの顔はこの位置からは見えないが、どうやら楽しげに笑っているのは長い付き合いなのでフェイトにはわかった。そんな使い魔とは対照的にフェイトは強張った声で答える。

『やれるかな？ 私たちだけで…』

『やれるさ。なんたってフェイトは私のご主人さまで、私はフェイトの使い魔だからね』

『わたしもいます』

『アルフ、……バルディッシュ……』

自慢の使い魔ともう一人の相棒の力強い言葉に勇気をもらい、フェイト自信に満ちた声で答える。

『うん!! やろう!!』

『そうこなくっちゃ!! よし!! いっちょクロノとなのはの敵討ちににっこうじゃないのさ!!』

『ユーノを忘れてはいけません』

二人と会話していて、フェイトは気付く。

目の前の少年を見ても恐怖を感じなくなっていることに。

もう一度、相棒達に感謝をするとフェイトは前へと踏み込んだ。

？

レイフォンは、目の前の少女を見て悟る。

この目の少女を侮るなど、レイフォンの武芸者の感がそう囁く。

魔導師ではないレイフォンが彼女の魔導師としてのレベルを知ることはできないが、でのこの少女は手ごわい存在というのは目を見ればわかる。

間違いなく先程斬り倒した三名の魔導師より手ごわいだろう。

だが、それだけだ、とレイフォンは右手に握る天剣を握りしめる。

「いきます」

その言葉とともにレイフォンは足へと勁を走らす。

内力系活動の変化、旋勁。

爆発的な速度で一直線に少女に迫ると、レイフオンは天剣を振り下ろす。

フェイントもなく、ただ振り下ろしたただけの一撃だが、旋勁による爆発的な踏み込みはそれを必殺の一撃と化す。

その一撃は少女に当たる前に横切るオレンジに防がれる。

「させないよ!!!」

オレンジ色の髪をした女性の拳により刀身の腹を叩かれ、軌道を逸らされる。

そうして攻撃を防がれたレイフオンに今度は上空から金色の矢に似た魔法弾が降り注ぐ。

それを叩き落としながら捌ききれないものを後方に飛んで回避する。

金色の矢は地面へと着弾し、砂煙を巻き起こすとレイフオンはその視界の悪い煙に向けて、針状にした衝勁を放った。

外力系衝勁の変化、針勁。

だがその一撃は再び間に入った何かが放った障壁に塞がれる。

砂煙がはれていくとともに見覚えのない女性が現れた。

だが、その女性の気配に見覚えがあり、レイフオンはようやくその女性の正体に気付いた。

「そうか、アルフ、君は守護獣だったのか」

「ふん、それはあの青狼のことだろう？ 私はフェイトの使い魔だ！」
やけにこだわるアルフだが、そんなことは魔法初心者のレイフォンには理解できず、使い魔と守護獣の違いなんてあるのだろうか？ と考えるレイフォンだったが、ひとつ気になった単語があった。

「フェイト？ それが彼女な名前？」

何気なく呟いたレイフォンにアルフは顔が硬直するという面白いほど反応をしていた。

「な、嵌めたねっ！」

「いや、そっちが言っただけ」

顔を真っ赤に染めて、こちらに殴りかかってくるアルフの攻撃を後ろに下がりながら回避する。

そして、同時にアルフの胴を断つように放った一撃は、アルフのバックステップにより空を切る。

接近戦は不利と判断したのか、アルフはレイフォンから距離を取る。

「あんたも名乗りなよ！！ こっちは名乗ったんだから！！」

遠く離れたアルフが指を指しながらレイフォンに対しなんとも言えない言い分を言ってくる。

そんな風にアルフと話しているとレイフォンは毒気を抜かれそうになっているとその瞬間、金色の斬撃がレイフォンに向かって飛んできた。

その斬撃をレイフオンは屈むように回避するとそのまま地を這うような高さから、金色の術者―フェイトとの距離を詰める。

それに反応したフェイトは後方に飛びながらレイフオンとの距離を保とうとするが、

内力系活動の変化、水鏡渡り。

さらに速度を上げたレイフオンがフェイトを射程内に捉えた。

驚愕に染まったフェイトの顔を見てレイフオンは天剣を振りを下ろそうとする。

だが、その時レイフオンの脳裏には先程の穏やかな時間が思い浮かんだ。

短い間だが話した結果、彼女は悪い人間ではない。

それがレイフオンがフェイトへの評価である。

多分、出会いがこんな形でなければ、友人にもなれたかもしれない。

だが、それはもしもの話である。

だからレイフオンはダメージを少なくするため、天剣を振り下ろすのをやめ、代わりに左拳を握りしめた。

そのとき、後方から鎖みたいなのがレイフオンは衝勁で吹き飛ばすと、活動で強化された左拳を腰へと引きよせた。

このとき、レイフオンはフェイトを侮っていた。

彼女が何となく侮れないというのはわかっていたのだが、彼女がどんなタイプの魔導師かはまったく知らなかった。

彼女が、レイフォンがこの世界で出会った人間の中で一番速くて、そして彼女のの本気の速さはこんなもんじゃないことを、レイフォンは知らなかった。

『sonic move』

レイフォンが拳を振り抜く瞬間、視界からフェイトの姿が消えた。

？

振り抜いた一撃は、重厚な手応えとともに少年を池の中へと吹き飛ばした。

水柱を上げる水面を見て、フェイトは作戦が成功したことに内心ほっとした。

フェイトはあの少年の戦いは見ていなかったが、クロノから聞いていた。

クロノとユーノを沈めた一撃とあの接近戦の立ち回り、そして、ユーノとクロノに接近を悟らせない速さ。

それは、彼に接近戦で勝つのは難しいという答えだった。

だからこそフェイトは接近戦に賭けた。

「うまくいったね」

「うん、予想より速くて本当に驚いたけどね」

隣に歩み寄ってきたアルフにフェイトは頷き返す。

普通に戦えば、アルフ二人でも勝つのは難しいだろう。

だから、始めはできるだけ距離を保って戦うことにした。

アルフには防御ではなく、回避を選んでもらい、攻撃も深追いしないように心がけもらった。

そうして彼にこちらが接近戦を嫌っているように認識してもらうために。

遠距離から魔法を放ち、頃合いを見て、比較的隙の大きい『ハーケンセイバー』を放って彼を釣りあげる。

彼が釣られた瞬間、アルフの『チェーンバインド』で一瞬、フェイトから意識を外し、その瞬間に『ソニックムーブ』で斜め後ろまで回り込み、体をひねったときの遠心力と魔力を乗せたバルディッシュの打撃を、頭部へと打ち込んだ。

結果、少年は吹き飛び、池の中へと着水した。

フェイト達の作戦勝ちである。

「フェイト、あいつは魔導師じゃないんだよね？」

「うん、感知できなかったし、何より最後の一撃のときは障壁を張らなかったし、バリアジャケットもしてなかった」

あの爆発的な速度が魔法なしとは驚きだが、バルディッシュやアースラのサーチにリンカーコアがないという結果から魔導師ではないという答えだ。

途中、針状の魔力弾みたいのものも放ってきたが、あれは何だという疑問が残るがとりあえずクロノ辺りに連絡しておこうとフェイトはポケットから真新しい携帯で仮宅兼司令部のマンションに連絡を送る。

「なら、私はあの餓鬼でも引きあげておこうかね、このままほっておいて水死されても困るしね」

そう言って池の方へと歩きだすアルフにフェイトはコール音を聞きながら注意を促す。

「うん、でも油断しないでね」

「はいよ」

手を振るアルフ見ながらとコール音かが途切れて、向こうに繋がった。

『はい、ハラオウンですけど』

柔らかな女性の声が聞こえ、フェイトは安心を覚える。

油断、そしてフェイトもアルフもすべて終わったと思っていた。確かに少年は、フェイトのことを把握していなかった。

だがフェイトも少年――レイフォンのことを知らなかった。

一瞬感じた殺気にフェイトは思わず、バックステップをすると、目の前の大地が吹き飛んだ。

事態が把握できないフェイトに対し、地面から現れた白金の剣はフェイトの右手に握られていた携帯が真つ二つにした。

「油断したね」

「……どうして」

立ってられる……とフェイトは言う前にフェイトの口が泥だらけの手のひらにより塞がれる。

「金剛勁を使って防御した。完璧には無理だったけど」

頭から流れる少量の血を拭いながら——レイフォンは何でもないように答えた。

第十八話 崩れ行く日々 その五（前書き）

最近、小説を修正もしています。

会話の内容が増えていたり、言葉を直していたりするので、よかったです。最初から読んでいただいたらうれしいです。

ちなみに大筋は変わっていませんので、読まなくても問題はないです。

第十八話 崩れ行く日々 その五

「うあっ……」

首元を握られ、声が潰されたかのような呻き声を上げる少女の顔をレイフオンは感情を失くしたような能面顔つきで見つめる。

内心、心が痛んだが、先程のこの少女の一撃は危険で脅威に値する一撃だった。

魔導師の認識を改めながら、レイフオンは少女を無力化するため、右手の天剣に剄を流す。

だがそんなレイフオンの行動を邪魔する一騎の獣が迫る。

「フェイト!!」

主の危機に駆けつけるアルフにレイフオンは無慈悲な一撃を振るい、アルフの体を切り裂き、遙か後方へと吹き飛ばした。

「がはっ……まだ、まだ……」

鮮血が舞い、地面を赤く染め、体中の力が失っていく感覚を感じながらもアルフは体を痙攣させながらも立ち上がる。

その姿にレイフオンは顔を顰めながら、ぽつりと呟く。

「アルフ、寝ていたほうがいいよ。その傷で動くのは自殺行為だ」

「うるさいね……私に忠告するな」

アルフ、レイフォンの忠告を無視し、ふらつきながらも主の元である金色の少女の元へと歩き出す。

その姿を見て、レイフォンは油断することもなく、情けをかけることもなく、天剣に、体中に剄を流し始める。

そして最後の忠告をアルフにかける。

「僕は手加減しないよ」

「頼んでないよ……」

アルフがレイフォンの射程内へと足を踏み入れた。

「そう」

外力系衝剄の変化、轟剣。

レイフォンから天剣へと流しこまれた膨大な剄が巨大な剣を作り出す。

それをただ見上げていたアルフはその姿に見とれてしまった。

そしてレイフォンは剣を振り下ろした。

？

「はやてちゃん!!」

「わっ!!」

はやてはいきなり横から聞こえた声にびくりと体を震わせた。

そんなはやてに声をかけたすずかもびくりと体を震わせ、正気に戻ったはやてが恥ずかしそうに頬を赤くそめながら笑う。

「ごめんな、いきなりぼっーとしてしまった」

「ううん、別にいいけど……どうしたの？なんか今日、ぼっーとしているのが多いけど」

心配そうにこちらを見るすずかに、はやては何でもないように首を振る。

「別に何もあれへんよ。しかしこの紅茶とクッキーほんまに美味しいな」

紅茶とクッキーを口に運ぶはやてを見てすずかも何も言わなくなる。

「そう？そう言ってくれるとうれしいな。それファリンが苦勞して見つけた逸品なの。私もお気に入りなの」

「へえーそうなんか……」

クッキーを見るはやてを見て、すずかはあることを思いつく。

「はやてちゃん、気に入ったならこれ御土産として家族の方に持って返らない？」

「えっ！そんな悪いよ」

すずかの提案にはやては慌てたように首を振った。

明らかに高級品のため、流石にそれは…とはやては遠慮する。

だが、そんなはやてを見てすずかもほほ笑むように顔を緩めると口を開く。

「別にいいよ。確かヴィータちゃんだったっけ？お菓子が好きって言ってたし、紅茶があるから他の二人のお姉さんたちにも大丈夫だし」

「いや、でも……」

「なら、今度はやてちゃんの家に遊びに行つて、夕飯を御馳走になるよ。それじゃ駄目かな？」

すずかの提案にはやては満面の笑みを浮かべる。

「ううん、もちろんいいよ。ありがとうな、すずかちゃん」

はやてが頭を下げてお礼を言うところとどちらとなく、笑みがこぼれ、安らかな空気が部屋中を包みこんだ。

そんな空気を感じながらはやては自身が幸せであることを認識する。

だからこそこんな幸せがいつまでも続くことを願った。

？

「レイフォン、なんのつもりだ？」

シグナムは目の前にいる同士の凶行に怒りを震わせながら尋ねる。

「……」

答えないレイフォンから視線を外さないように立つシグナムの後ろでは、シャルが地面に寝かしているフェイトとアルフに回復魔法をかけていた。

残りヴィータとザフィーラは現在周囲の警戒をしているためこの場にはいない。

「殺しはしない。……それは最初に決めた絶対守るべきルールだ」

蒐集をしない主のはやての唯一の命令を破ってまでの行動のため、せめて血だけは染めないようにとレイフォンを含む五人の誓いである。

だが目の前の騎士は、明らかに殺す気でアルフに攻撃を仕掛けようとしていた。

応援に来たシグナム達が偶然止めに入ったおかげで、アルフの命は救われたが、流石にこの行動は見過ごすことはできない。

口を開かないレイフォンにシグナムは不信に思い、レイフォンの顔を見る。

額から少量の血が流れていたのに気付き、シグナムは思わず手を差し出そうとする――がそれはレイフォンの手により振り落とされた。

「ごめんなさい、少し頭に血が上りすぎました」

そうシグナムに謝ると、レイフォンは天剣を基礎状態に戻すとそのまま振り返り、森のほうへと去っていく。

その後ろ姿を見ながら、シグナムはレイフォンの目を思い出す。怒りも何もない空虚な瞳、それはシグナムすらぞっとさせた。

そこで初めてシグナムは気付いた。

レイフォンの存在はある意味、管理局より危ないのかもしれないと。

「シグナム、とりあえずもう治療は済んだから、ここからは移動しましょう」

「ああ、そうだな、もうそろそろ管理局の増援がきてもおかしくないな。よしヴィータ達に念のためいつものように別れて退却するように伝えてくれ」

「わかったわ」

シャルに指示をしながら、シグナムは最後に眠っている少女の顔見てから呟く。

「すまないな」

それだけ伝えると、シグナムはシャルとともにこの場を離れた。

？

「馬鹿か、僕は……」

レイフォンは森の中で自己嫌悪に押しつぶされそうになる。

自分がしようとした行動は、フェイトやアルフはもちろん、はやて達にも益のない行動だった。

あのまま振り下ろしていたら、レイフォン達は殺人犯だったし、そうになると必然的にはやての責任も問われることになっただろう。

だから冷静になって思うことができる。

自分ははやての傍にいたら駄目な存在なのではないのだろうか？と。幸いにももうはやてはもう一人ではない。

シグナム達という家族がいるのだ。

ならもう自分の存在は必要ないのかもしれない。

蒐集活動でもレイフォンは無力であり、魔法知識もない素人である。戦うことしか取り柄がない自分は、はやてのような人間の傍にはいてはいけない気がする。

考えれば考えるほど、レイフォンは自分が必要ないような気がした。

「とりあえず、もうはやての家には帰らないでおこう。そうしたら、管理局の人間にバレることはないだろうし」

レイフォンは森の中を歩きながらこれからの行動指針を決めていると――天剣は復元させた。

「くっ」

全方位から降り注ぐ魔法弾の弾幕を何とか逃げのびると、横腹に強烈な一撃が突き刺さる。

声を上げることなく、レイフオンは後方の木に激突し、口から鮮血を吐きながら、体中に剉を巡らせて、体の治癒も施していく。

その間に、レイフオンは状況を把握していく。

肋骨が数本折れたが、体中にヒビが入っているようだが戦闘はできそうだ。

敵は気配から察して二人。

近接専門と後方支援の一人づつ。

かなりの腕前で、今までの相手とは違いこちらを殺しにくるつもりようだ。

問題ない、レイフオンは自分に言い聞かせ、現れた襲撃者と対峙する。

白い服を身に纏い仮面をつけた多分男である襲撃者。

「驚いたな……致命傷を与えたつもりだったのだから」

男とも女とも取れる作られた声にレイフオンは警戒を高める。

実際、天剣を抜いた際に体中に剉を流したから、今は立っていられるが、もう少し遅れていたら命は失くしていただろう。

逆に言えば、それだけレイフオンを脅威に思っているようだ。

となると、相手の素性は管理局の人間か、もしくはレイフオンの戦いを見ていた人間だろう。

「そう？別にどうってことないよ」

「そのやせ我慢、いつまで持つかな？」

迫る襲撃者にレイフオンも前に踏み込みながら天剣を振るう。

ダメージのせいで、押しきれないレイフオンは舌打ちをつきながら剄を体中に巡らせる。

内力系活剄の変化、旋剄。

爆発的な速度とともに打ちおろしの一撃を放つが、それは安々と回避される。

「その技は、直線しかできないみたいだなっ！！」

技を読まれて、カウンター気味に放たれた拳をレイフオンは天剣でぎりぎり受け止めるが、後方に下がらされる。

その瞬間再び、魔力弾がレイフオンに迫るが、それを再び旋剄を用いて回避する。

外力系衝剄の変化、針剄。

天剣から放たれた針状の衝剄を連射するが、それははじかれ、もしくは回避されて襲撃者達にダメージを与えることはできなかった。

「レストレーション02」

レイフオンは天剣を剣状から基礎状態のような剣の柄のみのような形にする。

「はあっっ!!」

気合一閃。

瞬間、前方の、そして周囲の木々が次々になぎ倒していく。

だが、襲撃者達には当たらなかったようで広くなった視界の中に佇んでいた。

「馬鹿か！回りの被害を考えろ!!」

流石に相手の肝を冷やしたようで、怒鳴る襲撃者達を見ながら苦笑すると、

「魔法ガンガン使う貴方達に言われたくないよ、レストレーション
01」

天剣を細い鋼糸状から元の剣状に戻す。

鋼糸による周囲への攻撃は失敗に終わったが、周囲の見通しが良くなり、姿の見えなかった後方支援の魔導師も肉眼で確認することができた。

同じ格好をしていることには驚いたが、今そんなことよりと、目の前の襲撃者達に集中する。

「おい、これ以上ここですると厄介なことになりそうだ。場所を変

えるぞ」

それだけ言うと、レイフォンの体が何か光に包まれて、思わず目をつぶってしまう。

そして、次、目を開けたレイフォンの視界には黄金色に染まった見渡す限り続いている巨大な砂地だった。

一瞬、はやて達のことを思い浮かべてしまったが、それは迫る魔力弾により中断される。

後方に飛ぶとレイフォンは天剣を地面に刺して、両手に剄を流す。

外力系衝剄の変化、九乃^{くない}。

両手の指の間から針のように細い剄の弾丸を形成し、そのまま迫る魔力弾を相殺させる。

「いきなりですか」

「ふん、油断しているほうが悪い」

現れた二人の襲撃者にレイフォンは剄を天剣に纏わせて答える。

そして両者が激突しようとした瞬間、それは響いた。

『アリア、ロツテ、もうやめるんだ』

その言葉にレイフォンも襲撃者も動きを止める。

「お父様！どうしてですか！！」

襲撃者の一人から発せられた女性の声にレイフォンは驚き、天剣を落としそうになる。

「そうです！あと数分でこいつを血祭りにあげますから！！」

物騒なことを言う襲撃者の片割れの声を聞きながら、レイフォンは警戒し始めるが、声の主の穏やかな声が聞こえる。

『そう警戒しなくてもいいよ、レイフォン・アルセイフ君』

その言葉にレイフォンは警戒心を高める。

「どうして、僕の名前を？」

レイフォンという名前を知っているのは、隠れて聞いていれば聞く機会はあっただろう。

先程もシグナムも読んでいたし、前の襲撃のときも呼ばれていた。

だが、アルセイフはシグナム達にはやての家で名乗った一回きりである。

だから知るはずがないのだ。

『ふむ、知りたいのであればこちらに来てくれないか？君とはゆつくり話がしたいと思っていたところだ』

罨。

いくら人の良いレイフォンでもわかるくらいあからさまなものだある。

「嫌だと言ったら？」

『別にどうもしないさ、アリアとロッテを帰還させるだけだよ』

拍子抜けしそうな答えだったが、それには続きがあった。

『まあ、君はこの世界から出れないけどね。……ここは無人世界でめったに管理局の人間でも寄りつかないところだ。助けが来る前で生き延びれたらいいね』

それは選択肢がないと一緒ではないかと、レイフォンは内心毒づいてしまう。

この見渡す限り砂漠で、突き刺すような熱射の前ではいくらレイフォンでも三日も持たないだろう。

それにリンカーコアのないレイフォンはサーチに当てはまらないから、助けにくる可能性は極めて低い。

「条件があります」

『なんだね？』

「ご飯を用意してください。昼間からなにも食べていません」

覚悟を決めるしかなかった。

そんなレイフォンの言葉を聞いて、何か面白かったのか、声を上げて笑い始めた。

『はははははっ、いいだろう。たくさん用意しているから楽しみにしておいてくれ』

その言葉を聞きながらレイフォンははやて達に別れを告げた。

最大の感謝とともに。

第十九話 蠢く闇

「うわ……」

レイフォンは、目の前の光景に目を奪われていた。

発光する天井に壁、そして床が金属板という何とも近未来的な通路が広がっている。

わかるやすく言うと、はやてとともに見たロボットアニメに登場する宇宙船艦の通路みtaiである。

「通路で止まるな」

後ろから背中を蹴られたレイフォンは前にめりになるが素早く体勢を立て直す。

そのまま振り返るとそこには見慣れない女性が二人立っていた。

同じ容姿で同じような服を着ている女性の頭には、アルフやザフィーラが人型の時のような耳が生えている。

「……誰？」

「はあ？先まで戦っていただろう」

そういうと顔を顰める片割れに対し、もう一人の方の女性が手を叩き、レイフォンとの仲介に入る。

「ロツテ、やめなさい。お父様も待っているわ。それにここで暴れられて人でも来られたら面倒だわ」

「ちえ、ほらくソガキついてきな」

歩き始める二人のあとをレイフォンは罨や奇襲に警戒しながらついていく。

歩きながらレイフォンは目の前の二人を観察する。

この双子が多分さっきまで戦っていた襲撃者なのだろう。

よく聞いてみると、声が似ているし、歩き方の癖も一致する。

多分、ロッテと呼ばれた柄の悪い方が近接の、そしてもう一人がリアという支援のほうでだろう。

だが、それがわかったとしても意味がない。

どのみちついていくしかないのだ、とレイフォンは結論づけるとレイフォンは体中に剉を流し、細胞を活性化させ治癒力高めていく。

程なくして目的地に着いたのか、前の二人が足を止めるとレイフォンも同じように足を止める。

するとロッテという方が、後ろに振り返りレイフォンを睨みつける。

「今からお父様と会ってもらうけど、変な行動したらその首をへし折ってやるからね」

「別にそっちが何もしなければこっちは何もしないよ。そっちが何かしてきたら斬らせてもらうけど」

何でもないように言ったレイフォンの言葉を聞いて、ロッテは睨みながら鼻を鳴らすと再び扉の方に振り返った。

そんな会話しているうちに、ひとり扉の付近の端末にパスワードを打ち込んでいたリアが扉を開けていた。

部屋に入る二人に続くようにレイフォンも部屋の中へと入る。

部屋は特別何かあるというわけではないが、部屋を中心に高級そう

な皮のソファと料理が山ほどのったテーブルが置かれていた。

「君がレイフォン君だね。こんなところまで足を運んでもらって申し訳ないね」

部屋の向こうにある扉が開き、現れた初老の男がレイフォンに話しかけてきた。

「ロツテもアリアもすまなかつたね」

「いえ」

二人をねぎらうようにほほ笑む男は、レイフォンのいる場所と向かい側に位置するソファに腰を下ろすと、その横に二人が並び立つ。

「貴方は誰ですか？ どうして僕を此処に呼んだのですか？」

二人を警戒しながらレイフォンは初老の男に話しかける。

「そうだね、確かに私だけ名前を知っているのは不公平だね、私の名前はギル・グレアム、君の推測通り
時空管理局の人間だ」

管理局の人間と言われて、レイフォンは思わず顔を顰めてしまうが、男の名前に何処かひっかかった。

どこかで聞いたことあるような気がするがどこで聞いたか思い出せない。

交友関係は、はやて達一色だったし、はやて達も状況が状況だけに限りなく狭い。

顔を顰めるレイフォンに男は苦笑すると口を顰める。

「今の紹介はわかりづらいかな。はやて君の両親の知人と言えわかりやすいかな」

「っ?! グレアム：おじさん：」

はやての家にシグナム達が来て数日経った頃、はやてが何処かに手紙を書いていた。

知り合いがいないと言っていたはやてが、手紙なんて書いていたので聞いたことがある。

確か、はやての支援をしている人物だった。

「その様子じゃ、どうやら私の事をはやて君から聞いていたようだね」

「管理局の人間だったですね……ならシグナム達の事を」

返答しだいでは、グレアムを斬らなければならない。

レイフォンが腰に差している天剣に手を伸ばすと、ロッテ達が構えを取る。

そんな緊迫した状況でもグレアムは笑みを浮かべたままテーブルにおいてあるポットでレイフォンを含む四人分の紅茶を入れ始める。

「そうだね、だけど勘違いしないでほしい。現状、私は彼女らを捕える気も、書の完成を阻止する気はないよ」

「現状：つまりは、頃合いを見て、と？」

レイフォンは天剣を握りしめてグレアムを睨みつけるが、グレアム

自身は気にすることなく、紅茶に口をつける。

「ああ状況がそうなればそうするね。それがはやて君を助ける唯一の手段だから」

唯一と言った言葉にレイフォンは過敏に反応する。

「唯一？　どういうことですか？　闇の書を完成させたらはやては助かるんじゃないんですか？」

シグナムやヴィータ達もそう言っていたし。

闇の書の真の主となる、それがはやてを助ける唯一の手段だと。だからこそ、はやてとの約束を破ってまでしたのだ。

「君がどうしてそう思っているか知らないが、闇の書の完成ではやて君の命が助かるわけではない。はやて君の体の麻痺は元々闇の書の魔力汚染が原因だ。幼い頃から契約者だったはやて君の体を確実に蝕んでいたはずだ。」

「でもシグナム達は助かるって……」

「それは君を騙していた……いやもしかすると知らなかったんじゃないのかな？」

「知らなかったって……」

「闇の書は何百年も主を変えて転生し続ける魔道書だ。そういうバグが彼らを襲ってもおかしくはない」

そう言われるとグレアム達の言い分とシグナム達の言い分に矛盾は

なくなる。

だけどそれは唯の推測でしかないし、調べることができない。

「……そんなこと信じると？」

「そうだね、私も君の立場なら信じることができなかったかもしれない。だけど私を信じてほしい。もうあまり時間がないんだ」

ソファから立ち上がりレイフォンに頭を下げるグレアムを見て、レイフォンは天剣から手を離す。

「……わかりました。とりあえずはなしを聞かせてもらってから判断します」

「そうだね、それがわたしもいいと思う。まあとりあえず座りなさい。立って話すには長い話になりそうだから」

レイフォンの言葉にグレアムは少し笑みを浮かべ、目の前のソファに座るように勧めると、レイフォンも警戒を少し緩め、ソファに腰を下ろした。

「料理も食べなさい。暖かいうちに料理を食べるのが料理の一番のマナーだよ」

まだ湯気が立つ料理をレイフォンは手に取り、ゆっくりと口に運ぶ。少し冷めてはいたが、その料理は美味しかった。

だが、少し食べて悲しくなるのをレイフォンは感じた。

?
?
?

某次元艦内。

「へえ、一撃で仕留められたようだな」

「はい、いくらランクの低いこの者達相手でも鮮やかです」

この艦の所持者であるリドは、治療のため収容された魔導師を眺めながら、隣に控える部下のテウルに話しかける。

収容された魔導師達には、胸元に大きく切り裂かれ、遠くから見ても重傷なのがわかるくらいの傷口である。

「ふん、欲にとらわれ、先に出た方がいいが返り討ちにあうは、何とも笑える話だ」

冷酷な目で一瞥するとリドは興味がなくなったように視線を、目の前のモニターに移す。

そこにはここにいる魔導師を斬り捨てたレイフォンの映像が流されていた。

「ですが、良い捨て駒になってよかったですね。いいデータが取れました」

「確かに、こいつ等程度の魔導師はこの艦には腐るほどいるしな」

この艦にいる百人余りの荒くれ者を思い出し、リドは鼻で笑うと、テウルに向けてにやりと笑みを向ける。

「映像あるんだろう？ヴォルケンの連中の分も」

「はい、アースラ組との交戦映像にヴォルケンリッターに関しましては過去の映像まで、揃う分は全て」

「そうか、クレスタやあいつらにも見せておけ。作戦と同様にな」

「はっ、かしこまりました」

主に一礼し、この場から立ち去るテウルを見送ると、リドは再び映像を眺める。

「しかし、こいつはいい……あのリンディに貸しができるうえ、相手はあの悪名高き闇の書とヴォルケンリッターだ。上に上がるにはいい生贄だ」

リドはこみあげてくる笑いを抑えながら一人自室へと足を向ける。

「クロノよ、貴様の青臭い正義論は俺という名の現実を見せて否定してやるよ」

憎き同世代の魔導師のことを思い出しながら、リドはこの場から去った。

第二十話 ヴォルケンリッターVSリド一味 前篇

「レイ君、おなか減ってないかな？」

はやては隣で寝ているヴィータを起こさないように小さく呟いた。その言葉はここ最近口癖になってきている。

レイフォン・アルセイフ。

はやてにできた新しい家族の一人で、レイフォンの幸せな日々の切っ掛けになった人物である。

人柄は優しく、家事ができて、運動能力も高く、武術の腕もシグナムが認めるくらいの腕だが、その反面勉強がまったく駄目な脳筋少年である。

その彼がいなくなって早十日である。

シグナム達は何か知っているようだが、何故か教えてはくれない。ただ、そのうち帰ってくると、アイスを賄賂に口を割ってくれたヴィータの言葉を信じるしか、今のはやてにできることはない。

はやては明日からこの家を離れて石田先生のいる病院に入院しなければならぬ。

できるなら一週間と迫ったクリスマスを自宅で過ごしたかったがあきらめるしかない。

もしかしたら、今日が最後のこの家での時間か、とはやての頭に縁起でもない考えが頭の中を巡る。

いいや、私は家族とこれから生きるんや、と弱気になる心を奮い

立たせ就寝につく。

せめて夢の中ではレイフォンがいますようにと願いを込めて……

？

レイフォンがいなくなった翌日の夜。

はやてが寝静まった後、リビングに集まったヴォルケンリッターの面々の前でシグナムは言った。

「主はやてには、レイフォンがいなくなったことを教えないでおこう」

一日過ぎてもレイフォンが帰ってこなかったことで、はやてが心配をし始めた。

だが、それははやて自身には言うことができない。

そう考えたシグナムの言葉にシャルが神妙な顔をして頷く。

「そうね……はやてちゃんの今の体状態からしてあまり動揺するようなことは言わないほうがいいわ」

ここ最近、病院に付き添ったシャルは、はやての主治医の石田先生から直接容体を聞いていた。

段々と容体が悪くなり、年越しすら危ないとはやての容体にあまりさわることを言いたくない。それが二人の見解である。

二人の話を聞いてきていたヴィータが苛立ったようにテーブルを蹴

る。

「そんなこと話してるくらいなら、レイフォンの奴を探しに行けばいいじゃねえか!!」

「ヴィータ落ち着け」

「落ち着いてられるか! シグナム! なんでレイフォンを探しにいかねえんだよ!! 仲間じゃなかったのかよっ!!」

床に伏せているザフィーラの制止の言葉も、怒りで興奮しているヴィータの耳には届かない。

「ヴィータちゃん落ち着いて……探しに行きたいのはヴィータちゃんだけじゃないわ、私もザフィーラもシグナムもみんな心配なのよ。だけどレイ君はリンカーコアを持ってないから探査魔法に引っかかりにくいのよ」

「今、不用意にレイフォンを探しに行けば、管理局の探査に引っかかる可能性が高い。闇の書の完成が我々の第一の指針だ。これらは全て主はやてのために、だ」

「ちいっ…わかったよ」

シャル、シグナムの言葉にヴィータは納得はできな勝ったが、折り合いだけはつけることができた。

その様子を見ていたザフィーラが空気を変えるように話し始める。

「レイフオンは確かに心配だが、あいつが管理局に捕まるヘマをするとは思えないしな」

「どうだかな、あいつ、普段トロいじゃねえか」

ザフィーラの言葉にヴィータは思わず首をかしげてしまう。

確かに戦闘時のレイフオンの実力はヴィータ自身も知っているが、普段の緩いレイフオンの事を考えると首をかしげてしまうのだ。

そんなヴィータを挑発するようにザフィーラは鼻で笑う。

「そういうヴィータは一度捕まりそうになっただろう」

「なっ!! いつだよ!」

「レイフオンが助けに来てくれた時の件だ」

ザフィーラの言葉にヴィータは顔を真っ赤に染めながら噛みついていく。

「馬鹿、あれはあれから逆転するところだったんだよ」

「逆転ということは押されていたことは認めるのだな」

「押されてねーよ! そういうザフィーラも手こずってたじゃねえか」

「別に手こずってはいない」

ヴィータとザフィーラの子供みたいな言いあいをシャルは微笑ましく眺めているが、その隣のシグナムの胸の内にはある不信任が芽

生えていた。

レイフオンのことである。

武芸者と呼ばれる戦闘のエキスパート。

聞いたこともなく他の世界とは何処か違う世界の来訪者。
戦闘時に見せるあの空虚な歪な瞳。

そんな彼が何故、主はやての元へ現れたのか？

目が覚めたら、はやての家 にいた。

そうレイフオンは答えたが、闇の書による召喚の自分達とは違い、
レイフオンは別に誰のもとでも現れる可能性があったのに何故主の
前だったのか？

これを運命や縁という言葉で片づけるには、現状消息を絶っている
今、無理な話である。

最悪のシナリオが思いつくなか、シグナムはレイフオンを信じたい、
そう思った。

？

クリスマスの一週間前、対策本部のあるマンションの一室で話し合
いをしていた。

「今だ手がかり無し…か」

クロノが眉をひそめながら報告書を見ている横で、オペレーター の

エイミーも疲れたように口を開く。

「そうなのよね……目新しい情報は無し……」

あのフェイトが例の少年と戦って以来、彼らとの戦闘はない。

確かに蒐集をしているヴォルケンリッターを見つけることが、彼らはあまりこちらと戦わないでうまく逃げられてしまう。

彼らからしてみれば、蒐集し終えたアースラ組との交戦は何の益もないのだろう。

「闇の書って今何ページくらいたまっているのかな？」

そういったのは、つい三日前にリンカーコアが回復したフェイトである。その隣では同じく怪我を完治したアルフが報告書をつまらなさそうに見ていた。

「さあ、わからないが、多分半分以上は溜まっているだろうな」

わかっている分の蒐集されたもののデータを取ると最低でも半分は溜まっているだろう、というクロノの推測にこの場にいる人間全ての顔が暗くなる。

「そういえば、なのはちゃんは？さっきまでそこにいたのに」

場の空気を変えるべく、エイミーはできるだけ明るい声でクロノの尋ねる。

「うん？淫獣の様子を見に行ったようだ。別に行かなくていいと僕

は言ったんだけどね」

「なるほど、だからクロノ君は機嫌が悪いんだね」

「どういう意味だ？」

「別に？」

ニマニマとからかう笑みを浮かべるエイミィにクロノは口元をひくつかせていると、突然部屋の扉が開いた。

「おっ、クロ助が、珍しく女といちゃついてるね。これは私の教育の賜物かね？」

「いちゃついてなんかない！！…って、やっと来たかロツテ」

クロノの前に颯爽と現れたのは、目の前にいるエイミィより面倒な師匠であるリーゼロッテだった。

おもに体術方面の戦闘技術を、もう一人の師匠のリーゼアリアに魔法や支援、戦術を教えてもらったクロノは、この二人に頭が上がるのだ。

「やっと来たかって、こっちは闇の書に関する情報を集めるために不眠不休で働いていたのに」

「だからこっちから人を貸したじゃないか？」

「ああ、あの子？確かに有能だね。なんか保護欲っていうの湧いてきそうな顔つきだし、あれって食べていい？」

「別にいいぞ。淫獣だし、あいつも本望なんじゃないのか」

二人の話している人物は、戦闘の時の傷により戦線を外れていたユーノのことである。

まだ、思うように動かない体を引きずって、無限書庫と呼ばれる管理局の巨大なデータベースで、闇の書について調べている。

無重力だから体の負荷が少ないから大丈夫と本人は笑っていたが、心配するなのはとフェイトが変わり交代に様子を見に言っているのだ。

「そういえばアリアは？最近見ていないが？」

現れたのはロッテ一人でアリアの姿が見えないことにクロノは思わず疑問に思う。

殆ど一緒にいる二人だが、ここ数日はアリアとあった覚えがない。そんなクロノの疑問にロッテは、なんでもないように答える。

「うん？ああ、最近わんぱくな犬を飼い始めてね、アリアはその世話さ」

「犬？猫じゃないのか？」

「犬さ、お父様が欲しいと言ってね、まあ、なんというか私達とは相性は悪いね。まあ、番犬には持ってこいだけど」

「へえー、そうか、なら僕と気が合いそうだから今度見せてくれよ」
ロッテが苦々しくその犬に語るのを見て、何となくその犬とは気が合いそうだな、とクロノは思ってしまった。

「やめていた方がいいと思うけどね、誰にも懐かないし、凶暴だしね……まあ、この事件が終わったら見せてあげるよ」

「そうか、楽しみにしておくよ、でこれが調査の結果か？」

クロノは、ロッテから手渡された書類を一つ一つ注意深く目に通していく。

「ああ、とりあえずは、ってところだね」

「そうか、特に新しい情報はないということか」

その中には特に新たな情報らしいことは書かれておらず、知っている情報の捕捉のみだった。

実際、アリアとロッテも前に調べたのだから、いくら優秀な探査魔法のユーノでもこの数日で新しい情報を出すのは難しいだろう。

「現状は、騎士達との接触でしか情報を集めることしかできないか」

「その騎士もこっちの探査を上手く避けてるみたいだしね」

唸るクロノの横でエイミーがなのは達のいる海鳴や近隣の管理世界にばら撒いたサーチャーからの画像などの情報を調べているが有益な情報は出てこなかった。

「待つしかないか……」

悔しそうに呟くクロノの言葉にここにいる人間全てもそう思った瞬間、突如部屋中に警告音が鳴り響いた。

「エイミィ！」

「わかってる！！……魔力反応確認！！ビンゴッ！！ヴォルケンリッターよ！それに……え？この魔力パターン」

モニターを眺めながら驚愕の顔で固まるエイミィの言葉にクロノはエイミィの肩を握る。

「エイミィ！」

「ちょっと待って……すぐに映像に出すから……」

エイミィが目の前のモニターに現場の映像を出そうとした瞬間、通信が入る。

「どうやら始まったようね」

「艦長！？」

モニターに現れたのは、アースラの艦長で、現在本局に用事で出ているリンディだった。

「クロノ、それにフェイトさん、貴方達はこの戦闘に関与しないこといいわね？」

いつもの増して険しいリンディは一方的に要件を伝える。

それに対し、固まっていたクロノが珍しくリンディに大声を出す。

「母さん！！いきなり何がどうなっているのですか？それに関与し

ないって、どういことですか」

「……先方から、さっき連絡があったわ。この戦いにそちらの人間を出すな。ヴォルケンリッターは我々が捕縛するってね」

「……まさか」

リンディの言葉にクロノは嫌な予感し、すぐにエイミィと席を替わり、自分でモニターに現場の映像を出す。

そこには、圧倒的な数で強敵ヴォルケンリッターを追い詰める集団がいた。

集団の中心には見慣れた人間がいた。

今までたびたび衝突をして、未だに嫌悪感しか湧かない同期生……

「リド……ロン」

そう呟いた瞬間、画面の向こうの男は楽しそうに顔を緩めていた。

第二十一話 ヴォルケンリッターVSリド一味 中編 その一

漆黒の空からシャワーのように降り注ぐ魔力弾をシグナムを掻い潜り、事的首謀者らしき男に向かって迫る。

だが、その突撃は再び現れた赤い長い髪の女――クレスタにより防がれる。

「そこをどけっ!!」

「リド様は私が守る」

振るわれた二対の刀型のデバイスとレヴァンティンが交差し、火花が散る。

共に空を舞いながら、何合もの打ち合いを重ねていると、突如、クレスタがシグナムから距離を取る。

その瞬間、頭上から魔力弾が迫り、シグナムは舌うちを打ちながら目の前の女から距離を取る。

追尾する魔力弾を叩き落とすが、再び迫る無数の魔力弾に後退を余儀なくされる。

先程から、この繰り返しをしているだけである。

目の前の魔導師は確かに優秀かもしれないが、白兵戦において負ける相手ではない。

相手もそれは理解しているらしく、単独での攻撃はしてこない。常に後ろにいる魔導師の援護とともに攻撃をしてくるだけだ。

それも明らかに時間を潰すような適当な攻撃で。

勝つ気がないのか、と怒りがこみ上げるより、なるほど、と称賛の言葉しか言いようがない。

シグナム達、古代ベルカの騎士は1対1で、特に白兵戦において無類の強さを誇っている。

だが、明らかに複数の相手をするのには向かないのだ。

「ちっ、レヴァンティン!!」

『Snake Form』

レヴァンティンの刀身が離れ、蛇腹剣となる。

レヴァンティンの第二の形態シュランゲフォルムである。

「飛竜：一閃!!」

魔力を込められたカートリッジが弾け、魔力を纏った刀身を振り抜いた。

蛇のごとき変幻自在な動きで目の前のクレストへと迫るが……

「ポーン2、3、行きなさい」

冷酷な指示を与えられた二人の魔導師が、プロテクトを纏いながら迫る刃に向かっていく。

が、歴戦練磨のシグナムの技が、決して有能と言えない魔導師二人に防げるわけはなく、

「がっ!!」

「うわっ!」

易々とプロテクトを打ち破り、その身は斬り裂かれた。
悲鳴を上げ撃墜されていく二人の魔導師を見て、シグナムは舌うちを隠せないほど苛ついてしまう。

「隙あり」

その攻撃の一瞬の隙について、クレスタを含む近接特化の魔導師達が、シグナムに襲いかかる。

「ちっ」

迫る刃や打撃を目の前にシールドを展開し、そのまま後ろに下がると元の形状に戻ったレヴァンテインで迫る魔導師の一人に向けて振るうが、後ろに跳ばれて威力を抑えられ、致命傷を与えることが出来なかった。

その間に向こうは、倒れた二人の代わりに新たに魔導師を転移させていた。

きりがないとばかりシグナム同様に、ヴィータやザフィーラ達も同じように苦戦していた。

ザフィーラは遠距離からの魔力弾と砲撃の嵐で防戦一方となり、ヴィータは老人の剣士に苦戦していた。

残るシャマルだが、彼女は戦闘向きでないためこの場にはいない。

となるとこの状況を切り抜けるには自分自身の力でどうにかしなければならぬ。

シグナムが冷静に頭で考えを巡らせていると、無表情のクレスタが話し掛けてくる。

「烈火の将シグナム。この包囲網からここまで粘るとは流石はあの悪名高き闇の主の騎士ヴォルケンリッターのリーダーと言えます」

主であるはやてのことを貶すような発言をする女の言葉にシグナムは眼光を鋭くさせて睨みつける。

だが、殺意すら混ざる視線に女は何でもないように話を続ける。

「あわれですね、プログラムといえど無能の主に仕える貴方達を見るのは同じ騎士として少々心が痛みます」

その言葉にシグナムは一息で斬りにかかるが、クレスタの双剣によって阻まれ、その瞬間、自身に迫る誘導弾の雨を見て、再び距離を取る。

「気に障りましたか？しかし事実であることには変わりませんよ、貴方達に蒐集を任せて自らは安全な所で高みの見物：まったく闇の書の担い手は保身を大事にする人間ばかりですからね」

クレスタの言葉にシグナムは睨みつけるだけだった。

だが、確かにそうかもしれないとシグナムも思う。

主はやての前の主達は、皆シグナム達を兵器や道具、そして玩具の様に扱ってきた。

自らの欲望のためにシグナム達に蒐集させて、そして真の闇の書の担い手になろうとした。

だが、はやては違う。

シグナム達を兵器や道具などの扱いはせず、一人の人間として、そして家族として向かい入れてくれた。

自らの命が尽きようとしても、蒐集をせずに他の、誰とも知れない人間達の心配をした優しい主だ。

「ふふふ……くくく」

シグナムは笑いが込み上げてくるのが抑えられなかった。そんなシグナムを見て、クレスタは怪訝な顔をする。

「何がおかしいのですか」

「いや、ただそれは貴様の主でもないかと思ってな……お前達部下に危険な前線を任せて、自らは後方からの射撃、そして砲撃とは、まさにお前の言う保身を大事にする人間ではないか？」

クレスタの主ーリドは、ザフィーラが戦っている空域で、ひたすら魔力弾を放っている。

確かに陣形の指示などの確にこなしているみたいだが、自身はザフィーラから一番離れたところから、ただ魔力射撃と指示を飛ばしているだけだった。

「ふ、挑発のつもりですか？」

「別にそのつもりはない。ただ、同じ騎士として無能な主に仕えるのは憐れに思えてな」

その言葉にクレスタは今までにない、フェイトにすら届く速さでシグナムの首に向けて刃を走らせる。

が、シグナムは何の苦もなくその一撃を受け止める。

「もう一本残っているっ……！」

残る左手に握る剣で、クレスタは刺突をシグナムに放つ。

近距離からの刺突は流石のシグナムでも回避できなかったようで、シグナムの脇腹を掠めた。その左手をシグナムの左手が掴む。

「やっと私の間合いに入ってきたな」

シグナムはにやりと笑みを浮かべると、レヴァンティンがカートリッジを弾き出す。

その瞬間、クレストは自身の失策に気付く。掴まれた左手を動かそうにも、力でシグナムに劣る彼女がその拘束から逃れることはできない。

レヴァンティンの刀身は、紅く灼熱の炎を纏い、その紅炎が驚愕の顔に染まるクレストを照らし出す。

「紫電……一閃!!」

クレストが双剣でシグナムの一撃を受けとめようとするが、その一撃は双剣を簡単に打ち砕き、そのまま女の身体を捉えた。

ピンボールのように弾かれたように吹き飛ぶクレストが、ビルに側面のコンクリートをぶち抜いていったのを見て、シグナムは周りの魔導師達を見る。

「さて、お前達のリーダーはいなくなったが、これからどうする？」

シグナムの気迫に圧されて後退する魔導師達を見て、シグナムはレヴァンティンをシュランゲフォルムへと切り替えた。

？

シグナム達が戦っているところから少し離れた所でヴィータも目の前の男――テウルと対峙していた。

テウルは男というよりも、白髪で頭を覆い、顔に皺を寄せている老人なのだが、ヴィータはそのことにも油断することなく対峙していた。

正確には先程まで油断をしていたのだが、その結果がだらりと血に濡れた左手である。

浅く斬られただけのため、戦闘には支障はないはず程度の傷だったのに何故か、左手は動かない。

「ふむ、孫と同じくらい背丈の小娘を斬るのはいささか忍びないが、仕事だから悪く思うな」

「はっ、そんな気が一つもないのによく言うぜ……」

「そうか？では……」

距離を詰めてくるテウル対し、ヴィータは出来るだけ距離を取るため、後方へと飛ぶ。

腕が動かない原因が目の前のテウルの攻撃によるものであるし、何よりどうして動かないのか全くヴィータにはわからなかった。

「ははは、嫌われたようだな」

「当たり前だ！！誰が好き好んで自分を斬った爺を好きになるかよっ！」

後方に下がりながらヴィータは自身の中距離誘導型射撃魔法シユワ

ルベフリーゲンを老人に向けて放つが、テウルが振るう大矛のデバイスにより撃ち落とされる。

「それは残念、っだ!!」

「がっ!」

振るわれた一撃の重さに片手のヴィータでは防ぐことが出来ずに、ヴィータは遙か後方へと吹き飛ばされる。

その隙をテウルは、身体をコマのように身体を一回転させると、その遠心力でヴィータに向けて投擲する。

凄まじい勢いで迫る大矛に、ヴィータは体勢を整えたと迫る脅威が防御は不可能と判断し、そのまま回避のため横へとスライドするように飛行する。が、

「甘いわっ!」

「しまっ、があっっ!」

前方に現れたテウルにより地面へと叩き落とされた。

「つてえ…」

地面に叩き落とされたヴィータは背中に負った強い衝撃と痛みを堪えながら、近くのビルの窓へと飛び込んだ。

窓ガラスを割りながら、ヴィータは建物の廊下を駆け、敵であるテウルについて対策を立てようとした瞬間、動かなかった左手が動くことに気付いた。

「痛みはあまり感じねえ、特に違和感はねえ……」

動かなかった左手を振りまわしてみるが、怪我した傷口以外痛みはなく、違和感も感じることはなかった。

相棒のグラーフアイゼンを握っても違和感も感じないことに、とりあえず攻撃を喰らわないようにしようと考えて、借りを返すために再び戦場へと戻ろうとすると、先に向こうから現れてきた。

廊下の壁を貫通してきた大矛に対し、ヴィータは両手でグラーフアイゼンで大矛に向けてフルスイングをした。

ぶつかり合う一撃が、衝撃波となり床や壁を破壊する中、ヴィータは見事飛来した大矛を吹き飛ばした。

弾き飛ばされた大矛の落下点に破壊された壁から現れたテウルがそれを受け止める。

「どうやら、左手の感覚が元に戻ったようだな」

ヴィータがアイゼンを両手で構えている様子を見て、テウルはそう判断するとヴィータと同様に大矛を握りしめる。

「どういう仕掛けか知らねえが、とりあえず殴られた貸しは返させてもらうぜ」

「そうかい」

同時に飛び出し、ぶつかり合う二人。

その衝撃で建物の壁や床、天井といったところに無数の罅が入り、そして、

高層ビルは崩壊するのであった。

第二十二話 ヴォルケンリッターVSリド一味 中編 その二

鉄槌の騎士、ヴィータ。

ヴォルケンリッターの斬りこみ隊長で、近中距離の高い攻撃技術と破壊力に富んだ鉄槌型デバイスを操る騎士である。

そんな彼女、ヴィータは初めて現在の主、八神はやてに会ったとき一番最初に思ったことは変な人という感想だった。

寧ろ、傍にいたレイフォンという剣士の方が衝撃が大きかったし、あとで自分達に向かって家族発言したの数多く仕えた主の中でただ一人だったと思う。

しかも、鉄槌の騎士としてではなく、ヴィータという一人の人間としてだ。

主であるはやてが作った手料理は初めて食べたとき、体中が暖くなり今まで食べてきたものよりも比べ物にはならないほど美味く満たされた気がした。

一緒にベットで寝て、はやてに抱きつかれた時、とても安らいでしまった。

ヴィータは自分を愛してくれるはやてのことが大好きだと実感した。

だからヴィータは止まるわけには：負けるには行かなかった。

大切な家族のため、敬愛する主のため：鉄槌の騎士は武器を振るうのだから。

？

悲鳴と怒声が響く戦場の上空で戦況を見ていたリドはおもしろくな

さそうに鼻を鳴らす。

自らが指揮する部隊は、盾の守護獣であるザフィーラを魔力弾の嵐で抑えているが、他はうまくいっていないようだ。

烈火の騎士のシグナムに対し送ったクレストアの部隊は、クレストアが敗れたことで劣勢に追い込まれている。

そして、テウルは鉄槌の騎士ヴィータと壮絶な一騎討ちをしている。ビルをなぎ倒すヴィータの一撃をかわしながらテウルも多彩な攻撃を仕掛けている。

現在はテウル優勢だが、多分テウルは最終的には負けるだろうとリドは冷酷な予想を立てていた。

それは二人の地力に圧倒的な差があり、テウルの動きにヴィータが反応し始めている様子が窺えた。

いずれは完全に見切られ、テウルはあの鉄槌をくらうことになるだろう。

「まあ、予想通りだね……ねえ、あれを用意して」

こうなってしまえばいつまでも戦況ばかり見ているわけにはいかないため、リドは視線をテウルから隣に控える護衛に移す。

「若、まさかアレをお使いになるつもりですか?!」

自分の指示に驚きの声を上げる護衛対し、リドは頭が痛くなってきた。

現状、シグナムは周辺の魔導師を一掃すると、ヴィータの援護より間違いなくこちらに来るであろう。

放っておけば勝てる戦場より、手こずっている戦場の援護するのは誰でもわかることだ。

そしてシグナムが介入すれば、抑えているザフィーラの活路を与えることになる。

となれば、こちらの敗北が濃厚となる。

だからこそ、このタイミングで確実に一体葬っておかなければならない。

そう考えるリドは再び部下に指示を送る。

「元から使う予定だ。使えないとはいえ、テウルもクレスタも魔導師ランクAランク以上の猛者だ。そのあいづら越えるヴォルケンリッターという化け物を討つには多少の犠牲と出費が必要ということさ」

「しかし……」

それでも愚図る護衛にリドはデバイスの先端を護衛の頭部に当てる。

「いいからさっさとしなよ。君も墜ちたいかい？」

「わ、わかりました！」

脅迫気味の指示でようやく動き始めた護衛に対し、リドは舌打ちを打つ。

再び、戦場に目を向けると今度はテウルがヴィータの攻撃に防戦一方になっていた。

「流石はヴォルケンリッターだね……間違はなくお前らは俺達より上だよ。だが、勝つのは俺だ」

不敵な笑みを浮かべるリドの元へ遂にアレが送られてきたのだった。

？

禍々しい風切り音立てる鉄槌が耳元を掠めるが、テウルは恐れることなく懷に飛び込み大矛型アームドデバイスを水平に構えて刺突を放つが、シールドに阻まれる。

お返しとばかりに、振り下ろされた鉄槌を流すように受け止めて、そのまま後方へと距離を取る。

再び、突進しシールドごと切り裂こうとするが、今度は鉄槌により阻まれ、今度は力負けをして後方へと飛ばされる。

体勢を整えると同時に迫る誘導弾を大矛で打ち落とすと、油断なく目の前の騎士を見据える。

テウルは目の前の騎士に対し、思わず愚痴をつきたくなる。

自分より優れた反射と動き、圧倒的な破壊力に強固な防御魔法。そして凄まじい威力の攻撃。

最初の一撃以外の攻撃は当たらず、そして多分もう当てることのできないだろう。

勝てない、そう分かっているでもテウル自身は戦うことはやめるつもりはない。

大恩があるロン家に仕え、現在の主であるリドの命もある。だが、それよりも自分は十年もこの時を待ったのだから。

？

「ふう、流石はヴォルケンリッターというわけか」

明らかに先程まであった戦意や殺気が消えて、大矛を下ろすテウルに対し、ヴィータは眉を顰める。

「何のつもりだ」

「いや何、このまま戦っていても負けということがわかったただけだ」

テウルは大矛型アームドデバイスを基礎状態に戻す。

その様子からヴィータは降参したのかと思い、アイゼンを突きつけながら尋ねた。

「負けを認めた、ということか」

「負け？ ワシがお前達に負けを認めると思っただけか？」

ヴィータの言葉に殺気とそして怒りで顔を歪めたテウルは右腕をヴィータに向けてつき出す。

「だから貴様を道ずれにすると決めたただけだ」

取りだした注射針を右腕に打ち込み、そして吠えながらヴィータに向かって突貫を仕掛けてきた。

武器を持たない何の細工のない突進に一瞬面を喰らうが、ヴィータは油断することなくアイゼンを構える。

迫るテウルに対し、アイゼンを振りかぶった瞬間……

「十年前に孫を殺した貴様らをな」

一瞬、その言葉に囚われたヴィータの反応が遅れ、鉄槌はテウルの脇腹を掠めただけに終わる。

その瞬間、テウルはヴィータに抱きつくように捕まえた。

「何故、最初の一撃を受けた時腕が動かなくなったと思う？」

尋ねるように話しかけてきたテウルの言葉よりもヴィータは掴まれた腕を振りほどこうとする。

テウルの腕を掴んだ瞬間、それは起こった。

「?!！」

テウルの腕を握った手がそこから動かなくなり、そして手以外の足や腰の感覚が無くなっていく。

感覚が無くなっていくことに恐怖したヴィータは顔を伏せている原因を睨みつける。

「お前、何しやがった?!」

ヴィータの怒鳴り声におかしそうに笑うとテウルは顔を上げる。

そのテウルの顔を見て、ヴィータは思わず息をのむ。

顔の至る所に黒い斑点が浮き出て、目が真っ赤に血走り、そして口元から少量の血液を吐き出していた。

だが、当の本人は笑みを浮かべてヴィータの質問に答える。

「我が魔力変換資質『毒物』だ」

「魔力変換資質……だと」

魔力変換資質……魔力をごく自然に直接的な物理エネルギーに変換

できる能力で、通常は魔法としての制御が必要な変換を自然に行えるため、自身の魔法に変換したエネルギーを付与することが容易となり、意図的に変換を行う際の効率も高くなるのだ。

シグナムも『炎熱』という魔力変換資質を持っているが、毒なんていう魔力変換資質が聞いたこともないし、そもそも毒の魔法というのも使っているものも見たことはヴィータにはなかった。

「ああ、言葉通り、毒を生み出す能力だ。しかも他の魔力変換資質とは違い、色々使用条件や使い勝手の悪いという一種のレアスキルみたいなものだ。ちなみに貴様の感覚を奪っているのは麻痺毒の魔法プログラムだ」

ヴィータはテウルの説明を聞き、理解したが既にもう遅かった。既に全身が麻痺に回り始めていた。

「このまま、攻撃を加えたいところだが……」

そう言ってテウルはヴィータから手を離し、そのままヴィータから離れる。

「私にもどうやら麻痺が回ってきたようだ」

そう最後に呟くとテウルは地面に落下し始めてた。

麻痺が全身に回り、飛行魔法が使えなくなったのだろう。

この高さなら助からないかもしれないな、とヴィータは落下するテウルを見ていたが、今度は自分の飛行魔法が保てなくなっていた。

「くそっ、落ちて…たま…るか」

飽和していく意識をヴィータは必死に繋ぎとめるが、それも時間の問題だった。

何とか、近くの建物の屋上に降りようとしてみるが、この状態なら浮遊しているだけで限界だった。

「あっ……」

そして遂に気が抜けたように力尽きてしまった。

手足は動かすことは出来ず、だが何故か落下する感覚だけははつきりと感じる事が出来た。

感覚が麻痺しているのならこれもわからなくていいのにな…、とヴィータは思い、そして目を閉じた。

第二十三話 ヴォルケンリッターVSリド一味 中編 その三

消えかけた電気、埃臭くそして薄暗い部屋の中、彼女――クレスタの記憶はそこから始まった。

閉鎖された部屋には扉が一つあるだけで他には若干の血のにおいが微かにこびりついているだけで他には何もない部屋だった。

そしてその扉が開くとき、それが恐怖の時間の始まりだった。

白衣を纏った科学者達が、彼女に対し実験という名の拷問を与え続けた。

そんな日々が続く中で、彼女は死にたいということしか願えなかった。

実験の中での失敗でもいい、だから早く死なせてと。

そんな彼女の願いは、彼女の記憶が始まって半年後に訪れる。

目が覚めるといつもと同じように暗い部屋だった。

だが、いつもと違い彼女の部屋の外は何か騒がしかった。

だが、そんなことは彼女にとってはどうでもいいことだった。

彼女は死ねればいいのだから。

クレスタが部屋の隅でいつものように蹲っていると、いつのまにか外の騒音は収まっており、そして彼女の部屋の扉が開いた。

暗闇を照らす光と現れた人間は、いつもの白衣を着た科学者とは違い、黒い服を纏った少年だった。

それが、彼女の世界を変えた人間で、そして彼女の主となる少年だった。

「へえ、これがサンプルの実験体か、おーい生きてる？」

「リド様、不用意に近づかない方が…」

少年は、周囲の人間の制止を振り切り、彼女の元へ歩き出す。
その光景を彼女は、ただ見ているだけだった。

「ふうん、なんかその目、気に入らないね。絶望の中にいます、つてみたいな目が……何、君死にたいの？」

眉をひそめ、不愉快そうな顔をする少年に、彼女は頷き、目を閉じた。

「OK」

その瞬間、彼女の首に圧迫感が迫り、そして足が浮く。
驚きながら目を開けると自分の首が少年の手によって絞められて、
そして無表情の少年の顔が見えた。

「リド様っ！」

「だってこいつが死にたいって言ったんだし……まあ、死にたいなら殺してあげた方がいいでしょ」

力が加わる少年の手に、彼女の頭は死を予感した。
ああ、やっと死ねる……そう願った彼女の願いを打ち砕いたのも彼女本人だった。

不意に腕が動き、少年の手に爪をたて、引き裂いた。

そのことで少年は右手を少女から離し、そして彼女は背中から地面に落下する。

強打した背中からの痛みから息が詰まりそうになるが、彼女の肺は不足な酸素を補おうとする。

「ふん、人間そう死ねないものさ」

そう言った少年が出血する右腕の傷を舐める様子を、少女は茫然といった様子で見ている。

少年が出血したことにはない、死にたいと願っていた自分の願いを自分で破いたことにだ。

「まあいいや、撤収するよ」

そのまま踵を返し、部屋を出ていく少年の足を少女は慌てて掴む。その様子に少年は目を細めると、呆れたように溜め息をつく。

「……まあいいか……テウル、こいつ、クレスタも連れて行って」

「わかりましたが……クレスタというのは……？」

「うん、こいつの名前さ。……この研究所の名称だけだね」

少年は振り返り、少女を見る。

そして、彼女に向かって手を差し伸べる。

「クレスタ、君の命は俺が貰い受ける。俺のために生き、そして俺のために死んでね」

傲慢ともいえる少年の手を少女は恐る恐る握りしめる。

初めて握った手はとても暖かった。

そして少女は、クレスタになった。

？

周辺の魔導師達を全て落として、ザフィーラの援護にこうとするシグナムは何か違和感を感じた。

自分に向けられる殺意。

周囲に目を向けるが、周りには誰もいなかった。

だが、その正体はシグナムを襲う斬撃とともに判明する。

「行かせるものかっ!!」

首筋に向けて、迫る斬撃をしシグナムは超人的な反応半歩下がって回避する。

そのまま襲撃者の方向にレヴァンティンを薙ぐように振るうが、こちらの攻撃も回避された。

距離を取り、襲撃者の顔を見るとそこには先程シグナム自身が倒したクレスタがそこにはいた。

だが、そこにいたクレスタは先程までと様子が違い、真っ赤だった髪の毛は真っ青へと変化し、そして黒い目が金色へと変化していた。

「お前…」

「お前をリド様の元へ行かせるわけにはいかない。そう私はリド様に約束したのだから」

迫るクレスタの動きは先程より二段は上がっており、そして動きが鋭くなっていた。

「はあっっ!!」

「ぐうっ！」

その動きから放たれた一撃は、ヴィータクラスの一撃を誇っており、シグナムはその一撃に思わず後方に吹き飛ばされてしまう。

「リド様のためにお前は私が討つ」

「お前……いいだろう」

身体から滲みだす気迫に、シグナムは最上の敵と認め、レヴァンテインのカートリッジを弾く。

「全力で相手になってやる」

その言葉にクレスタは顔に微かな笑みを浮かべると、両手に持つ双剣を天へとかざす。

「行くぞ、烈火の騎士。この雪原の騎士の一撃を受けてみる」

その瞬間、彼女の双剣に霜が降り、そしてそのまま青白い氷が剣に纏った。

「っ!! 魔力変換資質か」

「何を驚いているんです？私が『凍結』を持つように貴方も持っているじゃないですか」

目の前の能力を見てシグナムは驚くが、クレスタの言葉に確かにそうだと思う、先程までの考えは無粋だと思った。

だからこそ、目の前の青白く光る冷氣を見て思わず眩いてしまう。

「……確かにそうだな。それが貴様の本気か……美しい力だ」

その言葉にクレスタは顔を顰めるが、シグナムは正直に答えたつもりだった。

最近争い、戦っているフェイトの電撃もきれいだったが、目の前のクレスタの氷も美しいと思ってしまった。

だが、この場は戦場。

だからと、シグナムは炎を纏うレヴァンティンを上段に構える。

「さて、そろそろ斬り合おうか」

「望むところです」

シグナムの言葉に、クレスタも双剣をだらりと力を抜いた下段で構える。

先に動いたのはクレスタ、緩急を交えてシグナムに向かって突撃する。

それに対し、シグナムは迎撃のため、迎え撃つように身体を開く。

「行きますよ…電牙」

「来い…紫電」

距離が詰まるにつれ、シグナムは剣の炎をより巨大に、クレスタは双剣の氷を鋭くしていく。

そして、間合いに入った瞬間、

「連閃っ!!」

「一閃っ!!」

共に魔力を纏わせた一撃を相手に振り落とした。

？

「ヴィータちゃん、気がついた？」

気がつくとも目の前にはここにはいない仲間のシャルの顔が見えた。

「シャル……どうして……っ」

「まだ動いたら駄目よ……」

身体を動かした瞬間、激しい痛みに襲われるヴィータにシャルは手で押さえて動かないようにした。

シャルの言葉を聞きながら、ヴィータは現状を把握しようと記憶を遡ろうとするが、テウル 능력によって空から落とされたことまでしか覚えていない。

だが、目の前に広がる視界と背中当たる冷たいアスファルトの感触で大体の事情は分かった。

墜ちた、のだと。

「ヴィータちゃん達の反応が遮断されたから、慌ててこっちに飛ん

できたの。丁度たどり着いたときにはヴィータちゃんが地面に落ちようとしていたのを間一髪で間に合ったところね」

「そっか…はやては？」

「大丈夫、今日はすずかちゃんのところでもた泊まってくるみたいだから」

シャルルの言葉にヴィータはほっとしたのか全身の力を抜きながら目を瞑る。

その様子を見てシャルルは、肩の力を抜いて中断していた回復魔法を再開し始める。

「なあ、シャルル…：わたし以外に誰か落ちていなかったか？管理局の魔導師なんだけど、さ」

ヴィータの言葉にシャルルはここに来た時に見たボロボロの老人の魔導師を思い出す。

奇跡的に虫の息に近かったが生きていたため、シャルルはそのまま放置してきた。

だが、ヴィータの質問の意図がわからないため、シャルルはとりあえず首を振る。

「さあ…：見なかったわ」

「そっか…：そいつが言ってたんだ、お前は孫の仇だってさ」

「……」

ヴィータの言葉にシャルルは黙り込むしか出来なかった。

そんなシャルを気にすることなくヴィータは話を続ける。

「別にそのことがどうという話じゃないんだ……わたし達の手続きがどういふことかはわたし達が一番知っているから」

「……そうね、はやてちゃんに会う前の私達は人に恨まれることばかりしてきたわね」

そのことはヴォルケンリッターのメンバーならすべて覚えていることだった。

主の命とは言え、目の前の命を奪ったのは自分達なのだから。

「ああ、けどさ、はやては関係ないじゃねえか。わたし達の罪はわたし達と以前の闇の書の主の罪じゃねか」

「そうね…はやてちゃんは罪とは関係ない子ね」

ヴィータの言葉にシャルは肯定する。

いくら、新たな闇の書の主といえど、はやて自身は何もしていないのだから。

だが、闇の書を狙う者や恨みを持つもの、管理局の人間には通じない。

「そうだ、だから、わたし達ははやてを守ろうと決めたのに……わたし、は……」

「ヴィータちゃん」

「負けちゃった……はやてを守るために、もう誰にも、負けるわけには、いかなかったのに……」

目から溢れる涙を拭うが、涙は止まることなく、再びヴィータの頬を伝う。

そんなヴィータをシャルは優しく頭を撫でる。

「でも、はやてちゃんも私もヴィータちゃんが無事でよかったと思うわ」

「シャル、でもさ」

「大丈夫、もしヴィータちゃんが墜ちたとしても私がまた間一髪に助けて完璧に治すわ。」

ヴィータちゃんに迫る攻撃はザフィーラが守るし、どんな強大な敵が立ちはだかってでもヴィータちゃんとシグナムの連携なら打ち倒せるわ」

ヴィータの涙を拭いながら、シャルは慈愛に満ちた優しい笑みを浮かべる。

「そして、私たちでは壊せない壁でもヴィータちゃんなら打ち壊せることができるわ。だって、貴方は最高の主、八神はやてを守護する騎士の一人、鉄槌の騎士なんだから」

「…そう、だったな。わたし達はヴォルケンリッターで、わたしは全てを打ち砕くベルカの騎士だったんだから」

ヴィータの目に覇気が戻るのを見て、シャルの笑みが一層深くなる。

身体が回復したヴィータはそのまま立ち上がり、相棒のグラーファイゼンを振るい、身体の調子確かめる。

「よし、シャル、ありがとう」

完璧に近い状態まで回復してくれたシャルに対し、ヴィータは照れくさそうに頭を下げる。

そんなヴィータを見てシャルはクスクスと笑って答える。

「いいえ、それが私の仕事ですから」

シャルの言葉を聞いて、ヴィータは頷くと今度は自分の仕事をすべく、上空を見上げた。

その瞬間、上空に七色の巨光の筋が流れ、凄まじい爆発音が轟いた。

「きゃっ」

「な、なんだっ」

ヴィータは咄嗟にシャルのところまで飛んでいくとシャルを守るようにアイゼンを構える。

そのまま上へと視線を移すと、

「シグ…ナム…?」

遙か上空からボロボロの姿で落下する戦友の姿がそこにはあった。

第二十四話 ヴォルケンリッターVSリド一味 後編

気を失っているのだろうか、シグナムはピクリとも動くことなく、そのまま地面へと落下している。

「シグナム！」

落下するシグナムを地面ギリギリのところで飛び出したヴィータが受け止めた。

「おい、シグナムっ！」

腕の中で額から血を流し、ぐったりとした様子で身動き一つしないシグナムに対し、ヴィータは大声で呼びかけてみるが、返答は返ってこなかった。

その様子を見て、こちらに向かって走り始めたシャルが指示を飛ばす。

「ヴィータちゃん！！シグナムをそこに寝かしてっ！」

「お、おう！」

シャルの指示通り、ヴィータは近くにあったベンチの上に寝かす。その場をシャルに譲り、後ろからシグナムの容体を見るヴィータにシャルは状態を伝えていく。

「……息はある…けどダメージがありすぎるわ。ここでの治療では……ヴィータちゃん、辺りを警戒して。シグナムが何故ここまで

ダメージを受けたか分からない以上、警戒が必要だわ」

その言葉にヴィータはアイゼンを握りしめながら頷く。

ここは戦場であり、シグナムをここまで追い詰めた相手もわからないのだ。

そして現在、ヴィータ達がいるところは、何処かの建物の上である。いつ、相手に見つかってもおかしくない場所なのだ。

だからヴィータはシャルマル達に隠れているように伝えた。

「わかった……シャルマルはとりあえずそこに隠れてシグナムの治療に専念してくれ。わたしは飛んで相手の気を引いてくる」

「ヴィータちゃん……」

自らが囹になると伝えたヴィータを心配するシャルマルに対し、ヴィータは安心させるように顔を微かに緩めるような笑みを浮かべる。

「大丈夫だ。もう墜ちやしねえし、無理もしねえよ」

その言葉にシャルマルは顔を顰めるが、そのまま頷き返した。

「わかったわ、あとザフィーラにもどうにか探して、どうもジャミングされているみたいで連絡が取れないから」

シャルマルの不安はヴィータも同様に心配していることだった。

あのシグナムすら墜とした事実から考えて、ザフィーラは大丈夫という楽観的な考えは持てない。

それに引くにせよ、戦うにせよ、ザフィーラを見つけることは第一条件である。

「ああ、どうにか探してくるから、シャルはシグナムを頼む」

「ええ、ヴィータちゃんも気をつけて」

シャルがシグナムを抱えて、ビルから降りるのを見てヴィータは空を見上げる。

そして次の瞬間、上空へと飛び去った。

空を駆けるように飛ぶヴィータに対し、無数の魔力弾が迫る。

が、高速で迫るそれは歴戦の騎士のヴィータに通じることなく、潜るように回避され、そのままヴィータによって叩き落とされていく。

「ち、雑魚にかまってる暇はねえ！アイゼンっ！」

『シュワルベフリーゲン（Schwalbefliegen）』

取りだした鉄球をアイゼンで叩き、そのまま付近の魔導師達に向けて放った。

高速で放たれた弾は、ヴィータの魔力光と同じ、光の尾を描きながら魔導師達に直撃した。

落ちていく魔導師達を確認するとヴィータは、再びザフィーラの探索を再開する。

「くそっ、どこだザフィーラっ！！」

だが、ザフィーラは中々見つからず、焦りと苛立ちでヴィータが大声で叫ぶと、

そのとき、ヴィータは背筋に走る悪寒を感じながら、感を頼りに下降するように避けた。

そのヴィータが先程までいたところに、七色の光の光線が横切った。その光は、シグナムが墜ちてきたところに流れたものと同じもので、ヴィータは咄嗟に全方位に防御魔法を放ち、騎士服の魔力量を上げる。

「っ！！」

身体に走る衝撃を歯を食いしばりながら耐えると、収まったと同時にシュワルベフリーゲンを飛来方向へと放った。

炸裂音が響き、ヴィータは攻撃してきた何かから距離を取る。直撃というくらいの手応えはあったが、ヴィータの長年の戦士としての感がまだ終わってないと教えた。

「ふむ、かなりいいタイミングで放ったつもりだったんだけどね、流石は古代ベルカの騎士、ヴォルケンリッターというわけか」

「っな！」

爆発によって起きた煙が晴れて、現れたものにヴィータは驚愕を隠せないほど動揺した。

「ふむ……しかしお前がここにいるということはテウルをやつ、本当に敗れたのか……まったく、奴も年には勝てないということか」

そこには黒い鋼人がいた。

黒い鋼鉄が纏い、身体に至る所に宝石のような物体が光輝き、背中

から生え出したパイプからは白い蒸気が出ており、機械仕掛けの両腕には、シグナムの持つレヴァンティンよりも二回りは大きい巨剣と、巨大な砲台が握られていた。

全長六メートルはあるようなそれをヴィータは警戒しながら、アイゼンを握りしめる。

「何だ、それは……？」

「ん？このことかい？確かに物珍しいものかもしれないね。まだ開発段階のものだしね」

スピーカー越しに聞こえる軽い口調とは、逆にヴィータの額からは冷や汗が止まらなかった。

見た目に委縮したのではない。

あの機体から感じる魔力量にである。

あの量は人間が持てる量ではない。

どういう手段で集めたかは分からないが、何処からか引きだしているのだろう。

ヴィータが再びシュワルベフリーゲンを展開し、鋼人に対して正射する。

が、目の前に展開された鋼人のシールドにより完全に遮断された。

「無駄だよ、不意を突いた程度ではこれを墜とすことはできないよ」

「ちっ、なら直接叩いてやるよっ！！アイゼンっ！！」

『Raketenform』

ヴィータの呼びかけにグラーフアイゼンはカートリッジを吐きながらハンマーヘッドの片方が噴射口に、その反対側がスパイク状に変形した。

「ぶち抜けっ！ラケーテンハンマーっ！！」

カートリッジの魔力を燃料として噴射口から魔力を吐き出し、高速移動するヴィータはその推進力により加速させた一撃を鋼人に向けて打ち込んだ。

なのはのプロテクトを破ったほどの一撃は、見事鋼人に直撃したと思われたが、鋼人の正面に展開された多重シールドにより完璧に防がれた。

「並みの魔導師なら防ぐことは不可能そうだが、この魔導アーマーには効かないよ」

「うっせっ！今からスクラップに変えてやるから、黙ってろっ！！」

ヴィータはさらにカートリッジを使い、そこからより重い一撃を放つ。

威力を増した一撃は、鋼人の多重シールドを一枚一枚だが確実に破壊していく。

「へえ、まさかこのシールドをここまで破壊するとはね、凄まじい破壊力だ……流石は鉄槌の騎士と言っておこう……だが」

鋼人は目の前にいるヴィータに対し、左手の巨大な砲台を突きつける。

「防御力はどうかかな？」

体中の埋め込まれている宝石のような部分が光り出し、そして砲口に魔力が集まり始める。

その様子を見たヴィータは、こちらが目の前のシールドを破壊するより、向こうのチャージのほうが早いと判断し、舌うちをつき後退しようとするが、それより先にヴィータの両手両足にバインドが決まった。

「バインドっ！！！」

「この魔導アーマーの最大の利点さ。魔法の同時展開、かなりの高位の魔導師くらいしかできないものをこの魔導アーマーは可能とする。つまり捕縛、防御、攻撃が同時に出来るというわけさ」

目の前の説明を聞くより、ヴィータは必死でバインドを外そうと暴れてみるがバインドは外れなかった。

「さてこの砲撃はクラスA A Aの魔導師クラスの砲撃だけど耐えられるかな」

楽しそうに笑う声が聞こえると同時に左手の巨砲をのチャージが終わり、そして砲撃が放たれた。

七色に光る砲撃が迫ってくるのに対し、ヴィータは思わず目をつぶってしまう。

が、そこに割り込むような雄たけびがヴィータの耳に届いた。

「があっっっ！！！！！」

ヴィータはその声に思わず、閉じていた目を開くとそこには戦友が

いた。

「ザファイラっ!!」

「ぐっ! ヴィータ今のうちにつ!!」

シールドを展開し、七色の砲撃を防ぐザファイラの言葉にヴィータは急いでバインドを外しにかかる。

「よし、外れたっ!!」

「なら、ここから逃げろ」

バインドを何とか外すことに成功したヴィータは、目の前で踏ん張っているザファイラの加勢に向おうとするが、ザファイラの言葉に動きを止める。

「な、何言ってたよザファイラっ!!」

「この場は我らの負けだ。だからお前はシグナムを連れてこの場所から離脱しろ。それまでのこいつの足止めは俺がしておく」

「馬鹿言うなよっ!! ザファイラを置いていけるかよっ!!」

ザファイラの言葉にヴィータは激昂した声で返すが、ザファイラの声を冷静だった。

「そうなれば、我らは共倒れだ」

「ならこいつはここで倒せば」

ヴィータはそうは言ってみるが、内心無理と悟っていた。

ヴィータ自身はともかく、ザフィーラの神髄は防御にある。

が、目の前にいる鋼人に有効的な攻撃手段はザフィーラは持ち合わせていない。

それは当の本人も分かっていたようで、ザフィーラは首を振る。

「俺とお前の二人では無理だ。……だが、シグナムとお前ならこいつを倒すことができるはずだ」

「だけどさ」

「行けっ!! 我らの第一は主のはずだっ!!」

踏ん切りがつかないヴィータはに対しザフィーラは吠えた。

が、それでもザフィーラをヴィータは置いていくという選択は出来なかった。

はやても大切だが、ザフィーラ達ヴォルケンリッターも大切な戦友なのだから。

だが、その迷いは僅かな時間しかないこの場では命取りだった。

「感動的なお話をありがとう。あとは、牢の中かあの世で続けてください」

ザフィーラのシールドは破られ、七色の砲撃はヴィータ達を呑み込んだ。

そのまま爆発により起きた白煙を見ながら鋼人に乗るリド・ロンは鼻を鳴らす。

「友情も愛情も、所詮は力の前に屈するのさ」

誰に言ったかは分からない言葉を残し、リドはその場から立ち去ろうとするが、そこで異変に気付いた。

「…魔力反応が消えていない？それにこの信号は…」

白煙が薄くなり、そこには先程葬ったヴィータとザフィーラの姿があった。

そしてその前にはヴィータ達を守るように立ちふさがった白と金の剣を持つ少年がそこにはいた。

第二十五話 天から舞い降りた剣 前篇

「母さんっ!!」

「駄目よ、許可できないわ」

目の前のモニターで起こる戦闘とは言えない戦いを見て、クロノはついに我慢の限界を超えて、通信をしている母であるリンディに噛みついた。

リド達の攻撃は明らかにヴォルケンリッターを捕えるための攻撃ではなく。明らかに潰しにかかっている。

事実、先程リドの手により戦闘不能に追い込まれたシグナムは、彼女自身が咄嗟にプロテクトを張らなければ、そして結果として射線上にいたため、巻きぞいになり、盾の代わりになってしまったクレストがいなければ間違はなく命を落としていただろう。

それは正義感の強いクロノには許容できない行為だった。

「しかし、彼らは、リド・ロン達は非殺傷設定を解除し、そして明らかに殺意を持って戦っています。いくら相手がヴォルケンリッターと言ってもそれは……」

いくら強力な犯罪者といえど、捕まえることが法の番人である時空管理局のやり方である。

甘い考えかもしれないが、それを破ったら犯罪者となんら変わりがないうえ、誰の法を守ることが無くなる。

大げさかもしれないが、それがクロノの考えであった。

だが、リンディの答えは変わらない。

「でないと勝てない。それが上の判断よ。事実クロノやなのはさん、フェイトさんも彼らと戦い、敗北したわ」

だが、犯罪者を取り逃がすという失態はあってはならない。敗れたクロノはその言葉に勢いを削がれてしまう。

「だけど」

「クロノ、捜査の主導権は現在あちらが優先されているの、わかるわね？」

諭すように止めるリンディにクロノは口を閉じるしかなかった。

組織である以上、上の命は絶対である。

それが安易に破られることができれば、それは組織の崩壊へと繋がる。

組織の人間としてそれはクロノは痛いくらいに理解していた。

歯を食いしばり、せめてもの妥協点を目の前のモニター越しのリンディに伝えた。

「…わかりました。ですが、いつでも出れるように待機させてください。相手が犯罪者といえど、命の危機が迫ってる状況を僕は見逃すことができません」

そうになったら、命令を無視してでも飛び出していく。

そう強い意志を秘めたクロノの目を見て、リンディは思わず溜め息をつく。

「…わかったわ。…状況次第で、私が責任を持って指示を出すわ。」

：でもね、これだけは約束して、無理はしないこと。いいわね？」

自身の息子の頭の固さに喜んだらいいのか、呆れたらいいのかと。リンディは考え、そして最後には上司ではなく、母親として忠告をした。

「はい、わかっています」

その言葉にクロノは強張った顔を少しだけ緩めると、力強くその言葉に頷いた。

「リ、リンディさん、私も出ます」

そう名乗り出たのは、先程まで顔を青くしていたフェイトだった。その言葉にリンディは先程と違い、出来るだけ柔らかい笑みを浮かべながら諭すようにいつてくる。

「フェイトさん、貴方は無理をしなくても」

フェイトは少し前に、現在、姿を表していない少年と戦い、敗北している。

回復したとはいえ、まだ日は浅く精神的なダメージは残っていてもおかしくない。

だが、フェイトはそんなリンディの気遣いをありがたく思いながら、自分の意思をはっきりと伝えた。

「大丈夫です。無理なんてしていません」

「でも……」

「それに私は聞きたいことがあるんです。シグナムに、そしてあの子に」

話の途中で話が終わったレイフオンと、何度か剣を交えたシグナムとフェイトはもう一度、話がしたかった。

そんな、フェイトを後押しするように通信が届く。

『私も出ます。私もヴィータちゃんと話がしたいです』

通信の相手は、無限書庫に行っていたのはだった。

その横には、ユーノの姿があり、どうやら後ろに見える無数の本棚からして無限書庫からの通信のようだ。

なのはもフェイトと同様に、何度もぶつかり合ったヴィータの真意が知りたかった。

喧嘩腰のヴィータだったが、なのはには憎めない人間に見えた。

そんな二人の主張にリンディは額に皺を寄せて考えるくらい困ってしまう。

現状のこの場の危険性はリンディは十分に理解していた。

「なのはさんまで……でもこの場合は明らかに戦地、もしかしたら怪我や最悪、命を落とす可能性があるのよ」

二人の主張を退けるために脅すような喻えをリンディは持ち出してきたが、実際は喻えで済まない現状になっている。

しかし二人の意志はその現状より強かった。

「……確かに覚悟はできていないかもしれませんが、相手を傷つける

覚悟も……今だってシグナムが墜ちたの見たとき、身体が震えました」

『でも、見てるだけなんてできません。あんなにヴィータちゃん達が必死で蒐集をする理由を聞いてないから』

自分の意志を伝える二人に助け舟を出したのは、以外にも先程から黙っていたクロノだった。

「艦長、もし、リドを止める状況になったとき、情けない話、僕一人では荷が重いかもしれません、だから」

普段のクロノなら絶対に言わないであろうことにリンディは、自身
自身の覚悟を決めた。

「ふう……、あまりこういう場になのはさん達を巻きこまないつもりだったんだけど、わかったわ。こちらから待機しているアースラの戦闘メンバーを派遣しますから、彼らとともに行きなさい」

「リンディさん、」

リンディの言葉にフェイトは頭を下げようとするが、

「ただし、怪我なんてしてこないこと。なのはさんもフェイトさんも明日は学校なんですから、クロノ、男の子なんだから名のはさん達をちゃんと守ってあげるのよ」

人差し指を立てて、片目を閉じながら愛嬌のある笑みを浮かべるリンディの言葉に三人は頷く。

「『はい!!』」

「わかってますよ」

三人の返事に先程まで椅子に座って静観していたアルフが立ち上がる。

「やれやれ、なら私も行こうか。あのガキはいないけどあの青犬はいることだしね」

背伸びをしながら、モニターの向こうのザフィーラを睨む。

アルフもフェイト達とは違うが、借りを返さなければいけない奴がいるのだ。

「アルフも来てくれるの?」

アルフの言葉に、フェイトは心配そうに尋ねてくる。

それには、アルフが前にレイフォンに致命傷を与えられて、当分の戦闘は不可能と言われていたからである。

だが、そんな心配を余所に、アルフは胸元を力強く叩くとフェイトに対して元気になったとアピールし始める。

「当たり前だろ? フェイトが行く所なら。たとえば火の中、水の中、何処までだってついていくさ」

そんなアルフの姿を見て、フェイトは力強く思い、自身の微かな迷いを断ち切った。

話が決まり、デバイスを用意し始めたクロノ達の元に、先程からモ

ニターで様子を見ていたエイミィの報告が聞こえた。

「っ！！新手を確認！！これは例の少年だよ！！」

モニターを拡大し、レイフォンの姿を拡大されると、その姿を見てクロノは眉を顰める。

「っ来たか！！」

クロノ達の視線の先には、白と金の剣を構え、ヴィータ達を守るように立ちふさがるレイフォンの姿があった。

？？？

空を飛べないレイフォンは、そのままヴィータ達とともに近くの高層ビルの屋上に着地する。

そしてヴィータ達に向かって手を上げる。

「久しぶり、ヴィータに……えっと……どちらさま？」

ヴィータに声を掛け、そしてザフィーラに声をかけようとしたレイフォンの顔が一瞬固まった。

明らかに怪しむような顔でザフィーラを見上げるレイフォンに、ザフィーラは目を細めていつもより無愛想な声を出す。

「ザフィーラだ。まさか今のは本気でないだろうな？」

ザフィーラの言葉にレイフォンは息を呑むと、笑みを浮かべる。

「え、うん、も、勿論わざとだよ」

「どもっているぞ」

明らかに忘れていたレイフォンに、ザフィーラは思わず溜め息をついてしまう。

よくよく考えてみると、レイフォンがザフィーラの人間形態を見るのは、最初とデパートに行った時、そしてあの助けに來た夜だけである。

そのことを思い出し、明らかに犬扱いになっていたことに気付いたザフィーラは心に内心、大きな傷を負った。

そんなザフィーラを見て、レイフォンはバツに悪そうな顔をしていると、後頭部に強い衝撃が襲った。

「って、レイフォン、今まで何処に行ってやがった?! こっちはお前を探してたんだぞ!!」

振り返ると、顔を真っ赤に染めて怒り狂うヴィータの姿が見えた。

「ごめん、ヴィータ。僕も少し考えたいことがあったんだ。心配してくれてありがとう」

そんな彼女の頭をレイフォンは撫でてみるが、すぐにヴィータに距離を取られる。

「っ！頭撫でるな、あと心配もしてねえ」

怒りか羞恥のせいか顔がリングのように赤いヴィータに、トラウマを克服したザフィーラが突っ込んだ。

「いや、ヴィータが一番心配していたぞ」

「黙ってるっこの駄犬っ！！」

「まあまあ、っ！！」

何時も八神家で繰り広げられている会話を遮ったのは一筋の魔力弾だった。

それは、レイフォンの手により叩き落とされ、レイフォン達の視線が飛来方向に視線が移る。

そこにいたのはリドが乗る鋼人が見えた。

「中々面白い漫才を見せていただいてありがとう。しかし、時と場を考えなよ」

自分を見無視されたせいか不愉快そうな様子のリドに対し、先程までの笑みを消して無表情になるレイフォンが尋ねた。

「…貴方は？」

「うん？そうだね、君には自己紹介がまだだったね。僕の名前はリド・ロン。この部隊を指揮する者だ。まあ、部下の半数はそこにいる彼らに倒されてしまったがね」

「そう、ところでシグナムは？さっきから見かけていないんだけど？」

目の前のリドから視線をヴィータに移し、先程から気になっていたシグナムの事を聞く。

此処が前線であるから後方支援のシャマルがいないのは納得できたが、シグナムがいないのはおかしかった。

他の場所で戦っているのかと考えてみたが、此処以外で戦っている感じはしなかった。

レイフォンの質問にヴィータは目の前のリドが乗る鋼人を睨みつける。

「…シグナムは多分そいつに墜とされた……命には別条はないけど…」

ヴィータの言葉に、目の前のリドは顔が見えないため分からないが、明らかに笑っているであろう口調で話しかけてくる。

「へえ、烈火の将は死ななかったんだね……クレスタのおかげというわけかな？全く使えない奴だ」

おかしように笑うリドに対しレイフォンの表情が無表情に怒気が宿る。

「そう、ならもういい。これ以上喋らなくていい。不愉快だ」

身体中に剄を流すレイフォンに対峙していたリドも何かを感じたのか、レイフォンに向けて右手に搭載してある巨剣の刃先を向ける。

「そう、なら今度は確実に殺してあげるよっ!!」

リドの乗る鋼人の肩の部分から魔力弾が上空に向かって上がり、そしてそのまま上空で弾けた。

すると、レイフォンがいるビルの上に次々と何処からか魔導師達が集まってきた。

どうやら照明弾の代わりのようで、レイフォン達の周囲を取り囲んだ。

「ちい、こいつら、どっから湧いてきやがった」

その様子にヴィータはアイゼンを構え、警戒し始めた。

「さっきも言ったけど半数は倒されたけど、まだ無傷のがいるんだよ」

現れた魔導師の数は約三十。

普段のヴィータ達なら問題はない数だが、ヴィータは一度墜ちるほどのダメージを受けてるし、アイゼンに搭載しているカートリッジの数も残り少ない。

ザフィーラも同様に、先程の砲撃を防いでいたせいで疲労が溜まっていた。

これ以上の戦闘は無理だと判断したレイフォンは、前へと一歩踏み出し、ヴィータ達を守るように立つ。

「：ヴィータ達はとりあえず下がって、あとは僕がやるから」

怯むことなくそう言ったレイフォンに対して、リドの不快感が増し、その結果リドはレイフォンに標的を絞る。

「なるほど、かつこいいこと言ってるねえ、ならお望み通り君から始末してあげるよ」

リドの鋼人の周りに数十の誘導弾が、合図を待つように待機する。だが、レイフォンの顔色は変わることはなく、淡々とヴィータやザフィーラに指示を送っていた。

「あと、できるだけ僕の近くにいて、あまり離れると巻きこまれるかもしれないから」

レイフォンの言葉に、ヴィータ達は長年の感から従うべきと考え、レイフォンの傍に近づく。

「レストレーション02」

レイフォンが唱えた言葉により、剣の刃が無くなり、柄のみとなる。そんなレイフォンの行動に、リドは舐められたと判断し、レイフォンを完全に潰すために冷静に指示を送る。

「武器無しでもこの攻撃を防げると？、ならできるなら耐えてみなよ？そうでなければ楽しみが無くなってしまうからね」

周囲上空から青や黄、赤や緑と様々な魔力光の魔法弾がレイフォン達に向かって降り注いだ。

その様子をレイフォンは無手のまま眺めるだけだった。

そして、レイフォン達の周囲二メートル内に入って瞬間、それらは全て爆ぜた。

「何？なら…」

その現象に思わず、目を細めるリドは再び周囲の部下の魔導師達に攻撃命令を出そうとした瞬間、

「っあ！」

両隣りにいた魔導師達が胸から血を噴き出し、そのまま力尽きたように墜ちていった。

それは両脇にいた魔導師だけに留まらず、周囲にいた魔導師達は次々に胸元から血を噴き出し、地面へと落下していく。

その光景に、本能的に逃げようとした魔導師も背中から血を流して他の魔導師同様に同じ運命を辿った。

「この馬鹿が、怯むな、恐れるな！！それが奴らの狙いだっ！！」

リド自身全く理解できない光景から数秒で統率は失われ、リドの命令を聞く余裕のある魔導師はいなかった。

そしてその混乱から一分も経たないうちに、その場にはレイフォンとヴィータ、ザフィーラ、そしてリドの四人しか残らなかった。

その光景に、今まで余裕と冷静を保っていたリドの顔に驚愕、焦り、そして恐怖が張り付いた。

「お、お前は…何者だ？」

震える声を隠す余裕すらないリドの言葉にレイフォンは、元通りの天剣に戻して答えた。

「答える必要はない」

内力系活剋の変化、旋剋。

そのままリドに詰め寄り、天剣を振り下ろした。

第二十六話 天から舞い降りた剣 後編

リド・ロン。

第一世界『クラナガン』で大企業と名をはせるロン・グラム社を一代で築き上げた現ロン家の当主の三男として生を受けた。

そんな彼には、二人の兄がいた。

絶対的なリーダーシップと学生時代から頭角を現しつつあった頭脳をもつ長男は跡取りとして。

努力家で魔導師として天性の才能を秘めた次男は、管理局のエース候補として。

そんな二人に負けないようにリド自身死ぬほど努力を重ねてきたつもりだった。

が、所詮秀才で留まった学生時代に、平均クラスの魔力量では管理局のエースや跡取りとして選ばれることはなかった。

リドの取り巻き達は、皆兄達に靡き、最終的にはテウルという教育係だけになった。

それでもリドは努力をすればいつかはと、思っていたある日、事件が起こった。

管理局の魔導師をしていた兄が、捜査中に逃亡する犯人を追ひ、返り討ちにあって死亡するという事件が起きた。

後で報告に來た管理局の人間の話によると、兄は部下の人間を庇って死んだらしい。

そんな兄の死を父は懦弱の一言で、涙一つ見せずに次のプロジェクトの会議に出かけて行った。

その一言は、幼いリドにとって衝撃的なものだった。

家族思いで理想の魔導師として見ていた兄を、その一言で斬り捨てた父にリドは不信感を抱いてしまう。

その不信感がはっきりとしたのは兄が死んで、一年後に起きた出来事である。

突如、一番上の兄が失踪したのだった。

その出来事に周りの人間が心配する中、父だけは何一つ表情を変えないことはなかった。

その後、兄が湖の中で亡きものとして発見された。

近くには、遺書のようなものがあり、そこには自らがした不正の告白と、そして謝罪の言葉が書き記されたいた。

当時、ロン・グラム社はとある疑惑が持ち出されており、そのことで管理局の人間の捜査のメスが入ろうとしていた。

だが、兄の死に対し、父は記者会見で涙ながらに謝罪をおこなった。

そのことで、事件の黒幕は、後の捜査で兄の部屋から見つけられた書類により、兄となってしまった。

だが、事件はそれだけで終わり、自殺した兄も、そして涙の記者会見を行った父も、世間には同情的な印象を持つことになった。

それらが全て、父に仕組まれていたとしたも、だ。

リドがそのことに気付いたのは、兄が死んで兄の遺品を整理していたときにだ。

兄が勉強を覚えてくれたPCのファイルの中に、見慣れない言葉の

羅列が書かれていた。

その言葉が、幼い時、兄達と遊びで作った暗号文で、気付いたリドは嫌な予感を感じながらもその言葉を変換してみた。

そして、そこには真実が書かれていた。

元々、父の強引なやり方を好んでいなかった一番上の兄だが、もう一人の兄が死んだときの父の反応に、遂についていけないと決めたらしい。

そして、父から命令された不正や父の金回りを調べつくし、そして普通のやり方なら父の手により握りつぶされると判断した兄は、それを疑惑として世間に広めたのだった。

そして兄は、自らも刑務所に入ることになるだろうから、自らの資産をリドに託し、無関係のお前を身きこむ形となりすまないという謝罪の言葉で締めくくられていた。

ファイルの日付は兄が自殺したとされる前日の日になっていた。

それを知ったリドの中で何かが壊れた気がした。

? ? ?

「ちい、ハエがつ!! 墜ちなよっ!」

後方に飛びながら、リドは迫るレイフォンに対して誘導弾を放ちつづける。

だが、それはレイフォンには意味はなく、全て叩き落とされていく。その光景にリドはバインドと誘導弾を放つが、それらはレイフォンに当たることはなかった。

その光景に、リドは理不尽さを覚えつつも左手の巨砲をレイフォンに向ける。

そして、搭載するカートリッジを弾きながら、砲撃を放った。

外力系衝剄の変化、轟剣。

それすらも、レイフォンの剄を練り上げて作られた巨剣により真つ二つにされた。

砲撃を斬るという荒技を初めて見たリドは息を呑むとともに、恐怖から後ろへと後ずさりしてしまう。

「化け物か…お前は」

呑まれるリドと対峙するレイフォンは落下する自身の身体を鋼系により足場を作り、再びそこから加速するようにリドに向けて飛んだ。

レイフォンが天剣を振るうと、無数の鋼系がリドに襲いかかる。

「何だこの力は！？データにはないぞ、こんな攻撃」

レイフォンの鋼系の師であるリテンスなら、リドが乗る鋼人ごと切り裂くことは可能だが、レイフォンの鋼系の腕では展開するシールドに阻まれ、微かな傷と後方に吹き飛ばされるくらいしかできなかった。

「レストレーション01」

鋼糸から剣へと天剣を戻すと、再び天剣に膨大な剄を流す。

内力系活剄の変化、水鏡渡り。

瞬間移動したような目に見えない速度で詰めたレイフオンはそのま
まりドに剣を振り下ろす。

その一撃は、鋼人の防衛システムのオート制御により差し出された
剣により受け止められる。

その反応はレイフオン自身も予想外で目を丸くさせるが、それだけ
であった。

外力系衝剄の変化、蝕壊。

武器破壊で用いられるこの技は、鋼人の持つ巨剣も例外ではなく、
脆い金属のように、刀身の半分くらいのところから、簡単にへし折
った。

驚く暇を与えずにレイフオンはすぐにリドへと刃を向ける。

活剄衝剄金剛変化、竜旋剄。

活剄により強化された腕に握られた膨大な剄が溢れだし、自身も回
転しながら衝剄を放つことで、巨大な竜巻を発生させた。

巨大な衝剄の竜巻に巻き込まれた鋼人は全身を削られながら後方へ
と吹き飛ばされた。

が、流石は魔導アーマーというべきか、それでも沈むことなく飛行し続けている。

「何たる理不尽、所詮、力なきものは吞まれる運命というわけかい、だが…」

リドは屋上に着地したレイフォンを睨みつけながら最後の賭けに出た。

鋼人に残る残りの数十のカートリッジを全て打ち込んだ。

溢れるような膨大な魔力は全て巨砲へと注ぎこむ。

「裏技みたいなものでね、この砲身の耐久すら越える砲撃魔法でね、いくら君でも切り裂くのは不可能だよ」

凄まじい魔力が刀身に集まると同時に、数百の誘導弾もリドの付近に集まった。

流石にその魔力量にレイフォンも目を細める。

そして回避を選んだレイフォンは、身体を沈めた瞬間、

「っ！！」

「バイント。君がそこに来るように誘導し仕掛けておいたのさ…流石の君でもその数のバイントは数秒では破壊できないだろう」

ガチガチに固められたバインドでレイフォンもがいてみるが、リドの目論見通り動くことすらできなかった。

そうしているうちにリドのチャージが終えた。

「ここまで追い詰められたのは初めてだよ。さよならだ、名も知らぬ騎士よ」

フルバースト。

今までの砲撃の五倍は大きい砲撃と、その周りを舞う数百の誘導弾はレイフォンに向かい、そして呑み込んだ。

地割れが起きたような揺れと、星の爆発のような凄まじい光と音に辺りは包まれた。

ビルをなぎ倒し、大地を抉り、余波でその周辺の車を吹き飛ばし、建物のガラスを全て砕いた。

「勝ったのか？」

その様子をぼんやりと見ていたリドは、ぽつりと呟いた。

辺りを見渡し、砲撃により起きた惨事を見て笑い込み上げてきた。

「ククク…クククハハハ…ハハハハハハッ！！アハハハハハハハハハッ！！勝った僕は勝ったぞっ！！」

勝利に湧き踊る心を抑えることが出来ずにリドは狂ったように笑い始めた。

強敵への勝利と、この惨状を起こした気持ちよさがリドの中で暴れるような歓喜へと変わった。

そして笑みを浮かべたリドは下をもう一度見下ろすとそこには胸か

ら剣が生えていた光景が見えた。

「えっ？」

剣を伝う赤い雫は、リド自身の血あり、そう認識した瞬間胸元から激しい痛みと喉元から大量の血が口から吐き出されていた。

「馬鹿な、どうしてお前が、此処に」

消し飛んだはずじゃ、と続く言葉に、背後で剣を握るレイフォンは何も答えなかった。

その事実に出血により思考が纏まらないリドは、力が抜けて行きながらある結論が出た。

幻影魔法、と。

その答えは、半分当たっていた。

実際、リドの砲撃が撃ち抜いたのは、レイフォンの偽物だったのだから。

しかし、レイフォンは魔法を一切使えない身なのだから、魔導師の中でも珍しい魔法なんて使えるわけがない。

だか、レイフォンはそれに似た剋技を知っていた。

レイフォンの故郷のグレンダンにはルッケンスという有名な武門がある。

同僚の天剣使いのサヴァリスもこの一族のものであり、過去にも天剣を輩出した一族だ。

そんなルッケンスに伝わる剽技の一つで千人衝というルッケンスの奥義ともいえる技がある。

それをレイフオンは戦場でサヴァリスが使っていたのを見て、レイフオンも特技ともいえる模倣で、作った剽技。

千斬閃。

厳密には数十に別れたレイフオンの分身が一斉に斬りかかるというのが正しいのだが、レイフオンは一体だけ分身を生み出したのだった。

つまりはリドの策はレイフオンには初めから読まれていたことになる。

設置されたバインドの位置も、剽や魔力の流れを見ることが出来るレイフオンなら引かかるわけがないのだ。

「ここから、挽回する策はもうないね……だから最後に一つ……」

リド本体が潰されたせいで動きが止まった鋼人は徐々に地面へと落下し始める。

レイフオンは剣を抜くと、その鋼人を踏み台にして倒れていなかったビル窓枠に飛び移る。

そして落下し始めたリドは最後にレイフオンに向けて呟いた。

「いつか、君に不幸が訪れることを僕は祈ってるよ」

呪いのような言葉を残し、リドが乗る鋼人は落下していった。

そんなリドから視線を逸らし、レイフオンはぽつりと呟いた。

「それでも僕は手を汚し続けるよ」

そう呟いた言葉はレイフォンの耳以外には響くことはなかった。

第二十七話 加速する戦場

戦闘を終えたレイフォンは、屋上に飛び移っていると、前方からヴィータ達らしき人間がこちらに向かってきた。

レイフォンは二人に向かって手を振ってみると、あちらもこちらに気付いたのか先程より速度を上げてこちらにやってくる。

しかも、何故か先頭のヴィータが腕をぐるぐると回していながら飛んでいたので、レイフォンも何となく同じように腕を回してみた。

そして、あと数メートル先にまでヴィータが飛んできたので、笑みを浮かべるレイフォンに対し、ヴィータも珍しく笑みを浮かべー

「殺す気かつ!!」

「ぐはっ」

レイフォンの顔面を拳で殴った。

ゴロゴロと屋上の端から端まで転げるレイフォンに対し、ヴィータはまだ怒りが収まっていないのか、転げるレイフォンを追いかけると、そのまま服の襟を掴み、身体をゆすり始める。

「やっぱり、お前馬鹿だろっ!! あんな恐ろしいことするなら先に言えよっ、この馬鹿っ!!」

「ちょ、ヴィータ、首が決まってる……ザファイラっ、たす、け」

ミシミシ言い始める自身の首の音を聞いて、レイフォンは助けにくれと、近くにいたザフィーラに助けを求めたが、ザフィーラに軽く無視をされた。

「って、聞いてんのか、コラ？」

ヴィータの怒りは収まることはなく、レイフォンを揺する速度が倍速になる。

揺すられるレイフォンは、少し気分が悪くなりながらも、弱弱しく反論をし始める。

「聞ってるし、僕は事前に言ったよ、近くに来た方がいいって……」

「あんなんでわかるか！ノーモーションに近い上に広範囲って、一歩間違えりゃこっちが巻き込まれるじゃねえか！！」

だが、そんな言葉でヴィータの怒りが収まることはなかった。

実際、レイフォンも鋼糸を使ったのは少々ヴィータ達に危ないと思っていたので、ここはもう少し揺すられようと、流れに身を任せた。

「おい、ヴィータ、それまでにしておけ。これ以上揺すってレイフォンの頭がおかしくなったら、こっちが敵わん」

「……仕方ねえな」

ザフィーラの棘のある仲裁により、ヴィータからの刑から逃れたレイフォンは、ヴィータ達に慌てて頭を下げた。

「ご、ごめん、わかった、今度からはちゃんと言うよ」

「おう」

「うむ」

その言葉に、ザフィーラとヴィータは何とか機嫌を戻したようで、レイフォンは気を取り直して周囲を見渡しながらか、話掛けてきた。

「でも、こんなにやっても大丈夫かな」

レイフォンの視線の先には崩落したビルやマンション、跡形もなく吹き飛んだ家などがあつた。

「うん？ だいじょうぶだろ、結界内だしな」

「そうでなければ、管理局の者も此処まで暴れはしないだろう」

ザフィーラ達の言葉に、レイフォンは少し安心しながら周囲を見渡した。

確かに人の気配はなく、何処か空に色も違う感じだ、とレイフォンは考えていると視線の先にシャルとそのシャルの肩を借りたシグナムが現れた。

「レイ君っ!!」

「お、シャル達も無事のようなだな」

「うむ、レイフォンの攻撃に巻き込まれなくてよかったな」

レイフォンに呼び掛けるシャルの姿を見て、レイフォンを茶化す

ようにヴィータ達を口を開いた。
そんな二人を完全に無視することにしたレイフォンはシャル達の方に歩いていく。

「よかった、無事だったですね」

「ええ、私は何ともないけど、シグナムは少し、ね」

その言葉にレイフォンはシグナムの方を見ると、シグナムもレイフォンの方に視線を移したようで、互いに目が合い、何故か気まずい雰囲気になる。

レイフォンがいなくなったとき、最後に話したのがシグナムであり、そして最後にシグナムから批判されたのだった。

あの時後々後悔したのだが、こう対面すると何を話しているのか、レイフォンはわからなくなる。

逆にシグナムももう少しうまくいふべきだったと考えていた。

あの時、とどめを刺そうとしたレイフォンを批判したが、レイフォンは主であるはやてのために行動したのだ。

なら、シグナム自身がレイフォンに諭すように教えておけばよかったのではないのかと後悔したし、何よりレイフォン自身に不信感を抱いてもいた。

だが、こうして会ってみるとシグナムも何を言ったらいいのかわからなくなる。

だから、二人はとりあえず、

「ごめんなさい」

「すまなかった」

謝ってみた。

互いに謝る言葉を聞き、顔を上げてみると、再び目があつた。

そしてどちらからかともなく笑い声が聞こえた。

「シグナムさん、すみません、できるだけ傷つけないようにしたかったけど」

レイフオンは自身が起こした被害についてシグナムに謝った。

手加減をしたつもりだが、レイフオンの天剣には非殺傷設定なんて便利なものはないのだから。

手応えからして殺してはいないはずだが、間違いなく魔導師としての人生やハンディを背負うことになるだろう。

そんなレイフオンに対し、今度はシグナムが謝った。

「いや、お前が斬らなかったのは元々私が不甲斐なかったせいだ。主を任されたのにこの失態、本当にすまなかった」

もし、レイフオンが助けに来なかったらシグナム達は敗れていただろう。

そうだったら、はやての元に手が回るかもしれないし、何よりはやてを守るものがいなくなるのだ。

それは最悪の結果である。

「まあ、二人ともそれぐらいにしておけよ。ここで話すより、は

やく我が家に戻ろうぜ」

そんな二人を見かねて、ヴィータが助け舟を出すように帰宅を促す。
その言葉に、シグナムは何とも言えない顔する。

「しかしだな…」

「向こうもこっちを捕まえに来たんじゃなくて殺しに来た奴の方が
多いだろ？嫌な言い方かもしれないねえが、自業自得っていうやつだろ
？」

珍しく煮え切らない態度のシグナムにヴィータが口を開く。
それに続いて、ザフィーラ、シャマルも後に続く。

「レイフォンやシグナムの考えはベストで守るべきことだが、最悪
の結果を迎えるよりはいいだろう。何より、我々は正義の味方では
ない」

「闇の書の主の味方、だものね」

「……わかった。これを教訓とし、次に生かすぞ。これ以上血で染
めぬために」

締めるように言ったシグナムの言葉にレイフォン達も神妙な顔持ち
で頷く。

そして、はやてが待つ家に帰ろうとした時、

「あああああっ！！」

「っ散れ！！」

上空から突貫する一筋の青い閃光がレイフォン達に迫る。

その攻撃に、レイフォン達は屋上の四方に散らばるが、閃光はレイフォンへと狙いを定めて襲いかかってくる。

レイフォンは、冷静に天剣を復元させると、その閃光に向かって振り落とした。

「く、私を舐めるなっ!!」

閃光の正体であったクレスタは双剣でレイフォンに一撃を受け止め、そのままレイフォンを押しきろうとする。

「ふっ!!」

「がはっ!!」

隙だらけの腹にレイフォンの蹴りが突き刺さると、クレスタは上空へと吹き飛ばされる。

しかし、クレスタの執念は凄まじいもので、肋骨を折られても再びレイフォンに襲いかかる。

だが、華麗だったクレスタの連撃は見る影もなく、そしてそんな一撃がレイフォンに当たるはずがなかった。

「無駄だよ、そのボロボロの身体で僕に当てれるはずがない」

「黙れっ!! 貴様は必ず私が討つ!!」

レイフォンの忠告は、目を血走らせたクレスタに聞こえるはずがな

く殺意と怒りをまきちらしながら迫る。

「退け！お前はもうボロボロのはずだ。死ぬつもりかっ！！？」

クレスタと戦ったこともあり、その実力を認めたシグナムが止めに入る。

「烈火の騎士よ！！お前は主が討たれても同じことが言えるのかっ！！！」

が、悲しみの籠った叫びに誰も止めることができなくなった。

もし、はやてがそんな目に会ったらシグナム達は怒り狂うのは目に見えていた。

「私を止めたかったら、殺してみろ！！！」

クレスタの覚悟の言葉に、対峙したレイフォンの目が戦闘時の目に切り替わる。

そして、身体に剄を流し、天剣を握りしめる。

すれ違いざまに天剣を振るった。

「はっ！！！」

「ぐっ…、その程度で止まるかっ！！！」

振るわれた一撃はクレスタの右腕を斬り飛ばした。

飛ばされた右腕からは、血と機械の破片が飛び散る。

が、それでもクレスタは止まることはなく、残った左手に持つ剣でレイフォンを突き殺そうと強烈な刺突を放った。

が、それは無言に振るわれたレイフォンの天剣により、剣のデバイスは砕かれた。

そのまま連続で放たれたレイフォンの回し蹴りを、クレスタは腹部に喰らい、屋上の端のフェンスまで吹き飛ばされた。

「負けて…たまるか…リド…様の無念を…晴らすまで…」

ダメージにより立つことが出来ないクレスタに、レイフォンは天剣を戻し、シグナム達の方へ歩き出す。

「待て…と言って…いるだろう!!」

クレスタは左手で氷の結晶を作り出し、その鋭利な氷をレイフォンに向かって投擲する。

その刃をレイフォンは手をかざすとそのまま衝剄は放ち、吹き飛ばした。

吹き飛ばされた氷の刃をクレスタへと向かい、そして

「時空管理局…フェイト・テストロッサです」

閃光の速度で現れたフェイトの手により弾かれた。

そのフェイトに目を取られていると、上から魔力反応がした。

「デイベイン……バスターーツ!!」

ピンク色の巨大な砲撃魔法が、レイフォンに向かって迫るが、間に

入ったザフィーラのシールドに防がれる。

「高町なのは！！」

「久しぶりだね、ヴィータちゃん」

上空を見上げるヴィータの視線の先には白いバリアジャケットを纏ったのはがそこにいた。

「守護騎士ヴォルケンリッター、そして剣を持つ少年、ここで捕えさせてもらう」

新調したデバイスを持った黒いバリアジャケットを持ったクロノ・ハラウンが背に無数の剣のような誘導弾を従えていた。

こうして第二ラウンドが始まるのだった。

第二十八話 執念

「あの少年の相手は僕がする」

クロノが出る前にこう言いだした。

その宣言に回りの皆が固まってしまう。

「いや、無理じゃない？」

一番早く硬直から溶けたロッテが現実的な意見を言った。

その言葉にクロノは少しだけムキになったような口調で言い返す。

「無理じゃない。それにこれは僕がやるしかない」

「でもさ、一人では絶対無理だよ。アルフとフェイトちゃんのコン
ビでも簡単にやられたんだよ」

クロノを心配するようにいうエイミイの言葉に、クロノはわかっている、と答える。

「だが、他に戦う人間がいない。フェイトにはシグナムの、なのにはヴィータの、そしてアルフには青い守護獣の相手をしてもらわなければならない。武装隊の者ではリド達の二の舞になる可能性がある」

「でも、それはクロノ君が……なら私が」

クロノの心配をして、自分がと名乗り出るなのはにクロノは首を横に振る。

「なのは、君では接近されたら、一瞬で潰される。フェイトもアルフも同じだ。君達の場合、一度敗れている。消去法でも経験則でも僕が適任だ。接近戦の心得もあるしね」

だから心配いらない、とクロノはなのは達を心配させまいと笑みを浮かべた。

その言葉にフェイトもなのはも何も言えなくなる。

「でも…」

「それしかない」

決定しかけたその時、それに待ったを掛けたものがいた。

「いや、まだ他にいるよ、クロノ以上の適任者」

何故か自信満々に言ったロッテだった。

そんなロッテを見てクロノは眉を顰める。

「は？ ロッテ、何処にいるんだ？ まさかユーノとかいうんじゃないんだろうな。あいつは病み上がりだぞ」

クロノはそう言われて一番に思いついたユーノという選択肢を真っ先に否定する。

ユーノは重傷の傷を負い、つい先日から動けることになったばかりである。

そんな人間を戦場に連れていけるわけない。

だが、その答えはロッテもあっさりと否定した。

「そんなわけないでしょ、それに彼は戦闘向きじゃないでしょ」

「じゃあ、誰なんだ？そろそろ出る時間だから早く答えてくれ」

勿体ぶった態度を取るロッテに対し、クロノは段々と苛ついていく。そんなクロノを見て、当のロッテは笑みを浮かべながら人差し指でロッテ自身を指差した。

「ん」

「ん？」

その意味に気付かないクロノにますます笑みを浮かべるロッテは楽しげに口を開いた。

「わ・た・しだよ」

「はあ?!」

ロッテの自身の名乗りにクロノは困惑の声を上げる。

間抜けな声を出すクロノを見て、ロッテはやれやれと呆れたオーバーリアクションを取る。

「はあ？じゃないよ。私がやるっていつてんの。私はクロノの戦闘に関してのお師匠さまだよ。接近戦ならこのメンバーで一番だと思うし、それに伊達に長く使い魔やってないしね」

ロッテの説明を聞いて、クロノは確かにと納得してしまう。
使い魔だが、此処にいる人間の誰よりも圧倒的に長いキャリアを

持ち、接近戦ではクロノ自身も圧倒するロッテなら、一番適任だろう。

しかし、だ。

「いや、確かにそうだが……いいのか？ 危険なんだぞ？」

クロノは思わずロッテの心配をしてしまう。

ロッテの実力は管理局の魔導師の中では、だ。

接近戦特化な古代ベルカの騎士であるシグナム達すら越えるかもしれない剣の少年、レイフォンの相手である。

クロノの心配するのも無理はない。

その言葉を聞いたロッテはにやりと笑ってしまう。

「弟子の癖に生意気言うねっ！！」

嬉しそうにロッテはクロノに抱きついた。

「うわ、やめろっ！！ふざけている場合じゃないんだぞ」

ロッテの胸元に顔を沈めたクロノは、もがきながらロッテの拘束から逃れた。

ロッテは先程とは違い、真剣味を帯びた顔つきで頷いた。

「わかってるよ」

それでも心配そうな顔つきのクロノの肩をロッテは叩き、

「まあ、そんなに心配なら私と久々に組んでやってみるかい？ 私が前衛で、クロ助が後衛」

こんな提案を切り出した。

?
?
?
?

「くっ!!」

「どうした、その程度かいっ!？」

「うるさいっ」

ロッテの多彩な足技をレイフォンは苛立ちながら天剣で受け止める。そして、その返しでレイフォンはロッテに向けて天剣を振るうが、ロッテの両手に装備されたガントレットにより防がれる。

が、レイフォンの一撃は重く、防ぎきったロッテも後方へと下がる。

「終わるだっ」

その隙にレイフォンは天剣を叩きこもうとするが、寸前で上空から降り注いだ誘導弾に再び足を取られる。

「サンキュー、クロ助」

「ロッテ、気を抜くな」

レイフォン達が戦っている屋上の上空から周囲におよそ二十個のフ
ォトンスフィアを待機させたクロノがいた。

レイフォンは、今度はそのクロノを先に倒そうと思い足に剄を流す
が、その飛翔を邪魔したのは再び接近戦を挑んできたロッテである。

「あんたの相手は私さ」

迫る蹴り技の連撃に、レイフォンは苛立ったように防ぎきる。

そして拳と剣で鏢迫り合いのような形になると、レイフォンはロッ
テに小声で話掛ける。

「ちっ！！何で貴方が」

「ん、こんな美しい女性のお誘い^{レディー}を断るつもりかい？」

冗談を言いながらニヤニヤと笑みを浮かべるロッテに、レイフォン
は目に怒りを込めて威嚇する。

「ふざけるな、何で貴方が僕らの邪魔をする」

レイフォンはロッテが――はやてを救うための秘密の同士が何故邪
魔をするのか、理解できなかった。

それがロッテを押しきれない一つの理由である。

ここでロッテを斬ってしまい、ロッテの主でありはやてを助けてく
れるグレアムの非難をレイフォンは避けたかった。

はやてを助けられないなんて言われたら、最悪である。

その言葉にロッテも小声で答える。

「邪魔なんてする気はなかったさ、私達の計画にはまず八神はやてを完全な闇の書の主にしなければならぬからね」

事実、ロツテは主であるグレアムの悲願を果たすため仮面を被ることとはなく、そしてクロノ達側のほうで戦う気はなかった。あのリド達が墜ちる映像を見るまでは。

「だったら」

「やりすぎなんだよ、お前」

いくら計画のためとはいえ、愛弟子であるクロノにリドのような結末にしたくはなかった。

そして、ロツテも、そしてアリアもレイフォンの作戦参加には元々反対であった。

あり方や強さが異常なレイフォンは、作戦を根本的から破壊する恐れがあるからだ。

「っ！！、だけど、シグナム達が捕まったら」

「それは心配しなくても手を打ってあるさ。だからお前には少しの間だけ私の相手をしてもらおうか」

それでも、グレアムの指示にはロツテは忠実に従うつもりであった。だが、レイフォンはそれでも心配なのか、ロツテの攻撃を流しながら空で交戦するシグナムたちの様子を見る。

ザフィーラはアルフと複数の魔導師と戦い、ヴィータはなのはと、そしてシグナムはシャルを守りながらフェイトと対峙している。

ザフィーラとヴィータはなんとか凌いでいるみたいだが、シグナムはシャマルを守ることを含め自身の怪我もあるから押されていた。

それを見て、ロツテの手というものをを待っていられるレイフォンではなかった。

「せい!!」

「くっ!!」

余所見をするレイフォンにロツテは渾身のストレートパンチを放ってくる。

レイフォンはそれ上手く受けてめるが、思ったより重い拳に後方に下がらされる。

その瞬間、

「喰らえっ」

クロノの命を受け、レイフォンを囲むように飛来する魔力の剣型の誘導弾を見て、レイフォンは天剣に剄を流す。

外力系衝剄の変化、轟剣。

剄で出来た巨大な刃でレイフォンは自身の足元に天剣を振り下ろした。

砕かれたアスファルトの屋根に穴が空くと同時にレイフォンはビル内へと飛び込んだ。

頭上で誘導弾同士が衝突し爆発するのを、レイフォンは気にすることなく剄を纏ったままの天剣を下に構えると、全ての階の床を貫いていく。

そしてそのまま、一階にたどり着くとレイフォンは大穴が空いている天井部を見上げる。

砂煙で見えないが追ってきているだろう、とレイフォンは判断すると、剄を纏ったままの天剣を頭上に振り抜いた。

外力系衝剄の変化、閃断。

天剣から巨大な剄の刃を放たれ、ビルを真っ二つにしていく。

その隙にレイフォンはこのビルから出て、すぐに上空を見渡し目当てのものを発見するとそのまま道路を横断し、少し離れたビルの壁を蹴りながら再び屋上を目指す。

そして辿りついた屋上付近に思った通りフェイトとシグナム、そして様子を見るシャルがそこにはいた。

内力系活剄の変化、水鏡渡り。

屋上の間を助走をつけて、フェイトに斬りかかった。

その行動にシグナム、フェイトの両名は驚いたが、すぐに正気に戻りフェイトは後方に下がってレイフォンの一撃をかわした。

が、レイフォンが空中で剄を流した足を振り抜いた。

その風は衝撃波となり、フェイトを後方に押し戻した。

「きゃあっ」

「レイフォン！」

フェイトが吹き飛ぶのを見て、天剣を鋼糸に変更し、ビルの上の貯水槽に巻きつけ、屋上に着地した。

「シグナムさん、僕がシャルルさんを守りますから、彼女の相手に集中を」

「わかった。シャルルを任せた」

上空にいるシグナムにレイフォンはそう呼び掛けるとそのまま屋上にいたシャルルの元に向かう。

「レイ君」

「すみません、本調子でないシグナムがシャルルさんを守りながらあの少女と戦うのは無理そうなので」

シャルルという守るものがいなければ、シグナムも何とかフェイトの相手をできるだろうと判断した。

その判断にシャルルは確かに、と頷いた。

それを見たレイフォンは、シャルルに近づき小声で伝える。

「あと、脱出の機会がもうすぐ来そうなので、皆にそう伝えてください」

その言葉にシャルルは眉を顰めながら答える。

「どういうこと?」

「それは僕にもわかりませんっ!!」

レイフォン自身もどういう手なのかからないため、とりあえず来
ることを説明すると、レイフォンに向かって砲撃が迫っていた。

レイフォンは天剣に剄を流し、そのまま天剣を振り落とし、砲撃を
切り裂いた。

「映像では見たけど、実物じゃ信じられないわねっど！！」

切り裂いた砲撃魔法から現れたロッテの蹴りをレイフォンは左手で
受け止める。

そしてそのまま、蹴りを放った右足を掴むと屋上の端へと放り投げ
た。

ロッテは華麗に空中で一回転すると、再び突撃してきた。

レイフォンも迫るロッテを迎え撃つのではなく、叩きに行くとはか
りに前へと足を踏み出した。

ぶつかり合いながら二人は相手を射殺そうとばかりに睨みあう。

「よくも、ビル倒壊なんて荒技をしてくれたわね」

「それはそっちが仕掛けてくるからでしょう」

ロッテが放つジャブにレイフォンは首を動かすだけで回避し、レイ
フォンの返しの薙ぎは屈むように回避された。

互いにフェイントを混ぜた攻撃は圧巻の一言で、シャルが入りこ
む余地はなく、柄にもなくその剣舞に見惚れてしまった。

だから気付かなかった。

後ろから迫る悪意に。

それに気付いたのは上空から援護の機会を窺っていたクロノだった。上空からシャルマルが隙だらけなのを見て、先にシャルマルから捕まえるのはどうかと考えた時だった。

シャルマルの後方に戦闘不能だったクレスタが立っており、その残った手には剣が握られていた。

「後ろだっ!!」

その言葉にレイフオンはクロノの方を向くと、何やら焦った顔で杖を構えており、その視線の先はシャルマルの方だった。

その視線の先にはシャルマルが此方を見ており、その背後には剣を振り下ろそうとするクレスタの姿が見えた。

その瞬間、レイフオンは水鏡渡りを用いて、シャルマルを押しつけた。そしてクレスタが剣を振り下ろすより先に、クレスタをレイフオンの剣が切り裂いた。

帰り血を胸元に浴びながら、レイフオンは自らがやってしまった行為に固まっていると、屋上から落ちるクレスタが笑う。

「とっ…た」

そう満足そうにいつて指を鳴らした。

「えっ？」

そう呆けたような声を出したのはシャルだった。

シャルの視線の先にはレイフォンが胸元に血でできた氷の刃を生やし、屋上から転落していく姿だった。

第二十九話 墮

一言でいえば油断だった。

普段のレイフォンなら、クレスタの気配くらい簡単に察知して、シヤマルに近づく前に斬り伏せていた。

だが、実際はロッテの提案を呑み、時間を潰すだけに徹した。相手を舐めてはいなかったとも断言できない。

立ちふさがったのはやフェイト達を脅威には思えなかったし、一掃する自身もあった。

だが、レイフォンはその行動を起こすことなく、ただ時間を潰した。

その結果が胸に刺さる氷の刃から与えられる鈍い痛みである。

その傷は見たところ間違いなく心臓にまで達していることをレイフォンは理解した。

人間離れした武芸者は、ある程度の大怪我でも死ぬことはないが、脳と心臓と動脈、この三つのどれかが破損すれば死んでしまう。

力が抜けていくレイフォンの頭を巡るのはグレンダンにいる家族達、そしてこちらに来てできた大切な仲間、はやて達の事だった。

シヤマルは号泣してくれそうだろうか……

ザフィーラは無言で顔を伏せそうだ……

ヴィータは泣きながらアイゼン片手に暴れそうだ……

シグナムは仇討ちをしようと言おうで怖い……

はやては……

やっぱり悲しむだろうな……

それはレイフォンにとってとてもなく嫌なことだった。

この世界に来て一番初めに手を差し伸べてくれたはやてを……
家族と言って、共に料理を作ったはやてを……
自身の死期を感じながらも笑顔でい続けるはやてを……

悲しませたくはなかった。

泣かせたくなかった。

そして、ただ笑っていてほしかった。

だからレイフォンは願った。

まだ死ぬわけにはいかない……

その時、天剣に嵌っていた宝石が光ったようにレイフォンは見えた。

?
?
?

「今回の戦闘で、なのは達を含めたアースラの武装隊は数名の負傷ですが…」

クロノは報告書を見ながら苦々しいしかめっ面の顔をより眉に皺をよせ、報告書を艦長の執務机に置く。

その顔を見て、報告を聞いていたリンディも疲れたようにエイミイが纏めてくれた報告書に目を通す。

「リド・ロンが率いる艦船『ドルイド』に乗っていた傭兵を含む魔導師達、全百三十五名のうち、約半数の七十六名がヴォルケンリッターの手により落とされ、全治三日の軽傷から全治二カ月の大怪我、そして…」

「あの少年に落とされたリド・ロンを含む残り五十九名魔導師は皆重傷、中にはリンカーコアが破損し、魔導師と死んだ者も十数名いるとか……リド・ロンに至ってはもう体一つ動かすことのできない身体になってしまった。……個人的にはあまり気の合う人間ではなかったですが、これはあまりにも……」

ひどすぎる、そう言いたいクロノにリンディも同意する。

リンディもリドの部隊にいた魔導師の治療を手伝いに、急いで本局から『ドルイド』に向かったが、そこは地獄のような風景が広がっていた。

腕を飛ばされた者、足が切り裂かれた者、腹部からの出血が止まらない者、痛みと恐怖に泣き叫ぶ者、ヴォルケンリッターや例の少年に対し怨嗟の言葉を吐き捨てる者、まさにそこは地獄だった。

その光景を特等席で見てしまったリンディには死人が出ていないことが奇跡にしか思えなかった。

その光景を思い出し、顔色を悪くするリンディにクロノは現在、この艦が抱える問題について尋ねた。

「それで艦長、あの少年をいつまでここに留めるつもりですか？」

クロノは端末からとある場所に設置された監視カメラの映像を部屋のスクリーンに映し出す。

そこには四方を守りの者に囲まれ、治療されたのち拘束具を掛けられたレイフォンの姿があった。

年齢がなのはやフェイト達と変わらないレイフォンを見て、リンディは何とも言えない気分になってしまう。

「こんな少年がああ惨状を作り上げた人間には見えないわね」

無垢ともいえるレイフォンの寝顔にリンディは、母性としての優しい気持ちと、その無垢と起こした残虐性の差に恐怖を感じる。

隣で見ていたクロノもよく似た心境で答える。

「ええ、僕もそう思います。…だけど、彼には聞かなければならないことがあります」

「そうね、身体を治療した際に普通の人間にはない見たこともない器官と彼の強さの関連性、使用していたあの白金の剣、そして」

映像を切り替えて映し出されたのは、レイフォンの胸元の傷を隠すように埋め込まれた宝石。

その宝石は、半年程前の事件に見慣れたものだった。

「ジュエルシード…プレシア・テストロッサと共に虚数空間に消え

たアレを何故、彼が持っているのかしら」

「そのことですが、本局に問い合わせたところ回収できたものは全て本局の保管庫で確認されました」

クロノの報告から推測すると答えは一つしかない。

「となると、やはり虚数空間に落ちた物のようね……はあ、頭が痛くなってきたわ、上は上で面倒なこと言ってくれるし」

「面倒……」

溜め息をつくりンディの言葉にクロノは首を傾げて聞き返した。その言葉にリンディは頭を痛そうに答えた。

「ええ、あの少年を今すぐに本局に送らずに少しの間アースラで様子を見ておくように、と直々に命令が来たわ」

「……正気ですか？」

リンディの言葉にクロノは頭を抱え込みたくなった。

「らしいわ。取り調べの用意やその他諸々の用意に時間が掛かると言っていたけど、本当のところはどうなのかしらね……案外、あの得体のしれない少年に恐れているとか」

「……ありえそうで怖いですね」

実際、あのリドの一味を潰したのは、本局内では話題になった。人間性や規律の面を覗けば、あの部隊にいた魔導師は優秀でその上、

戦い慣れしており、幾度もなく戦場を切り抜けてきた人間ばかりだった。

それを血祭りにしたうえ、ジュエルシードという爆弾を抱えている。そのためクロノもあまりアースラには置きたくなかった。

「まあ、決まったことに反論しても意味はないわ。それにあの傷なら起きて暴れまわるということもなさそうだしね」

「そうだいいですね」

リンディの言葉は、対峙したクロノにとって気休めにもならなかった。

「まあ、あの少年の事は置いておきましょう。それより、クロノ、守護騎士の足取りは掴めた？」

これ以上ここで話しても意味はない、と判断しリンディはもう一つの懸念事項について話し始める。

それは逃走したシグナム達の情報についてである。

が、クロノの表情はあまり芳しくなく、首を横に振る。

「いえ……今までの彼らの転移の距離から考えて、第97管理外世界とあたりをつけていますが、詳しい場所や闇の書の主の特定はまだです。先の戦いでも、不甲斐ないですが仮面をつけた魔導師に追跡を攪乱されましたから」

仮面の魔導師……その言葉通り、顔は仮面により隠されており、地上に落下するレイフォンをクロノが助けた際に、結界を破壊して現れた魔導師である。

その仮面の魔導師の妨害により、シグナムたちにはあと一步のところで逃走された。

「仮面の魔導師、ね……ヴォルケンリッターを助けたみたいだけど、彼らからの反応からして仲間というわけではないようね」

現れた際に、ヴォルケンリッターの一人であるヴィータに攻撃されたのだから、多分仲間ではないと推測される。

「そうですね、あの少年は仲間のようにですけど、あの仮面の魔導師の場合は明らかにヴィータが噛みついていましたから、ですが、なのはの砲撃を受け止め、フェイトにバインドを掛けるほどの腕の持ち主です。侮れない存在には変わりありません」

そういうクロノの顔には悔しさがにじみ出ていた。

クロノには、管理局内でも稀ともいえるなのはの砲撃をああも見事に防ぐ自信はないし、高速移動の得意なフェイトを簡単にバインドで嵌める自信はない。

「もう一度、色々調べなおすしかないわね」

重い溜め息と共にリンディは椅子から立ち上がる。

どうやら本局に戻るようだ。

「はい、エイミィには悪いですが監視の範囲を広げてみるように頼んでみます。僕自身もう一度戦闘映像を見なおしてみます」

「わかったわ、お願いね」

その言葉を最後にクロノはリンディに一礼を返すとそのまま部屋を

退出し、話し合いは終わりを告げた。

? ? ?

リビングで明かりもつけずに暗闇の中、通夜のような雰囲気でシグナム達は黙りこくっていた。

いや、実際に通夜なのだろう。

シグナム達は、レイフォンが助かったところを見ていない。心臓を貫いた傷を見てしまったので死んだと思っていた。

事実、ジュエルシードがなければ、レイフォンは間違いなく死に至っていた。

そんなことを知らない彼らは、怒りに震えていた。

管理局に対して…

そして、仲間すら守れなかった不甲斐ない自分達に対して…

「ふぬけていたようだな……我々は」

沈黙の中、切り出したのはリーダーであるシグナムだった。

しかし、その声ははやての家族のときの声ではなく、明らかに闇の騎士として悪行を重ねていた頃の声色である。

「そうね……平穏に浸りすぎたのかしらね」

続いて口を開いたシャルもシグナムと同様の声色だった。

そこにはあの優しいシャマルの面影はなく、冷徹な参謀の顔しかなかった。

「我らは平穏というものには無縁のものだったようだ」

ザフィーラの声は普段と変わらない平坦な声だが、その声には感情なんてものは存在しなかった。

「そのせいでレイフォンは死んだ……」

唯一、感情の籠ったヴィータの声だが、その声には凄まじいまでの憎悪と怒りしかなかった。

「ああ、だから我らはレイフォンにできることは一つだ」

そのシグナムの言葉に他の三人は頷いた。

「はやてちゃんの平穏は必ず守り……」

「主はやてを完全な闇の書の主になってもらう……」

「そして私達四人の手で管理局の奴らをぶっ殺してやる」

「主の道を血に染める前に、我らが全て被るぞ」

決意を変えたシグナム達は気付かなかった。

そんなことははやてやレイフォンが望んでいないことを。

そして彼らははやての騎士から闇の書の守護騎士に戻った。

第三十話 最悪の再会

12月24日。

世間では『クリスマス・イヴ』と言われる特別の日である。

それは現在、海鳴市で掛かり付けの医師がいる病院にいるはやても同様であった。

レイフォンがいなくなった先週あたりから集まりが悪くなったシグナム達も今日という日は、病院に顔を出すと言っていた。

その他にも最近友達となったすずかとアリサ、そして他二名の友達も祝いに来てくれるらしい。

すずか曰く、他の二人も良い子で、友達になりたいと言っていたらしい。

そのことを聞いたはやては、新しい友達と友達とともにクリスマスパーティーができることに小躍りしたくなるくらい嬉しかった。

ここまで良いことが続いたら、もしかしてレイフォンも帰ってくれるのではないかと淡い期待を寄せてしまう。

「はやてちゃん、なんだか嬉しそうね」

笑みを浮かべるはやてを病室の扉を開いて現れたシャルが苦笑する。

そんなシャルの言葉に、はやては自身の顔を触って普通の顔に戻すが、再び笑顔へと戻ってしまう。

喜ぶはやてにシャルはクスクスと笑いながら、水を変えた花瓶を窓際に置く。

「確かアリサちゃん、でしたっけ？私はすずかちゃんしか会ってませんから楽しみですよ」

「そうやったっけ？でもいい子やよ、すずかちゃんみたいなおとなしめな子やあらへんけど、元気でおもしろい子や。時々見えるツンデレは絶品の一言やし」

ツンデレ、ツンデレと呟くはやてに対し、シャルはより一層笑みを深める。

こうして幸せを少しずつ手に入れている主の命をより一層頑張らなければならぬと。

「でもな、シャルそれだけでこんなに嬉しんやないで？」

「えっ？」

「今日は久しぶりにシグナム達も集まるやん、最近あんま会ってないから嬉しいわー」

「はやてちゃん……」

その言葉にシャルは何とも言えない罪悪感に襲われる。

確かに最近、シャル自身も蒐集活動に参加して、はやてを一人にさせておくことが頻繁にあった。

だが、その生活もうそろそろ終わる。

実際、闇の書完成まであと十数ページである。

多分、明日には全てのページが集まり、はやてが闇の書の真の主になる時だろう。

なら、明日はそれを祝うパーティもしようとシャルは考えていた。

しかし、続いてはやてが言った言葉はシャルにとって重いものだった。

「まあ、シグナム達はレイ君を探してるからしゃあないんやけどな」

その言葉にシャルは心に鈍い痛みが走った。

もうレイフォンがこの世にはいないことをはやては知らないのだから。

その悲しみを必死に顔を出さないようにシャルは耐えていると、病室の扉のノックの音が聞こえた。

「お？誰やろうか？」

「…えっと開けてみますね」

シャルは悲しみを押し殺し、いつもの表情を張り付けて、扉に近づき、右手をノブに添えた。

警戒しながら開くと、そこには両手に手提げの鞆を持ったすずかの姿が見えた。

その姿を確認したはやてが飛び上がらんばかりに喜びの声を上げた。

「おっ！！すずかちゃんやん！」

「うん、はやてちゃん、元気だった…ていう質問はおかしいかな？」
病院にいるはやてに対し、その言葉は不適切だったかすずかは考えたが、本人は気にすることなく笑みを深める。

「別に可笑しいない、元気やよ。…まあ、ベットの上からやと説得力ないけどな」

笑みを浮かべながらはやてに近づくすずかが壁際に立つシャルルの存在に気付いた。

「あ、シャルルさん。お久しぶりです」

頭を深深と下げるすずかにシャルルもお辞儀をして返す。

「ええ、久しぶりね、すずかちゃん。今日は来てくれてありがとう」

はやての母のようなそぶりで再びすずかに頭を下げた。

実際、すずかの存在ははやての助けになっていた。

蒐集を始めた時、はやてと一番遊んだのは他でもないすずかである。

「いえ、私もはやてちゃんとクリスマスパーティーをしたかったですから」

すずかとシャルルの会話を嬉しそうに聞いていたはやてがあることに気がついた。

「あ、そういえばアリサちゃん？」

それはすずかが一人で来たことである。

予定では、アリスの他に二人の友達で、計四人で来る予定になっていた。

その疑問にすずかは両手で握った手提げの鞆を部屋の隅にある椅子の上に下ろしながら答える。

「アリスちゃんなら他の二人と一緒にクリスマスケーキを取りに行ってるの。今日紹介する子の一人は家が喫茶店をしててケーキがすごくおいしいの」

「へえ、そうなんや。私も料理はできるけど、ケーキは買ってくるだけやもんな」

「私もそうだよ。で、私は……はい、これを飾ろうと思って」

すずかは鞆から取り出したのは折り紙で作られた鎖型のチェーンの飾りである。

それを見たはやては笑みを浮かべて確かに、と頷く。

「確かにこの病室でクリスマスパーティーは味気ないな」

はやては室内を見渡すと、病院であるから白を基調とした必要最低限の家具しかなかった。

確かにパーティーには不向きであろうとはやても思った。

「だから、飾っちゃおうか？ いっぱい用意してるから」

すずかは他にも星などの飾りを取り出す。

それをはやては受け取ると手に取って天井にかざすようにして眺める。

「ようできとるな。よし、私はベット回りをするから、すずかちゃん壁とかお願いな」

はやての言葉に、すずかが頷くと近くにあった椅子に手を掛ける。どうやら足場にしようとしていたが、不安定な作りで転落の恐れがあったため、シャルは止めるように口を開く

「なら、私はちょっと脚立でも借りてきますね。椅子じゃ不安定で危ないですから」

それを聞いたすずかは揺れる椅子に乗せた右足を下ろすと、申し訳そうに答える。

「あ、すみません」

頭を下げるすずかにシャルは頬笑み返すと、扉のノブに触れる。

「いいのよ。すずかちゃんはやてちゃんと一緒に飾り付けをしてて」

「シャル、じゃあお願いな」

はやての言葉にシャルは頷き、扉を開いた。

シャルが退出するとはやては両手の飾りをベットのの上に置いていく。

飾りを並べるはやてはふと聞いていなかったことを思い出す。

「そう言えば、今日来る二人ってどんな子なん？」

はやての何でもない質問にすずかも同様に何でもないように答える。

「そうだね……友達思いの良い子だよ。なのはちゃんとフェイトちゃんは」

すずかは自分の大切な友達の名前を誇らしそうに言った。

?
?
?

シャルが戻ってきて飾り付けを三人でしていると、いきなり病室の扉が開いた。

「はやて、元気だった?!」

病室の扉を破壊するかのように飛び込んできたのは、満面の笑みを浮かべるヴィータだった。

ヴィータは一目散にはやての元に駆け寄り、そのままはやてに抱きついた。

そのヴィータの姿にはやては頬を緩めると、ヴィータに抱きつき返した。

「おお！ヴィータは今日も元気やな」

「おうっ！はやても調子はどうか？」

頭を撫でられて上機嫌になるヴィータははやてに身体の調子を聞くと、はやては笑みを浮かべながら胸元を叩き元気だとアピールする。

「元気やよ、すこぶる元気や」

「そっか、それはよかった」

ヴィータははやてのベツトの上によじ登ろうとするが、後ろから肩を掴まれ止められる。

「こら、ヴィータちゃん、あんなに強くドアを開けたら危ないでしょう。あとはやてちゃんにあまり身体の触ることはしないの」

シャマルの説教に、ヴィータは肩を掴まれたまま、バツの悪そうな顔ではやての方を見る。

「ごめん……はやて」

反省したのか、気落ちしたヴィータの顔を見てはやては再びヴィータの頭を撫でる。

「まあまあ、シャマル。今日はめでたい日なんやから」

ウィンクをしながら愛嬌のある笑みをはやてはシャマルに送る。その笑みを見て、シャマルはしょうがないと言わんばかりに溜め息をつくが、頬が緩んでいた。

「はやて、大好き」

庇われたヴィータはそのままはやてに抱きつき、はやてと押し倒すような形でベットのの上に倒れこんだ。

「……」

そんな光景を、唯一この空気についていなかったさすがが呆けたようにはやて達を見ていた。

その視線は、ベットで寝転がっていたヴィータの顔を硬直させた。

「…誰だ、お前」

一瞬でいつもの状態に戻ったヴィータだが、若干声が震えていたのと顔が赤いのは恥ずかしさのせいだとすずかは思い突っ込むことはなかった。

そんな二人の空気と呼んだはやては、身体を起こしながら説明を開始する。

「すずかちゃんやよ、そういえばヴィータとかはまだすずかちゃんとかにはあったことなかったんやな」

そのことを聞いてヴィータはそんなことを言っただけのような気がすると思いだそうとしていた。

逆にすずかは、はやてと遊んだときにヴィータを含む家族の事を聞いていたので、これが噂のヴィータちゃんかーと考えていた。

「ですずかちゃん、この子がヴィータ。えっと私の親戚の子でシャ

マルの妹や」

元々考えていた設定思い出しながらはやてはヴィータの説明をした。ちなみに長女がシャルで、次女がシグナム、そして末女がヴィータである。

見た目から判断で判断したこの結果に、シャルが心に傷を負ったのは言うまでもない。

「えっと、はやてちゃんと図書館で知り合った月村すずかです。よろしくね、ヴィータちゃん」

「……」

口を全く開かず、すずかを睨みつけるヴィータを見て、すずかの方から話掛けてみた。

が、当のヴィータは黙ったままただすずかを睨んでいた。

「こら、ヴィータ」

そんな状態を見かねたはやては、ヴィータの頭を軽く叩きながら、妹を叱る姉のように叱る。

流石のヴィータもこれには逆らうことができなかった。

「わ、わかったよ。……よろしく」

微かに聞こえた挨拶にはやてはフォローを入れるように口を開く。

「ごめんな、すずかちゃん。この子人見知りが激しいんよ」

「うん、大丈夫だよ」

はやてに何でもないように答えるすずかは再びヴィータの方に向き直った。

その視線を受けたヴィータは何とも言えないといった感じで目を合わした。

その時、病室の扉が開いた。

開いた扉から現れたシグナムの右手には花束が握られていた。

「うん？お前は何をやっているんだ？」

「うるせっ黙ってろ！」

シグナムは、視線の先で挙動不審なヴィータを見て呆れた様子で話掛ける。

対し、ヴィータも自分の行動には思うところがあつたので、恥を隠すように吠える。

だが、シグナムはヴィータの事を気にすることなく、はやての方へ歩み寄ると手に持った花束を手渡した。

「どうぞ、私が選んだわけではないのですが……」

そう付け加えるシグナムにはやては生真面目やな、と言いながら受けとった。

シグナム自身こういうのには詳しくないから、店の人に仕立ててもらったんだろう。

だが、それでもはやては嬉しかった。

「ありがたいな、シグナム」

満面の笑みを浮かべて感謝するはやての言葉にシグナムは顔を緩める。

「いいえ、あとシャル石田先生から話があるそうだ……。私は聞いたがお前も聞いてこい」

はやての主治医の話とシグナムの様子からあまりいい報告ではないと判断したシャルは一瞬顔を暗くさせたが、ヴィータやはやてがいることから顔に出さないように頷いた。

「……わかったわ、じゃすずちゃんもゆっくりして行ってね」

最後にすずかに声をかけるとシャルは退出していった。

その様子を見ていたシグナムがすずかの存在に気付き話掛けた。

「…貴方は？」

シグナムに話しかけられて、すずかは姿勢を正しながら頭を下げる。

「はじめまして、月村すずかと言います」

育ちのせいか品のある立ち振る舞いにシグナムは目を丸くさせる。そんな礼儀正しいすずかの挨拶に、シグナムはヴィータとは対照的に好感を持ったようで目じりを和らげる。

「こちらこそ、シグナムです。ある、いや、はやてやシャルから

聞いています」

今度はシグナムが妙に堅い様子で頭を下げる。

そんなやり取りをはやては苦笑しながら見ていると、もう一人いないことに気がついた。

「そういえば、ザファイーラは？」

病室の外にもいないようで、

シグナムと一緒に来ると来るとばかりに思っていたはやては不思議そうに首を傾げるが、それを横にいたヴィータが何でもないように答える。

「はやて、ここはペットは立ち入り禁止だよ」

ザファイーラを完全に犬扱いする発言をヴィータがすると、はやても、ああと頷いた。

「あ、そうやったな」

主にも完全に犬扱いされたザファイーラは、病院の外で聞いており泣きそうになった。

「ザファイーラ？」

すずかは聞きなれない名前をはやてに聞き返すと、はやては忘れていたと言いながら説明を始めた。

「うん、私の家の犬の名前なんよ、今度すずかちゃんにも会わして

あげるな、ってそういうえば、すずかちゃんって犬駄目だったわけ？」

猫屋敷と言われそうなくらい猫がいるすずかの屋敷を思いだしながらはやてはいうと、すずかは何を考えているかわかったようで苦笑しながら答える。

「大丈夫、犬も好きだよ。アリサちゃんの家で遊んだときに遊んでるから」

アリサちゃんの家は犬屋敷だよ、と答えるすずかの言葉に、はやては行ったことがなかったのでわからなかった。

「そうなん？なら一回アリサちゃんにも行ってみたいな」

「アリサちゃんも喜ぶと思うよ」

はやての願いにすずかは頷くと、部屋の扉からノックの音が聞こえた。

「来たわよ。はやてにすずか」

部屋の外から聞こえる声はアリサ本人であり、その声を聞いたはやてとすずかは顔を合わせて面白そうに笑い始める。

「あ、噂をすれば何とやら」

「じゃあ、開けるね」

一番入口に近かったすずかが部屋の扉を開いた。

そして部屋の外にいた来訪者を見てシグナムとヴィータは息を呑んだ。

そこには仇敵がいたのだから。

第三十一話 加速する聖夜

学校を終えたなのは、アリサとともに自分の家である『翠屋』に向かった。

なのは達が辿りつくところにはなのはの母親である桃子からニコニコと笑みを浮かべながら本日の要件であるクリスマスケーキの入った箱を持っていた。

「はい、なのは」

「ありがとう、お母さん」

自身の腕によりをかけて作ったケーキを桃子はなのはに手渡すと、なのはもそれを慎重に受け取った。

「桃子さんすみません、無理を言って」

クリスマスというケーキ屋が忙しい時期にいきなり自分が当日に頼んだことに対してアリサは頭を下げるが、桃子は笑みを深めて何でもないように答える。

「別にいいのよ。恭也にも月村家で忍ちゃんと食べるバースディケーキを作るついでだから」

「あ、お兄ちゃんは今日はすずかちゃんの家にいるんだ。お姉ちゃんは？」

なのはは兄の恭也がすずかの姉であり恋人の忍と過ごすのを聞いて、思わず姉の美由希のことを聞いてしまうと、桃子は笑みを浮かべる。

「はやてちゃんだっけ？新しい友達の子のためなんだから、ね」

「えっお母…」

「はい、はやても喜ぶと思います」

母の桃子から全く違う答えが返ってきたため、なのはは思わず口を挟もうとするが、空気を呼んだアリサがなのはの言葉を遮るように口を挟んだ。

アリサの言葉に桃子は笑みを浮かべ、店内にかけてある時計を見ながらなのはに言う。

「もうこんな時間だから、早く病院に向かいなさい。すずかちゃんとはやてちゃんが待ってるわよ」

「うん、わかった。遅くならないうちに帰るから」

その言葉になのはは釈然としない様子でアリサを連れて笑顔の桃子に見送られながら翠屋を後にした。

なのは達はそのまま、病院に向かおうとすると後ろの方からなのは達を呼ぶ声が聞こえた。

後ろに振り返るとそこにはビニール袋を持ったフェイトが此方に走ってきた。

「なのは、アリサ、ごめん待った？」

どれだけ急いできたのだろうか、なのは達の元に辿りつき、肩で息をするフェイトに対し、アリサは呆れたように言う。

「別にそんなに走ってこなくても時間には余裕はあるわよ」

「まあ、それがフェイトちゃんの良いところだから」

呆れるアリサの横でなのはは苦笑してしまうが、フェイトは意味もわからず首を傾げてしまう。

とりあえずこんなところで立ち止まっても意味はないということとで、なのは達は歩きながら話をする事にした。

「で、フェイトは目的の物は買えたの？」

「うん、クラッカーだね」

はい、とフェイトが袋を広げるとなのはとアリサは袋の中を覗き込む。

袋の中には色々なクラッカーがあり、明らかに今日のパーティーで使う量ではなかった。

なのはは苦笑いをしながらアリサの方へ振り向くと、アリサは呆れたように溜め息をつき、自分の財布からお札を取り出し、フェイトに手渡した。

「今度、家でパーティーに使うから、半分いただくわ」

「え？うん」

アリサは予備で持ってあったビニール袋にクラッカーの半分を入れて、自身の鞆の中に入れていく。

そんな光景をフェイトは首を傾げていたが、場の空気呼んだなのは話を振った。

「そ、そう言えば、はやてちゃんってどんな子なの？私とフェイトちゃんはあったことがないから」

なのはの言葉にアリサは、数日前に初めて会ったはやての印象を思い出す。

アリサもすぐかと違い、まだ片手で数えられるくらいにしか会ってはいない。

なので、初めて会った時の感じたとおりに話すことにした。

「んー、一言で言うなら面白い子かな、話してて楽しいから。後は着いてからのお楽しみね」

「へえ、そうなんだ…その、友達とかになれそうかな？」

フェイトの言葉にアリサは自信満々に頷いた。

「それは大丈夫って断言してあげるわ」

? ? ?

先に硬直がとけたのは、こういう場慣れしていたシグナム達だった。

「っシグナム!!」

ヴィータは瞬時に自身のデバイスのグラーフアイゼンを取りだすと、大声でシグナムの名前を叫んだ。

その呼びかけにシグナムは即座にはやての元へと駆けより、

「主はやて、すみませんっ!!」

「え、なな何やシグナムッ!!」

はやての身体を優しく、そして力強く抱き上げた。

その様子を見たヴィータはアイゼンをハンマーフォームに戻して、力強く握りしめた。

「アイゼンッ!!」

ヴィータそのままアイゼンを振るい、病院の壁を破壊した。

凄まじい轟音を響かせ、ヴィータとシグナムははやてを連れて、病院の外へと飛び出すと、

「くっこれは!?!」

「くそっ!! 結界まで張るなんて…こっちの行動は読まれていたのかよ!!」

病院の外には誰もおらず、空の色や魔力反応からして結界に閉じ込められたことに気付いたヴィータ達は瞬時にこの場の最良を選び出した。

「シグナムッ! シャマルを連れてきて、転移の準備をしてくれ! 私が時間を稼ぐ」

それは片方がこの場で時間を潰し、もう片方がはやてを連れて何処かに安全な所へ連れて行く。

そう考えたヴィータの意図を読み取り、シグナムは頷く。

「頼んだぞ、病院付近に警戒させているザファイラを戻したら、お前も直ぐに戻ってこい」

「わかったっ!!」

シグナムの言葉にヴィータは頷くとそのままUターンし、追ってくるであろうなのは達を抑えに戻った。

その光景を唯一この状況に付いていけなかったはやてが叫んだ。

「ヴィ、ヴィータッ!! シグナム、これはどういうことやつ!!」

自身を抱いているシグナムにはやては迫るように尋ねるとシグナムは焦ったように答える。

「すみません、落ち着いた場所に避難したら直ぐに説明します!!
今言えることは敵が現れたため、主ははやてには避難してもらいます」

「敵?! 敵ってなんや!! すずかちゃん達の事かい!?!」

「そうです!! あの高町なのはとテストロッサは管理局の魔導師です!!」

自身の友達を敵扱いされて激昂するはやての勢いを勝るようにシグナムの真剣な忠告が周囲に響く。

その忠告にはやてが押されていると、そこにシャルと人型に戻っ

たザフィーラが合流した。

「シグナムッ!!」

「ヴィータは？」

無事の二人を見てシグナムは若干緊張した顔を緩めるがそれは一瞬だけで、険しい顔で二人に指示を送った。

「ああ、ヴィータは先に交戦している。ザフィーラ、主はやての御身の守護はお前に任せる。命を賭して守り抜け」

「承知した」

「シャマル、主とザフィーラとともに何処かへ転移して隠れておけ」

「わかったわ……シグナムも気をつけて」

「シグナムッ!!」なのはちゃん達が管理局の魔導師っていうのも。シグナム達が追われているのは理解した。やけど、戦ったらあかん！話し合えば……」

きつとわかってくれる。そう続けようとしたはやての言葉をシグナムの怒りに満ちた声が遮った。

「それは無理な話です。奴らはレイフオンを討ちましたから」

「え……」

返された答えに、はやてはショックで言葉を失っていると、その間

にシグナムははやてに一礼してそのまま病院方面へと飛んでいった。

「はやてちゃん……」

飛び去るシグナムの姿や心配そうに声を掛けるはシャマルの言葉にも何の反応することもなく、はやての頭の中で先程の言葉を反芻していた。

自身の心に宿る黒い光に気付くこともなく…。

一方、フェイトから連絡を受け、サーチャーを飛ばしの様子を見ていたアースラ内が慌ただしくなる。

「クロノ君ッ!!」

エイミーがメインモニターに展開する戦いを見て、焦ったようにクロノに呼びかける。

それもそのはずである。

今戦っているヴォルケンリッターは前に対峙した時とは歴然とした気迫の差がある。

そのせいで、なのはとフェイトは防戦一方になっている。

「わかってるッ!だが、これでわかった。彼らの主はあの少女ということが」

あの気迫は主の危機に迫ったからだろう、とクロノは考える半面、もう一つの答えが考えていた。

それは、レイフォンのことである。

あの一件からヴォルケンリッターの攻撃に迷いが無くなっていた。

つまりは殺すことに躊躇いが無くなっていた。

だからこそ、なのは達は完全に吞まれてしまい、その事実クロノを含むアースラの間人を焦らす結果になった。

「艦長、僕も出ます……こちらのほうは任せました」

「お願いね……クロノ」

クロノは最後にリンディに声をかけると、そのまま転送ポットへと向かう。

乗り込もうとしたとき、先程までいた人物が今いないことに気がついた。

「あれ？ ロツテは」

そこには先程までモニターを険しい顔で見ていたロツテの姿がなかった。

?
?
?

パスワードを打ち込み、嚴重な警備をされていた部屋に足音が響く。扉の前には数人の警備の魔導師が倒れており、この侵入者の手により眠らされていた。

侵入者は部屋を中心に置かれたベットを覗きこむ。そこには死んだように眠るレイフォンの姿があった。

「契約内にあった情報が漏れそうな際の互いの抹殺はこれに該当する」

悪く思ふなよ、とそう呟きながら侵入者は懷から注射針を取りだす。侵入者はレイフォンの左手を取り、針を立てようとした。

その瞬間、侵入者の持つ注射器が射撃魔法により撃ち抜かれた。

「信じたくなかったよ」

振り向いた侵入者の視界に映ったのはバリアジャケットに身を包み、こちらに向けてデバイスを向けるクロノの姿だった。

そのクロノの姿を見た侵入者は咄嗟に此処から逃げようとしたが、それより速くクロノのバインドが炸裂した。

「もう、あきらめろ……ロツテ」

クロノの視線の先には、顔を陰しく歪めたロツテの姿が見えた。

第三十二話 騙

結界内の空の上を紫と黄金の光が閃光のように弾けている。

「はぁっ!!」

「くっ!!」

頬を掠める銀の刃をフェイトは紙一重で回避する。

が、シグナムの流れるような連撃にフェイトはソニックムーブを用いて距離を取るしかなかった。

しかし、シグナムはその動きを読んでいるかのようにフェイトを執拗に追い続ける。

飛行速度は圧倒的にフェイトの方が上なのに、しかし、直ぐにシグナムにより距離を詰められてしまう。

その事実がフェイトの焦りと不安を増す要因となっていた。

「その顔から何故自分が距離を詰められるのかわからないようだな」

シグナムは剣を振るいながら、目の前のフェイトに語りかける。

一方、フェイトはそんな話を聞く余裕はなく、必死にシグナムの斬撃を受け続ける。

そのフェイトを見て、シグナムは冷酷に剣を振るい続ける。

自身の勝利に近いことを確信しながら。

ヴィータと戦っているのはもこちらと同じ状況になっていた。
なのも上空を逃げ回りながら誘導弾をヴィータに撃ち続けるが、
ヴィータのシールドやアイゼンに弾かれていた。

そしてヴィータに距離を詰められて、吹き飛ばされているなのはに
フェイトが目を見開き大声で叫ぶ。

「なのはっ!!」

「心配するのはいいが、自身の心配もしろ」

「!! きゃあっっ!!」

なのはの方に注意が向き隙ができたフェイトにシグナムは渾身の一
撃を振り下ろした。

その殺気の籠った一撃をフェイトはバルディッシュを滑らせてなん
とか受け止めることができたが、シグナムの剣圧は防ぐことはでき
ず真下へと叩き落とされた。

そのままビルに落ちた衝撃で屋上を転がっていくフェイトの様子を
上空から見下ろすようにシグナムは冷徹に染まった瞳で見っていた。

「フェイトッ!!」

吹き飛ばされたフェイトの姿を見たアルフは怒りのままに上空から
シグナムに襲いかかる。

しかし、シグナムはその攻撃を軽く後方に下がっただけで回避し、
そのままカウンター気味にアルフの横腹に回し蹴りを打ち込んだ。

「ぐっ!!」

回し蹴りを何とかガードしたアルフはそのまま吹き飛ばされる力を利用し、フェイトの元に降りる。

「フェイト、大丈夫かい？」

「うん、大丈夫。ちゃんと受け止めたから」

互いに労わる主従の様子を見てもシグナムは無表情のままで、落胆したよう声色でに口を挟む。

「この程度か……テストロッサ、私はお前を買っていたのだが、どうやら思い違いだったようだ」

その言葉にフェイトは顔を上げて、悔しそうにシグナムを睨みつけるが、その目には覇気がなかった。

カートリッジを用いたデバイス改造により、シグナム達との距離は縮まっていたとフェイト達は思っていた。

事実、好戦ができるほどまでになったのだから、距離は間違いなく縮まったであろう。

だが、それは試合での実力が、である。

今現在行っている死合いには何の関係のないものである。

「デバイスを改造し、私達との距離を詰めたと思っていたようだが……驕るなよ、我らが何百年と積み上げてきたものに、まだ赤子のようなお前達が勝てるわけないだろう？」

そこにあったのは、はやての家族として笑みを絶やさなかったシグ

ナムではなく、管理局から追われ続けたヴォルケンリッターのリーダーの烈火の将の姿であった。

?
?
?

「シャル、何処まで行くつもりだ？」

「とりあえず、この結界の端までよ。逃げるにはまずこの結界を何とかしないと」

ザフィーラは、全く喋られなくなったはやてを胸元に抱きかかえ、闇の書を抱えて先行するシャルを追う。

そのシャルの後ろ姿を眺めながらザフィーラは結界を破壊してこの場を脱出してからどうするべきか、考えていた。

喋らないはやては心配だし、まず落ち着ける場所を探さなければ、と考えていると先行するシャルが話掛けてきた。

「ねえ、ザフィーラ。貴方はどう考えてるの？」

「何がだ？」

シャルの脈絡のない問いにザフィーラは首を傾げる。
そんなザフィーラを気にすることなくシャルは言葉が続ける。

「逃げて、何か意味があるのか、とか？」

「だから何を言っているシャル」

見当違いな問いをするシャルはザフィーラに何も答えることなく突如、近くのビルの屋上に降りる。

そのシャルに釣られて、ザフィーラも同じように降り立った。

「いえ……意味なんて求めなくていいわね。我らは闇の書の守護騎士、全ては主のため……」

「いきなり何を……」

様子のおかしいシャルの反応を見て、ザフィーラは本能的に後ろに下がり、拳を握りしめる。

その行動より早く、

「だから、貴方の命、主に捧げてね」

シャルの言葉が響いた。

「シャマッ!! ツ!!」

その瞬間、ザフィーラの胸元から腕が生え、その生えた掌にはザフィーラのコアともいえる青い色を放つリンカーコアが輝いていた。

「がっ…シャマ…ルは…どう……した？」

リンカーコアを抜かれて、身体が動かなくなってもザフィーラは偽

物のシャルマルを睨みつける。

偽物はシャルマルらしからぬ歪んだ笑みを浮かべて掌で顔を隠す。
その掌が顔から離れるとそこは白い仮面で覆われていた。

「彼女なら先にこれの中に入ってもらった」

無感情な声で仮面の男は、腕に抱える闇の書を指差す。

その行動に、ザフィーラは全てを悟り、苦々しく顔を歪める。

「全て……掌の上……か」

「そういうことだ。書の中で安らかに眠れ」

腕は引き抜かれ、青いリンカーコアは仮面の男の手に残ると、ザフィーラは力尽きたように倒れ、そのまま体中が粒子状になり消え去った。

「ザ、ファイ……ラ……」

その様子を茫然と見ていたはやてに仮面の男はゆっくり近づいていく。

男は、仮面に手を当て、はやてに見えるように見せた。

「あ……」

その顔を見たはやては目を見開き、見つめる。

数分前に見た顔である。

すずかが紹介してくれるはずだった二人のうちの茶色の髪の子
——なのはの顔がそこにはあった。

「は・や・て・ちゃん？はじめまして」

楽しそうに笑みを浮かべる少女の言葉にはやての目に怒りがこもる。

「アンタ、よくも私のっ！私の大切な家族を！！」

足が動けば間違いなく掴みかかっていたほどの勢いで怒り狂うはやてを見て、目の前の茶髪の少女は満面の笑みを浮かべる。

「私が憎い？」

「あ？！憎いに決まってるっ！！」

歩けない足を引きずりながらはやては血走った目で目の前の少女に迫る。

「私を殺したいの？」

「殺してやるっ！！」

憎しみに満ちたはやての返事を聞き、少女は顔を笑みで歪めると小さく頷いた。

「そう……なら、交渉成立ね」

茶髪の少女は闇の書をはやてに向けて放り投げる。
それをはやては反射的に受け取ると、

そのまま黒い光の奔流に吞まれた。

?
?
?

アースラ内処罰房にて。

両手両足をバインドで押さえられたロツテはどうこの場を切り抜けるか、頭を休むことなく回転していた。

そのロツテにクロノは顔を俯きながら教えた。

「もう逃げられないよ。ロツテ」

その言葉にロツテはクロノがもうある程度のところまで踏み込んでいたことに気付いた。

「……いつから気付いていた?」

「違和感を感じたのは犬を飼ったという話だ」

観念したのか身体の力を抜き、顔を俯かせたロツテの疑問にクロノは一つ一つ答えていく。

「犬なんてお前達が進んで世話をするわけがない。同様にグレアム提督も犬を飼ったりもな」

猫の媒体の使い魔であるロッテ達が生理的に苦手な犬の世話をするわけがないし、グレアムがロッテ達がいるのに犬を飼うなんて言うはずがない。

「さあ、わからないよ。そんなことは。犬が好きになったかも知れないじゃないか」

「そうだな……しかし元々、リーゼ達が揃っていなかったことに疑問を持っていた」

なのは達に初めて合わせた時も、ユーノに無限書庫を紹介した時も、そして今回一緒に共闘した時も、ロッテとアリアは同時にいることは見たことなかった。

しかしそれだけでは偶々というだけかもしれない。

「疑惑を持ったのが僕とロッテとそこにいる少年と戦ったときだ」

その共闘をして時、クロノは相手に違和感を感じたことである。

「何故、僕たちは無事何事もなく帰ってこれたのかと。あのリドと戦った少年の強さなら僕とロッテを一蹴することができたはずだ」

実際対峙したことのあるクロノはレイフォンの力の深さは理解できた。

「あの時、少年の攻撃は全て手加減されているような気がした。時間潰ししているように」

実際はレイフオンが時間稼ぎをしようとしたのではなく、ロツテからそういう指示を受けたのだが、それは現在問題ではない。

「そして、その後都合よく現れた仮面の男がヴォルケンリッターを逃がした。それを見たとき僕は彼と少年が手を組んでいるのではないかと推測した」

クロノ自身、突拍子もない推測だが、そうなれば魔導師でもない少年がリド達の張った結界内に現れたという疑問が解消できる。

あ のとき、レイフオンの仲間と思われるヴォルケンリッターは全員結界内にいたのは確認できたため、レイフオンに第三者が関与していることになる。

「そして確信を持ったのはさっきだ。少年の本局への移送が見送られたことだ。……冗談でさっきリドの一味を壊滅した少年の力に本局の人間が恐れたのかと考えていたが、それはありえない。魔導師でもない彼の力に恐れを抱くのは彼の起こした惨状を見た者と彼と手を組んだ者だけだ……」

そしてリンディが本局で調べて名前が出た人物。

「お前たちだ、ロツテ」

クロノは自身の推測や情報を全てをロツテに話した。

証言は穴だらけで、証拠もない。

考え方を変えれば、他の容疑者も出てきたかもしれない。

クロノ自身、外れてほしかった推測であった。

だが、現実の結果としてバインドに嵌ったロッテの姿である。

「なるほどね……こいつのことを馬鹿呼ばわりしていたけど、本当の馬鹿は私だったか……」

自身が物的証拠になったことをロッテは顔を俯かせて力なく笑った。

第三十三話 去りゆく騎士に蘇る剣

八神はやてが願った幸せは、ほんの些細なことであった。

家族とともにご飯を食べたり、寝たりするというごく普通でありふれた日常である。

だが、幼い時に両親を失ったはやてはそんな日常を手に入れることはなくただ一人で病気に震える日々であった。

そんな日々を終止符を打ったのが、初めての家族であるレイフォンとそして、闇の書から現れたシグナム達である。

彼らと過ごし、はやては初めて自身の心が満たされたような気がした。

たとえば、自身の命が残り少なくとも、はやては幸せだったと自信を持って言えた。

しかし、その幸せは壊された。
レイフォンの死という結果に。

その時、はやての中で何かが弾けた。

そんな気が薄れゆく意識の中、はやては感じていた。

?
?
?

「ザフィーラ？」

地面に膝を突くフェイトに止めを刺そうと剣を振り上げたシグナムの動きが止まる。

硬直するシグナムの視線の先は、先に逃がしたシャル達のいる方向であり、その先をフェイトとアルフも釣られて見る。

「ぐっ…」

フェイト達の視界に黒い何かが奔り、後方にいたシグナムが吹き飛ばされた。

シグナムは飛来した何かをレヴァンティンで弾くと、直ぐに体勢を立て直した。

そのシグナムに駆け寄ったのが、なのはと戦っていたヴィータである。

「シグナムッ！ザファイラとシャルがっ」

「ああ、わかっている……どうやらこいつらは囹のようだ」

シグナムは歯を砕くように険しい顔をしてフェイト達を睨みつける。その怒りに満ちた視線を浴びたフェイトは身体を震わせるが、その様子に構うことなくシグナムは剣を振り上げた。

その剣は振り下ろされることなく、シグナムの腕に何かが貫いた。

「があっ！！」

「シグナムッ！！くそっ！！」

降り注ぐ黒い雨のような誘導弾からシグナムを庇うため、ヴィータ

は射線上に身体を滑らす。

シールドを展開しその誘導弾を防ぎきるヴィータの姿を、茫然とした様子で見っていたフェイトの傍に先程までヴィータと戦っていたのはが駆け寄る。

「フェイトちゃんっ！無事」

心配するなのはも所々バリアジャケットが汚れており、フェイトと同様に死線を繰り返していたのが窺えた。

「なのは、うん、なんとか……でもこれって」

フェイトはこの攻撃は最初はクロノ達、アースラ所属の魔導師の援護だと思っていたが、この魔力光に見覚えがなかった。

そして、この攻撃には加減なんて甘いものは存在しないほどの攻撃だった。

不測の事態に動けなくなるなのは達に比べて、シグナムとヴィータの二人は行動が早かった。

シグナムは傷により上がらなくなった右手の剣を左手に持ち替える
と、ヴィータとともに狙撃された方向に飛ぶ。

そのまま先程の攻撃を放ってきただろう魔導師らしき女を捕捉し、
レヴァンティンのカートリッジを弾く。

先手必勝。

そう言わんばかりにシグナムは狙いを定めて刃に焰を纏わせる。

視界に映ったのは銀色の髪、そして黒の魔導服。
何より懐かしさを感じさせた深紅の瞳。

その姿にシグナムは違和感と忘れてはいけない事があったのではないのかという不安に駆られた。

その不安も隣にいたヴィータの呻く声にかき消された。

「がっ！こ、これは……」

ヴィータの小さな身体の胸元から細い白い腕が生え、その手の平にはヴィータのコアでもあるリンカーコアが握られていた。

「ヴィータッ！！馬鹿なこれは……」

ぐったりとして動かなくなるヴィータの姿に似た光景をシグナムは知っていた。

シャルがなのはから蒐集を行ったときの光景と。

その一瞬の隙がシグナムの命取りになる。

接近に気付かなかったシグナムは、迫る黒い闇に反応が遅れ、吞まれた。

「がっ！無…念……」

悔しさとともに最後の言葉を吐き出したシグナムはその場から跡形もなく消滅した。

その様子をフェイト達はただ見ているだけしかできなかった。

シグナムを取りこんだ銀髪の魔導師はただ空を見上げていた。その目からは涙が溢れ、瞳は悲しみに満ちていた。

「守護騎士よ…主とともに安らぎの眠りにつきなさい」

そう銀の女性が呟いたのはなのは達には聞こえることはなかった。

?
?
?

「…ん、…ここ、は？」

頬を伝う冷たい風にレイフォンは目を覚ました。

視界の先は見たこともない天井であり、レイフォンは身体を起こそうとした。

「ぐっ……」

胸元から襲う鋭い痛みに、起こそうとしていた身体が再びベットに沈んだ。

痛みが残る胸元に手を当ててみると、そこには包帯の感触があった。

その感触と胸の痛みがレイフォンの頭を眠気からの覚醒となり、自身に起きたことを思い出す。

シグナム達を蹴ったリドを斬ったこと、

協力関係のロツテと戦ったこと、

そして、自身の身体を執念の刃が貫いたこと。

「何日寝ていたんだ…僕は」

硬直している身体は明らかに数日寝ていた感じがした。

「此処は何処なんだ？」

見渡してみるとそこには鋼の柵以外は鋼鉄の壁しかない。

明らかに独房だ、と鈍いレイフォンで理解できた。

よく見てみると足には錠がしかれていた。

自身の捕縛と言う事実気付いたレイフォンは直ぐにこの場から逃げようと身体を起こした。

そんなレイフォンに隣から聞いたことがある声が聞こえた。

「へえ……気がついたんだ、生命力が凄まじいね」

「……ロツテさん」

隣から聞こえたのは協力関係にあったロツテであった。

だが、いつもの彼女と違い、声には覇気がなかった。

そんな彼女の様子はレイフォンも気にはなったが、それよりも重要なことがある。

「はやてはどうなっているんです？」

気がかりなのははやてのことである。

彼女達の計画によれば、はやてをまず書の本当の主になければ治療ができないと聞いていた。

だが、その答えにはロツテの笑い声しか聞こえなかった。

「何がおかしいっ!!」

「馬鹿だと思っていたけどここまで来ると本当に哀れだね……まさかあの計画が本当に八神はやてを助けることなんてできるって信じていたのかい？」

その言葉はレイフォンが一番心配していたことだった。そのロッテの言葉にレイフォンは自身が騙されていたことを理解した。

「グレアムさんは……はやてを道具にしか思っていなかったんですね」

レイフォンも最初は彼らを信用なんてしていなかった。だが、グレアムの言葉にははやてを思う真摯な気持ちがあったとレイフォンは感じたから協力した。

共にはやてを思う同士になれると。

しかし、予想外にもレイフォンの言葉に先程まで聞こえていたロッテの笑い声は途切れる。

そして、帰ってきた言葉は苦渋に満ちた言葉だった。

「道具に思えたら、もっと楽だったんだけどね……」

それはロッテだけではなく、片割れのアリアも、そして主人のグレアムも思っていたことだ。

闇の書の封印は、ロッテ達の悲願である。

十年前のあのクロノの父親クライドが死んだ事件から。

犠牲者は彼だけではない。

たび重なる転生を繰り返す闇の書は、現れるたびに多くの犠牲を生む。

その理不尽に嘆いた人間は他にいるのだ。

闇の書による悲しみの連鎖を止めたかった。

だからこの方法を作り出したとき、連鎖を止めることができる喜びと同時に誰かを犠牲にしなければならぬことの罪悪感に押しつぶされそうになった。

他にも色々と方法を考えたが、結果は全て駄目だった。

そして何より、偶然にも発動前の闇の書を見つけたことと実行できる人間が揃うチャンスはもうないと思った。

これを見逃せば、再びあの惨劇が起こる。

ロッテ達にはもう計画を執行するしか道はないと思った。

「よく、お父様が言ってた……もし私が闇の書の主を選ばれるなら、迷うことも悲しむこともなかったのに……って」

ロッテが漏らした言葉にレイフオンは彼女達の本音を聞いた気がした。

だからこそ、レイフオンは言わなければならなかった。

「僕はグレアムさんが凄いと思う。…思いは間違いなく本物だ」

レイフォンも孤児院の仲間を助けるために、違法と知りながら賭け試合に出た。

そんなレイフォンの決断よりも、グレアムの決断は重く苦悩するものだったのだろう。

だが、

「女の子一人救えないのに、世界なんて救えないと思う」

その犠牲がはやてになることはレイフォンは許さなかった。

身勝手で我がままかもしれない。

だがレイフォン・アルセイフは八神はやての家族なのだから。

「そう、かもしれないね」

レイフォンの答えにロツテは笑うことなく答えた。

「だけど、もう遅い……八神はやては闇に落ちた」

「それでも行くよ。最後の最後まではやてを助けたいと思うから」

それが家族である自分の仕事だとレイフォンは思った。

「その結果、周りの人間を巻き込んでも？」

「わからない、でもやると決めた」

十年前の惨劇を犯すつもりかと聞かれてもレイフォンはそのことについては答えられない。

でも、はやてを犠牲になんてしたくなかった。

子供のような矛盾を抱えた答え。

しかし、それは子供だから答える事の出来る答えだった。

「……アンタの剣はこの部屋を出て、右方向の二番目の扉の保管庫の置いてある」

「ロツテさん……」

ロツテのいきなりの言葉にレイフォンは驚いたように声の聞こえた方に振り向く。

「勘違いするなよ。私はあくまでお父様の味方だ。自身が起こしたことに責任は持つ。ただそれだけだ」

そう言って黙り込んだロツテにレイフォンはその場で無言で頭を下げる。

そして、体中に剄を巡らせて、体中に取りついた拘束具を破壊した。

第三十四話 手を結ぶ者

それに気付いたのは、出撃準備を整えたクロノであった。

モニターの向こうで書の管制人格らしき女性と戦うのは達の救援ではなく、向こうの何処かに潜んでいるだろうアリアの捕縛という任でだ。

劣勢なのは達を助けに行きたいというのが本心だが、アリアの行動はクロノにとって許容できるものではなかった。

なのは達の無事を祈りつつ、転送トランスポーターに乗り込もうとした瞬間、背筋に背筋に悪寒のようなものが疾った。

その瞬間、艦内に衝撃とそれによる揺れが襲った。

「っ！ 何だこれは……エイミィッ！」

「うんっ！ ……震源は……処罰房っ！」

クロノの言葉に、慌てながら原因を調べるエイミィの言葉を遮るように再び衝撃が艦内を襲う。

しかも、それは段々と近づいているような気がした。

「僕が行くっ！！」

「っ！ 待ちなさいっ！」

嫌な予感しか感じないクロノはリンディの静止の言葉を振り切り、

咄嗟に管制室を飛び出そうとした。
だが、それよりも震源の原因がやってきた。

「あ、当たりかな？」

自動ドアを吹き飛ばし、現れたのは処罰房で眠っていたはずのレイフォンだった。

その姿に一瞬、クロノを含むアースラメンバーは面を喰らったように固まる。

「君はっ」

「動かないで」

コンマ何秒の硬直から抜け出したクロノは右手を腰に装着しているデバイスに滑らそうとしたが、レイフォンの天剣がクロノの首筋に突きつけられる方が早かった。

その目にも止まらぬ早業で、アースラメンバーは口を閉じ、レイフォンに視線を移す。

しかし、当のレイフォンはキョロキョロと周囲を見渡し、そして管制室の巨大モニターの戦闘に視線が釘付けになる。

そのレイフォンの様子にクロノはチャンスだと思い、右手でデバイスを掴むが、その瞬間、地面に叩きつけられる。

「があっっ！」

「動かないでと言ったはずですよ」

腕を極められて身動きが取れなくなるクロノの頭上から冷徹な声が響く。

その声に得体のしれない恐怖に襲われたクロノは、右手に握るデバイスから手放した。

その様子にエイミィを始めとするクルーは茫然と立ち尽くしていたが、その沈黙にリンディが口を挟む。

「…何が目的なの」

今まで踏んできた場数の違いからか、冷静なリンディの問いが管制室に響く。

しかし、リンディも一人の母。

息子であるクロノの危機に額から冷や汗が流れ、開いた唇も微かに震えていた。

その様子を見ていたレイフオンはクロノの首筋に立てていた天剣を基礎状態に戻す。

「質問したいことがあるのですが？」

「ええ、答えられることなら答えるわ」

レイフオンの質問という要求にリンディは簡単に呑んだ。

その様子にレイフオンは肩透かしを食らったような気分になるが、とりあえず聞くことがあるので気にしないことにした。

「ここ何処ですか？」

起きたすぐで此処が何処かも検討がつかなかった。

見た雰囲気から、グレアムと話合った場所に似ていたため、管理局と判断できたのだが。

そんなレイフォンに答えたのはレイフォンに踏まれて身動きのとれないクロノだった。

「時空管理局・巡航Ⅰ級8番艦次元空間航行艦船『アースラ』だ。君が胸の傷で気を失っている間に保護をした」

クロノの返答の半分以上はわからなかったレイフォンはとりあえず此処が船で自分は助けられたのだろうと理解した。

「そうですか……助けてくれてありがとうございます」

「えっ…ああ……」

レイフォンはお礼の言葉とともにクロノに向かって頭を下げると、素直にお礼を言われたクロノは何とも言えない顔をしてリンディの方を見る。

リンディもレイフォンのお礼に苦笑して話を続けることにした。

「で、そちらの要求は？」

リンディはレイフォンが交渉に不向きな人間と察し、率直に答えを聞くことにした。

「え、とその前に、あれって誰ですか？」

要求は此処からでることなのだが、状況がわからないレイフォンは

モニターに映る銀髪の女性のことを指差しながら尋ねる。

「あれは夜天の書の管制人格よ。全てのページが溜まってアレが書から現れたの。主と守護騎士も取り込まれたわ」

その問いにレイフォンは最終段階まできたのかと、内心焦っていた。

レイフォンが聞いた計画はこの状態で一度管制人格を封印し、はやてと守護騎士を出すという手はずだった。

だが、ロッテから聞いた話では、そのままはやてを封印する気と言っていた。

「じゃあ、要求ですが僕をあそこに連れて行ってください」

「なっ！ そんなこと」

「クロノ……貴方が言っても状況は改善しないわ」

レイフォンの要求にクロノは噛みつこうとするが、リンディに阻止される。

そしてリンディは諭すようにレイフォンにあきらめるように口を入れる。

しかし、レイフォンは決めていた。

「それでもです。僕ははやての家族だから」

それにと付け足して捕捉するように答える。

「グレアムさんの計画を僕は許すわけにはいきません。だからア

リアさんを止めないと」

「ちょっと待て、君はリーゼ達と手を組んでいたのじゃないのか？
それに計画の詳細を聞いているのか」

レイフォンの捕捉にクロノは思わず口を挟んでしまう。

クロノ自身グレアムが事件に関与しているのはわかっていたが、ど
ういう計画を立てていたのかはわからなかった。

ロットは吐かなかったし、アリアとグレアムは互に行方をくらま
している。

そのためにこれから周辺の探索にクロノは出ようとしていたのだ。

「僕も騙されたから、その計画が本当か知りませんが、ディランダ
ルというデバイスの凍結？魔法で冷凍封印するって言っていました」

かなり大雑把な説明だったが、クロノには少なくともアリアがあ
の付近にいることがわかった。

そしてあの書を封印する程の魔法なら間違いなく大規模となり、準
備には時間が掛かるだろう。

しかし、一つだけ問題があった。

「だが：何処を起点にするかが分からない」

場所が分からない以上、時間内に見つけることができないかもしれ
ない。

そんなクロノに対し、レイフォンは軽い口調で答える。

「え、そんなの魔力の流れを見れば一発ですけど」

「え、何だって？」

レイフオンの返答にクロノは思わず聞き返してしまう。

確かに魔法が発動すればクロノ達にも見えるだろう。しかし流れる魔力なんて見えるものじゃない。

せめて、魔法発動時に足元に展開する魔法陣が見えるくらいである。

だが、レイフオンは違う。

確かにレイフオンは魔導師ではないし、魔法知識も皆無だ。

しかし、レイフオンには通常、一般人なら見えない結界も見えだし、魔法発動前に術者から流れる魔力の流れも、空間を漂う魔力の残照も目で確認することができた。

何より魔法を発動していない状態でも流れがレイフオンには見えるのだ。

だからこそ、魔導師が魔力反応で探知できなくても、レイフオンなら上空から見れば一発でわかるというわけだ。それも大規模ならなおさらである。

隠ぺいのためにそれを隠す結界を張っていても、その結界自体が見えるのだから問題ない。

「本当に見えるのね？」

半信半疑という感じでリンディは尋ねるが、実際他には手はない状態であった。

「はい、見えます」

何のよどみもなく答えたレイフォンにリンディはクロノと視線を合
わす。

その視線にクロノは諦めたように溜め息をつく。

その様子にリンディは笑みを浮かべると、今までの空気を一変させ
るような柔らかい声で尋ねる。

「貴方、名前は？」

「え、レイフォンです」

いきなり変わったりリンディの様子にレイフォンは首を傾げ、そのせ
いで質問にも素直に答えてしまう。

その返事にリンディは一つ頷くと再び口を開く。

「少しこちらのお願ひも聞いてもらえるかしら？」

「え、っと、無理がなければ」

いきなりの要求にレイフォンは戸惑いながら答える。

そのレイフォンの様子にリンディは再び要求を言う。

「クロノと一緒に向こうに行って、リーゼさんを探してほしいの」

その要求はレイフォンにとって何の問題の物だった。

こちらの向こうに行くという要求は吞まれるし、グレアムの策謀も
阻止できる。

何より、レイフォンはアリアの止め方とはやてを救う方法が思いついていなかった。

だから、アリアを止めるという要求はレイフォンにも旨みがある要求である。

「それなら、もう一つこちらをお願いを聞いてくれませんか」

そのレイフォンの要求はリンディには容易に推測できた。

そのため、リンディは何の躊躇もなく頷いた。

「いいでしょう。言ってください」

「…はやてやシグナム達を助けるのを手伝ってくださいませんか？」

レイフォンの要求にリンディは笑みを深める。

「ええ、こちらもそのつもりです」

リンディが同意する返事を送ると、レイフォンもほっとした様子で頭を下げる。

「よろしくお願いします」

レイフォンの切なる願いにその場にいたクルーは皆頷いた。

「感動的で悪いけど、いい加減解放してくれないかい？」

場の空気に乗遅れたクロノは、レイフォンに踏まれたままそう呟くのだった。

第三十五話 夜空が綺麗な夜

書の管制人格に防戦一方になるなのは達には達にはクロノから通信が届く。

『なのは、フェイト、そちらの状況は?!』

「うん、私もフェイトちゃんも大きなダメージは受けていないんだけど」

「でも、かなり押されてる」

なのはとフェイトの言う通り、管制人格の前になのは達は打つ手無しと言われるくらいに追い詰められていた。

『そうか、僕は少しやらなければいけないことがある。だからそちらに優秀な援軍を送った。彼と協力して、何とか時間を稼いでくれ』

それだけ言うとかクロノの通信は途切れ、なのはとフェイトは互いに顔を見合わせて首を傾げる。

「援軍って、誰のこと?」

「えっと……ロツテさんじゃないかな」

見当がつかないなのは達は一番妥当なロツテの顔を思い浮かべる。だが、当のロツテはクロノの手により捕縛されている。そのため、ロツテが援軍として来る確率はゼロに等しい。しかし、そのことを知らないなのは達は、その救援を待った。

「まあ、誰でもいいけど、とりあえず早く来てほしいものだね」

フェイトの横についたアルフの額から少量の血を流れていたが、当の本人は気にすることなくが周囲を見渡していた。

「アルフ……ごめんなさい」

アルフの傷を負った額を見てフェイトは目じりを下げて申し訳なさそうに頭を下げる。

放たれた砲撃を避けきれなかったフェイトを、アルフが身を呈して守ってくれた際にできた傷である。

初期の治癒系の魔法しか使えないなのは達には、アルフの怪我の痛みを和らげることぐらいしかできなかった。

ここにユーノがいればどうにかなった問題だが、ユーノ自身まだ戦闘に出られるほど回復していないし、現在無限書庫で対策を練っている最中である。

そんな傷を負いながらも、アルフはいつも通りフェイトに笑いかける。

「なに、前にも言ったけど、フェイトを守るのは使い魔である私の仕事さ」

その言葉をアルフの本心だが、対象がなのはでも必死にアルフは庇ったであろう。

そのことに気付いたなのはもフェイトと同様に申し訳なさそうに見ていた。

しかし互いを心配する暇すら、状況は許さなかった。

魔力反応を感じ、なのは達はそこから散り散りとなってその場から離脱する。

その瞬間、数十の血の色のした短剣状の魔力弾がなのは達を隠していたビルを穿いた。

崩れ落ちる瓦礫や砂埃とともに現れた管制人格は周囲を見渡した。管制人格の視界には、怪我により逃げ遅れたアルフが映り、先に弱っているものから倒すという定石通りに手を魔力刃で纏いながらアルフに迫った。

「アルフっ！」

「フェイト、こっちに来ちゃだめだ!!！」

傷の痛みから回避が遅れたアルフを助けるために、フェイトは主の身を案じる使い魔の言葉を無視して管制人格との斜線に入る。

「バルディツシュッ!!！」

『H a k e n S a b e r』

フェイトのキーワードに反応し、先端の斧の部分に金色の魔力の刃が形成される。

そのまま気合とともに、大鎌を振り抜き、金色の刃を放った。

が、それは管制人格の右手に形成された魔力の剣に叩き落とされ、そのまま距離を詰められる。

「さようなら」

無表情で管制人格はフェイトに宣告するとフェイトの胸部に魔力の刃が迫る。

その言葉を聞いたフェイトは視界の全てがスローモーションになっていく気がした。

普段なら避けることができるその一撃をフェイトはかわすことなく身動き一つとることができず、

そのまますすべなく、ゆっくりと迫る刃を茫然と見ることでしかできなかった

その刃を砕く一撃が空からは降るまでは。

「きゃあっっ!!」

目の前で突風のような衝撃波が発生し、体勢を崩していたフェイトはそのまま後ろの飛ばされる。

体勢を立て直したフェイトの目に映ったのは白と金の装飾が施された剣を持った――レイフォンの姿があった。

?
?
?

目の前の管制人格である女性の魔力刃を叩き斬ったレイフォンは、そのまま近くの屋上に着地をすると、呼吸を整え目の前の強敵を睨みつける。

そんなレイフォンの姿を見た他の三人は、茫然とその姿を見ていた。

アリアの場所を思ったより簡単に特定できたレイフォンは、クロノの頼みを聞き、フェイト達の援護に来たのである。

睨みあう状態になった中、一番に動いたのはアルフである。

「このクソガキッ！！此処に何しに来たんだい？」

アルフは敵意丸出しの凶暴な顔でレイフォンを威嚇するように睨みつける。

その反応には無理もない。

アルフ自身は一度レイフォンに重傷の怪我を負わされたのだから。

そのため、レイフォンも気まずそうな顔でアルフの方を首だけ向けると、小さく頭を下げた。

「っ！！潰すっ！！」

この状況下でのレイフォンの謝罪の意味のこめたお辞儀は、アルフには挑発行動に見えたようでそのまま怒り狂ったようにレイフォンに襲いかかる。

そのアルフの行動と同時に管制人格も隙を見せたレイフォンに向かって三十もの追尾性誘導弾を放った。

そんな二人の行動に対し、レイフォンは冷静に対処した。

アルフに向かって手をかざし、掌から軽い衝刺を放ってアルフの動きを一瞬遅らせると、そのまま天剣に剄を流し、振り向きざまに迫る誘導弾の全てを切り裂き、叩き潰した。

内力系活剄の変化、旋剄。

地面の踏みしめながら、近場の建物の壁を蹴っては、再び違う建物の壁に向かって飛ぶ。

その予測のつかない動きをしながら、徐々に管制人格との距離を詰めていく。

その接近を防ぐために管制人格は誘導弾を放ち続けるが、その誘導弾が捕えるのは先程までいたレイフォンがいた足場であった。

確実に距離を詰めるのはレイフォンであったが、この動きには弱点というものがある。

それは建物などがある所、つまり足場があるところでしか飛び移れないのだ。

レイフォン自身空は飛べないからこういう動きしかできないのである。

そのことを理解した管制人格は、周囲の建物を一掃するため砲撃を薙ぐように放った。

その砲撃はレイフォンをも呑み込もうとするが、次の瞬間レイフォンの身体が霧のように消える。

その現象に瞬時に悟った管制人格は、上空を見上げる。

そしてその視界には天剣に剄を纏わせたレイフォンがいた。

その光景は管制人格の予想通りであったが、一つだけ予想外だった。

「幻術ですか」

そこにいたレイフオンは、一人ではなく、五人ほどこいたのだった。無表情で呟いた管制人格の顔には微かな驚愕が混じっていた。

活剏衝剏混合変化、千斬閃。

五人のレイフオンはそのまま剣に纏った剏を閃断として放った。

飛来する五つの斬撃の衝撃波に管制人格は右手をかざし、シールドを展開した。

その強固のシールドに五つの斬撃は弾き消された。

その様子に管制人格は、違和感を感じたが、その前に第二射を放とうとするレイフオン達に向かって魔法陣を描く。

レイフオン達にバインドを決めると、そのまま連続で詠唱し始める。

「刃^も以て、血に染めよ。穿^{うが}て、ブラッディダガー」

血の色のした短剣状の弾丸は、そのまま動きを止めたレイフオン達を貫いた。

その様子を見た管制人格は、腑に落ちない様子でその光景を注意深く眺めていた。

その瞬間、土埃で隠れた地上から数十の鋼糸が管制人格に巻きついた。

「はあっ！ー！」

ロケットのような爆発的加速力でレイフオンは鋼糸の先の管制人格

に向かって突貫する。

「ちっ！ 闇に、染まれ」

デアボリック・エミッション。

広域空間攻撃魔法。

管制人格を中心とする球形の魔力の波が現れ、爆弾のように中心部から外周部への向きで衝撃が広がり、レイフォンを呑みこもうとしていた。

その波にレイフォンは体中から衝剄を放ち、そして天剣に剄を巡らせる。

外力系衝剄の変化、轟剣。

通常刀身の五倍以上伸びた巨剣で、波を切り裂き管制人格に斬りかかる。

互いの一撃は交差し、周囲を巻き込む爆発を起こした。

?
?
?

「なんというか、でたらめだね」

その戦闘を遠くから見ていたアルフは、ぽつりと呟いた。

人間をやめたような目にも止まらぬトリッキーな動きで接近戦を挑むレイフォンに、高ランク魔法をバンバン放つ管制人格の戦いは、広い次元世界でもそうそう見ることでできない壮絶な戦いである。

その様子は隣でいたなのはとフェイトも同様でその感想に共感するように頷き返す。

なのはとフェイトもこの年であそこまでの魔法を放つことから、他の者からすれば異常そのものだが、その彼女達から見ても目の前の戦いは目を見張るものがある。

そんななのは達がいる近くの屋上にレイフォンが着地した。

「ふう、死ぬかと思った」

そうぼやくレイフォンの身体は煤や埃で黒く汚れ、腕や額には小さな切り傷ができていた。

目に入る血を拭いながら、レイフォンは遠く向こうで陣取る管制人格の動きを見る。

遠く離れた管制人格の左手は、大きく手首から肘にかけて切り裂かれていた。

しかし、次の瞬間にはその傷は物の見事に修復されていく。

その様子を見たレイフォンはこのまま戦っていても埒が明かないと思ひ、こちらを凝視するフェイト達の方に向き直る。

「あれってどうすればいいの？」

餅は餅屋、ということでレイフオンはフェイト達に尋ねてみる。
実際、レイフオンは管制人格のことは本当に言葉だけ知ってるだけで、アレがどういうものかもわからない。

蒐集行動の方針はシグナム達に任せっきりで、はやてを救うという結果騙された計画もグレアム達に任せっきりだった。

そんな魔法知識ゼロのレイフオンに対し、アルフは威嚇しながら口を開く。

「そんなの知るかつ！！ つるんでたお前の方が知ってるだろうっ！」

友好的ではないアルフの返答にレイフオンはなのはの方を見る。
その視線になのはは驚いたように口を開く。

「えっ、私っ！ ちょっと私も分からないよ……ただあの人にシグナムさん達が吸収されたことしか」

まだ、魔法を知って間もないなのはもレイフオンほどではないが魔法知識がないためレイフオンの疑問には答えることができなかった。

レイフオンは最後に残されたフェイトの方を見るが、フェイトが困ったように顔を振るのを見て聞くことを辞めた。

となると手段は限られてくる。

「じゃ、クロノさんに聞いてくれない？」

アリア確保を行っているクロノに通信を頼むがアルフが気に入らないのか口を挟んでくる。

「そんなの自分で聞けばいいじゃないか」

その言葉にレイフォンはに苦い顔をしながら答える。

「ごめん……僕は通信できない」

魔導師はおろか、リンカーコアすらないレイフォンには通信すらできないのである。

蒐集の際はザフィーラやシャルが傍にいたから重要視していなかったが、この場になるとその重要さが身にしみる。

そのレイフォンのことを察してフェイトがアルフをたしなめるように口を開く。

「アルフ、今はそんな状況じゃないよ」

フェイトがレイフォンを庇うような発言を聞いたレイフォンはアルフに向かって頭を下げる。

「アルフ……さん。あの時は済みませんでした」

フェイトの言葉とレイフォンの謝罪にアルフはバツの悪そうな顔をして答える。

「私はいいよ。フェイトに謝ってくれたら」

アルフの怒りは自身が怪我を負わせたこともあるが、それ以上にフェイトを危険に陥れたことが原因であった。

そのため、あまり気にしていないフェイトの様子をみて怒りの余韻

を収めていく。

そのアルフの言葉を聞いてレイフォンは、済まなそうにフェイトの方へ向き直り再び頭を下げる。

「ごめん、フェイトさん」

レイフォンの謝罪を受けたフェイトは少し慌てながら首を振りながら答えた。

「ううん、私も良いよ……えっと、そう言えば貴方の名前聞いてなかったよね？」

レイフォンの名前を呼ぼうとしたフェイトは、レイフォンとあの時名前の交換ができていなかったことを思い出し、場が場だが名前を尋ねた。

「え、…レイフォン」

もう名前を隠す必要性がなかったため、聞かれるままに自身の名前を言うレイフォンに対し、フェイトは名前を聞いたことに笑みを浮かべて喜んだ。

「うん、レイフォン。 私はフェイトだよ、で、こっちがなのはで、私の使い魔のアルフ」

自身の自己紹介から隣のなのはからアルフの自己紹介もしていく。

振られた二人は対照的な顔つきで答える。

「高町なのはです。よろしくね、レイフォン君」

「とりあえずこれが終わったら一発殴らせてもらうよ。それでチャラだよ」

笑顔で答えるなの是对し、不機嫌を隠すことすらないアルフの自己紹介を聞いたレイフォンは再度、三人に頭を下げる。

「図々しいかもしれないけど、はやてとシグナム達を助けるのを手伝ってほしい」

必死に頭を下げるレイフォンの言葉に誠意を感じたなのは達三人は力強く頷く。

「もちろんだよ。私はまだはやてちゃんやヴィータちゃんとお話していないし」

「私もシグナムと決着つけたいし、話もしたい」

「まあ、あの狼にこのまま消えられても気分が悪いしね」

三人の言葉にレイフォンは感謝の意味を込め、数度目のお辞儀をした。

第三十六話 家族と主

はやては気がつくところこそは何も見えない闇の世界だった。

誰の気配もなく、何も見えない。

そこははやて一人の世界だった。

そんな世界ではやては何も考えずにいたかった。

そうしなければ悲しみに押しつぶされそうだったから。

こんなはずじゃなかった。

はやて自身は何も特別なことを望んでいなかったのに、レイフォン、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、大切な家族を失ってしまった。

そして失ってから気付いた痛み。

それははやてが遠い昔に負い、そして忘れていた痛みであった。

その痛みは、孤独の寂しさよりもずっと苦しいものだった。

だからこそはやては思う。

始めから間違いだったのだと。

?
?
?

目の前の少年のことが理解できなかった。

彼は主である八神はやての家族で、友である。

守護騎士達にも信頼が厚く、そしてこちらの理解者だったはずである。

それなのに……

「どうして貴方は私の邪魔をするのですかっ!!」

苛立ったように管制人格は、迫るレイフォンを撃ち落とすために散発の砲撃を放つ。

しかし、無数に拡散された砲撃の網をレイフォンは潜るように避けきり、次の足場であるビルの上に着地をした。

「落ちなさいっ!!」

その着地の瞬間を狙った管制人格は、蒐集により手に入れたなのはのデイベインバスターをレイフォンに向けて放った。

本家であるなのはの砲撃にも勝るとも劣らない砲撃がレイフォンに迫るが、

外力系衝剄の変化、轟剣。

本家のなのはの砲撃を斬ったレイフォンには、問題はなかった。剄を纏ったレイフォンの天剣による一撃により真っ二つにされた。

その光景を見た管制人格は、距離を取りながらブラッディダガーを周囲に展開する。

照準をレイフオンに合わせた瞬間、管制人格の目の前を桜色の砲撃が横切る。

反射的に飛来方向を見るとそこには、レイジングハーを構えるのはがいた。

その目には先程まで見せていた迷いという弱さは無くなっており、強い意志が宿っていた。

その姿に何故か管制人格自身に原因が分からない苛立ちを感じた。

その苛立ちを取り除くため、管制人格はなのはに向けて左手をかざす。

だが再びそこに邪魔が入る。

かざした左手の手首にバインドが掛かり、同時に上空に展開した金色の矢が管制人格に向かって降り注ぐ。

降り注ぐ矢に管制人格管は、シールドを展開しそれを防ぐが、次の瞬間、横腹に衝撃が起きそのまま吹き飛ばされた。

管制人格は吹き飛ばされながら体勢を立て直し、視線をそこには蹴りを放った体勢のレイフオンが、そしてその後方には足元に魔法陣を展開し詠唱するフェイトとその前で主の詠唱を守るアルフの姿があった。

その二人を見て、再び管制人格の中に苛立ちという奇妙な感情が生まれた。

「アルカス・クルタス・エイギアス…」

何故かは、管制人格には理解できなかった。だが、

「疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかけ…」

なのは達がレイフォンの傍にいることに、

「バルエル・ザルエル・ブラウゼル……フォトンランサー・ファランクスシフト」

無性に怒りを覚えることに感じた。

「撃ち碎け、ファイアー!!」

フェイトが指揮棒を振るうようにバルディッシュを振るうと、フェイトの後方に展開する30発以上のフォトンスフィアが管制人格に向かって襲いかかった。

迫る脅威から逃れようとした管制人格の腰と右腕に何か引っ張られるような感じがした。

目を凝らし、右腕に巻きついているものを見ると、そこには目を凝らせなければ見えないほどの細い糸が巻きついていた。

そしてその先にはレイフォンの手が握られており、そのことに気付いた管制人格は回避は不可能と判断し、迎撃を選択するがその前に両手首、両足首に桜色のバインドが決まっていた。

「ディバイン…」

その声が聞こえたのは、管制人格の頭上。

そこにはなのはがレイジングハートを構えていた。

その先に溜まった魔力の量を見て、管制人格は危険と判断するが、それは既に遅かった。

「バスターツ！！」

正面から来る無数の矢群に頭上から迫る桜色の閃光に管制人格の身体は吞まれた。

? ? ?

「おおっ！これなら立てないはずだよ！」

「凄まじいね……」

なのはとフェイトの連携が直撃したことに歓声を上げるアルフに対し、隣でアルフに捕まってるレイフォンは呆れたように呟いた。

なのはとフェイトの連携は、レイフォンから見ても凄まじく感じた。剋と魔法の差があるが、技の規模からすると天剣クラスに匹敵するかもしれない。

しかし、当に本人達は険しい顔のまま、白煙で見えなくなった向こうを見ていた。

そして、白煙がはれ、そこに現れたのは両手を黒く焦げ、呼吸の乱れた管制人格が現れた。

「はあはあはあ……末恐ろしい才能ですね」

苦痛で顔を歪めたまま呟く管制人格に、なのは達も同様に驚いていた。

手応えからタイミングからして避けることもできない直撃だったはずだ。

しかし、ダメージを負ったのは両腕のみようだった。

「そうか、両腕にシールドを展開してそれで逸らしたのか」

両腕の負傷を見たレイフォンが、管制人格のあの時とった行動が理解できた。

そのレイフォンの言葉に管制人格も自身の両手を元通りに再生しながら頷く。

「はい、アレを直撃すれば、私でも危ないと判断しました」

簡単にそういつてのけるが、実際は至難の業である。

フェイトの魔弾となのはの砲撃を両手に装着した傾斜と回転を加えた特殊シールドで流したのだろう。

一歩間違えれば、全弾被弾と言うリスクを払って、だ。

しかし、この魔導師…夜天の書の管制人格はやつてのけた。

その行為にレイフォンは近くの屋上に飛ぶ移ると、体中に剉を巡らせる。

「なら、今度は直接叩く」

天剣に剄を巡らせたレイフォンに管制人格は何処か憐れむように見つめる。

「貴方は我が主八神はやての家族ではなかったのですか」

その言葉にレイフォンは目を細め怪訝な顔つきで答えた。

「そうだ。僕ははやての家族だ」

それはレイフォンの本心であり、事実である。

そのレイフォンの答えに管制人格は目を俯き、悲しげに答えた。

「なら、何故邪魔をするのです？ 私は主の願い、その二人を落とし、この悲しい世界を終わらせようとしているのですよ」

そのまま殺意を秘めたぎらついた瞳で管制人格はなのは達を睨みつける。

管制人格の中から溢れだすはやての悲しみや騎士達の無念は、それは管制人格にとって晴らさなければならぬものだった。

それを聞いたレイフォンは驚き、そして自分の馬鹿さ加減に気がついた。

自分がいなくなったことで、騎士達は変わったとクロノから事前に聞いていたが、その主であるはやてにも何かのダメージが残っていてもおかしくはない。

その事実レイフォンは思わず俯かせて聞き返した。

「……それは、はやてが本当に願ったことなの？」

その言葉に管制人格は頷くと、はっきりとした口調で答えた。

「ええ、主はそう絶望の中でそう願いました。私は主の願いを、最後の願いを叶えようとしているのです……私は貴方を傷つけたくない……引いてください」

最後は、懇願に近い命令。

それははやてや騎士達の本心なのだろう。

その言葉にレイフォンの答えは一つしかなかった。

「そう……なら僕ははやてを叱らなきゃいけないね」

少し、顔を緩めてレイフォンは答えた。

そのレイフォンの様子に今度は管制人格が怪しむような目つきでレイフォンを睨みつける。

そんな視線にレイフォンは動じることなく、言葉続けた。

「最後なんて願っているはやてを叱って、……その後、僕もシグナム達と一緒に怒られなきゃ、ね。隠し事や嘘をついたんだから」

レイフォンの言い分に、後方にいたなのは達も、そして前方にいる管制人格も言葉を失った。

悪いことをしたから謝る。

ただ、それだけである。

その硬直から一番に抜け出したのは、話の元の管制人格であった。

「馬鹿な、そんな問題では…」

「君もだよ。君も一緒にはやてに怒られて、……その後、皆ではやての鍋を食べるんだ」

管制人格の言葉を遮るようにレイフォンは言った。

戦って、話をしていて気付いたのである。

はやての願いのために戦い、最後には主であるはやてを死なせてしまうことに涙することに。

—彼女—もはやての家族なのだと。

だからレイフォンは天剣に剄を流し込んだ。

「まずは、はやての説教からだ」

家族を叱るためにレイフォンは足を踏み出した。

内力系活剄の変化、旋剄。

ビルの屋上から跳び、風となったレイフォンに三十の誘導弾の雨が降り注ぐ。

レイフォンはその雨を潜り、足元にできた誘導弾という足場を踏み抜いた。

内力系活剄の変化、水鏡渡り。

残像を残すほどの超加速をしたレイフォンは管制人格に迫り、そし

てその身体に天剣を突きたてた。

第三十七話 まぼろし

「レイフォン、いつまで寝ているのっ!？」

「ぐえ」

えいっという掛け声とともに、レイフォンは目覚めた。

「いててて……」

まともに床にぶつけた頭を押さえながらレイフォンは目を開く。ぼやける視界に映ったのは、見慣れた修理を重ねた天井に、壁紙が剥げた壁が見えた。

寝起きのせいか、働かない頭を振りながらこの声の主を探す。

「もう、レイフォン。今日はお父さんと訓練する日だったでしょう」

頬を膨らませて、不機嫌そうに言う――リーリンの姿があった。その幼馴染の顔を見て、レイフォンは何処か違和感を感じた。

そんなレイフォンの様子にリーリンは首を傾げる。

「どうしたの？」

「うん、何でもないよ」

リーリンの心配するような声にレイフォンは頬を二度叩き、頭を正気に戻すとリーリンに向かって笑みを浮かべた。

「おはよう、リーリン」

いつも通りレイフォンは朝の挨拶をリーリンに向けた。

?
?
?

レイフォン達と管制人格の戦いを見守っていたリンディを含むアースラのクルー達は騒然としたブリッジ内で指示が飛び交っていた。

「モニターの再起動まだなのっ?!」

「駄目ですっ!! 向こうからのジャミングでっ…」

メインモニターは先程まで流れていた通信はレイフォンが呑みこまれ、管制人格がなのは達の襲いかかった時に途切れたため、向こうに取り残されたフェイトやなのは達の安否が心配されていた。

「なのはさん…フェイトさん…アルフさん…無事でいて」

両手を組みなのは達の無事を祈るリンディは、内心駆けつきたい気持ちでいっぱいだった。

だが、艦長であり、一番上官のリンディが向こうに行くということには現状できなかった。

闇の書の暴走が起きれば、リンディは非情でもっとも被害を抑える

行動を取らなければならないからだ。

その時、アースラのメインモニターに通信が送られる。

現れた映像からはボロボロになったバリアジャケットに身を包んだクロノの姿だった。

『クロノです。リーゼアリアの捕縛を完了しました。……現状はどうなっていますか？』

「レイフォン君が書に取り込まれ、現在管制人格となのはさん達が交戦中よ。こっちもさっき映像が途切れたわ」

「……そうですか。では僕が向かいます」

レイフォンが取り込まれたという事実にはクロノは一瞬驚いたように目を見開くが、すぐにいつも通りの冷静な姿に戻り、リンディに向けて救援の許可を求める。

その提案は、疲弊しているであろうクロノにとって無茶そのものだろう。

何よりそれはリンディには重く、思わず十年前の最愛の夫であるクライドを失くした時を思い出してしまう。

今度は息子であるクロノがいなくなるのではないのか？

だが、クロノを送らなければなのは達を失うかもしれない。

管理局の人間として選ぶのであればクロノを行かすことが正解であろう。

だが、母として選ぶとするのなら、クロノを行かすべきではないのだろうか？

究極の選択に顔を苦しそうに歪め、泣いているようなリンディに対しクロノは口を開く。

「僕は母さんを尊敬しています。いつも毅然とした態度でクルー達を引っばっていく母さんに」

「クロノ？」

いきなりのクロノの告白にリンディは意味もわからずにただクロノの方を見る。

そんなリンディの姿を見て、クロノは少し顔を緩めると再び口を開く。

「父さんも尊敬しています。あまり記憶にないですけど、最後まで職務を全うし、出来るだけ多くの人間を救おうとした父さんに……」

クロノ自身はあまり記憶にないことだが、周りの人間や母、残された映像から父クライドの雄姿を知った。

クライドは最後の最後まで生きようと、そして助けようとした。

そんな二人の姿が格好良くて、憧れた。

「母さん達を目標に僕は管理局に入り、執務官になりました」

思い通りにならない世界の中、苦しむ人を助けたい。

そう思い、クロノは戦い続けた。

「だから、母さん。行かせてください。なのはやフェイト、そして書の主の八神はやてを救うために」

クロノの言葉に、リンディは思わず思ってしまった。
親子とはやはり似るものだ。

「わかりましたクロノ執務官、急ぎ現場に向かってくれますか？
こちらの問題は私が全て受け持ちますので、現場のことだけかんがえてください」

息子の急激な成長を感じながら、リンディは遂に決断した。

そのとき、管制の扉が静かに開いた。

?
?
?

目の前に立つデルクに鋼鉄錬金鋼性の刀の刃先を向けて油断なく構える。

対するデルクもレイフォンと同様に構えるが、何処かその構えには
余裕があった。

そして、先に動いたのはやはりレイフォンだった。

内力系活剷の変化、水鏡渡り。

小細工無しのレイフォンの一撃は、デルクに流すように受け止められて、そのまま腹部に蹴撃が襲う。

だが、後方に瞬時に飛んだレイフオンは、威力を殺し、速やかに体勢を立て直そうとするが、それより先に先程のレイフオンにも劣らない踏み込みでデルクが詰め寄る。

サイハーデン刀争術、焰切り。

抜き打ちから一撃をレイフオンは常人離れした反射速度で止める。が、次に炎剽とともに襲う衝剽に身体が吹き飛ばされる。

足の浮いたレイフオンは、一瞬動きを封じられると、それを狙い澄ましたデルクの刺突がレイフオンに迫り一ぎりぎりのところで止まった。

「無駄な動きが多すぎたな」

「うん……」

普通から見ればレイフオンの動きに無駄などなかったのだが、同門でよりサイハーデンの修行を積んだデルクの方が練度が高いのは言うまでもない。

その差が此処に出たのである。

だが、レイフオンはそれよりもこの光景に違和感と疑問を感じていた。

何故、天剣ではなく、刀を握っているのだろう、と。

その後、道場に呼びに来たリーリンの後姿をデルクとともに追いながらもその違和感が消えることはなかった。

食堂に辿りつき、レイフォンは定位置に着席するとそこにはリーリンの料理が並べられていた。

昔からリーリンが作る料理を食べていたのに何故かそれが懐かしく感じた。

「こらあっ、！！ファイルにテルファ、壁に落書きをしたら駄目って言ってるでしょうっ！！」

「ヤバイ、リーリン姉ちゃんが怒ったっ！」

「え、ごめんなさい〜〜！」

料理から視線を上げてみると、そこには孤児院の皆で囲む巨大な机の周りを悪戯をした子供達を追いまわすリーリンに、カップを片手に新聞を読みふけるデルクの姿があった。

「あ、シチューだ」

「やった、お肉が入ってる」

リーリンの作った朝食を頼張る孤児院の仲間達。

その光景を見て、レイフォンは穏やかな気持ちになる。

そうだ、とレイフォンが思い出した。

これがレイフォンが望んだ光景であり

そして、これが守りたかった物。

「ああ、そうだった……」

「レイフォン？」

レイフォンの呟きにいつの間にか追いかけて止めたリーリンに、新聞から視線をこちらに向けたデルク、料理からレイフォンに興味を移す孤児院の皆が心配するようにこちらを見ていた。

「…帰らなくちゃ」

席から立ちあがったレイフォンをリーリンは悲しそうな目で見つめていた。

「帰るって……何処に？」

「やらなきゃいけないことがあるんだ」

立ちあがったレイフォンはリーリンに向けて笑みを浮かべる。

会いたかった。

帰りたかった。

レイフォンははやて達とともにいた時でも、リーリン達のことを心の何処かで思っていた。

できれば、こうしてこの穏やかな日々に浸っていたい。

しかし、それはできない。

「はやて達を迎えにいかなきゃ」

はやてやシグナム達と過ごした時間を無しには出来なかった。

レイフォンの告白にリーリンは顔を伏せて微かに聞こえるような小さな声で呟いた。

「此処から出ても、悲しいことしか待ちうけてないかもしれないよ」

「うん、そうだね……でも行くよ」

レイフォンはリーリン達から背を向けて。いつの間にか手に握られていた天剣を復元させる。

天剣を振り上げ、レイフォンは天剣に莫大な剄を流し込む。

「……いつか、リーリンや義父さん達、皆の所へ帰って話すよ。」

僕が出会った八神家という第二の家族のことを」

外力系衝剄の変化、轟剣。

鋭く、強固な剣は壁が破壊し、その向こうの結界すら切り裂いた。その向こうで確かにはやての気配がした。

そのはやてのいる方角に向けて、レイフォンはもう振り向くことなく足を踏み出した。

「…いつてらっしゃい、レイフォン」

柔らかく優しい響き。

そのリーリンの言葉にレイフォンの足が一瞬震えた。

だが、それは本当に一瞬でレイフォンは足を一步踏み出した。

「……いつてきます。リーリン」

内力系活剋の変化、旋剋。

いつものように答えたレイフォンは、そのままはやての元へ飛んだ。
その横顔は微かに笑っていた。

第三十八話 名前

ギル・グレアムは自身の孫のような存在ともいえるクロノとの対話を終えて、彼がこの場から過去と決別するために飛び去る姿を見ながら、自身の計画が完全に破綻したことについて考えていた。

数十分前にアリアのサポートを受けながら封印の準備を完了し、計画の最終段階に入った時、現れたクロノとレイフォンによって潰された。

グレアムは戦闘の末クロノの手によりに捕縛され、そしてアリアはレイフォンに一蹴された。

数年の時間を有した計画を立った数十秒で潰されたことに茫然としながら、グレアムは全てをクロノ達に語るしかなかった。

八神はやてをデュランダルを用いて、書と一緒に封印すること。

クライドという息子のような男をみすみす死なせてしまったグレアム自身に怒りを覚え、その怒りから闇の書の完全封印を行おうとしたこと。

はやてが書に主選ばれたと気付いた時、封印の生贄として扱うことにしたのはやてへの罪悪感から彼女への援助を行い、本局の倉庫からジュエルシードを盗み出し、偽物とすり替え、

そのジュエルシードではやての寂しさを和らげるため、封印されたとき一人で寂しくないようにはやてと共に封印する生贄……レイフォンを呼び寄せたこと。

全てを話した時、予想通りクロノの顔には怒りとともにやり切れない

い気持ちが見えていた。

この様な卑劣なことを行ったグレアムに対する怒りと、あの事件の同じ被害者からの憐れみが混ざって顔に出ていた。

しかし、レイフォンは違った。

グレアムの頬に一撃を放ったあと、顔を緩めながらこう言った。

貴方のおかげではやてや守護騎士に出会えた。感謝している、と。

一人ぼっちで苦しんでいた時、貴方の存在、貴方の支援ははやての救いだったと思う、と。

その言葉を残しレイフォンは、今も苦しんでいるはやての元へ向かった。

その言葉は罵倒される覚悟も、罰を受ける覚悟も、死ぬ覚悟すらしていたグレアムの心を抉った。

その言葉にグレアムは自身のするべきことを見つめなおし、立ちあがった。

?
?
?

「此処……かな？」

レイフオンは視界ゼロの暗闇の中、はやての気配を探りながら同じような所を彷徨っていた。

近くまで来ている筈なのにはやての姿が見当たらず、目の前に広がるのは同じような空間である。

そのことにレイフオンは結界という言葉を出す。

それは対象物以外を遮断し、他を寄せ付けないとシャルから聞いたことがある。

今の状態がそれに近いと思ったレイフオンは天剣に剄を流す。

「なら破壊するまでだ」

その場にあると思われる見えない壁を破壊することにした。

外力系衝剄の変化、轟剣。

何度もよく似た物を壊してきたレイフオンは同様に破壊できると考え、天剣を振り下ろしたが、結界を斬った手応えなんてものはなく、ただ天剣は空を切るのみに終わる。

「なら、これならっ！」

外力系衝剄の変化、円礫。

続いてレイフオンを中心として衝剄を放ってみるが、これと言った反応はなく、衝剄は暗闇の向こうへと消え去った。

全く反応がなかったことにレイフオンは自身の考えは間違いだった

のかと考えたが、どの道レイフォンに他の考えは浮かぶことはなく、確実なはやての気配を頼りにレイフォンは天剣を振るう。

それを何度繰り返したか、既に体感時間では数時間は経っている気がした。

焦りを感じながらも、レイフォンはがむしゃらに剣を振るう。

はやてを諦めるなんて言葉は存在しない。

だが現実とは無情であり、見えないもの、存在自体があるか分からないものを切り裂けるわけなんてなかった。

それでも、レイフォンは剣を振るい続けた。

はやてを救う、それだけを想い、レイフォンはひたすらに剣を振るい、はやての元へ向かおうとした。

その一途にして強固な思い。

その思いにレイフォンの胸元に光る宝石が答えた。

光が回りを照らし出す中、レイフォンの振るう天剣が何かを切り裂いた。

微かだが感じた手ごたえにレイフォンは顔を上げると、そこに一筋の光の線が現れた。

その線を見て、レイフォンは本能的に悟る、向こうにははやてがいると。

確証のない確信にレイフオンは天剣に再び巨大な剄を巡らせる。

外力系衝剄の変化、轟剣。

巨大で鋭い光剣は空間を切り裂き、そしてレイフオンの行く手を遮る壁を打ち砕いた。

白い粉塵が舞い上がり、レイフオンは細めた視界の先に遂に見つけた。

眠っているように宙を漂うはやての姿がそこにはあった。

その姿にレイフオンは一步踏み出した。

「っ！！」

が同時に突然襲った胸の痛み思わず、膝をついてしまう。

胸に疼く激痛のせいで荒くなる呼吸を抑えながらレイフオンは、左手を患部の胸元に当ててみる。

「っ……」

そこにはべっとりとした鮮血が服の下から滲んでおり、その個所はレイフオンが先日受けた傷の場所と同じ場所であった。

傷が悪化したのかとレイフオンは思ったが、此处では傷の手当てができないため、はやてを救うことを優先した。

一步踏み出すごとに全身の力は奪われていき、その感覚がレイフオン自身を死に近づけていることを理解していた。

レイフオンは知らなかったのだが、先日レイフオンが負った致命傷を治したのは、あのジュエルシードのおかげある。

心臓を貫かれ、瀕死状態のレイフオンの死に際の願いである『死ぬわけにはいかない』という願いに反応し、ジュエルシードは心臓の役割を果たし、超高速の蘇生でレイフオンの傷を癒した。

だが、先程願った『はやてに会いたい』という願いとすり替わったため、レイフオンの身体はあの時の瀕死状態元の状態に戻していく。

血を流しすぎたせいでレイフオンの足元がふらつき、レイフオンは倒れた。

その際、レイフオンの胸にくっついていたジュエルシードが外れ、そのまま闇の向こうへと消えていった。

ジュエルシードがレイフオンから離れたことにより、胸の傷から大量の血が流れていく。

「は…や……て……」

あと一歩といったところまで辿りついたのにレイフオンの身体はそれ以上動くことはなかった。

霞んでいく視界の中、レイフオンは眠り続けるはやてに手を伸ばし、遂に意識を手放した。

意識を手放す瞬間、レイフオンの耳元に弱弱しい風が舞った気がした。

? ? ?

「レイ君……?」

一人で暗闇の中を佇むはやての耳に、レイフォンが自身の名を呼ぶ声がした。

空耳かと思い、顔を上げて耳を澄ます。

「レイ君……ここに来とるん?」

微かに聞こえた声にはやては初めてその場から立ちあがった。

自身の足で歩いている現状すら忘れ、はやては声がする方へと歩き出した。

「主はやて」

あてなく歩き始めたはやての後ろから声が聞こえた。

その声にはやては振り返ると、そこには銀の髪的女性がいた。見覚えのない、しかし、何処かであったことのある気がした。

「貴方は?」

はやてが女性に尋ねると、女性は膝をつき、頭を下げる。

主に忠誠を誓う騎士のような振る舞いを取った女性は静かに口を開いた。

「私は書の管制人格を務める者です」

はやての質問に対し女性―管制人格が答えたことは正解であり不正解であった。

「えっと……名前は何て言うん？」

書という所からシグナム達と同様の守護騎士のような存在だというのは理解したが、はやてが聞きたかったのは彼女の名前だった。その問いに、彼女は機械的に答えを返すだけだった。

「名前はありません」

その言葉にはやては考え始める。

管制人格にとって名前というものはただの記号のようなものと考えていたが、人のこととして生まれたはやてにとって名前というものは親から大切に付けられた自分だけのものである。

その大切さを理解しているため、名前のない彼女が何処か不憫に感じた。

はやての心境の機微を読んでなのか、それとも自身のことでここまです心配してくれるはやてのことを嬉しく思っただけなのか、無表情の管制人格は頬を緩めながら答える。

「主が気にすることではありません」

その管制人格の言葉にはやてはあることに気付いた。

彼女達の主ははやてである。

つまりははやては、彼女らの親のようなものだというのはやて的理論が答えとして導き出された。

「よっしっ!! じゃあ、名前をつけてあげるな。その前に聞くけど
なんか希望はある?」

「はい?」

はやての思考についていけない管制人格は、呆けた返事を返すのが
精一杯だった。

そんな彼女のことを気にすることなく、はやては名前を考えていた。
この時彼女の頭には、少し前に芽生えた憎しみや悲しみはなく、彼
女に良い名前をつけてあげるそれだけだった。

名前というだけあって時間が掛かることと想っていたが、はやては
彼女の姿を見て、すぐに名前が出てきた。

元々あった彼女の名前のようにはやてはその名前を呼んだ。

「リイン…フォース……」

ぼそりとその名を呼んでみると、考えたはやても思ってしまうくら
い美しい響きでこの目の前の美麗な女性に相応しい名前だった。

名が決まりはやては視線をそちらに向けると、先程まで固まってい
た管制人格は再びはやての前に膝を突いていた。

その姿にははやては笑みを浮かべるとそのまま口を開いた。

「主はやての名において汝に新たな名を贈る……強く支えるもの、
幸運の追い風、祝福のエール、リインフォース」

そう紡いだ時、ここにははやては本当の闇の一夜天の書の主となった。
そして、彼女ーリインフォースの頬に一筋の滴が垂れた。

第三十九話 世界で一番幸せな魔導書

書の管制人格ーリインフォースは、書の中で自身の主であるはやてのを見ていた。

守護騎士達と生活をしているはやてはいつも楽しそうに笑い、その笑顔はとても幸せそうで優しく、心を暖かくさせるものだった。

だが、リインフォース達のせいで、はやての下半身が麻痺が悪化し、それが原因ではやてを苦しめる事実は、リインフォースの心を痛み、そして誰にも見せないように涙を流すはやての姿を見たとき、自身の存在を…書の存在を恨みたくなった。

何故この優しい少女を命が奪われるのかと、いるはずもない神に問いかけたことは一度ではない。

リインフォースは八神はやてを助ける方法を考えようとした。

が、所詮自我があるとはいえプログラム。

大元のシステムに触れることはできず、自身の思考にも限界を感じていた。

結果、救えない事を理解してしまったリインフォースは、せめてもの願いとしてはやてが望む家族との安らかな生活が長く続くことを祈っていた。

だが、その願いも脆くも崩れ去ってしまった。

失っていく家族の姿を見たはやてから憎しみと悲しみを感じ、リインフォースは破滅への階段を上り始めた。

リインフォースの覚醒は、主の死に直結している。

ゆえにせめてものの願いとして、リインフォースはあの優しい少女が恨み悲しむ世界を破壊することで、最後のはやての願いを叶えよ

うとした。

しかし、その行動は一人の少年によって止められてしまった。

レイフォン・アルセイフ。

遠い世界からの異邦人は、主はやての大切な家族の一人であり、はやてを孤独から救ったヒーローであった。

死んだと思われていた彼は、主はやてを救うために剣を取り、リインフォースの前に立ちふさがった。

レイフォンが振るった剣筋は美しく、儼く、力強かった。

何より彼の目は主はやてやシグナム達を救うことを考えていた。

書の中へ取り込んだ後も、彼は優しい夢を振り切り主はやての元に向かった。

愚直で必死なその姿にリインフォースは現実という考えから無謀という希望に賭ける決意をした。

レイフォンという小さな英雄に……

たとえば、この命が尽きても……そうリインフォースは決意した。

?
?
?

リインフォースとの神聖な儀式を終えたはやては気になっていたことを尋ねた。

「あのなリインフォース、いきなりで悪いんやけど、ここって何処なん？ 真っ暗で壁や天井はおろか、床すら見えんのやけど」

はやては気付いた時には既にこの状態である。

思い出そうにも、病院ですずかと話していたところから記憶がぷつぷつと切れており、こんな真っ暗闇の部屋の記憶などなかった。何より、

「何で私は歩けるん？」

はやては自身の足でしつかりと立ち、何の問題もなく歩いているのだ。

車椅子生活だったはやてにとってそれが一番の違和感であった。

そんなはやての質問に対し、リインフォースは優しく笑みを浮かべて答える。

「はい、では一番初めの質問からですが、此处は書の中といえ一番わかり易いかも知れません」

普通の人間がそう聞けば意味が分からない説明だが、魔法という存在を知り、本当に書から人間が出てきたはやてには理解ができた。そして、書という言葉が何の本を指すが分かっていた。

「書ってあのシグナム達が出てきた、あの闇の書？」

シグナム達に聞いて初めて名称を知った本である。物心つく頃には、既に自宅の本棚に収容されており、書の回りを鎖

で巻き付けられていたせいで、開くことができなかった代物である。

はやての言葉にリインフォースは捕捉を入れながら説明を続ける。

「はい、正確には夜天の書という魔導書です。ここはその書の中に広がっている異空間で、壁や床などは存在しません」

異空間という言葉に、はやてはついていくことができず唸り始める。確かに魔法という存在を知ってはいたが、一度もそれらしいものは見ていないのだ。

シグナムに魔法を見せてといった時に、剣を取りだした反応にはやはり魔法の禁止を言い渡したのだから。

例外として唯一魔力通信の念話だけは許可を出していたが、はやて的には携帯より便利で不便なものと考えていた程度だ。

「むむむ……なんかいきなりファンタジーな展開やからついていけないけど、まあとりあえず書の中なんやな？　ということはシグナム達もここにおるん？」

とりあえず、異空間やそう言うものは置いといて、はやては気がかりな家族のことについて聞いてみた。

レイフォンの声を聞いた気もするし、何より書の中から出てきたシグナム達ならいてもおかしくないと考えていたからだ。

そのはやての問いにリインフォースは、何故か目を伏せて小さく頷き答えた。

「はい、守護騎士達も姿は見えませんがここにいます……ですが吸収されていますから、再構成を行わなければなりません」

淡々としたリインフォースの説明に引き気味なはやては、ある結論に達してしまう。

「……吸収って……って、あれ？　ということはここにいる私も既に吸収されているん？」

少し顔が強張るはやてに対し、リインフォースは申し訳なさそうに目を伏せて、頭を下げた。

「はい、その、私のせいで」

明らかに気落ちした様子のリインフォースを見て、はやては気まずそうに頭を掻く。

「あー、まあそれはいいわあ。　リインフォースもしたくてしたわけやなそうやしな……それよりここからはどうやったら出れるの？」

先程異空間と言ってはいたが、とりあえずこの場でずっといるわけにはいかないはやては、リインフォースにこの空間からの脱出方法を尋ねてみた。

その問いにリインフォースは先程までの気落ちした表情を普段の無表情に、何か強い意志を秘めた目をはやてに向けた。

「……その問いに答える前に主はやてに聞きたいことがあります」

「うん？　聞きたいこと？」

問いを問いで返されたことにはやては、何の不審も感じることなく聞き返した。

「はい……主はやて、貴方は本当にここから出てもいいのですか？」

「えっ？　　どういうこと……」

はやてはリインフォースの言った言葉の意味が分からなかった。

確かにこの空間で久しぶりに自分の足で歩いたことは新鮮だったが、いつまでもこの何もない空間でいる気はなく、そのために出る方法をリインフォースに聞いたのである。

言葉の意味に苦しむはやてにリインフォースは先程の意味の説明を口に始めた。

「外の世界……現実には辛く悲しい出来事が起きます。　主が両親を亡くしたように、理不尽な悲しみが待ち受けています。　ですが、ここでは優しく暖かい日々が、主の家族とともに」

リインフォースの吐いた言葉は優しく甘い響きがあった。

それははやてが昔、欲しかったものである。

平凡な当たり前の家族との生活を夢見たことである。

実際、はやては自身が家族を失う姿を見たときに、そう願ってしまったことを、微かにだが覚えていた。

「でも、それは夢や」

リインフォースの言葉を遮るように口にしたのははやては、前を、リインフォースの眼をまっすぐ見据えながら決意を口にする。

だが、それは今ここでこうして話をして気付いた。

「確かにここでは悲しいことや虚しいこと、理不尽なことはないん

やろう。確かに私も人間やから悲しむことよりも、嬉しいことや楽しいことのほうがいいと思う。でも、そんな悲しいことがあったの私の人生やから、私は優しい夢より悲しい現実を取る」

両親が無くなった時、はやては一人で生きるため家事を覚えた。

下半身が麻痺に侵され絶望していた時、レイフォンやシグナム達守護騎士達という家族を得た。

だからこそ、現実には悲しいこと、理不尽なことだけではないと知っていた。

そのはやての答えにリインフォースは無表情の顔を少し緩めて答える。

「貴方なら……そう言うと思っていました」

「でも、まあ……アレや。私が悲しみに押しつぶされそうになり、間違えそうになったら、リインフォース達家族に頼りそうやけどな」
リインフォースの言葉にははやては照れくさそうに頬を掻きながら笑みを浮かべる。

そのはやての言葉でリインフォースは十分だった。

「私は貴方が主であったことを誇りに思います」

はやてに聞こえないほどの小さな声で、感謝や様々な感情のこもった言葉をリインフォースは口にする
、遂に覚悟を決めた。

「主、最後に脱出方法を言う前に貴方に知らせておかなければなら

ない事があります」

リインフォースは、はやての返答を聞く前に自身の手をかざし、この空間に干渉し始めた。

「リインフォース？」

何処か様子のおかしいリインフォースの姿にはやては不安そうに呼びかけるが、リインフォースは何の反応を示すことなく、ただ集中を切らさないようにしていた。

そして次の瞬間、リインフォースの掌から淡い光の波紋が溢れ、周囲に広がっていく。

その眩しさあまりにはやては一瞬目を閉じてしまい、光が止むのを待つ。

次に目を開いた時、そこは見たことがある風景だった。

それははやてが物心ついた時から見ていた見慣れた場所、はやて自身の部屋の中だった。

変わり映えのない部屋のようだったが、ある一部分が違っていた。

「レイ……くん？」

はやてのベットの上に、いなくなっていたレイフォンの姿があった。寝ているレイフォンにはやては急ぎ足で近づくと、おもむろにレイフォンの右手を握ってみた。

「冷たい……」

レイフォンの手からはあの懐かしい暖かさを感じることなく、氷のような冷たさがはやての左手の肌を刺激した。

その冷たさを一度だけはやては感じたことがあった。

それは両親が死んだときに、遺体を握った時の感じであった。

「う…そ…」

信じたくない理性と悟ってしまった身体により、はやての心が真つ二つに引き裂かれるような幻痛に襲われる。

「大丈夫です」

はやての後ろから何かがはやてを包み込むように抱きしめた。

それはリインフォースであった。

「彼は死んではいません」

優しく諭すようにはやてに呼び掛けると、リインフォースはそのままレイフォンの胸元に右手を当てた。

優しくレイフォンを撫でるその姿は、慈愛に溢れた母のようで、その姿にはやては思わず見とれてしまっていると、リインフォースに変化が起き始めた。

「リインフォース……どしたん？ その手」

レイフォンの胸元に触れていなかった左手が指先から光の粒子となり消えていってしまう。

その姿にはやては嫌な予感を感じる。

身体を抱きしめてくるはやてにリインフォースは安らかな笑みを浮

かべながら答える。

「リインフォース……このような素晴らしい名前を頂いた私は、世界で一番幸せな魔導書ですね」

「あ、あかん！ リインフォース、いったらあかん！！」

リインフォースの意図を知り、慌てて止めに入るはやての額にリインフォースは口づけを落とした。

「大丈夫です。死ぬつもりはありません……私は彼の中で貴方のことを見守っていますから」

リインフォースがレイフォンを救う手はこれしかなかった。

レイフォンと完全融合で、レイフォンの失われた心臓の役割をリインフォースが補う。

だから、レイフォンが死ぬまでリインフォースははやての傍にいろことができる。

「でも……」

だが、それではやてが納得できるわけではなかった。

融合といってもリインフォースは心臓の代わりになるだけなのだから、もう二度とはやて達に話しかけることができなくなる。

だからこそ、リインフォースははやてに最後の別れでそんな悲しい顔をしてほしくなかった。

「主はやて、私からの願いは一つです。いつも笑っていてください」

安らかな笑みを浮かべるリインフォースにはやては言葉の無意味さを悟った。

はやてができることはただ一つ、笑顔でリインフォースと別れることだった。

はやての表情は笑顔とは言い難く、涙の跡が頬に残り、まぶたも赤く腫れていた。

その表情を見たリインフォースは、最後に今までで一番きれいな笑みを浮かべて、そのままレイフォンの中へと消え去った。

「またな、リイン……」

そう呟いたはやての掌には小さな十字架が握られていた。

第四十話 脱出、そして再会

目を開くとそこは見慣れない天井だった。

天井の至る所に数式の羅列が並べており、それを見ていると頭が痛くなったレイフオンは、目を擦りながら身体を起こす。

「あら、やっと起きたのね」

「おはようさん、レイ君」

身体を起こすとそこには何故か学生服を着たリーリンとはやての姿があった。

その二人の姿にレイフオンは首を傾げていると、二人は足元に置いてあった鞆を取りだす。

「さあ、こんないい日は勉強日和」

「レッツ勉強タイムや」

本を片手に小躍りしながら迫る二人の姿に、レイフオンは人生最大の危機が迫っていることを予感した。

体中に剄を巡らせて、瞬時にその場から逃げようとするが、何かに足を取られて前のめりに倒れてしまった。

「ぐえっ」

そのまま積まれた分厚い本の山に頭をぶつけて悶絶していると、足を握った白い柔らかい手のほうから声が聞こえる。

「レイフォンがこんなに勉強熱心なんて知らなかったわ」

レイフォンの足をしっかりと握ったりリーリンが朗らかな笑みを浮かべながら答える。

一般人であるリーリンが何故、剄を纏った武芸者であるレイフォンを抑えれるのかは疑問だが、そんな余裕はなく、そのままリーリンに向かって口を開く前に、レイフォンの口は白魚のような手により塞がれた。

「ちなみに答えは聞いていない」

間違いなくリーリンと同様の笑みを浮かべているだろうはやての声が、レイフォンの背後から聞こえた。

その言葉にレイフォンは、背筋に悪寒が迫るとともに生唾を飲み込む。

「本がっ、本がっ!!!」

「いきなりうるさいわ」

「ぐえ」

はやては、いきなり叫び始めたレイフォンの顔面に拳を落とした。不意打ち過ぎる一撃にレイフォンは悶絶しながら、ベットの上的に打ち回る。

その姿に流石にやりすぎたと思ったはやては、冷や汗をかきながら転げるレイフォンの肩を叩いた。

「レイ君、大丈夫か」

「は、はやて……僕に三桁計算は無理っ!!」

顔を上げるや否や、はやての顔を見たレイフォンは怯えながらベットの片隅で丸くなり、そのまま小刻みに震え始めた。

その姿に、これはまさか融合後の後遺症か?と心配してしまうが、冷静に考えるとレイフォンの頭がかわいそうなのはいつものことなので、一秒ほどで心配を斬り捨てた。

「そんなんは当の昔から知ってるし、あとレイ君は二桁計算も危ういからな」

あやすような優しい声ではやてが呼びかけると、レイフォンはそのまま恐る恐る顔を上げてはやての方を見る。

その姿はまるで小動物さながらのしぐさであったが、全く可愛く感じないのは不思議である。

だが、レイフォンの姿を見てはやては、懐かしさとともに安心さも感じてしまう。

「レイ君、久しぶりやな」

まだ別れて一週間ほどしか経っていないのに、はやてにはもう何年も会ってないほど、レイフォンと会うのが嬉しく感じた。

レイフォンもそんなはやての顔を見て、笑みを返すとそのままベツトの上を這ってはやての前に座る。

「うん、久しぶりはやて」

レイフォンはそっと手を突き出してはやての頭を撫でようとするが、

「……はやて、泣いていたの？」

目の前にいるはやての眼が軽く充血しており、頬にも涙の跡が残っていた。

「え、そ、そんなことないよ。私はいつも通り元気やよ」

指摘をされてはやては服の袖でごしごしと顔を拭って、泣き跡を消そうとするが、その言葉は若干震えていた。

はやてが泣いているように見えたレイフォンは、そのまま頭を撫でていた手を首の方へとずらし、

そっとはやてを抱き寄せた。

「レイ……君……」

「ごめんね、はやて」

胸元にはやての顔を押しつけたままレイフォンは残った左手ではやての背中を撫で続けた。

「…謝らん…というて…」

「うん、でも…ごめん」

ひたすら謝り続けるレイフォンに対し、はやてはレイフォンの胸元で静かに泣き続けていた。

?
?
?

「ということはここから出るには、外と中から強い衝撃を与えて主導権をこっちが握らなあかんのやな」

あの気恥しくなった二人は、そのまま顔を互いに逸らしながら、現状の情報を交換していた。

特にレイフォンは、リインフォースから命を繋いでもらっているた

め、はやてから聞かされることを真剣に聞いていた。

リインフォースという存在が消えたことには、レイフォン自身心を痛めていたが、助けてくれたことを感謝しながら、ただ最後の彼女の願いを果たそうと考えた。

「うん、なんで僕がそんなことを知っているのかはわからないけど」情報交換の際に、何故かレイフォンは書の詳しい情報を知っており、そのことは疑問に思ったが、多分リインフォースが残してくれた置き土産だろうと察して二人で感謝した。

その情報によると、管制人格は消滅したため、権限ははやてに戻ってきているようで、現在外で暴れている暴走プログラムというものだ。

そいつに強い衝撃を内と外から与えることで、この空間から出れるようだ。

「と、なると向こうにいる、高町さん達に協力してもらわあかんということか」

そう言いながらはやては若干気まずそうに顔を顰めてしまう。

なのはやフェイト達と会話なんてしてはいないし、シグナム達も迷惑をかけて、はやて自身も一瞬の気の迷いとはいえ、間違はなく、なのは達を憎んでしまった。

それなのに今度は助けてほしいというのは虫がよすぎるのではないかとはやてが考えていたのに対し、レイフォンは特にそんな心配を

していなかった。

短い時間とはいえ言葉をかわし共闘したなのは達は、はやてや守護騎士達を救おうとしていたことは理解できたし、何より彼女達ならはやての強い味方になってくれると思っていた。

「とりあえず、はやてが呼びかけて、一応はやては完全に書の主になったんだから」

はやてに外で戦っているだろうなのは達に通信を送らせているうちに、レイフォンは何とか暴走プログラムの動きを抑えることができないかと、必死に書の制御に掛かる。

感覚的に制御を行うレイフォンの横ではやても覚悟を決めたのか、なのは達に向かってというより、外へと声を送る。

「あーあー、聞こえますか」

こちらからは全く見えない向こうに向かってはやては呼び掛け始めるのを確認すると、向こうから返答が返ってきた。

『え?! あれ? え、とっ……』

向こうから聞こえた声はなのはの物で、どうにか向こうの方に通信が届いたことがわかり、はやてとレイフォンは安堵しつつ無効に要件を伝えることにした。

「えっと…高町、さんでいいんやな? 私は八神はやてです」

『はやてちゃん?』

「うん、ちょっと時間ないから用件だけ伝えるけど、こっちは閉じ込められているみたいで、向こうから強い衝撃が必要みたいなんよ」

なのはに簡単な指示を送るはやての横で、レイフォンの感覚に何か分からないが、強い力の塊のようなものが察知された。

黒く破壊的な波動を発するそれを、レイフォンはそれを暴走している防衛プログラムと判断すると、鋼糸を放ちそれを抑えつけに掛かる。

「ぐっ、ああ」

だが、それは流石は遠い年月をかけたバグだけあって、レイフォンの技量では破壊することも封印することも不可能だったようで、抑えることだけが精一杯だった。

しかしそれだけで十分だった。

『え、書の防衛プログラムが…』

「止まった？」

なのはとはやてが呟くように口を開く。

レイフォンは、歯を食いしばり、両手に押し掛かる力の圧力に耐えながら叫ぶように合図を送る。

「はやて、僕が抑えているうちにっ!!」

「っ分かった!! なのはちゃんっ!!」

『うんっ!! レイジングハートっ!!!』

「バルディッシュッ!!」

レイフォンの呼びかけに再起動したはやてが、外にいるなのはとフ
エイトの二人に合図を送る。

その言葉に二人が、攻撃態勢に移行するのを確認すると、レイフォ
ンも全身に最大の剄を巡らし、

『エクセリオンバスターっ!!!!!!』

『プラズマスマッシュャーっ!!!!!!』

なのはとフエイトの砲撃が着弾した瞬間、レイフォンは天剣を鋼糸
から剣へと戻す。

外力系衝剄の変化、霞楼。

斬撃による衝剄を見えない床へと放ち、そのまま無数の斬撃へと変
化した衝撃が、この空間内を駆け巡った。

レイフォンははやての傍まで掛けると、そのままはやてを抱きかか
え、白く発光する煙の中へと飛び込んだ。

?
?
?

風が頬に当たるのを感じ、レイフォンは目を開くとそこには幾つもの星が輝く夜空が広がっていた。

「きれいやな」

胸元のはやてがそう呟くのの聞いて、レイフォンも頷いた。

数時間も経ってはいないのに何処かその光景は懐かしく見えた。何でもないその風景が、はやて達には愛おしく大切なものだと感じた。

「無事か、レイフォン」

付近のマンションの屋上に着地したレイフォン達に、空から降りてきたクロノの声が掛けてきた。

「うん、そっちはボロボロだね」

クロノのバリアジャケットは所々穴が空いており、クロノ自身もかなり疲弊している様子だった。

事実、クロノはアリア戦を終えた後、なのは達と協力して闇の書の防衛プログラムを相手にしていたのだ。

「うるさい、こっちは大変だったんだ」

「うん、ありがとうクロノ」

レイフォンの素直な感謝の言葉にクロノは恥ずかしそうに横に顔を逸らすと、その隣でははやての周りを光の膜の現れ、強い光を放ち始める。

そのはやての四方には魔法陣が展開されており、その魔法陣からはかけがえのないの家族である守護騎士達が現れ、はやてを包む球体を護るように現れた。

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士」

「主ある限り、我らの魂尽きる事無し」

「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」

「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に」

シグナム達が宣言を終えるのと同時にはやてを包んでいた純白の球体が割れる。

そこには、バリアジャケットに身を纏い、杖を持って二本の脚で立つはやてがいた。

その姿は何処かリインフォースの姿に似ており、そんなはやてにレイフォンは手を差し出す。

その手を差し出された手をはやてが握ると、レイフォンは天剣を夜空に向かってかざした。

「夜天の騎士レイフォン・アルセイフ、祝福の風リインフォース、セットアップ！」

身体を治癒された際、体内に剉脈とも現れたリンカーコア『リイ

ンフォース』から全身へと魔力を流し、バリアジャケットを生成する。

師であるリテンスのような黒いコートを羽織り、リーリン達が用意してくれた天剣時の戦闘服を纏ったレイフォンが現れるとそのまま天剣を地面に突き刺した。

ここにはやてを守る第六の騎士が誕生したのであった。

その威風堂々とした姿に遅れて現れたのはやフェイトはもちろんのこと、近くにいたはやてやクロノさえその姿にただ見惚れていたが、

「くおっらあ！！レイフォオオオンっ！！」

と格好良く決まったと思ったレイフォンは、いきなり背後からの強い勢いに前方へと吹き飛ばされた

「ぐえ」

憐れ、というべきか、蛙が潰されたようなうめき声をレイフォンは上げながら屋上の上を転がっていく。

そして、目が回ったため、フラフラになりながら先ほどまで自分がいた方を見ると、そこにはおなじみのバリアジャケットに身を包んだヴィータの姿とそのヴィータを取り押さえるシグナムの姿があった。

「てめっ！！生きてたんなら生きてたって言えよっ！！」

「辞めろヴィータ！！ 今、戦力であるレイフォンを失うわけには
いかん、仕置きは後だ」

顔を真っ赤に染め、若干涙目のヴィータをシグナムが必死に抑えて
おり、その少し離れたところには目元を抑えたシヤマルと呆れたよ
うに溜め息をつく人型のザフィーラの姿がそこにはあった。

そんな彼らの姿を見て、レイフォンも目にも熱い何かが込み上げて
くる。

「ああ、よかった」

『そうだな』

呟いたレイフォンの耳元に柔らかなそよ風が流れた。

第四十一話 黒き悪魔

「なのはちゃん、フェイトちゃん、クロノ君、アルフさん、ほんまに私の家族が迷惑かけてごめんな」

はやての謝罪とともにレイフォンを含む守護騎士達も同時に頭を下げる。

「すまなかった」

「すみませんでした」

「悪かったよ」

「申し訳ない」

「ごめんなさい」

上からシグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラ、レイフォンの謝罪の言葉に、なのはとフェイトは笑みを浮かべながら、それぞれシグナムとヴィータの手を取る。

「うん、これでやっとお話できるね」

「おい、こら、いきなり手を振るんじゃねえよっ!!」

笑顔のままヴィータの手を握った手をぶんぶんと上下に振るなの是对し、ヴィータも口では怒鳴り声を上げているようだったが、その表情は照れたように真っ赤に染まっていた。

「シグナム、大丈夫ですか？」

「私は大丈夫だ。それよりお前の方は大丈夫か？」

その隣では、フェイトがシグナムの状態を聞くのに対し、シグナムはどこか罪悪感でいっぱいの顔でフェイトの傷の様子を聞き返していた。

先程まで殺しに掛かっていたシグナムの負い目に、フェイトは気にしていないように答える。

「大丈夫です」

「あら、無理は駄目よ、クラールヴィント」

隣で話を聞いていたシャルの手により、フェイトの足元に癒しの魔法陣が現れて、フェイトの傷を癒していく。

数秒で、簡単な傷の回復を終えたフェイトは軽くなった身体を動かして、癒してくれたシャルに向かって頭を下げる。

「ありがとうございます」

「いいのよ。『湖の騎士』シャルと『風のリング』クラールヴィントは癒しと補助が本領ですから」

フェイトを癒したシャルがなのは達の方に歩いて行くのを確認すると、レイフォンは視線をずらしてザフィーラとその隣にいたアルフの方を見る。

「アンタには借りがあるからね。この件が終わったら返させてもらうよ」

「いいだろう」

突きだされたアルフの拳にザフィーラ自身の拳を合わせて答えていた。

物騒な会話だったが、互いの顔には恨みや怒りの感情はなく、好戦的な笑みのみだった。

「余談はここまでにして、とりあえずアレをどうにかしよう」

先程まではやてに簡単な事情を聞いていたクロノが両手を叩き、右手に持つデバイスの先を遠い向こうにある球体へと向ける。

そこには管制人格を失い、コアである主を失くした憐れな暴走プログラムであった。

今は何故か大人しいのだが、いつまた再び暴れ出すかも知れないその破壊が現在の最優先事項であった。

何より、その黒い繭を見てレイフォンは、何か嫌な予感がした。

何か、忘れてはいけない事があったはずだと。

「で、あれどうすんだよ？ 全員で一氣に一斉攻撃で潰すか？」

ヴィータの荒っぽい提案に冷静なクロノが慎重に答える。

「いや、あれは闇の書の残骸だ。不用意に刺激を与えることは得策でない」

「だが、それならどうする？　このまま放っておくことはできないだろう」

「それにあれ、なんか卵みたいに見えませんか？」

シャマルの何気ない感想に、レイフォンは剄を纏い、屋上を駆け抜ける。

「レイ君っ?!」

いきなり行動を起こしたレイフォンに全員が茫然と見送る中、はやてがレイフォンに呼び掛けるものの、レイフォンは制止することなく、剄で強化された脚力で、空に向かって跳躍した。

周囲には先程の戦闘のせいで原形をとどめている足場^{ピル}は皆無だったが、レイフォンにはその必要がなかった。

レイフォンが手をかざすと、その前方に小さな氷の足場が現れた。

アイスブロック。

レイフォンが初めて放った魔法の名前であり、用途はただの宙に浮く氷の塊だった。

が、その塊に着地すると同時に。

内力系活剄の変化、旋剄。

爆発的な加速を得たレイフォンは、前方に現れた巨大な黒い繭に向かって、剄を流した天剣を振り下ろす。

「はああああっ！！」

外力系衝剄の変化、轟剣。

剄で構成された巨大な刃は黒い繭の切り裂いた。

が繭の表面を斬り裂いただけでナカは無事であり、その頑強な手ごたえにレイフォンは舌打ちをつきながら、再び前方に氷の足場を作るとそれを蹴って後方へ飛ぶ。

外力系衝剄の変化、閃断。

剄の刃から切り離された無数の斬撃の衝剄が、黒い繭に着弾し白い煙を巻き起こした。

レイフォンはそのまま大きく後ろの飛び、再び作った氷の塊に辿りつくと、前方の様子を見据えていた。

「おい、レイフォンいきなりどうした？！」

レイフォンの行動に、クロノ達がレイフォンの周りに集まってきたが、当のレイフォンは再び攻撃を仕掛けるために、天剣に先程よりも膨大な剄を流す。

が、それは前方から迫った黒光の砲撃により、中断される。

白煙を吹き飛ばして迫るそれは、レイフォンに向かって一直線に迫っており、それを見たレイフォンは回りにいたクロノ達を衝剄で吹き飛ばし距離を離すと、迫る砲撃に天剣を振り下ろした。

衝突と同時に、凄まじい衝撃がレイフォンを襲うのを、ただひたすら耐え、数秒の拮抗のもと、レイフォンの天剣が砲撃を両断した。

「あれって…デイベインバスター？」

「多分同型の砲撃だとは思うが……」

なのはの砲撃とは違い、あの砲撃は命を刈り取るほどの威力を秘めていた。

だが、そんなことよりもレイフォンは、前方にいる中身の威圧感に冷や汗が流れ始めていた。

全身黒く光る鱗に覆われており、赤く充血した巨大な目に、マンシヨンを一飲みでできそうな巨大な口に、名剣のような輝きと鋭さを秘めた無数の牙、全長三十メートルはありそうな蛇のような胴体、その背から黒く半透明の悪魔のような翼。

何より、武芸者であるレイフォンには感覚で分かってしまう存在。

「……汚染……獣……」

この世界にはいるはずのない最悪の生物がそこにはいた。

?
?
?

「汚染獣……？　なんだそれは」

レイフォンの言葉を耳にしたクロノが、聞き返すと隣で聞いていたはやてがあつと何か思い出したように声を上げる。

「汚染獣って確か、レイ君と初めて会ったときに聞かれたことや……けど」

唯一汚染獣と言う言葉を聞いたことがあるはやてだったが、レイフォンが詳しい説明をしなかったため、単語を聞いたことがあるだけで意味は全く知らなかった。

クロノを始めとする複数の視線を受けたレイフォンは繭から生まれた汚染獣を警戒しながらレイフォンは簡単な説明を開始する。

「汚染獣……僕がいた世界に存在する生物の名称です」

「レイフォンのいた世界……つまり管理外世界のことだな？」

「って、アンタこの世界の人間じゃなかったのかい？！」

八神家や事情を聞いたクロノ達と違い、全く事情を知らなかったなのは、フェイト、アルフの三人は驚いた様子でレイフォンの方を見ていた。

だが、現状アルフ達に話す暇がないため、半ば無視するような形で

レイフオンは説明の続きを始める。

「僕の世界では、大気が汚染物質：用は毒に侵された世界のため、僕たちはエアールフィルタで外気と遮断された世界、レギオスと呼ばれる移動都市の世界の上で生活しています。汚染獣とはそのエアールフィルタ外で漂う汚染物質に適合した生き物のことです」

レイフオンにとっては常識のことだが、なのは達からしたらある意味ファンタジーな世界の説明に口を開くことができず、この中で色々な次元世界を見てきたクロノやヴォルケンリッターですらその苛酷な世界を聞いたことがなかった。

「汚染獣は、頑強な身体に覆われており、剄を用いた攻撃でしか有効なダメージを与えられません」

これが汚染獣の厄介な性質である。

これは、単純に武芸者でしか倒せないという事実を指し示すことになる。

「ということは魔法が効かないの？」

「さあ：それはわからない。僕の世界では魔法なんて存在しなかったから」

フェイトの言葉にレイフオンも曖昧にしか答えることができない。もしかしたら効くかもしれないし、そうならばこの中にいる者達なら雄性体を一匹づつは倒せるかもしれない。

だが、レイフオンが一番問題にしていたことはそこではなかった。

「汚染獣には様々な形態があります」

レイフォンのいきなりの前置きのない説明にクロノは、何か嫌な予感を感じ眉を顰める。

いや、クロノだけではない。

百戦錬磨のヴォルケンリッター達ですら、レイフォンの説明と目の前に存在する化け物の威圧感に、長年の勘による警戒音が鳴り響き続けていた。

「幼性体、これは圧倒的な火力があれば、倒でなくても倒せるかもしれない。しかし、雄性体、そして雌性体は殆どの武芸者は単騎で倒すことはできません」

雄性体には何期なでもう少し複雑に分かれているや、殆どの武芸者がレイフォンの故郷であるグレンダンに存在することは、現在必要ないため言うのはやめておいた。

「それはレイフォン、君でもかい？」

冷や汗を流すクロノの質問に対し、レイフォンは何でもないように答える。

「いや、僕は倒せるよ。雄性体くらいなら複数倒したことがあるから」

むしろ天剣授受者が雄性体ごときで手こずるなんてありえないことである。

その説明を聞いて汚染獣の恐ろしさとレイフォンの異常さを知ったクロノ達にレイフォンはさらに重い現実を教える。

「で、最後に本題に入りますけど汚染獣には老性体という形態が存在します。それらは繁殖を止め、各自独自な変形を行った最強の形態です」

「最強……」

レイフォンの説明にこの場にいる全員が顔を青くさせて話を聞いていた。

それはそうであろう。

一騎で倒すことが難しいと言われる雄性体達よりも上に存在がいのだから。

そんなはやて達を尻目に、レイフォンは遠く離れた向こうに不気味なくらい静かに存在する黒き大蛇のような汚染獣を見る。

動かない汚染獣だが、あれはただ脱皮をしたせいで動けないだけで、じきに動き出すことを理解していたレイフォンは説明を急ぎ始めた。

「最強形態の老性体もピンからキリで、僕が戦った一番手強かったのは六期の老性体でした」

レイフォンが戦った老性六期は、過去为天剣授受者が逃したと言われる名付きの汚染獣『ベヒモト』。

レイフォン、リテンズ、ザヴァリスの天剣三人による共同戦線により倒すことができた本当の意味での化け物である。

そのことを思い出しながら、まだあの戦いから一年も経ってはいないんだな、と思い、再びアレには満たないものの確実に化け物と呼ばれるくらいの汚染獣と戦わなければならない自分の運の無さを呪いたくなった。

「ふう…嫌な予感しかしないがな……一応確認しておく。レイ

フォン、つまりあれは」

クロノは自身の中で確信に近い答えを、縋るような気持ちで尋ねてみた。

が、その思いは冷静だが、何処か緊張しているレイフォンにより断ち切られた。

「汚染獣です。 多分最低でも老性三期以上の化け物です」

レイフォンはそうは言っていたものの、目の前にいる汚染獣らしきものが純粹な汚染獣でないことから、ある意味ベヒモトよりも厄介な存在ではないかと考えていた。

「いや、で、でもさ、ここにいるフェイトやなのはやクロノ達は魔導師達はランクA以上の凄腕なんだよ？ それに守護騎士達もいるし」

レイフォンの言葉に重い空気に包まれるこの場をアルフはどうかしようと口を開いてみるが、アルフ自身の声は明らかに動揺していた。

アルフにとって化け物のような存在であるレイフォンが、化け物といった存在なのだから、動揺するのも無理はなかった。

「しかし、放っておくわけにはいかない。 まずは作戦を……」

「そうも言っていられねえみたいだな」

冷静に努めようとするクロノの言葉を遮るように、ヴィータが額には冷や汗をにじませながらアイゼンを握りしめながら答えた。

「そのようだな」

「時間切れというわけか」

シグナムはレヴァンティンを握りしめながらカートリッジを弾き、ザフィーラは両拳を握りしめ呟き、その少し後方では、シャマルが彼らを援護するためにクラールヴィントを光らせた。

その集団の中央にはやてが杖を構え、その両脇になのはとフェイトが足元に魔法陣を描きながら、デバイスを前方に向ける。

一番上空にいたクロノは自身の頭上に無数のスフィアを待機させ、指揮棒のようにデバイスを構えた。

「来る……」

ばそりと呟いたレイフォンの言葉と同時に目の前に黒き汚染獣は動き出し、両翼を広げるとともに、気味の悪い咆哮を上げた。

第四十二話 急速進化

禍々しい咆哮を星空に放ち、ゆっくりと前進を開始した汚染獣を見据えながら、レイフオンは天剣に剄を流し、その剄の純度を高めていく。

「先に言っておきますけど、汚染獣との戦いは死と隣り合わせです」

レイフオンは後ろを見ることはなく、そう後ろで戦おうとするはやて達やクロノやなのは達に尋ねた。

汚染獣の専門家である武芸者ですら、目の前にいる拒否したい相手であることは間違いない。

何より、数で当たれば間違いなく死人が出るレベルでもある。

だが、それでもこの状況怯む人間はここにはいなかった。

「だが、放っておけばこの世界は大打撃を及ぶことになる。それは管理局の人間として見過ごせない問題だ。何より管理局の魔導師は危険な任務といつも隣合わせだ。この程度で怯む人間はいない」

管理局の人間としての誇りを持つクロノは、自身を鼓舞するように力強く答えた。

クロノの答え同意するかのようになのは達も続けて口を開く。

「うん、私も、自分が住んでる街、大切な人達がいるこの街を守りたい」

「この街は特別です。私になのは達と会った大切な思い出の場所

だ。だから私も戦うよ」

「確かにこの街は居心地がいいからね。　フェイトの守護獣として戦うよ」

自身が愛した故郷、世界を守るというなのは、フェイト、アルフの答えは、とても尊く優しい思いだった。

そして、それは八神家の人間も同様であった。

「無論、我らも戦う。　元々の原因は我々にあるのだからな」

「ああ、はやての家を壊させる真似なんて、私がぜってえゆるさねえよ」

「私も皆のサポートに全力を尽くしますね」

「俺は守護獣の誇りに賭けて、ここにいる者の命を護ろう」

「私も戦うよ。　さっきまで魔導師ですらなかったから邪魔になるかもしれないけど、シグナム達と出会ったこの街を、レイフォンと出会ったこの奇跡を守りたいから」

全員の確固たる決意を聞いたレイフォンは、そんな彼女らを眩しく感じた。

この心は本来の武芸者が持つ都市を守るといふ思いに似ていた。

だからこそ、レイフォンは思う。

間違ったことをした自分も彼女達となら真っすぐ歩けるのではないのかと。

「わかりました。ではいきます」

そのためにまずは目の前の汚染獣を片づけなければならないと、レイフオンは天剣を力強く握りしめた。

? ? ?

最初に動いたのは汚染獣との唯一の戦闘経験があるレイフオンであった。

先程と旋廻とアイスブロックを用いて接近するレイフオンに対し汚染獣は体中の表面から突起された触手を生やしていく。

その数は千にも届きそうな触手の槍をレイフオンは身体を捻りながら僅かの隙間を抜いて掻い潜り、そのまま天剣を振り下ろす。

「はあっ!!」

が、下方から迫る迎撃の無数の槍により、踏みこみが浅くなり、汚染獣の表面を斬り裂くところで止まる。

迫る無数の触手を切り裂きながら下がるレイフオンの横を桜色の砲撃が横切る。

砲撃は触手を焼き払いながら、レイフォンが付けた傷口に直撃すると大きく抉り、表面を焼きつくした。

「えっ、嘘っ!!」

しかし、みるみると汚染獣の身体は修復し、再び元どりの形になる。

その光景を見ながらクロノが厄介だと言わんばかりに眉を顰めながら口を開く。

「再生能力……闇の書時代の能力は健在か……」

「いや？ 待て、なんだアレは？」

迫る無数の触手の槍を斬り落とすシグナムの視線の先にありえない者が映る。

それはなのはとレイフォンの連携により、剥がれおちた汚染獣の肉体の残骸である。

ただ、その肉体にはいつの間にか昆虫のような六本の足が現れて、ゆっくりと歩き出した。

「幼性体？」

動き始めた生物は、姿が違って汚染獣の中で一番弱い存在である幼性体であった。

幼性体はそのままゆっくりと歩き出し、結界の外へと向かって歩いていく。

「させないっ!!」

幼性体といえど、一体でも結界の外に逃げられれば、厄介のことになる。

一番近かったフェイトがバルディッシュの先に電撃の魔力刃を飛ばすと、幼性体は真つ二つに分かれてそのまま動きを停止した。

その光景を見ていたクロノが待機させていたスティンガーブレイドで触手を潰しながら、レイフォンへと念話を飛ばす。

『レイフォン！ 老性体というものは分裂の能力も備えているのかっ！！！』

「ううん、全ての老性体が同じ能力を持っているわけではないよ。ただ目の前にいるアレには再生能力と本体から離れた肉体が幼性体に代わる能力を持っているようだね」

クロノと違いレイフォンは、不死身に近いベヒモトとの交戦経験があるために特に焦ることはなかった。

あの時は三日三晩戦い、全く倒せる手応えのないベヒモトに焦り始めたレイフォンだったがリテンスの言葉により何とか立て直すことができ、ベヒモトを仕留めることができた。

つまりそれは、不死身ではなく近いだけという証明にもなり、目の前にいるこの汚染獣も何か再生の原因があると考えていた。

もう一つ的能力である幼性体を生む能力もそれ程問題があることもない。

確かに一気に百体、千体と産み落とされたら面倒だが実際に現れたのは一体のみで、何より切り離された所が幼性体になるなら、その前に完全に潰しておけばいいと考えていた。

汚染獣と戦う際の焦らない事が第一条件であると知っていたレイフ

オンと違い、クロノ達是不死の化け物の前にして焦りを隠せなかった。

特に戦闘経験が少ないなのは、フェイト、アルフの三人はそれが大きく出ていた。

「くっ、なのは」

「うん、フェイトちゃん」

焦りに焦ったなのはが汚染獣を屠るために大技を繰り出そうとする
とそれを援護するかのよう
にフェイトが汚染獣に向かって突貫を開始し始める。

「あの馬鹿っ！！ 焦りやがって」

「待てっ！」

その様子を見ていたヴィータとシグナムが二人の元へ向かうが、行く手を阻む触手の群れに思うように進めない。

その間にフェイトは汚染獣の周りを飛び回り、汚染獣の本体に向けて、牽制を兼ねてプラズマランサーを放ち続ける。

十を超えるプラズマランサーといえど、高層ビルにも匹敵する汚染獣の巨体には効果は薄く、ハエを落とすような動きで無数の触手で束ねた手でフェイトを叩き落とそうと振り下ろした。

だが、その動きは高速戦闘を得意とするフェイトには愚鈍ともいえる速度であり、それを易々と回避する。

が、汚染獣の攻撃はそれだけでは終わることなく、再び触手で十五

程の数の巨大な手を形成するとフェイトに向かって振り下ろし始めた。

その攻撃に回避が苦しくなるものも、ソニックムーブを用いてその攻撃の範囲から逃れることができた。

「えっ？」

攻撃の範囲から逃れたフェイトを待ち伏せていたのは、無数の触手で縫い合わされた巨大で頑丈な網であった。

前方に現れたそれに反応したフェイトはその網に突っ込むのを恐れ、その場で急停止を行った。

が、その行動はこの状況では適切ではなかった。

「止まるなっ！！ 狙い撃ちされるぞ！！」

シグナムの怒声とともにフェイトの周囲が黒い影に覆われた。

フェイトが慌てて顔を上げた時には既に遅く、巨大な拳が唸りを上げて落下してきた。

その攻撃をフェイトは茫然と眺めるように魅入られるように見ていた。

「紫電……一閃っ！！」

その拳を真っ二つにしたのはシグナムの一撃であった。

触手の網を切り裂き、一直線に向かったシグナムの手によりフェイトは包囲から抜け出すことができ、安堵の息を吐いていた。

「焦る気持ちはわかるが、焦ればアレに餌食だ」

「はい、すみませんでした」

シグナムの言葉に自身の軽率な行動にフェイトは落ち込んだように肩を落とした。

防御力の薄い自分があの一撃を喰らえば、どうなるかぐらいはフェイトにも予測はできた。

「何、とりあえずこれで一つ借りを返したぞ」

「借りですか……そうですね、ありがとうございます」

フェイトは顔を緩めて一つお礼をかわす。

その言葉にシグナムも笑みを浮かべて返すと、二人は弾けるようにその場から離れ、その瞬間、頭上から触手の槍を束ねた巨大な槍が降り注いだ。

「合わせろ、テストロッサっ!!」

「はいっ!!」

二人は並ぶように飛行をして、迫る無数の槍を切り裂いていく。

その華麗なコンビネーションが行われる遙か後方でチャージを完了したのはがレイジングハートを振り下ろした。

「これで……終わってっ!! スターライト……ブレイカー……!!」

なのはが編み出した収束魔法で最大の火力を誇る魔法、スターライ

トブレイカー。

自身の魔力を発動のトリガーとし、周囲に散らばった魔力素を束ねてそれを圧縮し撃ちだす魔法である。

径が十メートルを超えそうな砲撃の光線は、そのまま遠く離れた汚染獣へと一直線に向かっていく。

それを前線で戦っていたシグナムとフェイトはそれを交わすため、その場から離れてた。

その魔法を見て、特にこの魔法を受けたことがあるフェイトはある種の確信を得た。

フェイトが受けたモノより一段階上のそれを受けたら、流石の汚染獣と言えど致命傷のダメージを与えられると思った。

それは周りにいたシグナムやヴィータ、そして放ったなのはですら、だ。

だが、レイフォンはその光景に何故か嫌な予感しか感じなかった。確かにこの砲撃ならば、倒せなくても致命傷を与えられるだろうと、レイフォンもシグナム達と同様の推測だった。

しかし、それなら何故この汚染獣はなのはを放っておいたのだろうか？

「っ！！ 全員、シールドを最大限を展開をっ！！」

レイフォンのいきなりの指示が響き、その言葉になのは達が気を取られた瞬間、それは起こった。

耳障りな奇声を上げ、汚染獣は目の前に迫る星光の砲撃に向かってその巨大な口を開き、それを呑みこんだのだ。

その行動になのは達は目を見開いて驚くが、その光景ですら、汚染獣が再び口を開き寸分の狂いもないなのはの砲撃をその口から返し放った光景には遠く及ばなかった。

「えっ？」

「ぼさつとすんじゃねえっ！！」

自身の放った砲撃が返ってくる光景に硬直するなのはを寸前で助けたのは、いち早くなのはの元に駆け寄っていたヴィータであった。二人の脇を掠めるように空へと消え、結界を揺るがしたその威力にここにいる全ての人間が背筋を凍らせた。

だが、それ以上に恐怖したのは悠々と接近してくる汚染獣の存在であった。

不死身に近い身体と分裂能力、無数の触手の槍に、今度は砲撃返しである。

だが、それ以上に驚くべきことがある。

「こいつ……まさか知能があるのか」

それも人間に近い、もしかすると人間以上の知能を持っているかもしれない。

現に、なのはとフェイトを完全に罠にはめたその手腕は、ここにいる人間でも難しいであろう。

驚き恐れるシグナムの言葉にレイフォンは頷き答える。

「うん……でもそれ以上に厄介なことがある」

レイフォンの視線の先には汚染獣がいた。

だが、先程と違い巨大な首の付け根には何か巨大な瘤のようなものが二つ出来ており、他にも半透明の翼の付け根にも巨大な突起物が現れていた。

その異常で奇妙な姿は、よりシグナム達の不安を駆り立て、そして現実のものとした。

「異常なまでの成長速度だ」

瘤からは黒い血のような液体が吹き出し、背の突起物は二つ三つと枝分かれしていき、そして、首筋には新たな二本の首と背には四対の計八つの巨大な翼が生えでてきた。

圧倒的な存在感を秘めた化け物に、レイフォンは久しぶりに額から冷や汗が流れ始めた。

それは、なのは達も同様であり、なのはやフェイトはおろか、シグナム、ヴィータですら汚染獣の存在に魅入られてしまった。

そして第二ラウンドの鐘が、汚染獣の全身から放たれた触手の槍とともに鳴ったのである。

第四十三話 不死の怪物

あれからどれくらいの時間が経ったのだろうか？

戦場は市街地から、広々とした海上へと変わり、夜空に太陽が現れてもおかしくないような気がした。

なのはは全身に感じる疲労を誤魔化すようにしてひたすら空を飛び続ける。

しかし、いくら魔法の才能があり、膨大な魔力を持っているとはいえ、なのは自身は九歳の女の子であり、それ相応の体力しかもっていないかった。

だが、止まることはできなかった。

一度でも止まれば、触手の群れに捕まるか、無数の槍に串刺しにされるか、汚染獣のブレスに焼かれるという最悪の三拓が待っていた。

なのはだけではない、フェイトやアルフ、戦闘慣れしていたシグナムやヴィータ達ですら疲労が顔に濃く出ており、限界に近付いていた……一人を除いて。

巨大な剣で幾度も汚染獣の首を刎ね、山のような強固の身体を穿ち、無数の槍を弾き返すレイフォン一人を除いて。

その姿になのはは目を奪われそうになると同時に、あそこまで戦えるレイフォンに対し、自身の状態に情けなく感じてしまう。

魔法という力を得てもなのはは無力感を感じるしかなかったのに対し、レイフォンは全員を守りながら汚染獣に一人攻撃を仕掛けていた。

その姿を見て、なのははレイフォン・アルセイフを目標とし、追いついて見せるとに決めた。

だからこそそのためにはここで死ぬわけにはいかなかった。

なのはは力を振り絞り、こちらに向かってくる分離した頭の部分の汚染獣を砲撃で撃ち抜いた。

?
?
?

レイフォンは天剣で汚染獣の首を刎ねると同時に思わず舌打ちをしよう。

わかってはいたが、全くきりがないのである。

再生を行い、徐々に進化する汚染獣を見て、レイフォンは何か種があると考えていた。

こう戦っているため説得力はないかもしれないが、汚染獣がこの世界にいるはずがないのはレイフォンが一番分かっている。

だから何か原因があるはずだと考えているが、戦闘中に容易に考え

られることではなかった。

そして何より時間もなかった。

レイフォンはともかく、戦闘経験が浅いのはやフェイト達やそのなのは達を庇って戦うシグナム達も段々と動きの切れが無くなってきた。

唯一と言っていいほど疲労していないのは、遙か後方で遠距離射撃を行うはやとその横で糸口を探そうと汚染獣を調べているシャマルくらいである。

なのは達を退かすことも考えたが、この汚染獣をレイフォン一人で押さえるのは無理があった。

そういう意味では『ベヒモト』戦よりも厄介なことになっていた。ここにはリテンンスもサヴァリスもないのだから。

完全に思考が手詰まりになったレイフォンに、シグナムが触手を切り裂きながら話しかけてくる。

「レイフォン、どうする？　もうこうなったら全員で全力攻撃を仕掛けてでもみるか？」

シグナムの提案にレイフォンは眉を顰める。

確かにそれしかない気がしてきたが、一歩間違えば大量の汚染獣を生産してしまうことなるし、それ以上にチャージする時間が作れない気がした。

だが、考える時間はもう残されていなかった。

眉を緩めながら、レイフォンはシグナムの提案に頷いた。

「そうですね……、それでいきましょう。僕が前線で時間を稼ぐからシグナムさんは皆に攻撃の準備を伝えて」

「わかった…… 無理はするなよ」

「うん、あと攻撃は全方位から仕掛けましょう。さっきの二の舞になったらこっちが全滅するかもしれない」

なのはのスターライトブレイカーを喰らい、撃ち返したあの能力を使われれば、こっちに甚大な被害を被る。

幸いにも、それ以外の方法で魔法を跳ね返すことはできないようだから、胴体に打ち込めば問題はないとレイフォン達は考えていた。

「ああ、わかってる」

レイフォンに一つ返事を返すとシグナムは後方に下がっていたなのはやフェイト達の元へと飛んでいく。

それを見送ったレイフォンは天剣に剄を流し、汚染獣に向かって突撃を開始した。

五つの頭が、レイフォンを喰らおうと伸びてくるのに対し、天剣を振るいそれを飛ばして、墜ちた頭を踏み台に前方へと飛び、汚染獣の頭による追撃を振り切る。

汚染獣との距離を詰めたレイフォンを待ち受けていたのは頭上と足元から迫る無数の槍であった。

それを見たレイフォンは瞬時に足元にアイスブロックで踏み場を形成すると、そのまま旋廻で前方へと転がるように槍の弾幕をかわし、

身体を一回転させて天剣を振るう。

外力系衝剄の変化、轟剣。

十メートルに及びそうな剄の刃を横に振るい、汚染獣の胴体を斬りかかる。

汚染獣もその攻撃を防ごうとしたのか、触手を束ねて受けようとするが、レイフオンの一撃により胴体ごと両断され、その切り口から黒い血のような液体が噴き出した。

と同時に切り口から無数の触手が現れて、獲物を捉えようとレイフオンに迫るがレイフオンから放たれた衝剄に矛先を潰されて目標を失った。

その間にレイフオンは轟剣を纏ったままの天剣を胴体部分に突き刺し――

「ああああっ!!!!」

そのまま上に飛びながら、汚染獣を縦に切り裂いた。

汚染獣は悲鳴のような奇声とともに背にある十六の翼を大きく広げた。

空を覆うように展開された大翼は紫色に発光するとともに、無数の光弾をレイフオンに向け一斉掃射し始めた。

あまりの数と攻撃範囲に回避、迎撃不可能と判断したレイフオンは瞬時に全身の剄を高める。

活剄衝剄混合変化、金剛剄。

友人でもあり、同僚でもある天剣授受者リヴァースの剄技であり、レイフォンが知る中で最高の防御である。

無数の光弾が着弾するもののその攻撃から逃れることができたレイフォンは、お返しとばかりに天剣に纏った剄を閃断として放ち、汚染獣の頭を斬り飛ばした。

と同時に天剣を鋼糸に変えて、突撃時に斬り飛ばした二つの頭と今先程飛ばした頭を細切れに切り裂きながらアイスブロックで作った足場に着地した。

「金剛剄の上からでも抜いてきたか」

額から流れる少量の血を拭いながらレイフォンは、目の前の汚染獣の強さに脅威を抱いていた。

これ以上、この汚染獣を成長させないために、ここで葬るべきだろう。

レイフォンが天剣に剄を纏い、一刀の元、迫る二つの頭を両断し、その首に飛び移るとレイフォンは天剣を足元に突き刺して、足場になっっている首を切り裂きながら、本体へと向かって駆ける。

その行く手を阻むように触手の手と雨のような光弾が迫るが、レイフォンは首を盾にするようにして逃れると、胴体に向けて飛び一

ーレイフォンは二人になった。

いや、二人というより、一秒ごとにレイフォンの数が倍になっていき、

そして遂に総勢十六人になったレイフォンが天剣を握りしめるとそのまま汚染獣に向けて振り下ろした。

活勁衝剄混合変化、千斬閃。

十六の剣と無数の斬撃が汚染獣の身体を切り裂いていくが、それでも迎撃の体勢を繰り返さなかった汚染獣は翼から無数の光弾を放ち、レイフォン達を撃ち抜いていく。

撃ち抜かれたレイフォン達はそのまま消滅し、その場にレイフォンの姿がなかった。

「待たせたなレイフォン」

レイフォンの時間稼ぎは完了したということである。

最初に動いたのはグラーファイゼンを掲げた、ヴィータだった。

『G i g a n t f o r m . F o r m 』

「轟天：爆砕、ギガント：シュラーークッ！！！」

カートリッジを弾きながら巨大な鉄槌へと姿を変えたグラーファイゼンを、ヴィータは気合と共に、渾身の力で振り落とした。

その一撃に汚染獣の五つの首は潰され、巨大な背骨をへし折るような衝撃が汚染獣を襲った。

動きが止まる汚染獣の再生が働く前に、シグナムは両手にレヴァンティンとその鞘を握りしめる。

「レヴァンティン。アレを潰すぞ」

『Bogen form』

シグナムがレヴァンティンの柄尻と鞘を合わせると、レヴァンティンはそのまま白い弓の姿になった。

その感触を確かめながらシグナムはカートリッジを弾きながら弦を引き絞り、限界まで引き戻された一本の矢に魔力と必殺の気合を込める。

「翔けよ…隼!!!!!!」

『Strum falken』

矢は閃光のように夜空を駆け抜けて、そのまま汚染獣の胴体部分に直撃し、汚染獣の身体を業火で焼き尽くす。

全身に纏う炎のせいで細胞が焼かれているため再生が遅れている汚染獣に閃光となったフェイトが回りこんでいた。

「斬ってみせるっ!!」

フェイトは気合とともにバルディッシュをザンバーモードに移行し、巨大な剣の相棒を振りかざす。

「雷光、一閃……」

足元の魔法陣から紫電が放たれ、上空から降り注いだ雷が大剣に纏う。

その一撃を脅威と感じた汚染獣は、その一撃を放つ前にフェイトを落とそうと、まだ健在であった四つの翼を彼女に向けた。

しかし、彼女の傍には彼女達がいた。

「させないっ！！　　ディバイイイインバスタツツアーーー！！」

「フェイトは私が守るっ！！」

拡散型のディバインバスター・フルバーストで翼を撃ち抜き破壊し、流れ弾の光弾をフェイトの前に盾となったアルフにより塞がれた。

二人の援護の元、フェイトの魔法は完成した。

「プラズマザンバー……ブレイカアアアッー！！」

雷帝の一撃は、汚染獣の身体を切り裂き一部を消滅させた。
残る一部もバチバチと放電させながら汚染獣の身体を蝕み、再生を妨げる。

「今度こそっ！！　　ディバイン……バスタアアーーー！！」

追い討ちをかけるべく、カートリッジを弾きながら先程の二の舞にならないように、汚染獣の中心をぶち抜いた。

「力押しは性分じゃないんだけどねっ！！」

真上から放たれたクロノの砲撃『ブレイズキャノン』とそして、上空に展開させていた無数のスフィアによる『ステインガブレイド・エクスキュージョンシフト』で汚染獣を屠る。

五人による連続攻撃にほぼ原形を失った汚染獣に最後に一撃を加え

るべく、後衛にいたはやてが動いた。

長い詠唱を終えたはやての杖が空へと掲げ、足元に魔法陣を展開させる。

「リインフォース、私に力をつ!!」

レイフォンとはやてを救い、この世界から去ったリインフォースに祈りを込めてはやては杖を振り下ろした。

「デアボリック・エミッションッ!!」

レイフォンから手渡されたリインフォースの魔法をはやては汚染獣に向けて全力で放った。

汚染獣を中心に広がった広域魔法は周辺を吹き飛ばし、その猛威を振るう。

その威力に海面に逃げ込んでいたレイフォンも再び海中へと逃げ込みその攻撃から逃れた。

周囲を吹き飛ばし、あの巨体が完全に消えたことが肉眼で確認できたことによりその場にいた全員が安堵の息を吐く。

それは海面からシグナムにより引き上げられたレイフォンも同様で、レイフォンの察知能力にも汚染獣の存在が引っかからなかった。

だからであろう。

そのために海中からはやてへと向かって襲いかかってきた汚染獣に反応が遅れたことに。

「はやてっ!! 下っ!!」

「えっ？」

術後の硬直を狙われたはやてに反応するのが難しく、一番に動いたのははやての守護を務めていたザフィーラであった。

「がっ!!」

しかし、ザフィーラといえど先程のサイズの五分の一程度の大きさとはいえ汚染獣相手に力比べは分が悪く、そのまま海面へと叩きつけられる。

汚染獣はザフィーラを振り切った後、はやてを狙いに定め、口を開く。

その姿にレイフォン、シグナムが助けるために駆けるが、はやてとの距離は無情にも遠いものだった。

「はやてちゃん、避けてっ!!」

「シャルウウっ!!」

突き飛ばすようにはやてをシャルが押しのけると、そのままはやてを狙った黒き砲撃が庇ったシャルを呑みこんだ。

「シャルウウウっ!!」

ゆっくりと墜ちていくシャルの姿に完全にはやての動きが止まっ

た。

その隙を汚染獣が逃すわけもなく、背から生え出た触手の群れをはやてに向けた。

そして触手は無数の槍となり、はやてに向かって襲いかかった。

第四十四話 糸口（前書き）

この話を書く際に、第三十八話の冒頭での失敗文を訂正しました。
おかしなところがあるかもしれませんが、よろしく願います。

第四十四話 糸口

「はやてっ!!」

悲痛なレイフォンの叫びがはやての耳に響くが、はやてには目の前の脅威から逃れることができなかった。

口を広げた汚染獣に対し、体中が恐怖で震え、その場に硬直してしまふはやての脳裏には今までの思い出が駆け抜けるように流れていく。

「この馬鹿っっ!! さっさと避けるっ!!」

がその走馬灯も隣から聞こえた怒声と同時に横腹に襲った衝撃にかき消される。

衝撃のまま吹き飛ばされたはやては、そのまま汚染獣の脅威から逃れることができ、思わず自身を助けてくれた人間に視線を移す。

肩で切り揃えた艶のある髪に、頭にてっぺんには猫のような耳があり、腰の部分からは尻尾のようなものが見えていた。

「あの、どちらさまでしょうか？」

しかし、そこにいたのは、はやてにとって面識のない初対面の女性であった。

?
?
?

「ロツテっ!？」

遙か後方で驚く声を上げるクロノと同様、レイフォンも内心驚きを隠せなかった。

ロツテは思惑がバレたのちクロノに捕まり、アースラの懲罰房の中に入れられていたことはアースラ内で会話したレイフォンが一番知っていた。

そして、何よりレイフォンが一番驚いたのは、彼女がはやてを助けることだ。

確かに恨みなどはないとは言ってはいたが、あまり良い感情は抱いていなかったはずだとロツテ自身が言っていた。

「ほらよ、クソガキ」

はやてを引っ張ってきたロツテが、レイフォンに向かってはやてを押し出すと、レイフォンははやてに手を伸ばし、はやてを抱き寄せた。

その間、はやての身体を簡単に見たが、怪我らしい怪我を負ってはいなかったが、背中に真新しい血が付着していた。

「全く、私もどうにかしてるね……」

「ロツテさん……貴方怪我をっ」

「た、大変やつ、はよ怪我の治療をせえへんとっ!」

だらりと下げられたロツテの左手には鮮血が流れており、先程の一撃により負ったものだった。

レイフォンはの言葉に、はやては顔を青くさせながら、ロツテの傷を見ようと手を伸ばすが、ロツテ自身の右手により払われる。

「この程度の傷、放っておいたら治るよ。それよりお前はアレをどうにかするように考えなさい」

若干顔色が悪いロツテが指差した方をレイフォンとはやては視線を移すと、そこにはこちらに向かって飛来する汚染獣の姿が見えた。

身体の大きさは先程の三分の一ほどになってはいたが、機動力が格段に上がっており、停止したレイフォン達に向かって突貫してくる汚染獣に対し、レイフォンはやてとロツテを庇うように前へと躍り出ると天剣に剄を流し込み、迎撃に備える。

汚染獣もレイフォンを潰そうと考えたのか、口の中に巨大な光弾を作り出し、それを唸り声と共に吐きだそうとしていた。

が突如、汚染獣の背中に巨大な氷の結晶の槍が降り注ぎ、その攻撃により汚染獣の動きが乱れた隙を見逃さなかったレイフォンが轟剣で汚染獣を真っ二つにした。

両断した汚染獣が海に墜ちたことを確認したレイフォンは、魔法を放った方を見るとそこには、思った通りの人間がいた。

「アリアっ!?! 何故ここにっ!?!」

「忘れものよ、クロノ。お父様がこれを貴方に託すって」

先程より驚いた声を上げるクロノがに対しアリアは手に持った機械の杖をクロノに向かって投げ渡すとクロノはそれを慌てて受け取る。

「これは……『デュランダル』……どうして僕に」

「どう使うにしても最善のものは持っておくべきよ」

クロノの手にあるそれは、グレアムとリーゼ達が闇の書の封印のために、管理局の最新の技術と機能を注ぎ込んで開発したデバイスであった。

困惑するクロノの余所に特に不満がなさそうなアリアは、ロツテが怪我を負っていることに気付き、レイフォンの元へ飛んでくる。

「ロツテ、怪我を治すわよ」

「ああ、ありがとうアリア」

ロツテの治療を行うアリアに対し、はやては重大なことを思い出したように慌てながら彼女に詰め寄る。

「そうやっ！ シャマルっ！ シャマルの怪我を治してくれませんかっ！！」

必死なはやてにアリアはやれやれといった様子で指を下に向ける。

「彼女なら今、私の教え子が治療しているわよ」

アリアの言葉通り、海面付近ではザフィーラに抱えられたシャマル

をクロノが手を翳しており、どうやら治療しているようだった。その様子を見たはやてはほっとした様子で息を大きく吐き出すとそのまま弛緩したようにレイフォンに寄り添うように脱力した。

「気を抜いてるようで悪いんだけど、状況は何も変わってないわよ」はやての様子に呆れたのか溜め息をつくアリアの言うとおり、状況は何も変わらず、汚染獣が成長しすぎるせいで悪くなっていく一方である。

その言葉に慌てて身体を起こすはやてと同時に散開していた者たちがこの場に集まっていた。

「しかし、このままではこっちが力尽きるのが目に見えているな……」

「ああ、それにシャルが潰されたのが一番の問題だな」

苦々しく口を開くクロノに続くように眉間に皺を寄せたシグナムが口を開く。

確かにシャルはこのメンバーで一番サポートに長けている人間であり、逆に言えば一番大切なポジションでもある。

シャルがいなくなることにより、汚染獣の感知が大幅に遅れるうえ、回復もできなくなってしまった。

唯一その穴を埋めれるだろうユーノは、現在ドクターストップのためこの場に現れることができない。

いくらアリアとロッテという増援を得てもその穴は易々と埋めれるものではないのだ。

「それにこっちは疲労が溜まっているからね……出来れば一時退却

とかしたいけど」

「でもそうになったら、汚染獣に……」

アルフとフェイトの使い魔と主コンビの意見通り、この場にいる人間はレイフォンとロッテを除けば、殆どの魔力と体力がつかけていた。

戦闘慣れしたクロノやアリアは共に戦ったせいで消費していたし、シグナムとヴィータも必殺の一撃を放ったため疲れを隠すことができないほど消耗していた。

だが、一時退却なんてことはできない。

退却なんてしてしまえば、汚染獣は結界を破壊し海鳴の街へと向かうだろう。

それはここにいる全ての人間には見逃せない大問題である。

となればレイフォンが思いついた考えは一つだった。

「皆は一時アースラに戻り、休むなりして戦況と体調を整えてきてください。その間僕が引きつけておきます」

無謀ともいえるその策に全員の視線がレイフォンの方を向いて固まった。

「って馬鹿かお前はっ!!」

「そんなことできるはずがない」

「無謀だ……」

ヴィータ、シグナム、ザフィーラが詰め寄るようにいうが、レイフオンにはもうこれしかないと思っていた。

確かに標的がレイフオン一人になるため危険度は格段に増すが、回りに遠慮が無くなる分思いつきり戦うことができる。

と、レイフオンは納得していたが、他の人間には納得できない提案だった。

「無謀だ……それに魔導師でない君を一人置いて、撤収なんてできるわけがない」

「僕的に言えば、武芸者じゃない人間が汚染獣との戦闘にしていること自体が無謀なんですけどね」

汚染獣という存在の脅威を知ったクロノがレイフオンの提案は危険極まりないものと説くが、レイフオンの言葉は冷淡で何処までも現実味があるものだった。

その言葉に沈黙してしまうクロノの横で、なのはが口を開く。

「でも、でもっ!! 皆で戦えばきつとっ……」

「無理です。全快の時ならまだしも、疲労困憊の味方という足手まといを抱えた方が危険だ」

なのはの良さ、美德と言えるそれは現状では全く必要のないものだった。

何より戦場を知らない人間の言葉のそれは、この場では唯の理想論であった。

レイフオンの言葉はなのはだけではなく、この場にいた人間全ての胸に突き刺さった。

何よりそのことは当の本人達が一番身にしみていたことだった。ゆえに、ヴィータとシグナムとザフィーラの悔しさは、なのは達よりも何倍大きいと言える。

騎士たちである自分達の力のなさのせいで、家族が危険な目に合うのだから。

シグナムやなのは達が目を伏せるのを見て、レイフォンは承諾と判断し、全身に剄を流し込む。

先程から気付いていることだったが、既に汚染獣は復活し、海中でこちらの様子を見ていることには気が付いていた。

「出来るだけ早く離脱してください」

時間がなさに離脱を促すようにレイフォンは右手を振ろうとしたが、後ろから何かに掴まれた。

「はやて？」

振り返ってみるとそこには顔を伏せたはやての姿が見えた。

「…ん」

「えっ？」

何か呟くはやてに対し、聞き取れなかったレイフォンははやての口に自身の耳を近づけてみると、返事の代わりに帰ってきたのは乾いた音の頬へのビンタであった。

「ぶっ！！」

いくら鍛えようと顔面へのビンタは痛かった。

衝撃ともに僅かに後方へとずれたレイフォンは、真っ赤に染まっているだろう頬を抑えながら、涙目ではやての方を見る。

しかし、当のはやても涙目、いや涙を流していた。

「そんなん、許せるわけないやろっ！！！！！」

怒りと涙をぼろぼろと流すはやてにレイフォンも先程とは違い、どうすることもできない。

レイフォンははやてに泣かれると弱いのである。

「いや、でも、えっと……他に、他に方法が……」

「それとこれとは違う問題やっ！！！！！」

えー！と言いたくなる口を紡ぎながら、ポカポカと胸元を叩いてくるはやてを見て、どうすることもできなくなり、回りを見てみると、シグナム等家族の人間は全員目をあさっての方向に向けて目を逸らし、フェイトは申し訳そうに見ているその横でアルフはとざまーみろと爆笑しており、残るクロノとなのははニヤニヤと笑みを浮かべながらこちらを見ていた。

ロツテとアリアに至ってはシャマルの治療に集中していたためこちらの様子なんて見てもいなかった。

助けがいない事を理解したレイフォンは、違う意味で涙目になりそうになるとようやくシグナムが收拾し始めた。

「主はやて、一度落ち着きましょう。お前もだぞレイフォン」

「うん……」

「えっ、でも」

『あら、レイフォン。大人の女性の言うことは聞くものよ』

「ふう……わかりましたよ」

『そうそう子供は素直が一番、貴女もそう思うわよね』

「ええ、まあ……「っえ？」」

シグナムとレイフォンの声が重なる。

突如聞こえた声に、周りにいたクロノ達も辺りを見渡していたが、そこには人の存在なんていなかった。

だが、レイフォンの視線はある所で止まっていた。

はやての肩に止まっていた蝶……いや蝶のような光体にだ。

何によりレイフォンにはそれは見慣れたものだった。

『お久しぶりですね、レイフォン。ご飯は毎日食べてましたか？』

その声はもう聞くことのない声だった。

温和で何処か優しい声に、蝶の形をした念威端子を用いるグレンダンの最高の念威繰者。

「デルボネ……さん？」

デルボネ・キュアンティス・ミューラ、その人だった。

第四十五話 攻略への道

『貴方がいきなり消息を経て半年、私達も心配したんですよ』

「はぁ……そうなんですか」

デルボネのいう私達とは誰のことだろうとレイフォンは考える。

もし、天剣授受者や女王陛下のことならば、心配してくれるのはリヴァースくらいのような気がする。

『念威端子で貴方の様子を見ていた私も目を疑いましたよ、いきなり貴方が光に包まれて消えるのを見ていたのですから。陛下もそれを聞いて搜索に天剣授受者を用いてましたから』

「その……迷惑かけてすみません」

どうやら人並みに心配はしてくれたようで、その罪悪感と大事にまで発展していることに申し訳なくなりレイフォンは思わず頭を下げる。

『その台詞は私達ではなく、貴方の幼馴染や家族に言うべきですよ。特に貴方の幼馴染……リーリンさんでいいのかしら？ 彼女の報告を聞いた時の茫然とした様子は見てられられないほどのものでしたよ』

「リーリンが？」

デルボネにそう言われて、確かにそうだとレイフォンは自身の迂闊さに気付く。

レイフォンがリーリン達と別れて寂しいように、リーリン達も同様の心境でいたのだ。

いや、リーリン達の無事が分かっているレイフォンより、生死不明で戦場から消えたレイフォンを思うリーリン達の方が辛いに違いなかった。

『ええ、貴方はいい子に恵まれましたね。必ず幸せにしてあげるんですよ』

「はあ……」

どこか楽しげに言ったデルボネの幸せにしてあげるという言葉にレイフォンは思わず首を傾げてしまう。

自分なりにリーリン達を幸せにしようと、お金を荒稼ぎしてきたつもりだが、まだ足りないのだろうかと

考えていると、デルボネは何か呆れたような声色で再び念威端子を震わす。

『ですけど、レイフォン、貴方は少し粗相が過ぎるのではありませんか？ 可愛い女の子達に美しい女性に囲まれて、浮気は男の甲斐性だと言いますが、女性からすればその性質は大変好ましくないモノなんですよ』

「えっと…何のことですか？」

「そのなんだ、楽しそうに話している間を割って悪いが、今はそんなに呑気に会話している状況ではないのですが」

本格的に話についていけなくなったレイフォンは思わず尋ね返そうとすると、レイフォン達の間にクロノが割って入る。

その表情は、何処か呆れており、その顔を不審に思ったレイフォンは思わず回りを見渡してみると、そこにいるなのは達からも呆れたような視線を投げかけられ、後ろにいたはやてに至っては背中を抓られるという扱いを受けてしまった。

『あら、それはごめんなさい。この年になるとレイフォンくらいの子供が可愛くて可愛くて仕方ないのよ。あ、それとレイフォン、そろそろ来ますよ』

世間話をするようなデルボネの声に遅れるように反応したレイフォンは天剣を構えると同時に全身に纏っている剽を高めていく。その瞬間、海面から何かとてつもなく大きなモノが現れるかのように水柱を上げて現れた。

十の巨大な頭に背から生える二十越える翼、胴体部分から現れた巨大な二本のビルのような太さの腕。

両腕からは無数の触手が生え、海面を蒸発させているのか、白い水蒸気が舞う。

海に浮かぶ巨大な山のような最悪の化け物なのは達は言葉を失う。

『ベヒモト程ではないですが、ここまでの大きさのモノは久方ぶりに見ますね』

「ですが、これが最終形ではなさそうですから、いずれベヒモトを超える大きさになりそうですよ」

デルボネとの軽い口調で言葉を返すが、レイフォンの顔は強張り、額から冷や汗を流していた。

確かにデルボネの言うとおりベヒモト以下のサイズかもしれないが、この汚染獣の不死の謎をまだ解いてはいないうえ、こちらで満足に

戦闘できそうなのはレイフォンくらいであった。

『先におきますが、あの時のようにリテンズさんやサヴァリスさんの援護は期待しないように。ここまでたどり着いたのは念威端子だけですから』

「わかっています」

そもそもデルボネの念威端子がこの違う世界に届いたことにすら驚きである。

デルボネとの会話を終え、レイフォンははやて達よりもいち早く前方に踊り出ると、それに釣られたかのように汚染獣も二十の翼を大きく広げる。

空を隠すように広がった翼からは無数の光弾が形成され、前方を一掃するかのように打ち放つ。

避ける隙間もなく、万を超えるだろう光弾に回避は不可能と判断したレイフォンは体中に剄を纏い、金剛剄の体勢を取ると攻撃に備える。

それから間もなくして光弾の雨はレイフォンに迫り、レイフォンに直撃するとそのまま弾かれる。

しかし、その攻撃は完全にレイフォンの動きを止めることになった。金剛剄無しでこの攻撃を喰らえば流石のレイフォンでも危なかったが、それ以上に前方に立つことで守っていたはやて達がこの攻撃に吞まれることになる。

ゆえにレイフォンは耐え抜くつもりで金剛剄を使い続けるが、段々と金剛剄を抜いてレイフォンへと光弾の衝撃が貫き始める。

「ぐっう……」

その激痛を苦悶の表情で耐え抜くレイフォンを追いつくように後方から何かが飛び出してきた。

「盾の守護獣の名を舐めるなっ!!」

「絶対守ってやるっ!!」

レイフォンの前方に躍り出たのは互いに最大出力のシールドを展開し、レイフォンの代わりに攻撃を防ぐ。

「ザファイラ!! アルフ!!」

「守りは任せろっ!!」

「アンタはさっさとアレを止めなっ!!」

しかし歯を食いしばる二人の防御の壁を段々と汚染獣の光弾が崩れていく。

持たないと判断したレイフォンは再び壁となるために躍り出ようとしたが、後ろから掴まれた手により止められる。

「だから貴方は、攻撃の準備をしてなさい」

レイフォンと入れ違うように前線へと躍り出たエリアは前方に手を翳すと崩落寸前の防御壁を修復し始める。

三人による強固な防御壁は汚染獣の攻撃を遮断することに成功するのを確認したレイフォンの耳元にデルボネの念威端子が届く。

『レイフォン、貴方はこの汚染獣を倒すことに専念しなさい。貴方が倒さないとここにいる人間は全滅です』

「わかってますっ!!」

そのことはデルボネに言われるまでもなく、レイフォン自身わかっていて。

しかし、この不死の汚染獣を倒す術はレイフォンには解らなかった。刻々と過ぎていく時間にレイフォンの精神も徐々に蝕まれていく。そんな折れそうなレイフォンを後ろから何かが包んだ。

「レイ君、諦めたらあかん。きっとアレを倒せる術を私たちは知ってるはずや」

レイフォンを後ろから支えるように言ったはやての言葉がレイフォンの中に広がっていく。

その言葉がレイフォンの思考を冷静にさせた。

不死の汚染獣なんているわけがない。

事実、ベヒモトも不死ではなく、群体生命体であり、ただの結合が再生に見えていただけだった。

だが目の前の汚染獣からはそんな感じはしない。

どちらかと言えば、トカゲの尻尾が生えてくるような感じに近い気がする。

しかし、一度はシグナム達の最大火力の連携により完全に殺し尽くしたはずである。

そこまで考えるうちにレイフォンは最初に抱いた疑問を思い出す。

何故、汚染獣が現れたのか？と。

いやそもそも汚染獣なのかも疑問である。

確かにあの汚染獣の身体は斬った感覚から汚染獣のモノに近い気がしたし、レイフォンの武芸者としての感もあれが汚染獣だと告げていた。

だが、あれは黒い繭、つまり闇の書の暴走プログラムから生まれたのである。

その時点でアレは汚染獣ではない。

なら暴走プログラムなのかと言えば、明らかにあれは違う気がした。リインフォースという理性を失った力がアレである。

そんなモノにあそこまでの理性があるわけがないことは、リインフォースと融合したレイフォンが一番理解していた。

となれば暴走プログラム以外に何か原因があることになる。

「っ！」

「レイ君っ大丈夫かっ！！」

珍しく頭を使ったせいか、頭痛が激しくなり顔を顰めるレイフォンに対し、横にいたはやてが何故かレイフォンの胸元を抑えていた。

「って、はやて、何で胸元を抑えるの？」

「へ？ 私のはてっきり胸の傷が完全に治っていないんかと……だってあんなに血が出てたし」

はやての心配する声を聞いて、レイフォン自身あの深手の胸の傷を忘れていた。

傷自体はリインフォースに完全に治してもらい、痛みもない。

だが、はやてを助けに行く際にレイフォンは確かに身体から大量の

血液が無くなる感覚を覚えていた。

「あ…」

レイフオンは胸元を触り、そこにあったモノが無くなっていたことに気付く。

あのクレスタとの戦闘の際に受けた致命傷を完全に治した宝石…ジュエルシードがレイフオンの胸元から消えていた。

ジュエルシードの紛失に気付いたレイフオンは、思わず汚染獣を見失ってしまう。

汚染獣は当初通り姿を変えていき、段々巨大になって、凶悪な姿になっていく。

だからこそ、ジュエルシードの効果を思い出させる。

ジュエルシードは簡単に言えば願いを叶える宝石。

つまり破壊求めるプログラムに寄生すれば、あのような姿になるのではないかと。

何より、アレは元々はレイフオンに寄生していた。

当初は、汚染獣を屠るための武器である天剣に、そしてその次は汚染獣とは対の関係でもある武芸者のレイフオンにだ。

ならば、その情報を元に汚染獣が復元されてもおかしくはなかった。

が、それは素人考えであるレイフオンの憶測に過ぎない。

そのためレイフオンは、専門家と言うより、レイフオンよりもジュエルシードを知っているだろうクロノに尋ねた。

「クロノさん、ジュエルシードが闇の書に取り込まれたらどういう変化を起こすんですか？」

「つて、ちょっと待て……その言い方から察するとジュエルシードを、あの中に忘れて来たとも言いたそうだが」

「はい、何故か解りませんが、こう簡単にポロつと取れてたみたいです」

レイフォンの質問に目を見開きながら驚くクロノに対しレイフォンは頷く。

それを聞いたクロノはあまりのことに頭を押さえてしまう。

レイフォンはその力をあまり知らないが、ジュエルシード一つでも願いによれば世界一つのバランスを崩すことができるほどの代物である。

過去になのはとフェイトが激突した際にも、次元震を発生したほどである。

それと同じく、いやそれ以上に厄介な代物だった闇の書と重なったとすると考えたくないほどの惨事である。

だが、その惨事が起こっている以上管理局の人間として対処しなければならぬと判断したクロノは、この怒りを後ほどレイフォンを殴ることで落着けることにし、考えをまとめ始める。

「そうだな、確かに僕にもそれはわからない。ジュエルシードも闇の書もロストログアと呼ばれる過去に滅んだ超高度文明の遺産だ」

「ということは？」

「どうなってもおかしくはないということだ」

クロノの視線に釣られるようにレイフォンの視線もクロノから汚染獣の方へと向けられる。

そこには未だ光弾を放ち続ける巨大な汚染獣の姿があった。

圧倒的な火力と手数、強固な防御に不死の生命力、それでもアレを放っておくわけにはいかなかった。

「どうすればアレを倒せると思いますか？」

レイフォンの質問にクロノは眉を顰める。

こっちが聞きたいと言いそうな顔でレイフォンを睨むクロノだったが、聞くと言うことはわからないのだろうと疲れたようにレイフォンの質問に答える。

「いや、倒すと言うよりもジュエルシードを契約状態から封印状態にすれば収まるだろう。だがあの大きさではジュエルシードの所在も分からないうえ、内部の探査もあの身体の表面に阻まれて駄目みたいだ。アースラの探査ならもしかしたら大丈夫だったかもしれないが、あの化け物が現れてからアースラとの通信が途絶えた」

『なるほど、多分それは目の前にいる汚染獣から発せられる汚染物質が原因でしょう。汚染物質が舞う空間では電子機器類も意味もなしませんか』

「全く、厄介な存在だね」

苦々しい顔でロツテが呟く通り、厄介極まりない汚染獣の存在は魔法技術が発展する次元世界の天敵になるのだろう。

「デルボネさんはわかりますか？」

先程デルボネの言ったように、レイフォンの世界では外部の探査は念威端子による探査が一番精密である。

となれば頼る人間は一人である。

世界で最高レベルの念威繰者であるデルボネなら大丈夫ではないかとレイフォンは考えると、デルボネの念威端子が揺れる。

『そうですね……調べる自信はありますがこの距離では少し難しいですね』

申し訳なさそうなデルボネだったが、それだけでもはっきり称賛に値するものだった。

違う世界にまで念威端子を飛ばし、異常な汚染獣の核を調べるという荒技の出来るデルボネはまさしく天剣に相応しい念威繰者である。

「となると、どう汚染獣まで近づくか、だね」

突破口らしきものが見つかったが、その前にある大きな困難にフェイトは思わず顔を顰めてしまう。

普通に行けば間違いなくあの無数の光弾に撃ち落とされているのは明白であり、ザフィーラ達に防御を頼る方法は、ザフィーラ達の消耗具合から不可能だとわかっていたし、ここにいるメンバーも同様に消耗しており無理である。

「分かれて攪乱でもするか？」

「いや無理だな。あの手数だ。分かれたところを各個撃破されるだけだ」

「じゃ、私が囨に……私のソニックフォームなら……」

「フェイト、アレに対峙するということは大雨の中を傘を差さずに身体を濡らさないようにすることと同じくらい困難なことだ。君

の早さでも避けきることは不可能だよ」

ヴィータ、シグナム、フェイト、クロノと次々に口を開くが、中々実行できる案はなく時間だけが刻々と過ぎていく。

「あのね……私今ちょっと思いついたことがあるんだけど……」

手詰まりかここにいる人間が思っていたその時、唯一この場で沈黙していたなのはが口を開く。

そしてなのはが考えた案を聞いたレイフォン達は感心や呆れなど様々の視線をなのはに向ける。

「かなり力技な方法だけど……」

「確かに今まで上がった方法の中で一番成功率が高そうだ」

「ああ、これはある意味妙案だ」

「……めっちゃくちゃな奴だな」

「なのはらしいね……」

「なのはちゃんって結構……」

『若いて良いですね』

各自の称賛の言葉を聞いたなのはは照れたように笑っていたが、自身でも考えた案に思うことがあったのか微妙に頬が引き攣っていた。

だがいつまでもこうして話している時間はなかった。
各自、決められた配置につくと作戦決行の合図が待った。

「行くよっ!!」

なのはが上げた合図とともに作戦は決行された。

第四十六話 作戦開始

レイフオンは呼吸を整え、静かに合図を待つ。

緊張気味のはやての固さを解すためヴィータとシグナム達の会話を聞きながらレイフオンはあることを考えていた。

それはデルボネ、いや正確にはデルボネが現れたことである。帰ることを諦め、はやて達と共にいることを決意したレイフオンだったが、デルボネが現れたことにより向こうへの帰還が可能かもしれないという誘惑と向こうで待っている存在のことを聞くと、やはり迷いが生まれてしまう。

向こうに帰っても、またこっちへ来たらいいという考えは、たぶん無理だろうとレイフオンには何となくわかっていた。帰ればもうここには帰ってこれないし、残ればもう向こうには戻れない。

究極の二択を迫られるレイフオンに、なのはによる合図が聞こえてきた。

「今は倒すことだけに集中しろ」

自分にそう言い聞かしたレイフオンは、こうして問題は先送りにするのだった。

? ? ?

なのはの作戦は至ってシンプルなものだった。

現在この戦場は、汚染獣の広域無限射撃に空戦権を支配され、汚染獣に近づく術はおろか逃げる場所すらなかった。

防御魔法で固めてゆっくりと前進するにしても、汚染獣との間の距離では接近する前に力尽きてしまだろう。

回避という手段もこの中で回避に優れたフェイトやレイフォンですら数秒も持たないであろう。

ならどうするか？

なのはが考えたことはこうだ。

道が無ければ作ればいい、と。

「デイベイン……バスタアアー!!」

汚染獣との最適な角度を取ったなのはがカートリッジを弾きながら砲撃を放つ。

なのはが放った砲撃はこの空域を支配していた光弾の雨を呑みこみ、そのまま遙か後方の汚染獣にまで迫るが、汚染獣の胴体から生え出た巨大な腕により、その砲撃は弾かれる。

が、それはレイフォン達の思惑通りだった。

確かに攻撃自体は防がれてしまったが、砲撃が通過したその所には、汚染獣が放った光弾は無く、人が並んで三人も通れないほどの細いものだった。道と言えるモノが確かにできていた。

数秒もすれば、再び光弾に埋もれる道筋をフェイトを先頭にしたレイフォン達が駆けるように飛ぶ。

そして再び前方から迫る光弾に、戦闘のフェイトはカートリッジを弾きながらデバイスの先を向ける。

「プラズマ……スマツシャアアー!!」

今度はフェイトの砲撃により、迫る光弾を呑みこみ、再び前方に道を作り出すと、フェイトを追い抜くような形でシグナム、ヴィータ、ロッテ、そしてレイフォンの四人が駆け抜けていく。

砲撃二連発で確実に距離を詰めてきたレイフォン達に汚染獣は脅威に思ったのか、展開された翼を折り曲げて、拡散していた光弾の射角を狭めて接近するレイフォン達に的を絞ると同時に胴体部分から生え出た触手の槍をレイフォン達に向ける。

攻撃が放たれれば全滅するだろうが、しかし、それはレイフォン達にとって想定範囲内のことだった。

「悠久なる凍土　凍てつく棺のうちにて　永遠の眠りを与えよ……」

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍……」

突貫を行わずに、ザフィーラ達が展開した結界内で詠唱していたク

ロノとはやての極大魔法が炸裂する。

「凍りつけ！！ エターナルコフィン！！」

「ミストルティンツ！！」

クロノが放ったデュランダルに搭載していた極大凍結魔法は、足元に広がる海すらも凍らし、山のような巨体の汚染獣を拘束し、凍結させる。

動きの止まった汚染獣にはやての目の前に展開した七つの光の槍が追い討ちとばかりに、汚染獣の胴体に突き刺さる。

七つの光槍が突き刺さった場所からは、石化が起こり、汚染獣の動きと回復を妨げる結果となる。

その規格外の大規模魔法を受けた汚染獣はより規格外で非常識の存在だった。

普通のモノなら屈することもできない拘束の封印を身体を震わしながら破壊しつつ、石化と凍結から逃れた三枚の翼が突貫を行うレイフォン達に向けられて、一斉に光弾が発射された。

「アイゼンツ！！」

『G i g a n t f o r m』

グラフアイゼンを汚染獣に向けたヴィータは、カートリッジを打ち込みながら、アイゼンをギガントフォームに切り替える。

攻撃ではなく防御だけに展開された巨大な鎚は盾のように、汚染獣からの放たれる光弾からレイフォン達を守ると、そのまま主であるヴィータ共に汚染獣に向けて急降下を開始しその後にくくようにレイフォン、シグナム、ロツテが続いていく。

「よっし!! 行けるぞっ!!」

ここまではほぼ作戦通りに事が進んでいた。

後はこのまま接近したのち、ロットとシグナムとレイフオンの三人による攻撃により汚染獣の中へ侵入すると言う計画だったが、汚染獣の再生能力は予想を遥かに超えていた。

「っ!! 前方来ますっ!!」

汚染獣と距離が目の先まで来た時、その接近に脅威を感じたのか、汚染獣は自身に纏う氷と石の拘束を碎き、最後の防衛である巨大な両腕が振り下ろした。

「な、アイゼンっ!! っがはっ!!」

ヴィータのグラフアイゼンは無残にも碎かれ、その破片が海へと散らばると同時に先頭にいたヴィータは、そのまま海へと叩き落とされた。

「ヴィータッ!!」

「馬鹿っ!! もう一発来るぞっ!!」

ヴィータの墜落に一瞬動きの止まったレイフオン達に、汚染獣の両腕が唸りを上げながら頭上から迫る。

「二人とも、下がって」

「下がるのはお前だっ!」

動きが止まったせいで、回避が不可能と判断したレイフォンは、その腕を受け止めようと天剣に剄を流した瞬間、ロッテの放った回し蹴りにより真下へと叩き落とされる。

返す足で、シグナムも蹴り飛ばすとロッテはレイフォンに向って怒鳴り声を檄を送る。

「ぐっ、ロッテさんっ」

「さっさと終わらして来、っがあ！」

その場に残ったロッテはそのままヴィータと同様に海へと叩き落とされて、水柱を上げた。

「っ！！ 乗れっレイフォンッ！！」

「はいっ！！」

ここで止まれば全員の苦労が水の泡となり、唯一の勝機を見逃すことになる。

それだけは絶対に許されないと、レイフォン、シグナムは最後の行動に移る。

「紫電……」

レヴァンティンを構えたシグナムはカートリッジを叩くと、最高の一振りを放とうと息を整える。

だが、その一瞬の隙を汚染獣が見逃すわけなかった。

再び振りあげられた巨大な両腕はレイフォンとシグナムに向けて振り下ろされようしていた。

「させないっ!!」

「シグナムッこっちは任せてっ!!」

「ロッテの分、返さしてもらおうわよ」

光弾が消えたおかげで、接近が可能になったため、なのはとフェイトとアリアがその両腕を弾くように砲撃を打ち込んでいく。

「ヴィータとロッテの救助は僕達がしておく」

「行けっ、レイフォン、シグナムッ!!」

海面へと向かうクロノとザフィーラの声を受け、シグナムはその剣を振り下ろした。

「一閃っ!!」

「はああっ!!」

シグナムの斬撃に合わせるようにレイフォンはその刀身に乗ると、シグナムと言う発射台を用いて爆発的な加速を得たレイフォンは自身光の槍と化して、そのまま汚染獣に向かって突貫を開始する。

魔法剄技混合剣撃、流星火。

旋廻による加速とシグナムの紫電一閃の破壊力を上乘せし、全身に衝剄と炎を纏った一撃は、大気を巻き上げ、凄まじい上場気流を巻き上げると、その力を用いて汚染獣の強固な皮膚を紙のごとく貫い

た。

「デルボネさんっ」

『はい、このまま五十七メル先に光体が感じられます』

皮膚の鎧を貫き汚染獣の体内に侵入したレイフォンは肩に止まっている念威端子に尋ねながら、起点であるジュエルシードに向かっていく。

体中に汚染獣の体液や血肉がへばり付き、レイフォンのバリアジャケットや皮膚を焦がしながらも怯むことなく進んだレイフォンを誘うように、突如空洞のような所に辿りついた。

身体を半転させながらレイフォンは汚染獣の肉片の上に着地すると、開けた空洞内を見渡す。

回りは汚染獣の血肉である赤色に覆われて、酷い匂いがした。

「ここは？」

『どうやら、ここが汚染獣の心臓部のようですが、気を付けてください。何かいます』

デルボネの注意に頷きながら、息を整えながら周囲を見渡す。

先程から視線を感じるのだ。

今までの戦闘での疲れからか、額から汗が滲むと、レイフォンはそれを煩わしいように左手で拭う。

その瞬間、頭上から殺気を感じレイフォンは後方へと転がるように回避する。

「え…」

瞬時に身体を起こしたレイフォンは、その先にいる者を見て言葉を失う。

そこには有り得ない光景があったからだ。

右手には見慣れた鋼鉄鍊金鋼の刀を握り、真っ黒な服に目元を隠した仮面。

だが、そこにいたのは間違いなくレイフォン・アルセイフそのものだった。

?
?
?

「はあ……、やっと見つけたわね」

デルボネの報告を聞きながら、ソファの上で疲れたように横になっていたのはこのグレンダンの頂点に立つ女王アルシェイラ・アルニモスだった。

いつもならそのだらしないアルシェイラに苦言を言うであろうカナリスも現在、グレンダン内で広まっている噂の対策のためここにはいない。

「全く違う世界観の次元世界ね……まったくそんなところまで飛んで行っちゃって、飛んだ苦勞と勞力をかけさせたあの子には何か罰でも与えないとね」

とは言うものの内心、実はその子の幼馴染の悲しみを与えたことによる罰が大きいのはアルシェイラ本人以外誰も知らない。

「で、本当にあの子をこっちに戻せるのかしら？ 自称天才科学者殿？」

胡散臭そうに睨みつけるアルシェイラの前に膝をつく白衣の男が口を開く。

「ええもちろんです陛下。しかし、少し時間が掛かると思いますが」

「ふうん、まあいいわ。で、要求は何なのかしら？」

科学者の男の答えにアルシェイラは何か考えるように目を瞑りながら答える。

アルシェイラの言葉に男は顔を上げて嘘臭い笑みを浮かべたまま口を開く。

「いいえ、要求などはありませんよ。命を狙った私にこの厚遇に扱っていただいたお礼に、ですよ」

「タダほど高いモノはないのだけど」

さっさと言えと案にそう言ってるアルシェイラに男は口元を緩めながら答える。

「では、一つ宝石が欲しいのですが？」

第四十七話 結末

「レイ君……」

レイフォンが汚染獣に呑みこまれて数分、汚染獣はあの巨大な身体を再び黒い球体へと変化させるとそのまま宙に浮き上がり、そのまま停止していた。

その様子になのはやフェイト、はやてやクロノといった余力があった人間が、その球体に向かって攻撃を放ってみるが、球体は砲撃を弾いただけで何一つ行動を起こすことがなかった。

何も打つ手が無くなったはやて達はそのまま海面の上で汚染獣の姿を見ていた。

「主はやて……」

「あつ、シグナム。ヴィータとシャルの容体はどうなんや？」

心配そうにレイフォンの無事を祈っていたはやてに背後からヴィータ達の容体を見ていたシグナムが話掛けてくると、はやては治療のためにここから離脱したヴィータ達の安否を尋ねた。

その言葉にシグナムは少しだけ笑みを浮かべる。

「はい、二人とも命に別条はないです。特にシャルは治癒がうまくいったようで明日には目を覚ますでしょう」

その言葉を聞いてはやては、心底ほっとしたのか大きく溜め息をつくとそのまま身体を弛緩させた。

「そうか……ならクロノ君にお礼言つとかなあかな」

「そうしたほうがいいでしょうね」

だが、当のクロノは現在ここにはいない。

先程放った極大凍結魔法『エターナルコフィン』により完全に魔力が尽きたクロノは、怪我人であるヴィータとシャル、ロツテの三人をシグナムと共にこの戦域を離脱し、アースラへと戻った。

そのためここにいる戦力は、全快の四分の一くらいの魔力しか残っていないのはとフェイトの両名と障壁として全エネルギーを使いきったザフィーラとアルフ。

一番余力があるが、病み上がりのせいで体力に不安があるはやて自身に、相棒であるレヴァンテインが先程のレイフォンとの連携で大破したため無手のままのシグナムに、管理局の人間で一番余力があったため指揮を任されたアリアのみである。

アースラ所属の武装隊に応援を要請してはいるが、ヴォルケンリッターやレイフォン達との戦いでほぼ全員が負傷している現状から見て期待はできなかった。

「心配ですか？」

シグナムの言葉にはやては黒い繭の方を見つめながら小さく頷いた。

「うん、けど帰ってくると信じてるから」

そう呟いたはやては、中で生存していると信じるレイフォンへと祈りを飛ばした。

?
?
?

レイフォンはこの状況を理解できなかった。
振るわれた天剣による一撃は、易々と流され、返す刀でレイフォンの攻勢を退かされる。

「っ!!　ちっ!」

外力系衝剄の変化、轟剣。

膨大な剄で作られた刃でレイフォンは、目の前の幻想を切り裂きにかかる。
だが汚染獣の強固な殻すら切り裂くその一撃は、刀で流すように受け流されるとそのまま地面に突き刺さった。

外力系衝剄の変化、円礫。

幻想を囲むように現れた衝剄の波にレイフォンは吞まれ、そのまま後方へと飛ばされる。
空中で受け身を取ったレイフォンの表情はいつも以上に苛立っていた。

その苛立ちは、目の前に原因があった。

レイフォン自身と同じ顔、同じ体なのに、剣ではなく刀を持ち、レイフォンが封印したサイハーデンの技を使う偽物は、レイフォンにとって許せる存在ではなかった。

その幻想である偽物：シャドウを掻き消そうと手をかざし衝剄を放つが、向こうもこちらと同じように衝剄を放ち、レイフォンの衝剄を双殺した。

内力系活剄の変化、旋剄。

衝剄が弾けた瞬間、足を踏み出したレイフォンはそのまま一直線に目の前のシャドウを急襲すると、その首を落とすように剣を振るう。

内力系活剄の変化、水鏡渡り。

レイフォンの踏み込みを越えるその速度でレイフォンの背後に回ったシャドウは首筋に刃を走らせてレイフォンの首筋を裂こうと刀を振り抜いた。

その一撃を寸前のところを下に屈むことで回避したレイフォンは、そのまま天剣を振るおうとするが、突如襲った横腹からの衝撃により、その小さな身体は飛ばされた。

吹き飛ばレイフォンの眼に映ったのは、片手で刀身を掴み、抜き打ちを放とうとするシャドウの姿だった。

サイハーデン刀争術、焰切り。

レイフォンに向かって放たれた斬撃と衝剄の二連撃を、レイフォンは寸前のところで金剛剄を行うことで防ぎきったかに見えたが、

「があっ」

金剛剄の隙を狙って放たれた剄の乗った蹴りは、レイフオンの横腹を捉え、そのままレイフオンを後方に押し返した。

そのまま叩きつけられたレイフオンは壁付近まで転がると、そのまま突き刺した天剣で、ゆっくりと身体を起こしながら乱れた呼吸と怒り狂う頭を鎮めようとする。

が、しかし、シャドウが握る鋼鉄鍊金鋼の刀を見ただけで、抑えた怒りが込み上げてくるのをレイフオンは抑えることができなかった。

「潰してやる、偽物」

再び突撃を開始するレイフオンだったが、こうも簡単にいなされるため一つ考えを持っていた。

小刻みにステップを踏むレイフオンからブレたようにレイフオンが現れて、倍々とその数が増していく。

活剄衝剄混合変化、千斬閃。

計十五人にも分かれたレイフオンが全方位からシャドウに迫ると、剄を纏った天剣を振りかざした。

その振り下ろされた天剣から放たれた何十もの衝剄の斬撃は、シャドウを囲むようにして迫るとそのままその身を切り裂きにかかる。

が、その攻撃すらシャドウには通じなかった。

活剄衝剄混合変化、竜旋剄。

勁で体中を青く発光させたシャドウはそのまま身体を回転させる。

その衝撃から生まれた衝剄の渦がシャドウの周囲を包むように展開すると、そのままレイフオンの放った無数の衝剄による斬撃を全て呑みこむだけではなく、周囲にいたレイフオン達をも呑みこんだ。

竜旋剄の渦に呑みこまれたレイフオンは上へと飛ばされて、天井部の汚染獣の肉にぶつかり、そのまま地面へと叩き落とされた。

全身から発する痛みにレイフオンは、顔を歪めながらゆっくりと身体を起こし始める。

ふらつく身体を天剣を突き刺して支えると、そのまま力の無い目で目の前のシャドウを睨みつける。

何故勝てないのだ、とレイフオンは歯を噛み締めながら考える。

確かにレイフオンは剣がりゅうを使っていて、向こうは刀サイハーデンを使っているが、ここまで差がつくほどのものではないとレイフオンは理解している。何よりレイフオンが使っているのは最高峰の錬金鋼である天剣なのである。

天剣を用いたほぼ全開まで放出した勁による一撃なら、シャドウが握る刀の鋼鉄錬金鋼など一撃で破壊できるはずだ。

だが、結果は一目瞭然であり、向こうは無傷でこちらはボロボロである。

「それでも諦めるわけにはいかない」

力が抜け、震える足を一步一步確かめるように、前進するレイフオンは天剣を握りしめる。

そのレイフオンを迎え撃つかのようにシャドウは、刀を腰へと戻すと、そのまま左手を刀身を握る。

その構えから放たれる一撃は間違いなく、焰切りである。

その構えから発する圧迫感に吞まれそうな心をレイフオンは自身の奮い立たせるように声を上げる。

「はあああああつ!!!」

気合と共に旋廻を発動させると、渾身の勁を天剣と流し込む。

外力系衝廻の変化、轟剣。

レイフオンの渾身の斬撃に、シャドウも刀を振るった。

サイハーデン刀争術、焰切り。

驚異的な速度と圧倒的な破壊力を秘めた両者の斬撃はぶつかり、そして呆気なく勝敗がついた。

宙に舞う天剣を視線で追うレイフオンは、そのまま全身を襲う衝撃に身をゆだめる。

浮遊感を味わい、地面に叩きつけられたレイフオンは、全身が麻痺したように動かないことに、自身が負けたことを理解し、そのまま擦れていく視界を眺めていた。

視界に映るのは、汚染獣の肉でできた天井で、あまり良いものではなかったため、レイフオンは内心がっかりしていた。
最後くらいは空が見たかった、と。

「え……」

薄れゆく意識の中、レイフォンはありえないモノを見えた。

視界の先に広がったのは無数の光を放つ星達と大きな月に照らされた夜の闇、それは間違いなく夜空だった。

その夜空と一緒に映った人影は、レイフォンが間違うことができない相手、はやてだった。

必死に何か祈るはやての姿にレイフォンは、意識を覚醒させていく。

「そうだった……待つ人がいたんだ」

はやてが祈ることは現状から見一つしかなかった。

その声無きエールを受けてレイフォンは、自身の身体をゆっくりと起こしながら立ちあがり始める。

「あれ？ 攻撃してこないのか」

ゆっくりと身体を起こそうとしたレイフォンの視線の先には、刀を構えたシャドウの姿があった。

だが、レイフォンへ攻撃する気配はなく、レイフォンが完全に身体を起こしても動く気配がなかった。

レイフォンはゆっくりとそのシャドウの周囲を歩き、反対側まで飛んで行ってしまった天剣を取りに歩みを進める。

地面に突き刺さった天剣を抜きながらレイフォンは、目の前にいる自分自身の未練シャドウを見つめる。

「そうだった。僕は決めたんだったね」

残り少ない体中の勁を集め、身体の治癒を図る。

徐々に身体が癒えていくのを感じながらレイフォンは、天剣に剄を

流そうとする。

が、弱い光が天剣に纏っただけで、風が吹けば消えそうな程の
勁しか集めることができなかった。

しかし、レイフォンには焦りはなかった。

胸から溢れる暖かい何かをレイフォンは、天剣に纏め始める。

「はやてを守ると」

体中を包み込むようなはやてから送られた魔力をレイフォンは天剣
に纏め始める。

天剣に、そしてレイフォンの纏う魔力は淡い光の風となりレイフォ
ンの周囲を渦巻き始める。

「だから、さよならだ。」

レイフォン
幻想」

構えられた天剣の回りを全てを呑みこむような暴風が纏い、周囲が
嵐のような凄まじい轟音が鳴り響く。

そのまま風の推進力で、加速したレイフォンは天剣を振り下ろす。

嵐塵一閃。

全てを切り裂き、塵と化すその風の刃は、シャドウへと向かい、そ
して呑み込んだ。

そしてその一撃はそれだけに留まることなく、汚染獣の肉壁を易々
と食い破ると、再びレイフォンに夜空を見せる結果となった。

そのまま宙に浮くジュエルシールドをレイフォンは握りしめると、も
う一度だけシャドウがいたところに視線を送る。

「この結末に後悔だけはしない」

自身に送るその言葉をレイフォンは噛みしめるように告げると、レイフォンを待っている人達の元へと飛び去った。

第四十八話 決断（前書き）

久しぶりの更新です。

作者は喉が潰れて入院していました。

皆さんも声の出しすぎに注意しましょう。

第四十八話 決断

蒼い風を纏ったレイフォンは、そのまま自身の帰りを待つ家族の元へ向かう。

飛行するレイフォンに抱きつくようにはやてが抱きつく目元に涙を浮かべたままの笑みを浮かべる。

「おかえりレイ君」

その言葉にレイフォンを思わず頬を緩めると、抱きつくはやての頭を撫でながらゆっくりと口を開く。

「ただいま、はやて」

微笑むレイフォンにはやては袖で涙を拭うと晴れやかな笑みを浮かべた。

「全く、無茶をする」

「あまり主に心配をかけるな」

待っていたのははやてだけではない。

ザフィーラとシグナムもどこかほっとしたような安心した顔でレイフォンの頭を乱暴に撫でる。

「ザフィーラ、シグナムさん、ただいま」

乱暴な歓迎で髪がぐちゃぐちゃになりながらもレイフォンは嬉しそうに二人の方を見ると、そこにいるべき者がいないため、レイフォ

ンは思わず眉を落としながらに口を開く。

「あの、ヴィータの容体は…」

「今はシャルと一緒にアースラ内で治療中だ。 命等の心配はない」

シグナムの言葉にレイフォンは安心したように溜め息をつく。

全員が命がけで戦った結果がヴィータを失うというのならやりきれない。

戦いで人が死なないという甘い幻想をレイフォンは信じてはいないし、犠牲はつくと言うのも知っている。

それでも大切なものを失うことは慣れてもいないし、認めてもいない。

「で、感動の対面はこの辺にして、まずはアレをどうにかしない？」

感動の再会をする八神家を見ていたアリアが冷静な口調で話を進めていく。

アリアの視線の先には、まだ、ジュエルシールドを失ってもまだ存在し続ける黒き繭の残骸が残っていた。

その繭を見て、目元を落とすはやての肩をレイフォンはゆっくりと叩く。

「はやて……」

僕が代わりにやろうか？というレイフォンの言葉をはやては遮るように首を振る。

「大丈夫や。　これは夜天の書の主である私の仕事や」

はやては一步踏み出したかのように、目の前で崩壊と再生を行い続ける憐れな機械を見据えながら、自身の杖のアームドデバイス、騎士杖シュベルトクロイツを空に向かって掲げる。

はやての足元と前方にはベルカの魔法陣が輝き、そしてはやては悲しみを秘めた声で歌うように詠唱する。

「ごめんな……響け終焉の笛、ラグナロク」

小さな謝罪と最後の呪文キと共に放たれた砲撃は、狙いを外すことなく一直線に黒い繭の残骸へと迫り、そして爆発と共にそれらを完全に吹き飛ばした。

威力のあまりにこちらまで風圧が襲う中、はやての肩が微かに震えていた。

その肩をレイフォンは後ろから優しく抱き寄せると、闇の書の呪いの顛末を見届けていた。

?
?
?

朝日が昇る海面は寂しいくらいに静かのもので、その中で海面にサ
ーチャーを飛ばしていたアリアが口を開く。

「魔力反応無し……どうやら終わったようね」

その言葉にアリア本人を含むこの場の人間から安堵のため息が生ま
れる。

管制人格であるリインフォースに核となっていたジュエルシードを
失った呪いの残骸は、はやての一撃で完全に消滅したようだ。

「ああっ！！ アリサちゃんとすずかちゃんのことを忘れてたっ！
」

戦闘を終えて、緊張感が抜けたなのは達は、疲労困憊の身体でア
スラへと帰還しようとしたその時、はやてが何か思い出したかのよ
うに大声を上げる。

アリサとすずかは、なのは達とともにはやての見舞いのために病院
に訪れていた。

その後、シグナム達の強行に、広域戦闘である。

もしかしたら巻き込まれてしまったのではないかと心配するはやて
に対し、なのはは笑みを浮かべながら答える。

「大丈夫だよ、はやてちゃん。 アリサちゃん達はアースラで保護
してるから」

「でも、後で説明しなきゃ……だよね？」

砕かれたコンクリートの壁の破片が、アリサ達に迫るのを防いだの
はなのはとフェイトの魔法であった。

そのため、アリサとすずかには魔法のことがバレてしまい、説明す

ることなくアースラへと転送してもらったのである。

フェイトは理解ができなくて怒っているアリサの姿を頭に思い浮かべ、思わず苦笑いをしてしまう。

「私達も謝罪をしておかなければ、な」

「ああ、ヴィータとシャルが起きたらすぐにでも行くべきだろうな」

その会話を聞いていたシグナムとザフィーラは顔を伏せながら自身達の行動を恥じていた。

完全に怒りに振りまわされていたとはいえ、魔法を知らないただの少女に怪我を負わすことになっていたのだから。

「なあ、とりあえず話はここまでにしてアースラに戻らないかい？
いい加減疲れたし、休みたいね」

なのは達を急かすようにアルフが言うが、確かに闇の書のプログラムの破壊し、ここにいる意味がないなのは達はここいるよりもアースラに戻る方がいいだろう。

ただ、一人を除いてだが。

『その前に私からお話があるのですがいいかしら？』

沈黙し続けていた端子が震えると、はやてが首を傾げながら尋ねた。

「デルボネ……さんでしたよね、えっとアースラに戻っては駄目なんですか？」

『ええ、私も本来の目的を果たさないといけませんから』

デルボネの言葉にはやては、何か嫌な予感を感じながら恐る恐る聞き返す。

「目的……ですか？」

『ええ、私がここに来たのはそこにいるレイフォン・ヴォルフシュテイン・アルセイフの搜索、そして連れ戻すことです』

「連れ戻すってっそんなっ！」

一方的な宣告にはやては、狼狽したままデルボネの端子に駆け寄り訴えかけた。

その宣告は、はやて以外の人間にも衝撃的だったようで、シグナム、ザフィーラ、といった八神家の人間は眉を顰めてデルボネの端子を睨み、フェイトとなのはは困惑した様子でデルボネの端子へと視線を送る。

だが、デルボネはそんな視線を気にすることなく、淡々と話を続ける。

『レイフォンは元々こちらの人間、彼にも帰るべき場所があるというわけです。それに今すぐというわけではありませんよ。私の力で彼をこちらの世界に戻すことはできませんから。だから今日はこのことを伝えるだけです』

デルボネには、いや女王陛下すらこの世界から向こうの世界を繋いだりする力はない。

こうして念威端子を送ることができたのも外来の科学者のおかげであった。

その準備期間があるために、デルボネの端子だけこちらに送ったのである。

だが、何れは迎えが来ると言うことに、はやては自身が一番恐れていたことが起きることは理解した。

けれど、レイフォンにも帰る場所があるというのはわかっていただ。

「で、でもそんな急に……」

はやては力なく首を横に振りながら答えると、デルボネもどこか論ずようにはやてに話しかける。

『確かに急かもしれませんが……ですがこちらもあまり時間がないんですよ』

「……何かあったのですか？」

デルボネの溜め息でもつきたくなるほどに疲れた様子の声色に、沈黙を貫いていたレイフォンが口を開いた。

『グレンダンで少々厄介な噂が広まり始めているのですよ。レイフォン、貴方は身に覚えがあるのでは？』

「……」

その言葉にレイフォンは心臓に何か冷たいものが突き刺さった気がした。

厄介な噂、それは間違いなくレイフォンが行っていた闇試合のことでだろう。

高潔な精神で人々を守る存在である武芸者、その頂点とまでいわれる天劍授受者が、闇試合で金銭を稼ぐという人々の信頼を裏切る行為は、最悪、暴動に駆り立ててもおかしくはない問題である。

それが公になるということは、レイフォンが天劍授受者から犯罪者へと堕ちることを意味する。

『やってはいけないことだと理解はしていたようですね』

「……そうするしかなかったんですから」

それでもレイフォンにとってそれが最善な行動であった。

幼く軽率な行動であるが、それしかレイフォンには思い浮かばなかった。

『貴方の稼いだ金銭の流れは既に把握しています。それでも貴方の行為が正当化されるわけではありません』

デルボネの言葉にレイフォンは思わず鼻で笑ってしまう。

別にレイフォンにとって、正当化されようと非難されようとどうでもいいことだった。

ただ、今現在、茫然と話を聞くはやて達にはそのことを知られたくなかった。

「なら僕を捕えますか？」

どこか自虐的なレイフォンの言葉に、デルボネは少し呆れたよう溜め息をつく、レイフォンを諭すように言葉を返す。

『そうしてもかまいませんが、そうすると貴方の帰りを待つ者が悲

しむ結果となります。それは陛下も望んではいません。それに噂も所詮は噂ですからもみ消すことも可能です。ただ貴方が帰ってこなければですが』

それはレイフオンに帰って来いと言っているようなものだった。確かにリーリン達が心配しているという事実は、レイフオンの決意を揺るがすほどであった。

だが、陛下の考えはレイフオンに不信感を抱かせた。確かにレイフオンの知る女王陛下は、何処か非常識だが冷酷な人間ではなかった。

だが、過剰に期待を寄せたりするような愛情深い人間でもない。ましてやレイフオンの場合、危険にはらんだ罪を犯している。

この噂がある時再び、市井に流れでもしたら、その時はグレンダンを巻き込む大事件に発展するかもしれない。

「何故、陛下が僕にそこまでしてくれるのですか？」

レイフオンの搜索だけではなく、レイフオンの罪すらもみ消すという破格の条件を提示してきた。

確かにレイフオンの探索は、天剣の搜索と考えれば納得できるが、噂を消すことにはあまりメリットがない気がする。

そんなレイフオンの質問にデルボネは何処か誤魔化すように口を開く。

『それは帰ってきて陛下本人から聞いたらどうですか？ その歳で天剣に至るその才を捨てるのは惜しいとリテンスを始めとする天剣授受者達も考えています。私も孫のような存在がいなくなるのは寂しいものですから』

「デルボネさん……僕は…」

デルボネの言葉にレイフォンは胸を熱くさせるくらい嬉しく思った。だが、レイフォンははやてを裏切ることとはしたくなかった。決意は変わらなかった。

『……その様子ではあまり乗り気ではないそうですね。仕方ありません三ヶ月後、そちらに迎えの者が向かいますから、その間に別れの挨拶なりを考えておいてください。……では異世界の方達、私はここで失礼しますね』

デルボネはそう告げると念威端子はそのままが薄れていくように消えていった。

その端子が消えるのを見つめていたレイフォンに、はやては背後から心配そうに声を掛ける。

「レイ君……」

「……行こう、はやて。みんな待っている」

疲れたように吐き出されたレイフォンの言葉にここにいる全員が硬直を解き、その後、アースラへと転送されていった。

重苦しい空気と共に。

第四十九話 悩める子羊

自身に充てられた部屋のベットの上でレイフォンは身体を寝かして、部屋の天井を眺めていた。

アレほどの激戦を終え、流石のレイフォンも疲れが溜まっていた。だが、身体は睡眠に向かうことはなく、レイフォンはただぼんやりと天井を眺めて時間を潰していた。

いや、レイフォンにもわかっていた。

自身が眠れない理由を、デルボネの言葉を聞いてレイフォンの心に迷い、未練というしこりができたことに。

レイフォンはこの世界に残る決意をした。

はやての家族として、騎士として。

リインフォースとの誓いを抜きにしてもレイフォンはこの世界に残りたいと思っていた。

いつも元気でわがままだがどこか憎めない妹のような存在のヴィータ、堅物で戦闘狂だが家族思いの姉のような存在のシグナム、おっちょこちょいだが頑張り屋で姉のようで母のような存在のシャマル、無口で犬だが頼りがいのあるザフィーラ。

彼らもはやてと同じく大切な存在であった。

だが向こうの世界にも同様に大切なものがいた。

不器用だがレイフォンに武芸を教えてくれた養父のデルク、闇試合に出てでも助けたいと思っていた孤児院の皆、無口で冷徹だが鋼糸という奥技を教えてくれたもう一人の師であるリテンズ、レイフォンのことを心配していつも気にかけてくれる友人のリヴァース。そして、物心がつく頃から共に傍にいてくれた半身のような存在のリリン。

残るということは彼らとの繋がりが失われるということである。
そのことの重さにレイフォンはようやく気付き、そのために踏み出すことができなくなってしまっていた。

丁度、その時レイフォンの部屋の扉にノックの音が響いた。

思考が中断されたレイフォンはそのままベットから身体を起こし、壁に備えてあった時計に眼をやる。

時計の短針はこの部屋に入ってから二目盛りほど進んでおり、レイフォンは誰が来たのかと不審に思う。

別れた際、はやては初めて魔法に戦闘、リインフォースの別れと色々な事があったせいで、殆ど夢の中だったようだし、ヴィータとシヤマルは現在治療終えて安静に眠っており、そのためザファイラとシグナムもはやてとヴィータ達に護衛の意味を兼ねて、同じ部屋で眠っているはずだ。

ということは、クロノ達アースラの間人だろうとレイフォンは結論付けると、そのまま扉の前に向かい、部屋のロックを外すと扉の開閉ボタンを押した。

「こ、こんにちわ」

「あ、こんにちわ」

現れたのは予想とは違い、何故か緊張している金と黒の魔法少女、フェイトだった。

?
?
?

部屋の隅にあった折りたたみの椅子にフェイトは座らすと、レイフオンはベットに腰を掛けて彼女と対峙した。フェイトの足元には、小型犬のように小さくなったアルフが控えており、先程からこちらに睨みを利かせている。

だが主であるフェイトは、キョロキョロと落ち着きのない様子で、部屋中の至る所に視線を向けていた。

挙動不審なフェイトに、レイフオンは首を傾げつつし尋ねてみた。

「えっと、何か珍しいものでもある?」

「えっ?! う、ううん、私の部屋と変わらないよ」

「そう」

レイフオンの質問に、フェイトは何でもないと言いながら今度は椅子の上で身体を硬直する。

そのために会話は途切れ、互いの沈黙がこの場に支配する。

だが、その沈黙も長くは続かなかった。

おろおろとしているフェイトを見ていたレイフオンが可笑しそうに口元を緩める。

「なんか初めて会ったときもこんな感じだったね」

「えっ？ うん、そうだったかな？」

「うん、で、その後色々あって戦闘になったけどね」

自分が行った行動の迂闊さにレイフォンの表情に影が掛かるように暗くなる。

自傷気味のレイフォンの様子に気づくことなく、フェイトもあの時の戦闘のことを思い出しながら口を開く。

「あ…：そういえば私、簡単に負けちゃったんだね」

余りの完敗具合にフェイトは自分が情けなくなったのか、少し表情の曇らせながら言うのと、少しだけ回復したレイフォンがフェイトの評価をし始める。

「いや、簡単ではなかったよ。動きが目で見失うほど早かったしね」

実際にレイフォンはフェイトの姿を一度は完全にその姿を見失い、背後から一撃を喰らってしまった。

天剣授受者とデルクを除けば、間違いなくトップクラスの速度だったとレイフォンはフェイトの実力を称えた。

「えっそうかな？」

フェイトは明らかに自分より遙かに上の実力の戦士に褒められて喜んでいると、レイフォンも同意するように頷く。

「ただちよつと動きが単純だったね。読みやすかったよ」

「そうなんだ……」

褒め上げて落とすというレイフオンの言葉にフェイトは地味に凹むのを見て、レイフオンは慌ててフォローを入れるように口を開く。

「いや、でもまだまだ発展途上なんだし、これからだよ……きつと」

「そう……かな？　ならレイフオンどうやったら私はもっと強くなれるんだろう？」

フェイトの言葉にレイフオンは思わず首を傾げてしまう。

「強くって……今のままでも十分強いと思うから、そんなに焦らなくともいいと思うよ」

レイフオンから見ても、フェイトは実力があると思っている。

魔法の才は、何度か刃を交えたシグナムが絶賛するほどであったし、防御は薄いとはいえ、それを補う速度に圧倒的な火力。

若干の経験不足は、フェイトの年齢からして仕方ないことだし、これから経験値を積みば間違いなく化けるだろう逸材である。

だが当の本人は、満足してないようで首を振る。

「でも……シグナムには一度も勝てなかったし、あの汚染獣には打つ手がなかったよ」

そう言って落ちこむフェイトの言い分は普通の人から見れば傲慢な発言かもしれない。

百戦錬磨の猛将であるシグナムに対し、まだ十にも満たない経験不足の小娘であるフェイトが太刀打ちできるはずがない。

汚染獣に至っては、シグナムを含めた殆どの人間がどうすることもできないほどの怪物である。

レイフォンから見れば馬鹿な言い分であるが、目の前にいるフェイトの眼が真剣そのものだったため、レイフォンは言葉を選びながら答える。

「なら焦らない事だね。近接戦闘など体術や魔法や戦術を学んで、そして戦って経験を積む。そうやって確実に強くなるしかないと思うよ」

焦りは自身を壊す原因になり、死を招くことすらある。

それにわかりきったことだが、強くなることに近道はない。

確実に一步一步進むという地道な作業が強さの土台となり経験の積み重ねになる。

「レイフォンもそうだったの？」

「うん、数えきれないほど戦って、馬鹿らしいほど剣を振るって、嫌になるほど死にかけてきたよ」

そうしてレイフォンは、天剣授受者という地位まで駆けあがった。強くなるための理由はお金のためだったけど、レイフォンを強靱な武芸者まで育てたのは、デルクとの鍛錬と汚染獣との死闘、そして周りの天剣授受者から学んだ経験である。

「そっか……私も頑張ってみるよ」

「うん、まあ死なない程度にね、もしなんだったらシグナムさんに相談してみたら？」

「シグナムに？」

「うん。シグナムさんと戦ったからわかると思うけど、シグナムさんは間違いなく一級品の戦士で、白兵戦なら僕が知ってる人間の中でも最上位のレベルだよ」

経験値もある上、腕も立つ。

間違いなくシグナムの経験は、フェイトの成長に役立つだろう。

「レイフォンから見てもそうなの？」

「僕の評価が高い気がするけど、純粋な剣術の勝負であれば、シグナムさんと良くて互角だよ。で何よりシグナムさんは魔導師ならぬ魔導師だから、同じ魔導師に教えるのには向いてるよ」

バトルマニア
ただあの戦闘狂はいただけないけどねと苦笑気味のレイフォンの言葉にフェイトは思わず吹き出してしまう。

「あははは……ありがとうレイフォン」

「どういたしまして……役に立って嬉しいよ」

「うん、じゃあ私はもう行くね」

レイフォンに感謝を言うとフェイトは、そのままゆっくりと椅子から立ち上がる。

「そうだね。部屋に帰ったら早く寝た方がいいよ。多分身体がかなり疲労していると思うから」

「うん、ありがとう」

「じゃあ、アルフもね」

レイフォンはあくびをするアルフの頭を一度撫でると、部屋を退出しようとするフェイト達を見送る。

部屋の扉に手を掛けたフェイトが、その動きを止めて、唐突にこんなことを言い出した。

「ねえ、レイフォン。友達っていいよね」

「えっ？」

いきなり脈拍もない言葉にレイフォンは、反応できなかったが、フェイトは構うことなく話を続けた。

「私、なのはに出会って、アリサやすずかと出会って、そういつも思っているの」

「そうなんだ」

フェイトの言葉にレイフォンも頷き返す。

フェイトとなのはの仲の良さは、見ていだけで伝わるほどだったし、レイフォンと全く交流の無いアリサとすずかもフェイトの言葉から想像するに大切な友達なのだろう。

「うん、だから今回魔法のことや隠していたことを、なのはといっ

しよにアリサとすずかに言おうと思っっているんだ」

「確かに二人とも巻き込まれたからね」

そう言うレイフォンは、内心責任を感じていた。

自身のミスで、結果ヴォルケンの皆を暴走させ、二人に危険を及ぼすことになってしまった。

「まあ、そうだけど、アリサ達に話すのはそれだけじゃないんだよ？」

レイフォンの心境を知ってか知らずか、フェイトはこちらに振り返ると頬を緩めた顔を向ける。

「友達が悩んでいたり、苦しんでいたりするのを、助けたいと思うのが友達。だから私達を心配するアリサ達にはちゃんと話して少しでもいいから安心してほしいんだ」

フェイトの言葉にレイフォンは思わず黙り込んでしまう。そして同時にフェイトの強さを垣間見た気がした。

立ち尽くすレイフォン対し、フェイトは笑みを浮かべる。

「だから、レイフォンもはやてと話をしたらいいと思うよ。はやてはきっと心配してると思うから」

「……そっか、そうだね。確かにそうかもしれない」

その言葉にレイフォンの迷いの結び目が緩くなった気がした。はやてと話そう。

残るか戻るか、迷いだらけだが、はやてに話すことだけはしよう。

「って、何か偉そうだったね。レイフォンの事情も知らないのに」

「ううん、僕は話を聞いてよかったと思ってる。あっそうだ。最後に聞いてもいい?」

「うん、何?」

「何でこんな話をしたのかなって思ってた。はやてのことを心配して?」

「心配というより……友達だから、かな?」

フェイトの言葉にレイフォンは胸が熱くなっていく気がした。はやてに良い友達ができたことに、彼女を支えてくれる存在がいることが嬉しくなった。

「そっか……テストロッサちゃんみたいな人がはやての友達になってくれたと思うと僕も嬉しいよ」

レイフォンは笑みを浮かべて、フェイトに向かって感謝するように頭を下げる。

だが、当のフェイトは何故か首を傾げて何でもないように答える。

「何も言ってるの? レイフォンも私達の友達だよ」

「えっ?」

その言葉にレイフォンは驚きながらも下げた頭を戻してフェイトの

方を見る。

「うん、だって初めて会った時と今こうしてお話しをしたから、もうレイフォンは私の友達の一人だよ」

なのははそう言ってたよ。と満面の笑みを浮かべてアルフと共に立ち去るフェイトの後ろ姿をレイフォンはぼんやりと眺めるしかなかった。

第五十話 告白 前篇

激闘の長き夜を一夜明けて、目覚めたはやて達一同はリンディに呼び出されて、アースラ内にある艦長室に集まっていた。

部屋に初めて通された八神家の面々は艦内に広がる日本古来の和風な室内を眺めると、そのまま畳の上置かれた座布団の上に腰を下ろすと既に室内にいたクロノとリンディに向かって深深と頭を下げる。

「遅くなっちゃいましたが、私の家族が多大な迷惑を掛けてもうてすみませんでした」

はやての謝罪にシグナム達守護騎士達も続いて頭を下げる。

その様子を見ていたクロノは何処か居心地悪そうに顔を逸らすと、そのままはやて達に向かって頭を下げる。

「それはこちらも同じだ。確かにシグナム達は法に触れるようなことをしたかもしれないが、こちらの対応も褒められるものではなかった。リド達の一件、本当にすまなかった」

リド達の行動を悔やんでいたクロノの言葉に、頭を戻したシャマルが口を開く。

「それはもう済んだことです。結果的にはレイフォンを救ってくれたのは貴方達なのですから」

「ああ、うちのばかやろーを助けてくれてありがとう」

珍しいヴィータのお礼に、はやては一瞬ばかりとヴィータの方を見ると、そのままニヤニヤと笑みを浮かべながら口を開く。

「なんか、ヴィータが素直にお礼も言うんがなんか可笑しい感じがするわ」

「はやて、ひでえよ。私だってお礼くらいは言えるよ」

その会話にシグナム達やクロノ達も笑みをこぼしていると、入口の扉がゆっくりと開いた。

開かれた扉から現れたのは呼び出されたのはであり、当のなのはお部屋に入るなりそこにいる人間全員が笑みをこぼしていたため、思わず首を傾げながら尋ねてしまう。

「何話してたんですか？」

「何でもねえよ！！早く入れよっ！！」

怒りと照れが混ざった様子のヴィータの言葉に、なのには不思議そうに首を傾げて部屋の中へと入ってくる。

その彼女の後をフェイト、アルフ、そして今日、無限書庫から帰還したユーノが現れた。

ユーノの姿に、いち早く気づいたシグナムが素早くその場から立ち上がると、ユーノの前で立ち、深深と頭を下げた。

「先日の件、本当に申し訳なかった」

深深と頭を下げるシグナムにヴィータ達も何かを思い出したように釣られて頭を下げる。

ユーノは初めて刃を交えた際に、レイフォンに撃墜され、一時的に戦闘不可能までの状態にされたのである。

そのため、シグナム達は自分たちにできることをさせてほしいと続けるが、当のユーノはほぼ初対面に近いシグナム達に謝れたため、狼狽しながらこちらを見ていたなのは達に視線を送る。

その視線になのは達が微笑むのを見て、ユーノも顔を緩めるとそのままシグナム達に向かって口を開く。

「頭を上げてくれませんか」

ユーノの言葉にシグナム達が顔を上げると、ユーノは再び口を開く。

「確かに貴方達は、僕達を傷つけたかもしれませんが、僕はこうしてピンピンして、貴方達はなのは達と手を重ねました。ですからこの謝罪で十分です」

「……すまな、いや……ありがとうと言うべきだな」

ユーノがシグナムに向かってさし伸ばした手をシグナムはゆっくりと掴む。

「はい、ちゃんとお話できてよかったですね」

今までこの場を静観していたリンディがこの場を仕切り直すと、はやてが首を傾げながら答える。

「リンディさん、もしかしてこのためにわたし達を呼んだんですか？」

「いいえ、確かにこう話しあってもらうつもりでしたが、ここに皆さんと呼んだのは私ではありませんから」

リンディの言葉と同時に再び、入口の扉が開く。
そこにいたのは、今回呼びだした張本人、レイフォンだった。

？―？―？―？

「すみません、遅くなりました」

レイフォンが艦長室に入ると、もう既に呼んでいる人間は来ている
ようで、入室しようとするレイフォンに視線を送る。

「あつ、君は」

その時レイフォンは一人の少年に目を止まる。

レイフォンがなのは達との初戦で落としたユーノであり、その姿に
レイフォン自身戸惑っていると、向こうも同様なのかきこちない笑
みを浮かべてくる。

先程シグナム達とは簡単に和解ができたユーノだが、流石に自分を
墜とした人間を目の前にして顔が引きつるのは無理はなく、互いに
言葉が出てこなくて、その場で無言の対峙をしていると、ようやく

意識が復帰したレイフォンが頭を下げた。

「ごめんなさい」

その謝罪の言葉にユーノもようやく硬直から解かれて、許そうと口を開くそれより先に、不安げに待っていたレイフォンが勘違いしたのかゆっくりと口を開く。

「許してほしいなんて図々しいけど、本当にごめん。もしよかったら気が済むまで殴ってもいいよ」

レイフォンの発言にこの場にいた人間は、ポカンとした様子で口を開けて固まり、はやて達は面倒なことになったと頭を抱える。

特に当人であるユーノは、珍しく状況についていけないのか、目線を右へ左へと忙しく動かしながら戸惑っていると、その場を見かねたヴィータが呆れたように口を開く。

「ユーノ、だっけ？　とりあえず突っ込み気持ちも、お前が許しているのは分かるけどさ、とりあえず一発殴っと思ってくれよ？　チャラと言うわけにはいかねえが、お互いに事の折り目くらいはつけれるんじゃないか？」

それに男同士ってそうやって仲直りするもんじゃねえか、と何処がズレた知識を披露するヴィータに続くように、他のヴォルケンリッターも同意するように頷いている。

その光景に、とりあえず殴らなくちゃいけない状況になってしまったユーノは、助けを求める如く、他の人間に視線を送ると、フェイトは男同士の仲直りの仕方に共感しているのか（なのはと友達になったのも魔法戦だった影響だろう）しきりに頷き、使い魔のアルフ

はニコニコ笑みを浮かべながら握りこぶしを作りそのまま突き出すようなジェスチャーをして一番気乗りしていた。

なのはも頑張れとユーノに声援を送り、ある意味この状況の原因になったはやては気まずそうにこちらから眼を逸らし、残るリンディとクロノも関与しないつもりなのか笑みと不機嫌気味の顔でこちらを見ていた、

とりあえず誰一人殴ることを止めようとしなのは、目を瞑っているレイフォンの頑強さと覚悟を決めて握りこぶしを作ったユーノの非力さを知っているからだろう。

「えっと、行くよ」

「いつでもどうぞ」

何処か余裕のあるレイフォンの言葉に、ユーノも覚悟を決めてそのまま拳をレイフォンの頬をめがけて勢いよく振り抜く。

「あっ」

レイフォンの何処が啞然とした言葉が無音の空間に響き、そして

「ッッ！！！！」

声にならない声を上げるユーノの叫び声が部屋中に響き渡る。

「ユーノッ?!」

「ユーノくんッ?!」

蹲り自分の拳に治癒魔法をかけるユーノになのはとフェイトが慌て駆け寄る。

「まあ、怪我が完治していないユーノが殴ればこういう結果になるだろうな」

「シャマル、ユーノ君の治療を手伝ってきい」

「はい」

残された結果にクロノが冷静に呟くと、はやての指示を受けたシャマルが治癒魔法を行うためユーノの傍に立つ。

こうしてこの騒動の收拾のせいで、予定の時間が大幅に遅れたのは言うまでもない。

？――？――？――？

「ところでリンディさんにクロノくん、どういう用件でわたし達を呼んだんですか？」

何とか收拾がつき、その場を代表するようになのはが口を開く。
この場に呼ばれたのも今朝、クロノに食堂で呼ばれたからである。
どういう理由で呼ばれたのかは知らされておらず、そのことについて
は他の者も同様であった。

「それについては僕も詳しくは聞いていない。　　と言うわけなので
すが、艦長」

呼びだしたクロノ本人も知らされておらず、クロノに呼び出しを頼
んだリンディに対してこの場にいる人間の視線が集まる。

「それについては、レイフォン君。　　お願いしますね」

リンディは、なのは達が並んでいる最後尾で、唯一人天井を眺めて、
何処か覚悟を決めているような顔つきのレイフォンに話を振った。
彼女自身も今朝早くに尋ねてきたレイフォンに、皆を集めてほしい
と頼まれたからである。

「はい、わかりました」

どうやら心境の整理がついたレイフォンは、そのまま立ち上がると、
そのままこの場にいる皆の前側の方へと歩き始める。

立ち止まり、振り返ったレイフォンにはやて達全員の視線が集まる。

「話したいことがありましたから、この場に集まってもらいました」

その言葉に一番反応したのははやて家の人間だ。

彼女達は、そのことについて、相談も知らせておらず唯レイフォ
ンを見ていると、その様子を見ていたリンディが口を開く。

「レイフォン君、本当によろしいのですね？」

「はい、はやて達に話すだけじゃ駄目な気がしますから」

昨夜、フェイトと話して、そう思ったからである。

デルボネの件や自身の力に、極めつけは件の汚染獣のこと。様々なことでレイフォンはこの世界に迷惑をかけたと自覚し、そしてなのはやフェイトなどの新しくレイフォンを思ってくれる人間に對して最低限のことは話したいと思った。

「それに、はやてにも伝えたいこと、話したいことがあるから後で聞いてもらえるかな？」

そして、はやてだけには聞いてほしいことがある。

自分の今までしてきたこと、そして悩み抜いて決めた決断を。

「うん……」

困惑気味だがしっかりと頷いたはやての姿を見て、レイフォンはほっとした様子で目を瞑った。

「じゃ、話させてもらいます」

こうしてレイフォンは語り始めた。

自身が住む世界のこと、その世界に存在する汚染獣のこと、武芸者のこと、

そして自分自身のことを。

第五十一話 告白 中編

鹿威し（ししおどし）の音が響くだけの音のない空間。

どこか息苦しいその沈黙の部屋の中心で静かに座っていたレイフオンはゆっくりと口を開く。

「僕がいた世界は……大地が死に、風が腐り、死が充満した枯れた世界でした」

レイフオンの言葉に殆どの人間が眉を顰める。

唐突で簡易的な説明のせいで、どんな世界なのか想像できなかったのだろう。

しかし、なのは達、いや次元世界を駆け巡る管理局の人間でもあるリンディ達ですら、理解できない世界、それがレイフオンがいた世界である。

困惑気味のはやて達に、世界中の至るところに毒がばら撒かれた世界だと思ってくればいい捕捉をつけるとその説明を聞いていたリンディが口を開く。

「でもそんな世界じゃ、人間は生きていけないのではないかしら？
人間は防護服を着ることで毒を遮断することはできるかもしれないけど、食物も育たない世界では生きることが不可能よね」

「はい。だからこそ僕達は『レギオス』と呼ばれる巨大な移動都市の上で生活してきました。レギオスの上では都市中を包むように形成されたエアーフイルターという空気の膜のおかげで生きることができましたから」

「『レギオス』か。聞いた感じでは都市というよりも星や世界という印象を受けるな」

「うん、エアークリスタルって地球というオゾン層みたいな役割やし、さしずめ外の世界はわたし達の世界では宇宙というわけやな」

リンディの質問にレイフォンが答えると、それを聞いていたクロノとはやてが思い思いに口を開く。

「そうかもね。でも星っていうほど凄いものじゃなかったよ。巨大といっても所詮は都市だからそれ程大きなものでもないしね。それに昔、誰かが鳥かごって言ってたっけ」

「それは嫌な表現だよな」

「まあ仕方ないけどね。そんな世界でも僕達は懸命に生きてきたから」

レイフォンの表現に思わずヴィータが眉を顰めるとレイフォンも苦笑交じりに答える。

実際、向こうで生まれ育ったレイフォンにはそれは当たり前のことで、寧ろはやて達と共に過ごし初めて気付いたことである。

「何というか……凄いとか言いようがないよ」

「うん……」

世界観だけでお腹一杯といった様子のなのとはフェイトが口を開く。特になのはに関してはこの中で一番恵まれた環境だったためにレイフォンの世界とのギャップの差が大きい。

だがレイフォンの説明は始まったばかりで、レイフォンはその場の様子を見ながら話を続けていく。

「だけど、そんな懸命に生きようとする僕達の生活を脅かそうとする存在がいた」

「それが汚染獣……やね」

レイフォンの言葉に、唯一出会った際に簡単な説明を受けたはやてが答えた。

そのはやての表情は、最初に話した時とは違い、汚染獣の恐怖を知ってしまったために若干強張っていた。

いや、顔を強張らせているのははやてだけではない。

あの場にいた全員が、その脅威から表情を硬くさせていた。

「うん……僕ら人間を圧倒する生命力に巨大さ、万の子供を産むことができる繁殖力を持つ汚染獣に、幾つもの移動都市が破壊され、その度に移動都市で生きる大勢の人達が命を落としました」

汚染獣に破壊されその機能を失った都市をグレンダンを出たことがないレイフォンは見たことは無かったが、そういう情報は嫌でも耳にはしていた。

「そんな……」

「苛酷……ね」

レイフォンの説明を受けても、光景を思うように想像できないのは達も表情は暗く、そして悲しそうだった。

「しかし、ならどうやって人間は生き残ることができたんだ？」

比較的動揺が薄かったシグナムが疑問に満ちた表情でレイフオンに尋ねる。

彼女からしても自身の剣技が汚染獣に通用しなかったの見て、生半可な攻撃では不可能だと思ったのだろう。

「ええ、それは……って見てもらった方が早いかな」

レイフオンは自身の目の前に右手を翳した。

するとレイフオンの身体が徐々に発光して、次の瞬間レイフオンの掌に小さな渦が現れた。

「何、これ？」

「綺麗だね……」

その光と渦を興味深そうになのはとフェイトが覗き込む姿にレイフオンは、思わず苦笑いしながら説明を始める。

「剄という力です。これは衝剄と呼ばれるもので、身体に纏っているのは活剄と呼ばれる技術で、全身に剄を流すことにより自身の身体を強化……といえはいんでしょうか？ まあそんな感じです」

「なるほど、これが君のあの超人的な力の正体か」

「というところの巨大な光剣は衝剄ということか？」

クロノとシグナムが興味深そうに能力を判断しているのを見て、フ

エイトが不思議そうに答える。

「あれ？　なんでシグナムも不思議そうに眺めているの？」

先日まで敵対していたクロノや自分達はレイフォンの正体チカラを知らない事は理解できるが、同じ仲間であるシグナムが知らない事に疑問を覚えた。

しかもそれはシグナムだけではなく、ヴィータやシャマル、ザフィーラといった残り守護騎士達の面々もレイフォンの掌の現象を興味深そうに眺めていた。

「ん？　いや、わたし達もレイフォンの能力を詳しくと聞くのは初めてだからな」

「えっ、そうなの？」

「ああ、はやてが聞くなって言ったんだよ。　初めて会った時にさ」

正確には力ではなく、レイフォンの過去についてだったがな、とそんなヴィータの言葉に当人のレイフォンを始めとするその場にいたなのは達の視線がはやての方を向く。

その視線に何処かばつの悪そうに顔を逸らすと、苦笑いを浮かべながら答える。

「いや……な、レイ君初めて会った時に、ほんまに苦しそうだったから思い出させるのは辛いと思ったんよ」

本心を語ったつもり

「そうだったんだ……ごめん」

はやての心遣いに思わず、レイフォンは申し訳なくなり思わず頭を下げようとすると、はやてが首を振りながらレイフォンの下げられた両手をぎゅっと握りしめる。

「ううん、私の方こそ黙っていてごめんな」

「はやて…」

顔を上げたレイフォンの眼に映ったのははやての笑顔だった。

「あと謝れるよりもお礼の方が嬉しいな」

二コリと笑みを向けたまま愛嬌のあるウインクをレイフォンに向け、はやては対し、レイフォンも笑みを返しながら答える。

「ありがとう……はやて」

「それより話を続けてくれないか？」

その空気を断ち切ったのはクロノの空気の読めない言葉だった。

その瞬間、なのは達を含むその場にいる者は空気の読めない男へと何処か寒い視線を向けると、当の本人は気まずそうに肩を落とした。

「えっと、では話を続けますね」

四面楚歌状態と化したクロノを救ったレイフォンは、そのまま話を

続けていく。

「この剽と呼ばれる力を使えるのは剽脈と呼ばれる者を持つもので、僕を含む剽脈を持ち、剽を扱うことができる人間、それが武芸者と呼ばれる存在です」

「武芸者に剽脈か……なんか魔導師とリンカーコアの関係に類似してるね。　そう言えば、あの剣はどういうものなんだい？」

「錬金鋼ダイトのこと？　うーん、とりあえず見てもらった方が早いかな？」

学者としての血が騒いできたのか、話を静観していたユーノが興味深そうにレイフォンに尋ねる。

その言葉にレイフォンは腰に下げていた錬金鋼ダイトを抜く。

「レストレーション」

復元言語を唱えて、天剣を剣へと復元させると柄をユーノに向ける。

「触ってもいい？」

「壊さなければね」

冗談交じりにレイフォンは天剣をユーノに渡すと、ユーノはそれを恐る恐る受け取った。

「って結構、重い……」

予想以上の重さに身体をよろめかすユーノだったが、天剣という未知の存在に興味を抑えることができなかったのか、真剣な目つきで

剣先から柄尻まで調べていく。

「なんだろう？ 金、に似ているけど硬度が違いすぎるし、鋼なんかじゃないよね？」

思考を巡らすユーノの言葉にレイフォンは首を横に振る。

「僕もわからないよ。 それは鍊金鋼の中でも特別らしいし」

「特別？ どういうことだ？」

「うん、この鍊金鋼は天剣って呼ばれてて、グレンダン……僕の故郷で十二本しかない王家の鍊金鋼なんだ」

だから僕のものじゃないだというレイフォンの言葉にユーノは思わず固まってしまい、思わず天剣を落としそうになる。

「つていいの?! そんな大切なものを」

「うーん、貸したり上げたりするのは問題だけど、見せるくらいなら問題ないと思うよ、多分」

天剣授受者としてまだ自覚の浅いレイフォンの発言に、ユーノは呆れたように溜め息をつくとレイフォンに天剣を返す。

「これからは気をつけた方がいいと思うよ」

「え、うん」

天剣を受け取ったレイフォンは、このままでは危ないので天剣を基

礎状態に戻そう思ったその時、服の裾を引っ張られた。

引っ張られた裾の先にはなのはの手があり、なのは本人と眼が合うと誤魔化すような笑みを浮かべる。

「にやははは……私も見てみたいかな」

九歳といってもやはり女性であることには変わりはないようで、寶石のように光っているようにも見える天剣を手にとってみたいようだ。

笑うなのはの後ろにいるフェイトもそのようで、先程からチラチラと視線を向けてきている。

「別にいいけど、はい」

「本当？　ありがとう」

再びレイフォンの手から離れた天剣をなのはは、フェイトと二人でしっかりと持つと、興味深そうに眺め始める。

「うわっ、本当に重いや」

「……本当だ、バルディッシュの倍はあるかも」

手に持つ天剣の隅々まで視線を巡らす二人は、変わり交代に手に持ち天剣の重さを感じていた。

戦斧型のデバイスであるバルディッシュを振るっているフェイトはまだしも、運動が苦手で杖のデバイスであるレイジングハートの担い手のなのはには天剣は重かったようで、足元が何処か頼りなく、腕が若干震えていた。

だが、当のなのはは天剣の白金の輝きに魅せられたように恍惚の眼

で眩く。

「なんか……神々しいね、この剣」

「うん、金色と銀色のバランスがね……うん、すごく綺麗」

女の子が剣を楽しそうに見ているというシュールな光景を眺めていたレイフォンは隣にいたもう一人の女の子に話しかけてみる。

「はやては見ないの？」

「うん？ 私は初めてレイ君と会った時によう見たから大丈夫だよ」

「ああ……そうなんだ」

レイフォンがこの世界に来てすぐに気絶した時の間のことだろうと判断すると、視線をなのは達に戻すと、天剣の観覧者が増えていた。

「ふむ、これがレイフォンの剣か」

「この剣馬鹿、一人で見るんじゃないよ」

天剣を掲げて握り具合を確かめるシグナムに、その足元で精いっぱい腕を伸ばすヴィータ。

「興味深いな……マリーにでも見せれば」

「クロノ、ユーノ君とレイフォン君の話を聞いていなかったのかしら」

少し離れたところで天剣を調べようとするクロノ、それを阻止するリンディ。

いつの間にかもみくちゃになっている惨状に、天剣を貸したことを若干後悔し始めていたレイフォンに対して、救いの声が掛かる。

「別にいいけどさ、そろそろ話を戻さないかい？ さっきから話が逸れてばかりじゃないか」

一番話に興味が薄かったアルフの欠伸交じりの言葉に、その場にいる者がぴたりと立ち止まり、自身のいた座布団の上へと戻る。

「すまない……、少し我を忘れてしまった」

「いえ、楽しんでいただけてよかったです」

シグナムから天剣を受け取り、基礎状態に戻すとレイフォンは話を続けようとしたが、そのまま固まってしまう。

「？ どうしたん？」

動きが止まったレイフォンを不審に思いはやてが声をかけてみるが、やはりレイフォンは固まったままだった。その様子にシャルの顔が蒼くなっていく。

「つまさか、それ壊れちゃったとか……」

「シグナム……」

ザフィーラの責めるような視線に、シグナムはえっとそのまま周囲

を見渡すと、周囲から責められるような目で見られる。

「ちょっと待てっ！！ 何故私なんだっ！！」

「お前ぐらいしか壊す奴がいねえんだよ」

ヴィータを含むヴォルケンリッターからの非難の声にシグナムは思わず声を詰まらせる。

その時、沈黙していた男から声が上がる。

「大丈夫、壊れたとかじゃないから」

レイフォンの言葉に、シグナムを始めとするその場にいた者たちがほっとした様子で肩の力を抜く。

一番動揺し、安心していたシグナムは壊れていない事に安心しながら聞き返す。

「なら、なんだ？」

「いや……さ」

歯切れの悪いレイフォンの言葉にヴィータが呆れたように呟く。

「何だよ？ 早く話を続けようぜ」

「うん……そうなんだけど、さ」

「レイ君？」

心配するようなはやての顔にレイフォンは苦笑いを浮かべる。

「何処まで話したのかわからなくなっちゃった」

その瞬間、室内に軽快な音が響き渡った。

第五十二話 告白 後編その一

「つたく、話があるっていうから聞いてみれば、当の本人が忘れるってどういうつもりだ」

呆れて様なヴィータの言葉に、レイフォンはただただ身体を小さくさせるしかなかった。

そんなレイフォンを憐れに思っただけか、見かねたはやてが中に割って入る。

「まあ、ヴィータ。レイ君らしくていいやんか」

フォローを入れるはやてだったが、見方を変えればレイフォンをアホの子と認めるようなものだった。

だが、当の本人は、ヴィータからの口撃から逃れてほっとしているのだが。

「で、肝心の話したい内容は思い出したのか？」

「うん、先の衝撃で何か思い出したみたいだ」

「なんか壊れかけたテレビみたいね」

ようやく話の続きを思い出したレイフォンはゆっくりと再び語り始める。

「武芸者のことは言ったよね？ 武芸者が扱う剋というこの力は、汚染獣に対して唯一といっていいほどの対抗できるものなんだ」

「そのことなんだけど……ちょっといいかしら？」

汚染獣は剽という力でしか倒せないというレイフオンの世界での常識に、話を静観していたリンディが待ったをかける。

「汚染獣を倒すのに質量兵器とかはなかったのかしら？ 管理世界では使用禁止なんだけど、レイフオン君の世界では別に禁止というわけではないのでしょうか？」

この前見た汚染獣の規模からして人が戦うより、火力のある兵器で倒す方がいいのではないかというリンディの推測に対し、レイフオンはゆっくりと頷いて答える。

「はい、確かに質量兵器の使用の禁止なんてことはないですよ。実際、幼性体達なら簡単に倒せるでしょう。ですが、それは無理な話です」

「どうしてかしら？」

実際、レイフオン達は使用しないが、剽羅砲と呼ばれる兵器があることをレイフオンは聞いたことがある。

多くの武芸者が流し込む剽を巨大な砲弾へと送り、放つ兵器は、他の都市では多く利用されている。

だが、剽羅砲は質量兵器の概念からは外れており、どちらかというと巨大な鍊金鋼になる。

それに、レイフオンの世界ではミサイルなどの質量兵器は無用の存在だ。

「資源が無いからですよ。先に言ったと思いますが、僕達は移動

都市の上で生活しています。その世界以外は全て死んだ世界です。資源なんてありません。そして第一に火力が低いから使えませんよ」

ミサイル程度では、老性体レベルの汚染獣に効きそうもない。

実際、レイフォンが戦った老性六期のベヒモトに一発打ち込んでも、そのあと何にもないように復元されるだろう。

核爆弾と呼ばれる程の代物であれば、倒せるかもしれないが、その前に放った都市がやられる気がする。

「……でも人間があのだ大な生物に勝てるというの？」

いくら剋と力を得ようと汚染獣との差は大きく離れている。

故に世界とは厳しく、リンディの懸念通りのが起こるのである。

「ええ、勿論簡単には勝てませんよ。事実、汚染獣の手により滅ぶ都市は少なくありません」

都市が滅ぶ原因は大きく分けて二つ。

レギオス

移動都市の動力源でもあり、数に限りのあるセルニウムの鉱山をかけた移動都市同士の戦争により緩やかな死を遂げていくこと。

そして、もう一つは汚染獣による天災のような理不尽な死である。

「ってことは、あんたみたいに強い武芸者がいなかったらまずいんじゃないのかい？」

「それは問題ないですよ。僕がいなくても僕の故郷グレンダンが滅ぶなんてありえないですから」

が、しかし、レイフォンの断言した通り、故郷であるグレンダンが

これらの理由で滅ぶはずがないのだ。
それには一つの理由がある。

「でも、汚染獣に滅ぶ都市って少くないんでしょ？」

だが、滅ぶということに過敏に反応したフェイトが心配したように
レイフォンに尋ねてきた。

だが、当の本人は全くその心配はしていなかった。

「うん、けどグレンダンが汚染獣に滅ぼされるってことは絶対ない
ことだから。僕を除く十一人の天剣授受者にグレンダンを統べる女
王陛下がいるから」

絶対強者ともいえる彼らがいる限り、汚染獣に敗北することはあり
得ないし、他の移動都市との戦争に負けるわけもない。

実際、グレンダンは汚染獣を寧ろ襲っているようにも思えるし、他
の都市の戦争にも一度も負けたことはないから、鉱山も腐るほどに
所有している。

「天剣授受者か……その剣は確か特別なものだと言っていたが？」

天剣という言葉にひかれたかのように、シグナムの視線がレイフォ
ンの手に握られる白金の鍊金鋼へと注がれる。

「そうだね、十二本しかないグレンダンの至宝らしいよ」

詳しいことは、担い手であるが、専門家でないレイフォンにもわか
らない。

だが、こう握っていると明らかに他の鍊金鋼とは違うのだ。

戦闘時においてもどれだけの膨大な剄を流し込んでも壊れないほど

の代物であるから、ある意味当たり前なのかもしれない。

「ってことは他の天剣授受者っていう人達もレイフォン君みたいにすごく強いってこと？」

レイフォンの実力を数度の邂逅で思い知らされたのはは、驚きを表情に張り付けたままレイフォンに尋ねると、それに対しレイフォンは何でもないように答える。

「うん、正確には僕以上、にだよ。他の天剣授受者が本気で戦っているところなんて見たことないけどわからないけど、知っている数人は今の僕じゃ絶対勝てないよ」

レイフォンが実力を知っている天剣授受者は、ベヒモトと戦った際に手を組んだサヴァリスと師のリンテンス、あと天剣授受者の中で唯一の親しくしてもらっているリヴァースぐらいである。

特に師であるリンテンスには、勝てる気が全くなかったし、友であるリヴァースのあの防御を抜く自信はない。

他の天剣授受者も同様であるし、唯一勝てる見込みがありそうなのは、戦闘向きではない念威繰者のデルボネくらいだろう。

「ん？ さっき女王陛下がどうか言ってたけど、女王も強いのかよ？」

レイフォンの話を聞いていたヴィータだったが、女王という存在を思い出しレイフォンに尋ねてみた。

その質問にレイフォンは、奔放な陛下を思い出し、苦笑いをしながら答える。

「うん、強いってもんじゃないよ。一般人より遥かに強い肉体を

持つ武芸者をさらに越えた存在が天剣授受者なら、その天剣授受者を超越した存在が女王陛下になるかな？」

「なんか…強さのインフレがどこぞのバトルマンガみたいで想像できへんのやけど」

レイフォンの説明にはやては眉間を抑えながら答えるが、その気持ちも無理もない。

つい最近まで魔法の存在を知らなくて、昨日生まれて初めて戦いというものに巻き込まれて、汚染獣という化け物に出会った。

そんな化け物を葬ったレイフォンのことも一瞬だが分からなくなつたのに、その彼を易々と越える存在がいるというのは想像できなかった。

彼女が言つた通り、マンガの世界のようなことなのだから。

「あー、確か三人の天剣授受者を相手にしても返り討ちにするくらいだからね……」

その上、主に刃を向けるという背信行為すら全く気にすることなく、寧ろ暇つぶしができたと喜んでいたほどの豪胆な人物である。

それにレイフォンは知らないが、最強の天剣授受者と呼ばれるリントンスすらも瞬殺したこともあることから、女王アルシェイラがグレンダン最強というのは間違いないことだろう。

「じゃあっ！、あの汚染獣と戦ったら！？」

「多分、こう一発で、バーンと」

興奮気味なのはの質問に、レイフォンは右手の人差し指を天井に向けて、銃を撃つように答える。

その説明に戦闘狂でお馴染みのシグナムも流石に顔を引き攣らせて口を開く。

「……それは流石の私でも、な」

「でも、ある意味会ってみたいかもね」

未知の生物の話を聞いたかのように少し学者の魂が騒ぎだしたユーノの言葉に、レイフォンは女王に引きづり回って遊ばれた経験から、出来ることなら会わない方がいいと内心思っていた。

「ははは……とりあえず簡単な説明ここまでにしておいて、僕がここに来た経緯を話しておきましょうか？」

とりあえずレイフォンの力と故郷、そして天剣についての話を終えたレイフォンはクロノとリンディの方へと視線を移す。

その視線にクロノはゆっくりと頷くと口を開く。

「そうだな。簡単には聞いたと思うんだが詳しく説明してくれ」

クロノ自身、レイフォンの存在は気になっていたが、それ以上に気になっていたのはレイフォンがこの世界にきた経緯、そして何故ジュエルシードを持っていたのかという疑問である。

そんなクロノの視線を感じながら、レイフォンはグレンダンでの戦闘後のあの時のことを思い出しながら、口を開く。

「うん、いつものように汚染獣と戦って、その戦闘後、綺麗に光っている宝石を見つけました」

汚染獣の体内から出てきた綺麗な宝石。

あの汚染された外の世界で唯一輝きを放っていたあの光景はレイフオンは忘れることができないだろう。

あれが自信をここに送る片道チケットになるのだから。

「それで？」

先を急かすようなクロノの言葉にレイフオンは口を開く。

「それを拾ったら、次の瞬間光に吞まれて、気付いた時にはやての家でした」

「……それだけか？ その拾おうとした瞬間の状況の説明とかは？」

何とも短く、簡易な説明にクロノは思わず聞き返してしまう。

その言葉にレイフオンは、あの時のことをよく思い出しながら口を開く。

「?? 幼馴染にあげようと思って拾いました」

「いや、もういい……」

疲れたきつた表情で肩の力を落とすクロノだったが、レイフオンにとってこれ以上言いようがなかった。

レイフオン自身、それがジュエルシードという存在だったことを教えてくれたのは、目の前で呆れているクロノだったし、飛ばされた原因を考えてみても触れたためとしか考ええなかった。

落胆しているクロノにレイフオンは微かな罪悪感を感じながら、辺りを見渡す。

「えっと、とりあえず説明を終わりましたけど、他に聞きたいことはありますか？」

「なら、私からいいか？」

レイフォンの言葉に一番早く反応したのは綺麗な姿勢から手を一直線に突き出したシグナムである。

「はい、僕に答えることであれば」

「武者の武器というのはレイフォンの持つような剣のように、武者の武器は剣なのか」

もしそうであるなら、シグナムにとってレイフォンの世界はある意味天国だろう。

そんな剣マニアの質問にレイフォンは、出来るだけわかりやすく答えようとする。

「いいえ、銃や槍、鞭など様々なものがありますよ。ちなみに天劍授受者も別に剣だけを使うわけじゃないので、大矛、盾、細剣、糸、拳、鉄球、杖、銃、弓と様々な使い手で編成されています」

レイフォンの言葉にそうか、と答えるだけで特に表情を変えることなくシグナムは手を下ろす。

その姿にレイフォンは一抹の不安を覚えるが、次に手を上げたフェイトの質問に答えるために視線をフェイトの方へと移す。

「はい。じゃあ次」

「えっと質問です。あの汚染獣と戦う前に現れた蝶みたいなのが何だったの？」

フェイトの疑問はあのデルボネが放った念威端子のことであった。その質問に、確かにあの時はそんな説明をできる状況じゃなかったし、先程の武芸者の説明時にも完全に忘れて念威繰者のことを説明していなかったことに気がつく。

「そういえば言っていなかったね。あれは念威繰者が飛ばす念威端子というものです」

「念威繰者？」

フェイトの首を傾げる姿を見ながら、レイフォンは念威繰者について説明を始める。

「うん、簡単にいうと、武芸者には二種類あって、僕のような戦闘向きな武芸者とは逆に後方支援専門の武芸者って言ったところかな？ 念威という力で端子を作って、それを眼として遠くを見たり、遠く離れた武芸者達に指示を送ったりできるよ」

「じゃあ、レイ君もできるの？」

後方支援組でもあるシャルの質問にレイフォンは首を振る。

「いえ、僕は念威は使えませんよ。念威は生まれたに決まった才能がものを言いますから。完全な先天的才能が無ければ使えません」

レイフォンの言葉にシャルはやっぱりそうよね、と納得しながら

頷いている。

そういう意味では魔法は便利だとレイフォンは考えていた。武芸者は完全攻撃型であるし、念威繰者の戦闘能力は低い。そういう意味では、魔導師は傾向あれど万能型といえるだろう。

「じゃあ、次はわた……」

「ごめんなさい、なのはさんにレイフォン君。　続きは後ほどいいかしら？」

なのはの言葉を遮るようにリンディの言葉が入る。彼女の目の前には通信のモニターが開かれており、緊急のようでも入ったようだ。

「かまいませんよ。　話したいことはある程度は話しましたから」

「うーん、これからはいっぱいお話しできるからいいかな？」

話し終えたレイフォンと若干不服そうだったなのはに、リンディは申し訳なさそうに頭を下げる。

「ごめんなさいね、今度お茶でも御馳走にするわ。　クロノ、皆さんを連れて食堂で食事でも取ってきなさい」

「わかりました。　じゃあ付いてきてくれ。　案内する」

「あーあー、はやての飯じゃないのか」

「こらヴィータ贅沢いったらあかんよ」

クロノの後をぞろぞろと付いていく一行の最後尾に立ったレイフォンは、リンディの方に振り返ると一度頭を下げて部屋を退室していく。

全員が退出したことを確認するとリンディは通信先の女性―レティに確認を取る。

「レティ、さっきの話本当なの？」

「ええ、本局では大騒ぎよ」

「そう、

ロン・グラム社の社長が暗殺されるなんてね」

？．．？．．？．．？．．

「ちょっといいかな？」

食堂に向かう一行の後を追っていたレイフォンは目の前で車椅子を進めるはやてに声をかけた。

「うん？ どしたんレイ君？」

振りかえたはやては、レイフォンの表情を見て微かに驚く。

レイフォンの顔を先程よりも真剣だったからだ。

そんなレイフォンを不思議そうに眺めるはやてに、レイフォンは一度深呼吸をすると、覚悟を決めたようにゆっくりと口を開く。

「うん、少し話があるんだ」

レイフォンの話は終わらない。

まだ、本題には入っていなかったのだから。

覚悟を決めたはずなのに、レイフォンの声は微かに震えていた。

第一部最終話 告白 後編

彼女に出会ったのはほんの半年程前、
長いようで僅かな時間を彼女と過ごした。

優しさに溢れて、困難にも立ち向かう強さ。

家族とともに笑う彼女の幸せそうな笑みに、自身の病に怯える彼女の
見せた涙。

そんな彼女に対し、自分は何ができるのかと剣を握った。

そのとき胸を駆け巡ったこの思いはなんだろう？

唯一つ言えることは、八神はやてはレイフォン・アルセイフにとって大切な存在である。

はやての車椅子を押しながら、他愛な話をしていく。

シャマルが料理を煮込みすぎて鍋を焦がし炎上したこと、ヴィータがアイスを食べ過ぎてお腹を壊したこと、シグナムが道場で小さい子たちに纏われてどうすればいいか困惑していたこと、ザフィーラがシャマルの料理を無理やり食べさせられて失神したことなどを、

そのレイフォンの話に釣られるように、はやても懐かしそうに語る。初めてレイフォンに出会った時強盗に間違えたこと、趣味である読書の本をレイフォンに見せたらいきなり倒れて気を失ったこと、シグナムに追いまわされて必死に逃げるレイフォンを見て爆笑したことなどを、

「なんか話が尽きんな」

「うん、やっぱり賑やかだったからね。あ、はやて何か飲む？」

「うん、甘いやつにしてな」

休憩所に辿りついたレイフォンは、自動販売機の前で飲み物を買うと、それをはやてにも手渡した。

「ありがとうな」

「どういたしまして」

レイフォンはそのまま近くの長椅子に座ると、缶の蓋をあけて中身を飲み干していく。

乾いた喉を潤し、空になった空き缶を捨てると、はやてがこちらの方を見て、面白そうに笑っていることに気付いた。

「うん？　どうかした？」

「いやな、レイ君があんなに多く語ったの初めて見たからな、よっぽど喉が渴いていたのかなと」

「ははは、まあちょっと疲れたかな」

実際、レイフォンは少し疲れていた。

唯の説明だけでこれ程疲れてしまうのだから、レイフォン自身、自分分は身体を動かす方が性に合ってるなと思ってしまう。

「その割には、ちょっと説明がぎこちなかったわ。　レイ君はもう少し本とか見て言葉とか文法を覚えた方がええよ」

「……考えておくよ」

はやての助言に、レイフォンはいつか見た本に潰される光景を思い出しながら身体を震わすと、それを見ていたはやてが大声で上げて笑い始める。

そんなはやての笑い声を聞きながら、レイフォンは眼を細める。

レイフォンの脳裏に浮かぶのは、はやてとの思い出である。

半年と時間にしてみればそう長くない間のはずなのに、レイフォンにとって大切な一時であることに違いはなかった。

思いを耽るレイフォンに対し、笑うことを止めたはやては車椅子にもたれかかるように座ると、そのまま言葉を零すように口を開く。

「……大変なんやね、レイ君の世界は」

それがはやての正直の気持ちである。

気持ちに分かるなんてあの世界に行ったこともないのに言えるわけがないし、可哀想という言葉はその世界で生きる人間に対する侮辱である。

他人事のようにも聞こえるが、実際はやてにはどうすることもできない世界なのだ。

だから、ただ聞かされた内容で、苛酷な世界だと思った正直の感想だ。

「そうかもしれないね、けどそういうことを考えることは無かった気がするよ」

だが、その世界の住人であるレイフォンにとってはよくわからないことで、あまり考えないことだった。

むしろこの世界に来て気付いたのである。あの世界の異常さを。

「そっか……やっぱり大変な世界なんやね」

その言葉にはやてはそう返すしかなかった。

そのままレイフォンもはやても黙ってしまい、互いの間に沈黙の空気が流れる中、レイフォンがふと立ち上がり、再び自動販売機の前に立つ。

再び飲み物を取りだすと、そのまま椅子に座り直す。

指先でそのジュース缶をくるくる回しながら、レイフォンは話を切り出した。

「ねえ、はやて、こっちはいいところだね」

「え?」

いきなりの言葉に、はやては戸惑いの声を上げるが、レイフオンはそのまま話を続けていく。

「はやてやシグナムさん達にクロノさんや高町さん達、出会う人皆いい人だ」

「……そう言ってもらえると嬉しいわ」

レイフオンの雰囲気から何かを感じ取ったのか、はやては若干声のトーンを落として言葉を返す。

「けど、僕の故郷にもいい人で大切な人達がいるんだ」

「うん、知ってるよ」

レイフオンが話していたときに、故郷の話をした際、笑みを浮かべていたのははやては知っていた。

そして、はやての家でいた頃も、時々寂しそうな顔をしていた時は故郷のことを思い出しているのだろうと思っていた。

「守りたいものがあるんだ、だから僕は剣を手にとった」

その言葉にはやての一つの疑問が消えていく。

はやては疑問に思っていたのだ。

何故、レイフオンが彼の故郷の天剣授受者という地位についている

のかを。

確かに実力はあるかもしれない。

だが、はやてが見てきたレイフォンは地位を求める人間じゃないし、むしろ平和そのもので、争いを好まない人間である。

故にはやてはそのことを嬉しく思い、そして全てを悟った。

「戦って戦って、時には法にも触れることもしたんだ。軽蔑した？」

「せえへんよ。守りたいものがあつたんやろ？」

それははやてを救おうとしたシグナム達も同じことが言える。

彼らの思いを十分に知るはやてには軽蔑できるはずはなかった。

そういうのは理屈ではない気がするのだ。

「うん、守りたいものがあるんだ」

はやての言葉を聞いたレイフォンは頬を緩めると、嬉しそうに笑った。

？．．？．．？．．？

「はやて、僕は帰るよ。 グレンダンに」

レイフォンから放たれた言の矢は、はやての胸に突き刺さり、痛みを与える。

それは、あの夜、念威端子が現れた時に悟ってしまったことである。レイフォンが帰ってしまうと。

「いや帰らなくちゃいけないんだ。帰りを待ってくれる人がいるから」

「そっ…か…」

レイフォンの言葉にはやての身体の力が抜けていく。覚悟はしていた。

出会った時にもそのことは考えていたことでもある。

それにあの時とは違い、はやては一人ではない。

シグナムやヴィータ達という家族達と、すずかやなのは達の新しい友達。

出会ったことがなかったグレアムおじさんのことも知ることができ、病気が治ることも知った。

ただ、レイフォンという家族の一人がいなくなるだけで、

それも死ぬなんて最悪の別れはなく、レイフォンは故郷に帰るだけなのだ。

レイフォンが元の世界に帰りたいことは知っていたし、その念願が叶うのだから家族としてそれは祝うべきことである。

でもそれは無理だ。

レイフォンははやてにとって特別な存在なのだ。

初めての家族で、自分を助けてくれた英雄^{ヒーロー}で、

初めて恋した男の子であった。

そのことを自覚してはやての瞳に涙が溜まる。

レイフォンには見せたくない、その一心で顔を伏せているが、身体の震えは止まらない。

眼は真っ赤だろうし、鼻水も止まらない。

そんな姿をレイフォンには見せたくない。

「……多分向こうに帰ったら、こっちに戻ってくるのは難しいかもしれない」

レイフォンは、はやての様子に気づいていないのか、いつも通りの口調で話し続ける。

その言葉をはやては何処か他人事のように聞き、自身の惨めさを噛み締めていた。

だからこそ反応できなかった。

「けどいつか必ず帰ってくるよ」

レイフオンの希望の言葉に。

「えっ？」

幻聴のような気がした。

レイフオンが帰ってくると言った気がしたからだ。

はやては慌てて顔を上げると、レイフオンは先程と同じ笑みを浮かべていた。

「僕は馬鹿だし、こっちに來た方法もイマイチ理解もできていない。けどいつか絶対にはやての元に帰ってくるから」

レイフオンの決意を聞きながら、はやては先程の言葉が本当だということを理解する。

だが、同時に理解できないことがある。

「なんで……だって向こうには大切な人がいるって」

こちらに帰ってくるのが難しいということは、先程の話から簡単に推測できる。

方法が、ではない。

それはレイフオンの地位である。

レイフオンは天劍授受者という存在であり、グレンダンでも貴重な重要な人間である。

いくらレイフオン以外の天劍授受者がいて、都市が安全といっても

それはそういう問題ではないのだ。

だからこそ、彼を探そうと異世界にまで搜索の手が来た。

それに先程レイフォン自身が言ったように、向こうにはレイフォンの帰りを待っている人や守りたい大切な存在がいるのだ。

それらを捨ててくるというレイフォンの行動が理解できなかった。

だが当のレイフォンは何でもないように笑みを浮かべたまま、はやての方を向く。

「うん、だけどこっちにも僕を待ってくれる人がいるからさ」

その笑みに、はやては思わず涙をこぼしそうになる。

そうだ。

レイフォン・アルセイフという男の子は、人一倍馬鹿な男の子で、それ以上に優しい男の子だったことをはやては忘れていた。

故にはやてがこぼしたは涙ではなく、笑い声だ。

「ぷっ、それは自意識過剰やレイ君」

「ええ!？」

驚きの声を上げるレイフォンの反応にはやての笑い声が一層大きくなる。

悲しみが吹き飛び、心に暖かいものが溜まっていく。

「ほんま、帰ってくる方法もわからん程のバカチンなのにな」

「うう」

呆れた声でいつもの如くレイフォンを弄りながらはやては思う。
やっぱりレイフォンは、はやての救済だ、と。

？・？・？・？・？・

「約束や」

「へえ？」

腕組みしながらじとりと睨むはやてに、レイフォンはふぬけた返事を返してしまう。

自分なりに真剣に伝えたはずなのに、当のはやてに笑われたダメー
ジは、結構深刻である。

むしろ帰ってほしかったんじゃないか、とまで思ってしまった。

「約束を守らんと絶対に許せへんよ。破ったら針千本呑みこんで
もらうからな」

「は、ハリセンボン……」

にやりと笑みを浮かべるはやての眼が若干赤かったが、当のレイフ
オンはそれどころではなく、気付くことはなかった。

「返事はっ!!」

「はいっ!!」

はやての言葉に思わず返事してしまうと、はやてはよしと頷き笑み
を零す。

その笑顔に先程までの考えがバカみたいな気がする。

レイフオンは手に持ったジュース缶をはやてに投げ渡すと、それは
はやては両手で受け取り笑みを浮かべる。

プルタブに指をかけ、開けると大爆発。

噴き出た中身にレイフオン、はやては止まる。

その後二人で大爆笑、全てが丸く収まった気がした。

そんな大団円で終わることは無く、その後はやて達を探しに来たク
ロノが大激怒。

こうして、事件は幕を下ろすのだった。

第一部最終話 告白 後編（後書き）

作者の康頼です。

天剣を持つ少年の第一部、闇の書編が終わりました。

今まで読んでくださった読者の皆様、これからもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0904j/>

天剣を持つ少年

2011年9月28日20時57分発行